

ドラフ島列伝 ～The last page of baseball legends chronicle
～

マリリンマンション

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて母校を甲子園へと導いた大坂小波は、大学では野球と無縁の生活を送っていた。

そんなある日、太平洋に浮かぶ南の島で野球大会が開催されるといふ噂を聞きつける。

その島では、魔道術という不思議な力が存在していて、野球への応用が盛んなのだとか。

異能力バトルと野球が好きで作者の自己満足的な作品です。

至らない点も多々あるかと思いますが、お楽しみ頂ければ幸いです。

※パワプロの要素はほんのちよつとだけです。

目次

プロローグ

Unbreakable Security | 1

First contact as Last chance

12

第一章

One of the most attractive HE

ROINE | 21

Out of Control | 34

Go for broke! | 41

How do you like Wednesday? | 54

Mirage Zone | 63

Dr. DAIJOHBU | 70

Living Dead | 77

Initializing | 84

Runners In Scoring Position

91

Like a bird flying down | 98

Birth of Counter Magic | 106

Close play | 112

A Drama without Scenario | 118

Game Set | 125

第二章

Get Back the Treasure | 134

Cocktail Ray | 142

第三章

P o p o n e v e r t e l l s a l i e	305
C a f e G i a n t s S t a r	296
M a g i c a l C r a m p	287
279	
S h o c k i n g P i n k a n d A s h P u r p l e	271
T r u m p i s a l w a y s b e . . .	262
T a s t e o f S e n i o r P l a y e r	254
C r e s c e n t M o o n	246
A k i o Y a b e ?	
C a n y o u p l a y P A W A P U R O w i t h o u t	239
T h e b e t t e r c h o i c e	232
J u s t a t o y r o b o t	224
T h e R e a s o n	213
P u r p l e " O "	205
D o n ' t t h i n k , F e e l	198
t y T r a p	190
H o w t o B r e a k t h r o u g h t h e G r a v i	
A H y p o t h e s i s o f C o u n t e r M a g i c	181
C o u n t e r R o c k e t s	173
U n b r e a k a b l e S e c u r i t y I I	166
F r o g s i n t h e W e l l	158
V a l u e a s t h e C a t c h e r	150
N a t u r a l B o r n A r t i s t	

プロローグ

Unbreakable Security

「何っ！ 鍵が開いてる!?!」

豪華客船の最上階の大ホール。パーティー会場の去り際に、警備主任の茅野はインカム越しに静かに叫んだ。船の最下層フロアーにある特別用具室には何重ものセキュリティが掛けられて、船内でも特に警備が厳重な場所だ。この鍵を扱えるのは、船の中には茅野しかないはずである。インカムの向こうからは信じ難い事実が矢継ぎ早に報告された。

「いつからだ?」

「ついさっきです。セキュリティが勝手に解除されてしまいました……」

「はあ? そんなわけないだろ!」

「それが、今、調べているのですが……」

インカムの向こう側の歯切れの悪さに、茅野の苛立ちが募り、船内の廊下を走る彼の語気が強くなった。

「カメラは見たのか?」

「それが、カメラには何も映っていないんです。そもそも侵入者があれば自動で迎撃用の警備システムが作動するはずです……」

確かにその通りだ。最下層フロアーには監視カメラだけでなく赤外線センサーもあり、侵入者があればシャッターが下りて閉じ込めるシステムになっている。解せない。そんな表情のまま茅野は顎の髭をさすった。浅黒い顔に深く刻まれた眉間のしわがさらに深くなり、ただでさえ悪い人相が一層悪くなる。幸い、彼は誰ともすれ違うことなく船内の廊下を駆け抜けていく。間もなく廊下を右に折れると、船内最下層まで直通するエレベーターがある。茅野はボタンを押してエレベータを呼んだが、一向にそれらが動き出す気配がない。

「モニター室!」

茅野はインカムに向けて怒鳴った。

「主任、エレベーターはベースフロアで荷物に扉を塞がれていて……」
「姑息な時間稼ぎを！」

上着のポケットから名刺大のスマートホンのような端末（PDA）を取り出すと、階段へと続く扉の受信部にかざす。PDAは、船内の警備員はもちろん、清掃や給仕などのすべての従業員が所有している身分証のようなもので、船内のあちこちの扉のセンサーキーも兼ねている。茅野は勢いよく扉を開けると今度は2段飛ばしで階段を駆け降りる。インカム越しに状況報告が続いた。

「出港してから今まで、外部からのメインシステムへのアクセスは一切ありませんね。セキュリティがハッキングされた可能性は低いです。理屈では、事前にプログラムでもされてない限り、こんな芸当は不可能ですよ」

「事前にプログラムか。面白いな。だが、それなら出港前のスキャンに引っ掛かるはずだ。とにかく、俺は現場に向かう。上への報告はそれからだ。そのままモニターを続けてくれ」

「了解。すでに南木曾と飯田を向かわせていますので、あとで合流してください」

「了解だ」

茅野は船内最下層の特別用具室へと続く階段を下っていく。破られるはずのないセキュリティが破られた。お気楽な船旅は一転して、緊迫の修羅場と化していく。



豪華客船の最上階の大ホールは立食パーティーの会場となっていた。パーティーとは言ってもドレスで着飾っている女性は数えるほどしかない。ささやかな出会いを期待していた矢部は、となりに壁にもたれている大坂に愚痴るばかりだ。酒も入っているのだろうか、彼はさつきから同じ話ばかり繰り返している。大坂は、いい加減に矢部の話にうんざりといった様子で、会場の様子をぼんやりと眺めていた。

警備員がひとり、血相を変えて会場を去って行ったが、近くにいた人間はそんなことにすら気が付かない様子で、自分たちの会話に興じている。これが、社交界というやつなのだろうか。就職活動を始めたとはいえ、世間のイッパンジヨウシキからは縁遠い学生の身分である大坂は、面倒なところに来てしまったと今更ながらに後悔していた。そんな折に大坂の視界に見覚えのある人物が映り込んでくる。

「矢部君、あれポートルランドじゃね?」

「ポートルランドといえば去年までライオンズにいた助っ人選手でやんすね」

くると矢部が振り返ると、分厚いレンズの眼鏡の奥にある目を細めた。

「こんな所で突っ立っていても始まらないんだ。お近づきになっておきますか」

大坂は通りすぎるウェイターからシャンパングラスを受け取ると、会場を横切り始めた。

太平洋に浮かぶ南の島で野球大会が開催されるという噂が、突如ネット上で話題になったのがおよそ半年前。優勝賞金1億円という触れ込みは話題性十分だった。大手財閥系企業の主催と中堅スポーツ用品メーカーの協賛ということもあって、約1カ月間の拘束期間にもかかわらず応募が殺到したらしい。事前に書類選考と面接が行われた後に、セレクションで体力や適性の審査をパスした人間が、今回の大会への参加を認められたようだ。

高校時代まで野球の覚えがあった大坂は好奇心半分、冷やかし半分でこの大会に応募した。就職活動も行き詰っていたし、ちよつと気分転換のつもりだったが、運も良かったらしい。内定も、こんな風にとんとん拍子で決まらないものだろうかと思いながらの参戦だ。連れの矢部もきつとそんなところだろう。

人込みをかき分けるようにして会場を横切る大坂の後ろから、矢部が声をかける。

「でも妙でやんすね。ポートルランドといえば去年のリーグ3冠王でやんす。2年5億の提示があったにもかかわらず、契約更改しないま

ま帰国したでやんす。今更、たった1億に目が眩むとは思えないでやんす」

「確かに」

パーティーの直前まで行われていたオリエンテーションによれば1億円は優勝チームで山分けだ。ということは、一人の取り分はさらに少なくなる。最低人数の9人で割っても千百一十一万千百一十一円。余り、1円。学生の大坂や矢部にとっては充分すぎる報酬だが、「青いバース」の異名を持つ外国人選手が契約更改せず、ましてメジャーにも行かずに、こんな所で何をやっているのだろうか。

大坂が足をとめると、それは人の流れに逆らう事になった。大坂の背中に矢部がぶつかって、さらに後ろから悲鳴が聞こえてきた。

「きやつー！」

「も、申し訳ないでやんす」

「ちよつと！ 危ないじゃないの！」

二人が振り返ると、鮮やかなピンクのミニのワンピースを着た気が強そうな少女が立っていた。ボーイッシュに刈り込んだショートヘアを、かなり明るい金色に染めている。こんな美少女が会場内にいた事に、どうして今まで気が付かなかったのだろうか？ 吸い込まれるほどに大きな瞳で睨まれた二人は一瞬たじろいだ。

「犬も歩けば何とやらだな。矢部君、ここは頼んだ」

大坂は矢部の肩をぽんと叩くと、もう一度向き直ってポータランドの方へと歩き出した。矢部も満更ではないようだ。

「ちよつと、大坂君！……あ、お、オイラは矢部明雄でやんす。」

「名前なんか聞いてないでしょ？ それよりヤンスって何？ 今時そんな語尾ないわよ？ いったいどこ出身なのよ？」

「埼玉でやんす」

「ゼンゼン標準語圏じゃない。頭おかしいの？」

「失敬な、これはオイラのキャラクターでやんす！」

「語尾も語尾なら、一人称も一人称ね。でも思い出したわ。三年前の甲子園の一回戦。埼玉代表埼玉第八高校×長野代表松代学園の試合。確か、二日目の第三試合だったかしら？ あの試合、私観てたんだか

らね」

三年前の甲子園の一回戦。確かに印象的な試合だった。見ていたとはいえ、この刹那でそれを思い出したこの少女は、世間一般に考えれば相当な高校野球マニアといえるだろう。ピンクのワンピースの少女は、わざと少し間を置いてから矢部の顔を見上げると、少し嘲りを含めて微笑んだ。

「続けましょうか？」

さっきまで小馬鹿にされ怒りに紅潮していた矢部の顔がどんどん青白くなっていく。矢部は、耐えられない様子で震える声を絞り出した。

「……やめろよ」

「そうね。まっとうな神経ならば、あそこで野球をやめていてもおかしくないわ。だけど、あいかわらず、牛乳瓶の底みたいな眼鏡かけてるのね。今時そのセンスはどうかと思うわよ？」

「う、うるさいでやんすー」

矢部は右手に持っていたシャンペングラスを一気に空けた。

「あら、結構いけるじゃないの。見どころあるじゃない。あなたの飲みっぷりに免じてさっきの無礼は許してあげる。またどこかで会いましよー！」

ピンクのワンピースの少女は大きく手を振ると、ぴよんぴよんと跳ねるようにして人込みの中へと消えていった。矢部は振り返り、辺りを見回したが、すでに大坂の姿はなかった。ポートランドには会う事が出来たのだろうか。ため息混じりに空のグラスを持って立ちつくしている、近くの気のいいおじさん達の集団のテーブルに彼は取り込まれた。酒の席とはいえ、彼らはもう島に着いて新しくチームを旗揚げする話がまとまっているようだ。

「兄ちゃん、いい飲みっぷりだねえ、こっちおいだよ」

パーティーの前にあったオリエンテーションでは、大会会場がある常夏の島の風土、参加者全員に配布されたPDAの取り扱いなど、大まかな大会の流れについてレクチャーがあった。現役大学生である矢部と大坂は、講義の内容がオリエンテーション終了後にPDAに転

送されると知った直後から居眠りを決め込んで知らなかったのだが、どうやら参加者同士がチームを組んで勝負することになっているらしい。

つまり、既にこのパーティーではチーム編成への根回しや勧誘活動が始まっていたのだ。利害の一致した者同士、気の合う者同士がチーム編成を始めつつある。仕切り始める者がどこからともなく現れて、ある所では実力がある者同士が集まって、優勝を狙うチームが作られはじめる。またある所では、気の合いそうな仲間同士が集まり、作戦会議という名の宴会が始まる。どうやら矢部が取り込まれた集団は後者のようだ。

「ところで、兄ちゃん。何て名前だ？」

「オイラの名前は矢部でやんす」

「デヤンス君か。変わった名前だな。ハーフなのかい？」

「違うでやんす。矢部でやんす」

「はっはっは！ 違わない違わない。きみ面白いね、気に入ったよ」

「ところで、野球経験は？」

「高校まででやんす」

「高校球児とは心強いね〜 どの高校？」

「埼玉第八でやんす」

「埼玉第八？ あ〜聞いた事あるかも。とにかく、若い兄ちゃんが入ってくれたら心強いや」

3年前に甲子園に初出場して初戦敗退した高校の名前を覚えている人間がどれ程いるだろうか。

酒が入っていた矢部は、和やか雰囲気の中にすぐに打ち解けていった。一方のおじさん達も、思わぬ助っ人の登場に歓迎ムードである。

その時、船内放送が流れ始めた。ピンポンパンポン。落ち着いているものの緊迫感のある女性のアナウンスに、会場が静まり返った。

——中ノ鳥島ベースボールリーグへご参加の皆様にお知らせ致します。只今、船内におきましてルールブック規約0章第4項に反する行為が発覚いたしました。これより、船内のすべての扉を封鎖して、違反者の摘発を開始致します。係員にID提示を求められました際

には、速やかにこれに応じて下さいますよう、お願い申しあげます。繰り返しお知らせ致します・・・

特にやましい事の思い当たらない会場の参加者たちは、すぐに元の談笑へと戻っていく。矢部が合流したグループもまた同じだった。

「そうだ。折角だから、お近づきの印にID交換でもしますか。チームに入るかどうかは後で決めればいいからさ」

IDは、オリエンテーションで配られたPDAに登録された個人データのことだ。液晶ディスプレイには顔写真と名前の他に、セレクションでの成績を元にした運営本部による「A」から「G」ランクの評定が画面に表示されている。このデータを交換することによって、相手の情報がPDAに登録されて、位置情報の確認や通信なども行う事が出来るらしい。チームの登録や編成も、この端末を用いて行ううだ。

「喜んででやんす」

矢部は野暮つたい着潰したジャケットの右ポケットからPDAを取り出そうとした。しかし、そこに仕舞ったはずの端末が見当たらなかった。続いて左ポケット、ズボンのポケットをまさぐり始めたが、やはりそこにもPDAは見当たらない。

「おかしいでやんす……？」

もう一回、ジャケットの右ポケットを確認したが、やはりそこに端末はない。矢部の表情が次第に曇っていく。

「おかしいでやんす、ないでやんす……」

テーブルを取り囲む一同も驚いた様子だ。冷たい汗が矢部の額から流れ落ちていく。この大会では、PDAの携行が義務付けられている。理由の如何を問わずPDAを紛失した者や非携行者はその場で失格となるのだ。

「落ち着いて探そう。一緒に。矢部君といったね」

「……そうでやんす」

「何か、心当たりはないのかい？ たとえば、トイレに行ったとかさ」「無いでやんす。さつきまで大坂君と一緒に使い方を確認していたでやんす」

「友達と一緒になのかい？」

「親友でやんす。そうだ、ポートランド選手を見つけて……あっ！あの娘でやんす」

矢部はピンクのミニワンピ姿の美少女を思い出した。

その時、会場の照明が一度落ちて、すぐにオレンジ色の非常灯が点灯した。



ポートランドは立ち止まると、振り向かずに片言の日本語でこう言った。

「ドウシテツイテクルノデス？」

こんな事になるなら、もつと早くに声を掛けておくべきだったと大坂は後悔した。パーティー会場では和やかに談笑していたポートランドだったが、彼は突然会話を切り上げて会場の出口へと歩き始めた。あと数メートルまで迫っていた大坂は、声をかけるタイミングを失ったが、引き続き後を追うことにした。会場を出たポートランドは客室がある方に向かって歩きはじめる。成り行き上、尾行する格好になってしまったが、彼の部屋番号くらいおさえても罰は当たらないだろう。そんな事を考えていた矢先に、ポートランドは突然立ち止まった。

「黙って後をつけたことは謝ります。大坂小波、ただの大学生です。チャド・ポートランドさんですよね。」

「ヨク知ツテルネ」

「去年のパリーグ三冠王。そりゃあ有名人ですよ」

パーティー会場でさんざん繰り返された問答なのだろうか。ポートランドのリアクションは薄かった。少し眉をあげて、やれやれといった表情だ。しかし、大坂にはまたとないチャンスだった。さすがにパーティーの最中にルールブックには目を通しておいた。ここでポートランドを口説き落とせば、間違いなく1億円に近付けるだろう。今しかない。大坂はポケットからひとつの硬球を取り出した。

これが運命の悪戯でなくて何だというのだろうか。

「これは、僕の御守りです。この大会、野球道具の持ち込みは一切禁止されていますけど、何だと思えます?」

見ればわかるよ。とばかりにポートルランドは両手を広げて見せた。

「ベースボール」

「去年の5月5日の西武ドームです。ライオンズ×マリーンズの試合、9回裏の3―3同点の場面で、あなたは代打で登場した。この時から、あなたの快進撃が始まります。覚えていますか?」

「オフコース 覚エテイルヨ」

「マリーンズのリリーフエース早川あおいのウイニングショット。地面すれすれのシンカーをすくい上げての右打ちにもかかわらず、打球はよく伸びました。追い風はラッキーでしたけどね。あの時、僕はライトスタンドにいたんです。これは、その時のボールです」

「……」

ポートルランドは少し驚いた表情でボールを手にとると、じつくりとそれを眺めた。

「サイン、してもらえませんか?」

「イイデシヨウ。ツイテキテクダサイ」

ポートルランドの表情から警戒心のようなものはなくなっていた。ひとりのファンに対するプロの自然な笑顔だった。

「ワタシノ部屋マデアンナイシマス」

吹き抜けの階段を降りて行くと、一等客室のフロアーだ。大坂たちが寝泊まりしている一般客室のフロアーとは違って豪華絢爛だ。何かの小動物をかたどった青銅の置物が真っ白な大理石の上に並んでいる。赤い絨毯の廊下を奥へ進むと、ある客室の前でポートルランドは足を止めた。

「オヤ?」

客室の扉に、一本のポツキーバットが立て掛けてあった。

「ポートルランドさん、咎めるわけじゃないですけど、野球道具の持ち込みって禁止されましたよね?」

「ソレハオタガイ様デス」

ポートルランドは大坂が持っている白球を指差して笑ったが、どうも困惑の表情を浮かべているようだ。ポートルランドがバットを手に取ると、扉との間に挟んであった紙が1枚ひらりと落ちた。大坂がそれを拾い読み上げる。習字のお手本のような丁寧な文字だ。

「何かのお役に立てれば幸いです。いずれあなたに会える日を楽しみにしていますピンクⅡパンサン……だそうです。」

「ピンクパンサン?」

ポートルランドは全く心当たりがないようだ。首を傾げながらPDAをオートロックのルームキーにかざす。ピピピピッと機械音が鳴って、エラーコードが表示させる。

—— 認証エラーです。フロントまでお問い合わせください。

「そういえば、さつき船内の扉を封鎖するとかアナウンスされてましたけど……」

「困リマシタネ」

手持無沙汰になったポートルランドは持っていたバットを構えると、軽く素振りをして見せた。一等客室のある廊下は、素振りをするには十分な広さだ。ブンという重低音が静かな廊下に響いた。

「ゴノバット フリ心地サイコウデスネ」

ポートルランドはバットを握り直すと、今度は真剣な表情でバットを構える。さすがはプロの気迫だ。大坂は気圧されて半歩後ろへと距離をとった。さつきよりも、鋭くてキレのあるスウィング音が廊下に響く。すると同時に、パパンという電気系統がショートする音が船内に響き渡った。そしてほぼ同時に、ガチャンとドアのロックが解除される音がする。

「二ホンノ科学ギジュツハ スバラシイネ」

「いや、違うと思いますけど?」

その直後に廊下中が暗転して、直後に非常灯の明かりが足元を照らした。一瞬の出来事に、2人とも困惑したが、お互いに顔を見合わせた後で、ポートルランドは恐る恐るドアノブに手をかけた。部屋に入ると、ポートルランドのPDAがメールを受信したらしい。アメリカのパンクバンドTHE OFFSPRINGのPRETTY FLYの

イントロが流れた。

First contact as Last chance

「飯田！ 南木曾！ 大丈夫か!? しっかりしろ!!」

打ちっぱなしコンクリートの廊下の突き当たりにある鉄格子の前で、武装した男女が倒れている。茅野は、その一方を抱きかかえるように叫んでいた。

「モニター室！ 通信が途絶えていた飯田、南木曾の両名を確認。 2人とも意識がない、大至急救護班を呼んでくれ！」

「了解」

「なんでこんな事になってるんだ！」

「茅野さん、落ち着いてください」

「ああ、わかっている。カメラの方は相変わらずか」

「ええ、バックアップシステムを立ち上げたんですけど、これもどこかでブロックされているみたいで役に立ちません。大変ですよ。事前にウィルスが仕組まれていたとしか考えられません。今もバグが進行しています」

「——仕組まれた？」

そんなことはあり得ない。茅野の立会いの下で、出港前にセキュリティシステムのチェックは何度も行ったのだ。

彼は二重になっている鉄格子の扉を慎重にあけると、分厚い金属の扉の前に立ち止まってID端末を受信部にかざした。ここを開ける権限があるのは、船内には茅野しかいないはずだ。間もなく、ロックが解除されて特別用具室の内部が露わになった。特別用具室は、参加選手たちに支給される野球用具のすべてを積んだ一般用具室のような大型倉庫とは様子が異なり、小さなアートギャラリーのような造りになっている。強化ガラスのケースにバットやグローブなどが数点収められているだけの小さな部屋だ。もちろん、このガラスケースのセキュリティだって簡単に破れるものではない。祈るような思いで茅野は特別用具室の奥へと歩みを進めていく。

特別用具室に収められている用具は大会運営本部の直轄で入手したもので、これらは中ノ鳥島では高値で取引されることになっている。運営本部の重要な資金源でもあり、それゆえ厳重な管理が成されているのだ。すでに買い手が決まっているものもあり、万が一にも、この中の何かひとつでも無くなるような事があってはならない。

今回の輸送で唯一の星5つアイテム「雷神バット」の収められているはずのケースの前に立った茅野は愕然とした。夢であって欲しい。そう思った。

「おいおいおい……」

頭の中が真っ白になる。

「茅野さん、どうかしましたか?」

「……ないぞ!!」

「なんですか? もう一度お願いします」

「雷神バットがないぞ!」

「またまたあ、悪い冗談はよしてくださいよ……」

どうやら、機械の誤作動ではないようだ。取り返しのつかない失態に、モニター室の空気も極限状態にまで張り詰める。

大量生産可能な一般の野球道具とは違い、ここにあるものは唯一無二のレアアイテム。レアアイテムは運営本部によって厳重に管理されていて、その性能から星1つ(ソロ)から星5つ(クインテット)まで格付けがされている。特に、星5つアイテムは現在7点しか確認されていない大変貴重なものである。

想定外の事態だが、怯んでいる場合ではない。茅野はこの状況に手を打たなければいけない。

「すぐに船内すべての出入り口を封鎖してくれ。間違っても犯人を船外に取り逃がすなよ。いいな。それから、全員のIDをチェックを、最優先で。レアアイテムとの接触があれば記録に残るはずだ」

「全員のですか? 何時間かかると思ってるんですか!」

「いいからやれ!」

「はー!」

「……」

茅野は一瞬黙った。モニター室の箕輪は茅野の逡巡を察した。熱くなりやすいが、いざという時の判断において冷静沈着な茅野が取り乱している。

「主任、あくまで仮説ですが、よろしいでしょうか」

「何だ。言ってみろ」

「Sランカーが乗船している可能性はありませんか？」

「そうか、それは考えもなかったな。確かに、Sランカーならばセキリテイーを破る事ができるかもしれない。だが、その可能性は低い。今回の筆頭のチャド・ポートランドはAランクだ。次点はBランクの橘みずき。それ以外はCランク以下ときている。まったくCランク以下じゃ本戦では及びでないだろうな。本部もどうして一般公募なんて真似したのかって、そんな話はどうでもいいが……」

しかし、と茅野は考える。この嚴重な警備を掻い潜って、何の痕跡も残さずに犯人はバットを持ち去った。となれば、Sランク以上の使い手が何らかの“能力”を駆使した可能性は高い。そして、今回のリンク付けは事前に行った適性と能力テストの結果を反映しただけの暫定的なものだから、自分の能力を高く偽ることはできなくても、低く偽ることは可能だ。とはいえ、セレクションを確実に突破できるだけの実力はアピールする必要はあっただろう。なるほど、自ずと犯人が浮かび上がってくる。

「橘みずきとチャド・ポートランドは今どこにいる」

「橘は大ホールのパーティー会場です。チャド・ポートランドは、えーと、9階の、自分の部屋に向かっているようですね」

「そうか、わかった。俺はこれからチャド・ポートランドに会いに行く。橘みずきも見失わないようにマークしておけ」

インカムに向かつて応えようと、茅野は再び元来た道を走りだした。本命は橘みずきだ。そして、ポートランドは共犯か、何も知らずに利用されているかのどちらかだ。ちょうど開いたエレベータから救護班のメンバーが降りてきた。手短かに状況を引き継いで、茅野は9階のボタンを連打する。ボタンを連打してもエレベータのスピードが速まるわけではないことは、警備員だけでなく船内のすべての従業員が

知っている事だ。エレベーターの扉がゆっくりと閉まった。

茅野もかつては中ノ鳥島において開催されるリーグ戦に参加していた実績がある。しかし、現在所属している運営本部直轄の警備部隊に志願して以来、野球からは距離を置いていた。自分よりも才能があつて、自分よりも努力をしている人間たちがそこに五万といたからだ。必死で頑張つてBランクが限界だった自分が立ち入る隙などそこにはなかった。それに、最近では島の外からも招待選手を招いているため、格段に本戦のレベルが上がっている。

そんな中での、突然の一般公募に茅野は疑問を持ったが、輸送船の警備主任を任されて、その疑問もすぐに解消された。今回の公募は、本土で開発された星5つレアアイテム「雷神バット」の輸送のカモフラージュの為だったのだ。星5つレアアイテムは中ノ鳥島にも数えるほどこか確認されていないが、そのどれもが超人的威力を発揮して、扱う人間の能力を飛躍的に向上させている。

雷神バットの移送。それが茅野の任務であり責任だ。経緯がどうあれ、中ノ鳥島にたどり着く前に雷神バットを回収すればよい。茅野は繰り返し自分に言い聞かせた。すると間もなく、ゴーンという衝撃音とともにエレベーターは緊急停止した。

「茅野さん、大変です！ 聞こえますか」

茅野のインカムに通信が飛び込んでくる。彼は、深くため息をつきながら、胸ポケットからペンライトを取り出す。つまみをパキンとひねると小さな明かりが彼の足下を照らした。

「ああ、聞こえてるよ」

「船内の電気系統に高圧の負荷がかかって一部の機器が破壊されました。」

「そうか。ならば、誘導しろ。すべての乗客と従業員を最上階の大ホールに集めるんだ。拒否した者のIDは没収して構わん」

茅野は7階で緊急停止しているエレベーターを降りると、すぐに非常階段を駆け上がった。

「茅野さん。無茶しないでくださいよ、手が空いてる人間をそちらに送ります」

「着くまでに一体何分かかる？ 奴はいとも簡単に最新鋭の警備を掻い潜って、自分の客室に戻るなり、しれつとパーティー会場に戻るなりしてるんだ。電気系統を遮断すれば時間を稼いで逃げ切れるとも思ってるんだろうが、そうはさせるかよ」

9階は赤い絨毯張りの一等客室フロアーだ。インカムの通信を終えると、茅野は赤絨毯の上を走り始めた。



扉の向こうは一流ホテルを思わせるスイートルームだった。ポータランドの招きで大坂も恐る恐る足を踏み入れる。特別な待遇を受けていることは想像に難くない立派な内装だが、さつき停電して以来は非常用の薄暗い電灯が足元を照らしているだけだ。また、正面にある大きな窓はベランダのようなデッキへと続いていて、夕闇に浮かぶ黒々とした水平線を望むことができる。

不意にポータランドのPDAがメールの受信音を奏でる。陽気なパークツションと女性のコーラスが特徴的なイントロに、大坂は聞き覚えがあった。

【運営本部からのお知らせ】レアアイテム獲得おめでとうございます
「雷神バット」★★★★★ 効果・打撃力+200（効果はランクにより変動）

日本で開発された科学技術の結晶。電荷を帯びたバットがボールの反発力を増すとされている。

※このメッセージはレアアイテムを獲得した際自動的に受信されます。

「なんだか、貴重なバットみたいですね。」

「タシカニ ウェイト バランス サイコウニフィットシテマス」

100キロを超える巨漢の大男が思いっきりバットを振っても、何の差しさわりもないくらいにこの部屋は広かった。ビュオンとポータランドがバットを一振りすると、不思議な事に、天井から下がっていた照明に一齐に灯がとまり、また暫くすると元の薄暗い部屋に戻っ

た。種と仕掛けと洗練された話術によるマジックショーのような光景だった。そうでなければ魔法使いが物理法則を歪めたようにも見えた。

突然起きた超常現象に、部屋のまん中で大坂は驚き立ち尽くすばかりだった。ポートルランドは、平然とした様子でバットをテーブルに立て掛けて、ペンスタンドからサインペンを手にとり大坂を促す。「そうでしたね。お願いします」

大坂は少しだけ手首のスナップを効かせて、ポートルランドの胸元にボールを投げると、それはパシンと小気味よい音を立てて、ポートルランドの分厚い掌の中に収まった。

「そのバット、僕も、借りていいですか？」

「モチロン オフコースヨ」

おそらく、このバットには何か秘密があるのだろう。大坂は慎重にバットに手を伸ばす。黒塗りのヘッド部分が放つ不気味な光沢と、対照的に美しいグリップの木目が妖艶で引き込まれそうだ。しかし、指先1センチまでその木目に迫ったところで、大坂の左腕に激痛が走った。

「うああああつー！」

「What's wrong! ダイジョウブデスカ！」

「な、何とか…」

伸ばした右腕を抱えてながら、大坂はもう一度ツートンカラーのバットを見返す。強烈な静電気を何百倍にもしたようなバチンと弾かれるような衝撃で、骨が痺れている感覚だ。一方のポートルランドは、床を転がるそのバットを平然と拾い上げて様子を窺っている。大坂の頬を、冷たい汗が伝う。

「ポートルランドさん、そのバット、普通じゃないです」

暗がりの中で、ポートルランドの表情がよく見えない。ポートルランドはサインを書き終えたボールを、山なりの軌道で大坂に返した。

「ニホンデノファーストホームランボールデス ワタシニトツテ トテモ大事ナモノデスガ コレハオーサカノモノデス オーサカガ持ッテイテクダサイ」

大坂は飛んできたボールを両手で丁寧にキャッチした。

「そのバットは、何なんですか？」

「ワカリマセン デスガ ツヨイパワーヲモツテイマス 理由ハワカリマセンガ ピンクパンサンガワタシニタクシタモノデス キットコレハ大切ナモノデス ソレニ……」

チャンピオンにならなければならない。とポートルランドは続けた。この告白に大坂の思考回路に素朴な疑問が浮かぶ。三冠王に輝き、日本シリーズ優勝まで経験している彼は、いったいこれ以上の何を望んでいるのだろうか。2年5億を蹴った男は、いったい何を考えているのだろうか。

大坂が訊こうとしたその時だった。ドンドンドンというドアをノックする音が、薄暗いスイートルームに響いた。どうも友好的なノックではなさそうだ。

「ポートルランド！ そこにいるのはわかってる！ おとなしく出てこい！」

大坂とポートルランドはお互いの顔を見合わせ、お互いにここまでの状況を整理した。ポートルランドは度重なるチーム勧誘合戦に嫌気がさしてパーティーの会場を後にした。大坂はそのポートルランドの後を追いかけて会場を去った。やがて、ポートルランドの部屋の前でレアアイテム「雷神バット」を手に入れる。どうやらこれは電気系統に影響を与える代物らしい。ポートルランドがバットを振ると部屋のロックが解除されて船内の照明が落ちた。そして、どうやら正規の方法で支給されたアイテムではないらしい。そもそも、ピンクⅡパンサンという人物の置手紙は怪しすぎる。そして、今扉を叩いている人物に心当たりはない。

「ドチラ様デスカ？」

「船内の警備の責任者だ。雷神バットを持っているな。手荒な真似はしたくない。速やかに返してくれないか」

やはりこのバットは曰く付きのようだ。

「ポートルランドさん、返しましょう。これは僕らが持っていてはいけないものなんですよ。きつと」

諭すように大坂が言った。しかし、ポートルランドは黙ったままだ。この野球大会が一筋縄ではいかない事を、ポートルランドは事前に理解していた。

「バットヲカエスマエニ ヒトツ キキタイ」

「何だ、言ってみろ」

「ピンクⅡパンサン トイウジンブツ 知ツテイルカ？」

ポートルランドはベッドルームを指差すと、ライフジャケットを取って来るように大坂に指示した。ここから窓を開けて海に飛び降りるだけでも言うのだろうか。まさか、ドアを開けしなに銃撃戦になるわけでもあるまい。熱くなっているポートルランドの表情の意味を大坂は理解できなかった。しかし、同時にポートルランドの背負っている覚悟を大坂は感じた。大坂は、すぐにベッドルームへ走った。

「ピンクⅡパンサン？ 知らないな。それよりもバットを返してくれ。おとなしく返してもらえれば、君たちを傷つけるような真似は決してしない。約束しよう」

「キミタチ？」

ポートルランドの表情が一瞬強張るが、後に続く茅野の言葉に、彼は安堵の表情を浮かべる。

「今回の主犯は、おそらく、橘みずきだろうな。しかし、嚴重警戒下にあるレアアイテムだ、迂闊に持ち歩くわけにはいかない。そこで、今大会筆頭の君に一役担ってもらおう事となった。そもそも、雷神バットの移送は極秘事項なんだ。これがどういうことかわかるよな？」

「ナラバキクガ ソノケイビヲトツパレタノハ アナタタチノ ミステイクナノデハナイカ？」

大坂が、オレンジ色のライフジャケットを2つ持って渋々戻ってくる。

「ポートルランドさん挑発したらダメですよ。ここは穩便に……」

「イチゴイチエ ニホンジンハ エニシヲ大事ニシマス」

あまりの急展開に、大坂の思考が追い付かない。

「今から3つ数える。その間に出てこない場合はこちらも手段を選ばない。1つ！」

ポートランドは大坂からライフジャケットを受け取ると、すっかり日が落ちて闇に包まれたベランダに向かって走り始める。

「2つ!」

ポートランドは急いで窓を開けると、まだ踏ん切りの付いていない大坂を促す。

「Come on!」

「3つ!」

ポートランドは大坂の手を引っ張り、抱えあげて海に放り投げた。

「えっ、ちよっ、あゝっ!!」

大坂の着た蛍光オレンジのライフジャケットが黒い海に飲まれるのを確認すると、ポートランドも、その後を追うように海へと飛び込んだ。

間もなく、茅野が部屋に突入するが、すでに誰もいなかった。開け放たれた窓から、海風が吹き込んでくるだけだった。

「茅野さん、チャド・ポートランドの信号が消えました!」

インカムに管制室からの報告がむなしく響いた。

「ガッテム!」

茅野はスイートの床にインカムを叩きつけた。

第一章

One of the most attract ive HEROINE

夏苗は重ねていた唇をゆっくりと離すと、少し憂いた眼差しで彼を見つめ返す。本当に、こんなやり方でよかったのだろうか。初めての経験に不安になって、彼女は注意深く彼の様子をうかがうが、彼は表情を変えない。脈を打つ鼓動が普段の何倍もの音を立てて響き、しばらくの沈黙が、実際の何十倍もの長さに感じられた。朝の冷たい潮風が赤く染まった彼女の頬をやさしく撫でると、黒い艶やかな髪がさらさらとなびいて彼の顔に触れていく。すると、彼は表情を歪めてにわかにかき込んだ。

「だ、大丈夫ですか？」

たまらず夏苗は蛍光オレンジのライフジャケットの青年に声をかける。彼は20代前半だろう。ずぶ濡れのまま浜辺に打ち上げられていたとはいえ、17歳の少女は今更ながらに自分がとった行動を思い返し、頬を赤く染めた。何となく、いつかどこからか白馬の王子様が現れてそれは奪われるものだと思っていたから、なんだか越えてはいけない一線を越えてしまった気がしていた。

「あれ、ここは？」

「よかった。気が付いて頂けましたか」

青年は横になったままで夏苗を見上げる。夏苗は安堵の笑みを浮かべたが、不意に目が合うと、恥ずかしさのあまり、彼女はあわてて視線を逸らした。

「ここはパラキ村の海岸です」

「パラキ？」

「はい。ここは中ノ鳥島東地区のパラキ村でございませす。あなたは見かけない顔ですね？ 悪い人ではなさそうですが……」

「ああそうか。助けてくれたのか。オレは大坂小波。出身は埼玉県の川……」

意識がハッキリとしてくると、酸欠からくる激しい頭痛が大坂を襲った。大坂は苦悶の表情を浮かべて言葉に詰まったが、目を逸らせている夏苗にその様子はわからない。

「埼玉ー。もしかして、島の外からいらしたのですか？」

「ああ……」

気のない返事で大坂が答えると、不安そうにしていた夏苗の表情がぱっと明るくなった。

「凄いです！ 凄いですよ！ さっそくおじい様に知らせませんと！」

「おい、ちょっと待ってくれ。どういう事だ？」

「あつー。自己紹介がまだでしたね。私はこの村に住んでいる龍ヶ崎夏苗といいます。宜しくお願いします」

命の恩人とあつては致し方ないが、その微笑みは天使の頬笑みだった。夏苗は大坂を起こすと、家まで案内すると言って歩きはじめた。それから、彼女は大坂を発見し助けるまでの経緯を細かく説明した。話は何度も脱線を繰り返したが、それはそれで育ちのよさそうな彼女の人となりを窺い知ることが出来た。朝の浜辺を愛犬のみかんを連れて散歩するのが日課であること。みかんが突然走りだしてどこかに行ってしまったこと。大坂はみかんを探している最中の彼女に発見されたらしい。

彼女は独特のリズムで言葉を紡いだ。気品のある物腰はどこかのお嬢様といった表現が相応しいだろう。身につけている仕立てのいいブラウスやスカートの着こなしも自然だったし、何よりリボン付きのカジュアルなストローハットがとても良く似合っている。一方で、色白で端正な顔つきと、手入れの行き届いた長い黒髪が、まだ10代とは思えないほどの艶やかさを醸し出していた。さらに、時折見せるあどけない笑顔は、男なら誰しも魅力的と思うはずだと大坂は感じた。

「……じゃあ、犬はまだ見つかってないんだらう？ 先に犬を探そうよ」

「でも、小波さんがずぶ濡れです」

「大丈夫だよ。これでも昔は嵐の中で練習してたし……へつくし！」
「ふふふ。みかんなら心配ありませんの。とつても賢いんです。今までも散歩している最中に勝手にどこかに行ってしまう事がありましたけど、必ずランチの時間には帰って来ますのよ」

「それって賢いのかよ」

笑いながら大坂は夏苗の頭を小突いた。

退屈のぎで応募した野球大会、運よく選考を突破して、軽はずみに参加を決意して、気が付いたら海の真ん中に突き落とされ、見知らぬ浜辺で、美しい少女に命を救われていた。いままで積み上げてきた日常が、雲のように流れてどこか遠くへ去っていく。今は、目の前で微笑みながら歩く少女の存在だけで充分だった。大坂は頭の痛みのことなど忘れていた。

二人はそのまま海岸線に沿って暫く歩いた後で、防波堤の階段を上り、小さな港のある小さな集落にたどり着いた。

「人口は134人しかありません。漁業と林業で暮らしていますが、基本的には自給自足の村です。もともと、東地区は過疎が進んでおりますけど、ここは特にひどいんです。だから、小波さんの事はみんな喜んでくれると思います。」

「それは嬉しいな」

大坂は短く答えると、なるべく夏苗の気に障らないように気をつけて続けた。

「あと、さつきから言おうと思ってたんだけど、その『小波さん』っていうの、やめてくれないか？」

「あらどうして？」

「滅多に下の名前で呼ばれないから、その、照れるっていうか……」

「名前、お嫌いなんですか？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「ならいいじゃないですか。小波さん」

「じゃあ、せめて呼び捨てにしてくれ」

「年上の殿方を呼び捨てですって？ そんな事できるわけがないじゃないですか」

本気で言っているのか、面白がって言っているのかはわからない。大坂は何も答えずに、彼女の横を歩く。夏苗のすまし顔もまた魅力的だった。

「見えてきました。あの丘の上の建物が私の家です」

龍ヶ崎家は村の集落の北西の丘陵の中腹にあった。豪邸と呼ぶには質素な作りだったが、赤い屋根と白塗りの壁は由緒ある洋館のような佇まいだった。

眺望の良いベランダで、白塗りのアンティークの椅子に腰をかけ、キセルを吹かす。屋敷の主のヤソジにとっての至福のひとつだった。特に晴れている日は、青い水平線と常夏の緑色のコントラストが、まぶしくパラキの村落を包み込む。この平和を一枚の絵にかいたような光景を、ただただ眺めることが年老いたヤソジの少ない楽しみの一つだった。

「おじい様、帰りました」

「夏苗か。おかえりなさい」

ヤソジは愛用している朱塗りのキセルを丁寧にテーブルの隅に置くと、その代わりに紫檀の杖を手取る。それから、ゆっくりと立ち上がってベランダの下をのぞいた。

最近膝の調子も芳しくない。立ちあがり、数歩歩くだけのことがこれ程までつらいのか。自分自身へのもどかしさは日に日に強まっていた。今でこそ、孫娘はヤソジを慕ってくれているが、それもいつまで続くだろうか。彼女にだって、いずれ連れ添うべき男が現れるはずだ。その時の事を、時々思い描いては、ヤソジは年甲斐もなくセンチメンタルになるのだった。孫娘にとって、こんな老いぼれの世話をするよりも、好きになった男のもとで暮らした方がいいに決まっている。それがわからないほどヤソジも野暮ではない。しかし、今、目の前に現れた男はどうだろうか、ずぶ濡れである。

「おじい様、紹介します」 大坂小波さん、島の外からいらしたの」

「そうかそうか。今そちらに行く。千代さんに着替えを用意してもらいなさい」

千代というのは、この家に下宿しているお手伝いさんの事だ。ヤソジがここに家を建てた時から住み込みで働いている。この家はヤソジと千代と夏苗の3人住まいだ。



——ここで、ただいま入った情報をお知らせします。第8次招待選手を乗せた船、セントラルバード号が原因不明の制御不能に陥り、北地区リモニア港への着岸に失敗。市街地の一部にまでセントラルバード号が侵入して、大きな被害が出ている模様です。現場では火災や有毒ガスが発生しているとの情報もあります、付近の方は当局の指示に従って冷静な対応を……

リビングダイニングにある旧式のラジオが速報を告げる。ベテランの男性アナウンサーの緊迫した声が、洋館のリビングに響いた。

「まあ、ひどい事故ですこと」

いつもより1つ多い4つのコーヒーカップをお盆に並べて、千代がリビングにやってきた。落ち着いた物腰の清楚な老婦人は、少しだけ表情を歪めた。少し遅れて、頭からバスタオルをかぶった大坂がリビングに戻って来た。そして、簡単にシャワーの礼を述べた。

家の主であるヤソジは、一見すると優しそうな風貌だが目つきは鋭い。夏苗の言うとおり『おじい様』という呼び方のしつくり来る人だ。木目の美しい西洋風のダイニングチェアに腰をおろして大坂が戻るのを待っていたようだ。

「ゆつくりしていきなさい。小波君といったね。男物の服は、生憎わしの物しか用意できないが勘弁してくれ」

「いえいえ、とんでもないです」

大坂は改めてヤソジに礼を述べると、濡れた髪をバスタオルで拭いながら、ラジオの速報に耳を傾けた。セントラルバード号は昨日まで大坂が乗っていた船だ。そして、今朝この島に到着する予定だった船だ。大坂が船を飛び降りた後、何事もなければ、同行していた矢部はあの船で島に到着している事になる。あの後、矢部は連絡の途絶えた自分を探したのだろうか。大坂の脳裏に船内を捜しまわる矢部の姿が浮かんだ。しかしその姿は滑稽で、いまひとつ緊迫感に欠けるもの

だった。

大坂はアナウンサーの放つ言葉を注意深く聞き取るように試みた。しかし、報じられているニュースは北地区リモア市での被害状況を告げるばかりで、一向に船内の様子には触れようとしない。大坂にとつてのそれは歯痒かった。

「小波さん、どうかなさいました？」

奥からお茶受けを持ってきた夏苗が声をかける。

「実は、あの船に友達が……」

「それはお気の毒に。どうぞ、掛けて下さい」

コーヒーカップを並べ終えた千代が大坂に椅子を勧めた。促されるままに大坂も椅子に腰かけた。そして、大坂はここまでの経緯を掻い摘んで説明した。一同はその話を黙って聞いていたが、大坂が話し終えたところでヤソジが口を開いた。

「ならば、君たちは第8次招待選手団ということになる」

「第8次？」

どことなく上の空だった大坂の目に力がこもった。過去に7回同じような事があったということになる。

「ああ。この島では定期的に外部から有志を募っていてな。と言つても、今回みたいな大規模な招待は初めてなんじゃが、君たちは北地区で行われる予選を勝ち抜いた後で、中ノ島野球リーグの本戦に参加することになっていたんじゃ。これまでも、数年に一度、本土から9人の精鋭を募つて、島内のリーグ戦に参加させていたんじゃが……」

ヤソジは言い淀むと、朱（あか）いキセルに火を落とす。火皿の刻み煙草が赤く燃え上がると、間もなくヤソジはふーつと長く煙を吐き出した。

「しかし、知っているかね。彼らの中で本土に帰れた人間はいないんじやよ。本土に帰るためには、本土と島とを結ぶ定期便の乗船チケットが必要なんじやが、それを手に入れる為には、この島のリーグ戦を勝ち上がって優勝しなければならんじや。察しはつくだろうが、島内には幾つもの強豪チームが存在する。外から来たにわか作りのチームで、おいそれ優勝などできるはずもない。事実上の拉致じや

よ。いずれ、仲間割れが起きるか、島の風土に慣れてしまうかで、みんな故郷に帰る事を忘れてしまうんじゃないよ」

ヤソジはまだ少し熱いコーヒーを飲み干した。大坂はテーブルに両手をつけて立ち上がるとヤソジに尋ねた。カップの中でコーヒーが揺れる。

「帰れないって事ですか!？」

「そうは言っていない。ただ、島内のリーグ戦を制覇しなければならぬ」

「そんな……」

答えに詰まった大坂を、夏苗は心配そうに見つめた。大坂は俯いたままだ。

大坂はポケットからPDA端末を取り出した。長い時間、海水につかっていたにもかかわらず、それは正常に起動画面を示した。液晶画面を含め本体は新品同様で傷ひとつない。電話帳から矢部のページを呼び出す。締まりのない薄笑いの顔写真の隣にはEDBD Dという彼の能力テストの結果が示されている。不器用だが足だけは速かった。かつての彼の特徴をよく表していた。総合評価はDランク。ブランクがあるとはいえ、かつての高校球児でさえ上から4番目の裁定だ。その辺の草野球のレベルでは通用しないということだろう。

端末のGPSシステムを起動させて、彼の現在地を検索した。所在地を示す赤い丸印が、島の北のはずれに在るリモアアの市街地を移動している。おそらく彼は無事なのだろう。しかし、何回電話で呼び出しても、彼が出ないのは気がかりだ。

矢部と連絡がつかないことは気がかりだが、大坂には頼れる人物にもう一人心当たりがあった。「優勝しなければならぬ」と言っていた人物に覚えがある。矢部には悪いが、こちらが本命だ。電話帳のページをめくる。A A E D D。総合評価はAランク。彼は現役の三冠王で、なおかつ不思議な力を持つバットを持っている。

「例えば、プロ野球の三冠王がチームにいたとして、リーグ戦を勝ち上がれますか？」

「ふむ、どうじゃろう。いい線までは行くと思う」

「そんなに、レベルが高いんですか？」

「いや、北地区の話じゃ。招待選手は原則として北地区のリーグ戦にエントリーすることになっておる」

「では、ここは？ 東地区は？」

3人の表情がにわかには曇ったのが大坂にはわかった。何かまずい事でも言ったのだろうかと大坂は不安になる。常夏の日差しを雲が遮ったらしく、リビングの照度がぐっと低下した。気まづくなってPDAに視線を落とすと、画面に表示されている赤い丸印が、少しずつこちらに近づいてきているのがわかった。土地勘のない大坂にはどのくらいの距離が離れているかわからないが、結構な速さで近づいてきている事がわかる。

しばらくの沈黙の後、夏苗が静かに口を開いた。

「東地区は、もうリーグ戦が機能していないんです。私たちの村のチームも東地区5球団中最下位。明日の試合を棄権したら、チームは解散してしまいますの」

「解散って？」

「中ノ鳥島野球リーグの規定で、2シーズン勝ち星のないチームは解散しなければならぬ。私たちが最後に勝ったのは、一昨年の初戦で、明日は今シーズンの最終戦。だから、解散なの」

夏苗は涙こそ浮かべないが、今にも消えてしまいそうな声で答えた。

野球が生業ともいえるこの島で、町ごとに点在する野球チームが持つ意義は大きい。その存続・発展のために町の若者が集められ、その勝敗に皆が一喜一憂する。ある町では設備の整った巨大ジムを建設して選手を強化し、別の町では絢爛豪華なスタジアムを建設して試合ごとにお祭り騒ぎをする。野球がこの島の人々の生活の中心なのだ。それは、片田舎のパラキ村でさえ例外ではない。

しかし、過疎化が進む東地区、とりわけパラキ村の野球事情は特殊だった。ヤソジが夏苗の話の後を受けた。

「恥ずかしい話じゃが、この村には野球ができる人間がもういなくてな。私みたいな老いぼれか、女子供ばかり。こんな村に野球チームは

必要ないと言われてしまえばそれまでじゃが、このまま何もせず終わってしまうのは、忍びなくてなあ」

雲が流れて太陽が顔を出すと、再び常夏の日差しが窓を抜け鋭く床に突き刺さった。床一面にまぶしく光が反射してギラギラと大坂を照らした。

大坂は、再びPDAに目を落とすと、東地区の順位表を検索にかけた。パラキ村のホームチームと思われるパラキフロッグスは、夏苗が言うとおりの5球団中最下位だ。0勝7敗、棄権試合7。

「オレでよかつたら、力になりますよ」

大坂は出来る限りの笑顔を作って答えた。なるべく固くならないように努めたが、それはぎこちない笑顔だった。夏苗の表情が少し明るくなったような気がしたが、ヤソジと千代さんは困ったように顔を見合わせている。ヤソジは言い淀んだが、代わりに千代さんが口を開いた。

「大坂君、よく考えて決めてちょうだい。さっきのルールには続きがあるの、解散したチームに所属する選手は、二度と中ノ鳥島野球リーグに選手として登録ができなくなってしまうのよ。それでもいいの？」

「男に二言はありません。オレでよかつたら是非」

安請け合いだった。ただ一度、こういうセリフを言ってみたいなと、昔思った事があっただけだ。先の事なんて少しも考えていなかった。

中ノ鳥島野球リーグでは春に東西南北の各地区でリーグ戦を行い、秋に各地区の成績上位チームが決勝トーナメントを戦うことになっている。

ところが、過疎が進む東地区では、自然と野球への振興は他の西・南・北地区から比べると劣るものとなり、決勝での成績も芳しくない状況が続いている。これは、東地区の過疎に更なる拍車をかける悪循環となり、他地区との格差は広がる一方である。

そんな折に頭角を現したのが、隣町のサンシャインモンキースである。彼らは元々由緒ある東地区の雄であったが、いつの年からか勝つ

為の手段を選ばない極悪非道集団へと変ってしまった。反則すれすれの危険行為を繰り返して、やがて相手チームの戦意を削ぐ。そんな彼らの振る舞いもまた、東地区の野球離れを加速させた。

彼らの素行は何度も運営本部に申し立てられたが、彼らへの咎めは注意勧告にとどまり、それ以上のペナルティーが科されることはなかった。それもそのはずである。ルールの範囲内での行いを誰も咎めることはできない。

このような状況では東地区のまともなリーグ運営は不可能だった。星取表は、モンキースの独壇場が続いて、他球団の主力には故障者が相次いでいた。身の危険を感じて棄権するチームさえ出始める。すると、8つあった東地区の球団が1つ消え、2つ消え、一昨年は東地区最古参の球団が解散した。今ではパラキ村のフログスを含めて5球団しか東地区では存在していない。そして明日、その終焉を迎えようとしていたのが、ヤソジが監督として率いるフログスだった。

話が決まるや、ヤソジは東地区の球史を熱く語り始めた。聞くところによれば、ヤソジは元々島でも屈指の名プレイヤーだったそう。合いの手をいれる千代も嬉しそう。何度も聞かされている話なのだろうか、夏苗はあまり興味がなさそうだった。

彼女はぼんやりと窓の外を眺めていた。大坂は、この家の日常を何となく垣間見たような気がした。

そんな談笑が続く中、不意に夏苗が立ちあがった。

「みかんが帰ってきたわー！」

お昼にはまだ早い。ふと大坂はそんな事を思った。どんなバカ犬か一目見てみよう。と大坂も立ち上がり、玄関へと急ぐ夏苗に続いた。

「まあ、みかん！ また、こんなものを拾ってきた」

見ると、ふてぶてしい柴犬がポッキーカーラーのバットを咥えながらしっぽを振っている。夏苗はおもむろにバットに手を伸ばした。見覚えのあるバットだ。

「ちよつと待ってー！」

大坂が言うが早い。すでに夏苗はみかんの口元からバットを引き

離していた。

「どうかなさいまして?」

不思議そうに夏苗が振り向くも、平気そうな夏苗の様子に大坂は安堵した。

「いや、何でもない……」

大坂の心配をよそに、夏苗はバットにつ見入っている。

「何とまあ、美しいバットなんでしょう、でも私には少し重いかしら」
夏苗は靴も履かずに青い芝生の庭先へ飛び出すと、ブンブンと素振りをして見せた。重いバットに振り回されて、軸がブレていたが悪くないフォームだと大坂は感じた。普段からバットを握っていないければ、あのスウィングはできないだろう。しかし、それ以上に、無邪気にはしゃぐ夏苗の姿に目を奪われた。大人しい印象だった彼女が、たった一本のバットに表情を変えて、天真爛漫に振る舞う。野球の事となると熱くなるのはこの島に生まれ育つ者の性なのかもしれない。
「小波さんも振ってみてくださいいな」

もし、あのバットだったらば、また腕が痺れるかも知れない。一抹の不安を抱えながらも大坂は夏苗のリクエストに応えるべく、玄関先にある来客用のサンダルの足をかけた。不意に見上げた空に浮かぶ雲の形が、妙に目蓋に焼き付いた。

その時、聞き覚えのある声が庭先を駆け上がってきた。

「ガツテムー!」

ずぶ濡れの大男が、息も絶え絶えに駆け上がってきた。玄関先でふてぶてしく欠伸をするみかんの姿と、ポツキーバットを構えた少女の姿を確認すると、両手をひざについて肩を上下に揺らしながら呼吸を落ち着かせた。

「ヤット 追イツキマシタ ハア ハア……」

「ポートランドさん?」

「オー! ミスターオーサカ! マタ会エマシタネ」

本当ならば、大坂は目の前で能天気な笑みを浮かべている外国人に色々と言わなければならぬ事があるような気がしたが、今この瞬間に、そんな事はとても小さな事のように思えた。巨漢の外国人にいき

なり海に突き落とされ、清楚なお嬢様に命を救われたのだ。埼玉に帰るのを急ぐ必要はない。そう大坂は直感した。

大坂とポートルランドが知り合いだとわかると、ポートルランドも龍ヶ崎家に手厚く迎えられた。もちろん、彼が元プロのAランカーと分かればパラキフログスのチームの一員として招待されたのは言うまでもない。



翌朝、試合前のミーティングで、大坂は驚くべき事実を知らされた。

「三番、ピッチャー 大坂」

「!?」

「聞こえんかったか？ 三番、ピッチャー大坂」

「あ、はい！」

昨日は一度も見せなかった厳しい表情と、強い語気でヤソジに迫られて、慌てて大坂は返事をする。ピッチャーなど生まれてこの方経験がなかった。大学の草野球大会ならいざ知らずであるが。

「四番、ファースト ガツテム」

「ハイ」

ポートルランドは既にこの呼び名を受け入れていた。ずぶ濡れの大男が現れるなり「ガツテム」と言い放つ様は、夏苗にとって新鮮だったらしい。彼女はガツテムさんと呼んで彼を慕った。気が付けば、皆も彼をガツテムと呼び慕った。

「五番、ショート 井伏……」

スターティングオーダーが次々と読み上げられていく中、最後の最後で大坂はまた驚かされた。

「九番、キャッチャー 夏苗。以上だ。今日は強力な助っ人2人が加勢してくれたから、私はベンチからお手並みを拝見させてもらおうよ」

『オー!!』

士気は高かった。

しかし、よりによってキャッチャーがこのお嬢様とは。清楚な外見とは裏腹に、お転婆な一面も垣間見えていたが、キャッチャーはナインの中で最も危険なポジションと言ってもよい。だからこそ、プロテ

クター・マスク・ヘルメット・レガースと一式の防具で身を守るのだ。
クロスプレーに代表される危険な局面もあり、昔から屈強な大男と相
場は決まっている。最近はやインテリメガネ君の需要もあるらしいが、
とても女の子に務まるようなポジションではない。

Out of Control

——リモア市内。

緊急車両が、街の目抜き通りを絶えず往来している。一般住民の避難は済んでいるらしいが、逃げ遅れた者の悲鳴と、警察と消防関係者の緊迫した怒鳴り声が路地に響いていた。時折、どこかのガス管が破裂して、シューとガスが漏れている音や、充満したガスがどこか遠くで爆発してドーンという音が響いてきた。

矢部は雑居ビルの陰に身を潜めて、数人の警官をやり過ごした。彼は現在PDA（ID端末）を持っていない。PDAがなければ、不法滞在とみなされて厳罰に処せられるのがこの島の決まりだと聞いている。乗船していた船が、突然制御を失って、北地区最大の港町であるリモアの市街地に座礁、そのまま炎上した。前代未聞の重大事故の混乱に乗じて、彼は逃亡を凶ったが、それは同時に船内で紛失したであろうPDAを取り戻す機会を失う事でもあった。このままでは、当局に身柄を抑えられるのも時間の問題だ。

一緒に乗船していた親友の大坂とは、昨夜の船上パーティーの会場で別れて以来、連絡を取っていない。正確には、船上パーティーの最中にPDAを紛失してしまい、連絡が取れないでいる。PDAの端末は電話としての通信機能がある。そして思い出されるのは、船内で接触した鮮やかなピンクのワンピースを着た女の子だ。PDAは彼女に盗られた可能性が高いのだが、彼女が今どこにいるのか、この混乱では知る由もない。

「おいー！」

突然、後ろから腕を掴まれる。

「おいー！」

男は、強い語気でもう一度言うと、矢部の腕をぐいと締め上げた。

「いででで！ 痛いでやんす」

「やっとながが付いたか、貴様も逃げる身ならば、周りへの警戒を怠るな」

「痛い痛い痛い！ 放すでやんす」

「大声を出すな！ 名前は？」

「矢部明雄でやんす！ 痛いでやんす！」

男に腕を解放されると、矢部は表通りに出て大袈裟に石畳の地面に転がり、のたうち回った。

「おまわりさ〜ん！ 暴力でやんす！ 助けるでやんす！」

「馬鹿か貴様は！」

男は再び矢部の腕を掴むと、路地裏へと引き戻した。

「捕まりたいのか！」

男はリモーア市内を巡回する警官と良く似ている様な身なりだったが、それは似ているだけだ。彼は警官ではない。彼は抵抗を続ける矢部の鳩尾に一発極めると、彼を担いで路地の奥へと消えていった。

◆ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

男のアパートは雑然と散らかっている。独身男の一人暮らしなんて、誰だつてこんなものだと思う。パソコンデスクの上には読みかけの本と、飲みかけの薬と、数週間洗ってないコーヒーカーップがそれぞれ。領土を確保していた。男は自身のPDAとパソコンをケーブルで繋ぐと、深く深呼吸をする。パソコンを起動すると、お互いの端末が同期を始めた。

矢部と名乗った青年は、案の定PDAを持っていなかった。しかし、間違いなく本名だろう。あの刹那で偽名を使う男にはとても見えない。彼は、玄関先でまだぐったりと眠ったままだ。この青年を含めて、今回招待された選手のデータは、本部のバンクに登録されているから、本部のパソコンにアクセスすれば彼の身元を特定できる。

男は、自分のパソコンを本部のネットワークに接続して、慣れた手続きでパスワードを通す。警備部門と管理部門の一部の人間しか知らないパスワードだ。

続いて、矢部明雄なる人物のIDを調べて自分の端末に登録する。そして、そのまま所在地を検索にかける。今は、本部の仕事熱心な人間がシステムへの不正なアクセスに気が付いて妙なプロテクションをかけない事を祈るだけだ。

男は、さらにチャド・ポートランドと橘みずきのIDも検索にかけ

だが、それらは生憎ヒットしなかった。男は不審に思い、顎の無精髭をさする。

「おかしいなあ……」

リモニアの中心街から3丁目にあるこの男の自宅付近は、緊急避難地域に指定されていて、町はとても静かだった。一度だけ、中心街に向かつてけたたましいサイレンを鳴らしながら緊急車両が表通りを駆け抜けていったが、その時以外は、廃墟のように静まり返っていた。

男はケーブルからPDAを引き抜いて、先程取得したIDを連絡先に登録した。やはり、この青年に間違いない。そのまま現在地を検索にかけると、表示された地図の赤いポイントが市街地を南に向かつて移動しているのがわかる。今ある唯一の手がかりは、まだそれ程遠くへは行っていないが、駅に向かっているようだ。やはり急がねばならないようだ。

「ここは、どこでやんすか？」

気の毒な青年が、ようやく目を覚ましたようだ。

「港通り3丁目だ。残念だな、青年。君のPDAは今、誰かの手に渡り、どこかに向けて移動中だ。PDAは指紋による本人認証をクリアしないと電源が入らないから、位置情報も発信できないはずなんだが、どういう訳か今も発信が続いている」

分厚い牛乳瓶の底のようなメガネをかけた青年は、間の抜けた表情で辺りの様子を探っているらしいが、男は構わず続けた。

「今から、取り返しに行く。取り返した時に電源が入らないと困るから、付いてきてもらうぞ」

男の名前は茅野啓吾。セントラルバード号の警備主任だった男だ。今回の事故は、船内の厳重なセキュリティを破られた事に端を発している。厳戒態勢で保管されていた「雷神バット」が何者かによって盗まれたのだ。そして、その深夜に船は暴走し、今朝の事故に至った。これらの出来事が無関係だとは考えにくい。

茅野は当然、これらの責を問われる事となる。しかし、とても言い逃れができる状況ではない。星5つレアアイテムの紛失は大会運営の根幹を揺るがす大失態である。一刻も早く、犯人を突き止めるしか

ないのだ。

「…と、その前にだ。君が、仲良くしていた青年が一人いたな。彼の名前を覚えてくれないだろうか」

メガネの青年は、無然とした表情で黙った。見ず知らずの人間に、友人の名を軽々しく喋るほどバカではないらしい。しかし、目の前の人間が、自分にとって有益か否かを見極める賢さはないようだ。茅野は言葉を続けた。

「俺は、セントラルバード号警備主任の茅野だ。今から、君の友人の居場所を調べてやる」

再会したいはずだ。しかし、好条件すぎるだろうか。無闇に疑われて、情報を引き出せなければ元も子もない。

「大坂小波でやんす」

茅野は、キーボードを叩いた。しかし検索にヒットしない。間もなく、不正アクセスに対する警告画面がデスクトップのモニターに映し出された。これで、お尋ね者確定だ。

「大坂の坂は大阪府の阪じゃないでやんす。坂道の坂でやんす」

「ちつ、もうバレたか……」

「どうしたでやんすか？」

「時間がない。行くぞ」

「ここは茅野の自宅だ。逆探知などせずともアクセス元が特定されただろう。」

「待つでやんす！」

「何だ」

「船に戻るでやんす！」

「断る。時間がない」

「嫌でやんす。ガンダーロボ限定フィギアを置いてきてしまったでやんす！ シリアルナンバー入りでやんす！ 命よりも大事なものでやんす」

「吹けば飛ぶような命なんだな。諦めろ」

茅野は強引に矢部の腕を振り払おうとしたが、矢部は放さない。

「オイラ……オイラ……!!」

「鬱陶しいな。ガキじゃねえんだ」

「オイラ、まだ死にたくないでやんす！ 死ぬ前に好きな女の子とあんな事やこんな事だつてヤツてみたいでやんす！ でも、あのフィギアも手放せないでやんす！」

どつちかにしてくれ。リスクが大きすぎる。しかし、今、目の前でハリウッド女優級の涙を見せるメガネに事情を説明した所で理解できるとは思えなかった。

「男がそんな顔するんじゃないよ——」

——気持ち悪い。という言葉葉を茅野は慌てて飲み込んだ。近頃は口が悪くなつていけない。筆筒の引き出しを開けるとタオルハンカチを1枚取り出した。

「わかった。君の宝物は、俺の同僚に頼んで責任を持って回収させる。時期が来たら、必ず君に返そう。これでいいな？」

さすがに、船に戻れば当局に捕まる事くらいは理解しているらしい。とはいえ、彼の心を絶ち切るにはもうひと押し必要だろうか。茅野は一芝居打つことにした。PDAの電話帳をめくり「かつての」同僚に電話した。呼び出し音が鳴る。1回、2回……

「もしもし、原村か？」

『ちよつ、啓吾!! みんなあなたを探してるわよ?』

「うん、ああ、すまない。迷惑をかける」

茅野は矢部を促して部屋を出た。アパートの階段を降りながら会話を続ける。

「違うんだ、聞いてくれ」

甲高い声に紛れて、彼女のオフィスの喧騒が聞こえてくる。茅野を取り巻く状況はあまり良くないらしいが、彼女は今すぐ現場に戻るよう提案してきた。

「悪いが、それはできない。だが、信じてほしい」

同期で入社した2つ歳下の女は、これ以上、茅野を引き留める事はしなかった。

「今は言えない。でも、ひとつだけ頼まれてくれないか？」

少しの間を置いて、かつての交際相手は彼の要求をのんだ。茅野は

原村に簡単に礼を述べると、船室のどこかにあるガンダーロボと言うおもちゃのファイギアを回収して欲しいと告げた。

「そうだ。それを俺が戻るまで預かっておいてくれないか？」

彼女は電話越しに頓狂な声をあげている。

「それはわからない」

アパートの小さなエントランスを抜けると、大通りへと続く路地を走りはじめた。

「本当にすまない。切るぞー！」

茅野は大通りまで全力で走った。途中何度か振り返ったが、ドンクさそうな青年はしっかりと後を付いてきている。息が上がっている様子もない。少々見くびっていただろうか。大通りに出ると、驚くほど良いタイミングでタクシーが通りかかった。すかさずそれを捕まえると、矢部と共に乗り込んだ。

「新リモーア駅」

「あいよ」

朝から何度も往復しているルートなのだろう。運転手は無表情でハンドルを回しはじめた。

見慣れた街の景色が通り過ぎていく。目を閉じると、暗闇に浮かぶ2つの蛍光オレンジが波に煽られて遠ざかっていく様が思い出された。忌々しい光景だ。彼の悪夢は、ここから始まったのだ。

◆ ◆ ◆

船がコントロールを失ってから3時間後。外部との通信もできず、打つ手がなかった。このままでは船は港に衝突してしまう。市街地への被害も甚大なものとなるだろう。非常用の発炎筒や信号弾も何者かに持ち出され、緊急事態を外部に知らせる術もなかった。お飾りのような緊急時用の救命艇では暴走する船のスピードを追い越せるはずもなく、女性と年配の参加者と数名のベテラン従業員だけを避難させる事で手一杯だった。

翌早朝、息の詰まるような衝撃と共に船が止まると、混乱に乗じて茅野は船を降りた。そして間もなく、予めカメラでチェックしていた青年を発見すると、彼の後を追いかけた。ポートランドと一緒に海

に飛び込んだ何者かと行動を共にしていた青年である。特徴的な分厚いメガネをかけていたので、すぐに彼とわかった。しかし、下船してから彼の様子がおかしい。他の乗客が、近くの警官や消防士のもとにイの一番に保護を求めているのに対して、メガネの青年は人目をばばかりのように建物の影へと消えていく。それでもなお、誰かを探しているようだ。「あいにく、君の連れは今頃、太平洋の海の中だよ」と茅野は心の中で呟いた。それにしても、連絡を取りたければPDA端末を使えばよいものを。そして、茅野はある事に思い至った。

彼は、事情はわからないが、この混乱でIDを紛失したのだ。当局にも出頭するわけにはいかないし、友人にも連絡が取れないでいるのだ。そして、橘みずきがまんまと嚴重なIDチェックを逃れた事にもこれで合点がいく。しかし、もしそうだとすると事態は厄介な方向に進んでいる事になる。

そもそも、招待選手がPDAを紛失するなんていったいどういいう了見なんだ!?

にわかによぎる苛立ちと共に、茅野はメガネの彼に声をかけた。

Go for broke!

パラキ村村営グラウンドの両翼は88m、センター112m。ナイターの設備はないが、天然芝の外野も、黒土の内野も手入れが行き届いていて、球場設備としては申し分ない。午前中にもかかわらず真夏の日差しがキラキラと照りつけて、ホームから両翼まで伸びる鮮やかな白線を眩しく照らす。

剥き出しのコンクリートが階段状に並んでいるだけの内野スタンドには、試合の行方を見届けようとパラキの住人が集まり始めていた。芝生の外野スタンドでも村外からの見物人が何人か観戦に訪れている。

自ずと、試合前のキャッチボールは夏苗とペアになった。長い髪をお団子に結んで、チームカラーの緑のキャップを浅めにかぶると、それは器用にも帽子の中に収まった。そして、準備完了とばかりにミットをパンと叩いて合図した。

まずは、お手並み拝見。大坂は少しずつ距離を伸ばしていく。ちょうど塁間位の距離になったところで、夏苗の送球が弧を描き始めた。

「まだ塁間だぞ?」

それほど声を張らなくても、聞こえる距離だ。

「あまり張り切ると、肩壊しますよ?」

夏苗は強がって微笑んだが、彼女はこれ以上キャッチボールの距離を伸ばそうとはしなかった。キャッチャーと言えば本塁からセカンドまでの対角線を矢のような送球で射抜き、企てられた盗塁を阻止するのも見せ場の一つである。まさか塁間の送球が限界では? と、大坂が心配し始めたところに2台の大型トラックがグラウンド横の駐車場に横付けされた。

華美に装飾されたデコレーショントラックから、真黒に日焼けした屈強そうな男達が続々と降りてくる。両腕にビッシリとタトゥーの入った長身の金髪男や、鼻や耳をピアスで埋めつくした白髪の男、さらに、スキンヘッドにサングラスのギャングの用心棒にしか見えない輩までいる。悪そうな奴はだいたいトモダチ。そんな連中が十余名

トラックから降りてきた。ある者はくちやくちやとガムを噛みながら、またある者はゲラゲラと品のない笑い声をあげながら、彼らはグラウンドへと足を踏み入れる。とりあえず、まともに挨拶をする気はなさそうだ。

その様子をしばらく見ていた夏苗は、大坂の方に向き直ってボールを投げ返す。

「小波さんは、まだ伝えていませんでしたね」

突然の矢のような送球が大坂のグラブに収まる。抜群のコントロールだ。掌に伝わる予想外の衝撃の大坂はまた驚く。

「モンキースは見ての通りの荒くれ者集団です。勝つためには手段を選びません。特に、ここ何年かの彼らの素行は酷いんです。どんなプレイでもルールの範囲内ならば、試合中の事故で済まされてしまう。フロッグスの棄権が続いているのも、実は試合中に怪我人が何人も出て、試合続行が不可能になって棄権しているからなのです」

大坂は周囲を見渡した。

フロッグスのメンバーは、40歳を過ぎたおじさんばかりだ。おじさんならばまだいい、ヤソジとそれほど変わらないお爺さんと呼んでもいい年齢の者もいた。彼らはキャッチボールもそこそこに、ベンチの日陰でくつろいでいる。一方のモンキースは、柄が悪いとはいえ、10代20代の若者ばかりと見受けられる。彼らの一部はろくにアップもせず、ジャージ姿のまま肩自慢とばかりに遠投を始めている。ウォーミングアップの様子から察する限り、まともな勝負になるとは思えない。

「特に気をつけて頂きたいのが、あの赤髪にバンダナを巻いてる男です。モンキースのリーダー漁火剛。打つも守るも十人並みですが、ファイヤースターターと言う発火能力者です」

「発火能力!?!」

大坂は訊き返した。電撃バットの次は発火男と来たものだ。

「はい。今の東地区で、目に見える魔道術の使うのは彼くらいです」

「マドウジュツ?」

魔道術。ファンタジーな言葉が、大人しく可憐な少女の口からこぼ

れた。よく見れば、向こう側のベンチに腰掛けるバンドナ男はライターも使わず、指先に灯った炎でタバコに火をつけていた。

大坂は一度夏苗に視線を戻した後、改めて相手ベンチを覗き込んだ。間違いない。指先に灯った炎が、タバコの先端でくすぶると、一筋の煙が確かに流れ出した。

「ちよつと、あんまりじろじろ見たら……」

向こうのベンチからガラの悪い大男が2人近づいてきた。どちらも180cmは軽くあるだろう。片方はスキンヘッドにサングラスのマフィアの用心棒風の男、もう片方は長身の割にひよろつとしているが腕にはびつしりタトウーが彫り込まれている。

「おい、何見てんだ？」

タトウー男がメンチを斬った。迫力十分だったが、大坂も引くわけにはいかなかった。何か気の利いた口上でもあれば、この場を丸く収める事ができるだろうが、生憎、大坂はそれを持ち合わせていなかった。大坂も黙って睨み返すのが精いっぱいだが、それは対峙する4人の間の空気を悪くするばかりだ。

「ドーカシマシタカ？」

能天気に見えて、とても頼りになる男だった。ぼんやりしている様でも、周りの状況を良く見ている男だ。背後から現れたガツテムは彼らと身長でタメを張り、横幅で圧倒した。ガラの悪い2人の足が止まる。

「なんでもねーよ。見ない顔だから挨拶しに來ただけだ。俺はピッチャーの菅野で、こつちは4番の佐賀だ。おい！じーさん！今日もヨロシク頼むぜ！」

タトウー男は平静を装い口上を述べると、すぐに三墨側ベンチへと引き返した。マフィアの用心棒も黙って引き返して行つた。ガツテムも大坂の背中をポンとミットで叩いて、元いた位置に戻ると、キヤッチボールを再開した。

「お手柔らかに頼むよ〜」

一墨ベンチで腰掛けるヤソジの声も意外によく通る。

「それで、俺なんかピッチャーでいいのか？ 魔法つてヤツの心得

はないんだ」

おまけに、公式戦ではピッチャーの経験もない。大坂はキャッチボールを再開したが、指先が汗ばんでいるのがわかった。今までにない緊張を感じているが、それは、ぶっつけ本番のマウンドに対してでも、柄の悪い対戦相手に対してのものでもない。ハッキリと目の前で見せつけられた空想の産物に対してのものだ。

「それは、お気になさらないください。島の外から来た人で、初めから魔道術を扱えた人にはお会いした事ありません。それに、東地区には昔から魔道術の使用を良しとしない伝統があるんです。なので、東地区では魔道術の野球への応用があまり発展していません。純粋な野球が楽しめるといふ側面もですが、残念ながら本戦での結果は昨日お話ししたとおりで…」

東地区では5年前、あまりの成績不振が理由で、2つあった本戦への出場枠が1つに減されている。それ以来、5大会連続でモンキーズが本戦に出場しているのだが、彼らの本戦での成績はお世辞にも良いと言えるものではなかった。

「当たって砕けろってか」

夏苗に聞こえないように、大坂はつぶやいた。しかし、孫を溺愛するヤソジは最も危険なポジションに孫娘を据えている。話を聞く限り、ヤソジの野球への造詣の深さは生半可なものではない。何かの策でもあるのだろうか。

『しゃーっす!!』

午前10時、両軍の選手がグラウンドに整列して一礼すると、各々の持ち場へと散っていく。プレイボール。

初回表、フロッグスの守り。即席ピッチャー大坂の立ち上がりは上々で、先頭の足尾、2番の渡良瀬をあっさり三振に斬って取ると、続く3番漁火もショートフライに打ち取った。初回裏の攻撃は、フロッグス先頭の鹿島が三振、続く筑波も三振に倒れると、3番大坂に打席が回って来る。

大坂には18歳の夏に引退して以来、丸々3年間のブランクがあった。多少、身体のなまりは感じていたが、打席に立った時の緊張感が

懐かしい。最後の打席は勝ち越しのタイムリーだった。3年ぶりに左の打席に入り、右手に持った金属バットをゆつくりと手首で1回転させながら、右足で足場を均らしていく。無意識に高校時代に繰り返した癖のような動作が出てくると、嫌でも口元が緩んでしまった。心は野球を忘れていたが、身体は野球を忘れていなかった。また、こうして打席に立てる日が来るとは、この3年間、考えてもいなかったことだ。

相手投手の菅野は試合前に絡んできたタトゥー男だ。180cmを超える長身で、マウンドから見下ろされるといふ表現がぴったりだ。手足も長く、球速は150km/h近くをコンスタントに叩きだしている、肩が温まれば、さらに球速は上乘せされるだろう。これだけの剛腕ならばプロでもトップレベルだ。

しかし、ネクストサークルにはそのプロをも手玉に取るガツテムが控えている。大坂は、グリップを余らせて、バットを短く握った。調子は悪くなさそう。大きく息を吐いて、気持ちを落ち着かせる。まずは、塁に出ることを考える。

——ズバンツ！

長身を活かしたダイナミックなフォームから放たれた初球は、インコース高めへの直球。大坂は思わず仰け反った。しかし、ボール球。大坂もこれで怯むような打者ではないから、不敵に笑う菅野を一瞥すると、さらにバットを短く握り、ベースに覆い被さるようにして構えた。制球に余程の自信がなければ、インコース攻めはまず無いだろう。ブランクのある大坂とて、ヤマを張れば150km/hは打てない球ではない。

アウトコースにヤマを張って、握るグリップに力を込める。菅野のモーションと同時に、大坂は右足をあげる。しかし次の瞬間、菅野の150km/hは大坂の右肩を直撃すると、高く宙に舞い上がった。「デッドボール！」

「相変わらずじゃのう。夏苗、コールドスプレーを持っていきなさい」「はい」

早速、夏苗が大坂のもとへ駆け寄る。ヤソジは厳しい表情のままス

コアブックにDBと記した。

「小波さん！ 大丈夫ですか」

「このくらい平気さ」

慣れた手つきでスプレー缶を振る夏苗を、手を振って追い返しながら、大坂は菅野の様子を窺う。彼は、帽子を脱いで会釈こそはしたものの、悪びれる様子は全くなかった。大坂も痛がるそぶりは微塵も見せずにゆっくりと一塁へ歩いた。デッドボールの当たり方くらい心得ている。この程度の死球で投球に影響はまず無い。

二死一塁で4番ガツテムが打席に入る。

ややオープンスタンスで打席に立ち、バットを寝かせて構える姿は、去年大坂が西武ドームで見たものと変わりがなかった。違うのは、大坂自身も同じフィールドに立って一緒にプレーをしていること。1歩、2歩と大坂はリードを広げる。

すかさず、菅野は牽制球を挟む。大坂は頭から帰塁する。厳しいタッチが大坂の前腕に叩き込まれた。ファーストの外藤は塁審の様子を窺うが、塁審の両腕は水平に広げられた。セーフ。

中ノ鳥島では本土の球界の情報は手に入りにくいらしい。去年のシリーズ三冠王の顔を皆が知らないのも不思議な事ではなかった。主催者の裁定による選手データがメンバー表交換時にそれぞれのPD Aへ転送されるが、ガツテムと大坂のデータはまだ準備されていないようで「NO DATA」という表記しかされていない。昨日の事故のせいでデータの更新が間に合っていないのだろう。

——カキーン！

菅野が不用意に投じた初球を、ガツテムのポツキーバットが真芯で捉える。快音を残して高々と舞い上がった打球は、スコアボードの向こう側、遙か場外へと消え去った。両チームの選手は呆気にとられて打球の行方を見守ったが、間もなく一塁側ベンチは歓喜に包まれた。ガツテムが右手こぶしを高く突き上げる。

しかし、喜びを分かち合う一塁側ベンチで、ヤソジの表情だけが陰しい。

先に帰って来た大坂を、ベンチは暖かく迎え入れる。

「大坂君、ちょっとそのバットを見せてくれまいか」

ポッキーバットを持ってベンチに戻ってきた大坂をヤソジが呼びとめた。今度はバットを持っても腕が痺れる事はなかった。バットを受け取ったヤソジは低く唸り声をあげて、そのバットをじっくりと観察している。

「どうかしましたか?」

「ここを御覧なさい」

ヤソジがグリップテープを少し剥がすと、木目の一部が不自然に変化している部分があった。一見すると、それはただの木の節のようにも見えたが、よくよく見ると鬼の形相の男が太鼓を打ち鳴らす様が精巧に彫刻されていた。

「おじい様、これは昨日みかんが拾ってきたものよ」

夏苗は得意気に、ベンチの隅ですやすや寝ている愛犬を指差した。

「その直後にガツテムさんが家にいらしたの」

「そう言えば、そうじゃったな」

ヤソジは、ベンチ前でハイタツチを交わしながら喜びを分かち合うガツテムを一度見やっつてから、静かに語り始めた。

「まだ、わしが若いころじゃ。風神バットという神懸かり的な威力をもったバットがある日突然現れてのう。その年のリーグ戦は風神バットを手に入れたチームが圧倒的な打力を誇り優勝したのじゃ」

「おじい様、また昔話ですか?」

ヤソジが長台詞モードに突入するのを察知すると、夏苗は眉を吊り上げた。

「まあ、聞きなさい。当時その風神バットと対をなしている雷神バットというアイテムが予言されてのう。それらしい贗物が幾つか出回っていたものじゃが、結局、本物の雷神バットは見つからなかった訳じゃ。与太話だと思つて、今の今まで忘れていたが、ひよつとするど、これは本物の雷神バットかも知れん。今のホームランが何よりの証拠じゃ」

ハイタツチをひとしきり終えたガツテムが戻ってきた。浅黒い肌にはラテン系特有の明るい笑顔が印象的な男だ。ヤソジも右手を突き

上げてガツテムに握手を求め、先取点の喜びを分かち合った。やがて、腕を解くとヤソジは丁寧な口調で言った。

「ガツテム君、つかぬ事を聞くが、このバットはどこで手に入れたのだね」

「フネノウエデス」

「船の上じゃと!?!」

事もなげに言うガツテムに対し、ヤソジはかなり驚いたようだ。鋭い視線をガツテムから逸らして、暫く思索してからこう述べた。

「野暮な事は言いたくないのだが、暫くこのバットの使用は控えた方がいい」

ガツテムの表情が曇った。この老人の言う事は一理あった。ガツテムも経緯のわからないバットを使い続ける事には少なからず不安を感じていた。このバットが持つ不思議な力の存在を頼りにしたい一方で、得体の知れない力への恐怖がないわけではなかった。

「このバットに限らず、持ち主に不思議な力を与えるアイテムがこの島には幾つも存在する。しかし、その力が強ければ強いほど扱いが難しく、持ち主を不幸に招いた事例も少なくない。だから本当に必要な時が来るまで、これは封印しておいて欲しい。このバットは、何と云うか、力が強すぎるのじゃ」

ヤソジは言葉を選びながら、ガツテムへと告げた。不思議な力を持ったアイテムに翻弄されて選手生命を短くした選手を、少なからずヤソジは見てきていたからだ。

「それに、君のセンスなら道具に頼らずとも、結果は出るじやろう」「ソレモソウデスネ」

ガツテムの表情に笑顔が戻る。見かけによらず、聞き分けのいい男だ。

そうこうしているうちに、5番井伏はセカンドライナーに倒れスリーアウトチェンジ。フロッグスナインは2回表の守備に散っていく。



モンキース4番の佐賀は、サングラスを外すと非常に目つきの鋭い

男だった。目の下の痣のようなクマが悪辣なイメージで、凶悪な犯罪者として指名手配されれば誰もが納得するだろう。もちろん、人を見かけで判断するのは褒められた事ではないのだが。佐賀に睨まれると、ロジンバツクを片手にマウンドに立つ大坂の背筋から冷たい汗が流れる。事前に確認したIDのデータによればミート力B、長打力A。

AとかBとかの評定がどの位凄いものか大坂にはわからなかったが、他の打者のデータにCやDが並んでいるところを見ると、この佐賀という男の能力がチームで飛び抜けている事がわかる。

一方で、夏苗は相変わらずノーサインで相手打者の膝の高さにミットを構えた。試合前に彼女は「低めに集めればどんな打者も打ち取れる」と言っていた。実際に初回は3人で打ち取ったが、150km/hの速球を見慣れている彼らが、大坂が投げる打ち頃の棒球を捉えられないわけがない。

…ブオン！

初球ストライク。やはり佐賀のスイングは、今までの1、2、3番打者の比ではない。高校野球ならば、間違いなく全国クラスの強打者であろう。弱気なピッチャーならばマウンドから逃げ出してしまいかもしれない。それ位の威圧感がある。大坂は、もう一度ロジンに手を当てた。

…ブオウン！

またも、ストライク。さつきよりも、また一段と鋭い強振だ。低く、低く。夏苗はジェスチャーで促した。言うほど楽じゃないんだぜ！

…ブオン！

佐賀は結局、3度とも低めのボール球に手を出すと、あっさり三振に倒れた。選球眼は小学生並のようだ。

速球に目が慣れていている打者が遅い球にタイミングが合わず、軟投派の投手にいいように玩ばれる事があるが、今のモンキース打線がそんな風に打ちあぐねている様には見えない。5番菅野、6番外藤もまったくバットに当たる気配がなく三振に倒れた。スコアブックにKが並ぶ。

「打ち頃の直球だよな？」

ベンチに戻ると、たまらず大坂は夏苗に尋ねたが、夏苗は黙って微笑みだけだ。まん丸の瞳を少しだけ細めて、小さな唇をキュツと結んだその微笑みに骨抜きにされそうな大坂だったが、気を取り直してもう一度問いかける。

「これは魔法か何かなのか？」

「さすが小波さん。正解です」

「そうか、俺もいよいよ魔法が……」

「いいえ、誤解なさらなくてください。小波さんが気を悪くするといけないから、黙っていたのですが……」

「わかってる。130km/hそこそこの直球と付け焼刃のカーブもどきで抑えられるような相手じゃないだろ」

「それもそうですね。隠し事も気がひけますし、ご説明いたします。そもそも、この島で魔道術は異端の能力ではありません。得手不得手は人それぞれですが、多くの場合は島の環境に促されて能力が顕れます」

「島の環境？」

「はい。どういう訳か、この島にいる殆どの人間には、何かしらの能力が顕れます。これは、島の外から来た人も例外ではありません」

「それは、俺も魔法が使えるようになるってことなのか？」

「はい、おそらく」

微笑みながら夏苗は答えると静かに、しかし、愉しそうな口調で続けた。

「個人差はありますが、島の風土に慣れる1カ月くらいで何かしらの兆候が自然と顕れると言われております。それをコントロール出来るように訓練していけば、小波さんならきつとスゴイ事になりますよ」

「待ってくれよ。北地区の予選の開幕が今朝の発表で明後日なんだ。1カ月も待ってられない」

自分の未知なる能力に、にわかな期待を抱いた大坂は頭を抱えた。

「小波さんは、本戦に出られるおつもりなのですか？」

「そのつもりで、この島に来ただけどね」

今となつては、それどころではないと大坂は言えなかつた。魔法という空想の世界に一抹の期待を覚えていたのも事実だが、この空想の世界から戻れなくなってしまうのではないかという不安の方が大きかつた。出口のわからない迷路に、うっかり足を踏み入れてしまったかのようにだつた。籠の中の鳥とでも言えばよいのだろうか。中ノ鳥島とはよく言ったものだ。

「そうでしたか。何か、引き金になる強い衝撃があれば、能力が強制的に発現するという話を聞いた事があります」

「強い衝撃？」

「ええ。非常に珍しいケースです。トリガーと呼ばれていて、瀕死の危機に晒されたり、トラウマになるような事故に巻き込まれたりすると、強制的に能力が発現することもあるみたいで……」

「トラウマとかは、ちよつと勘弁だな」

大坂は苦笑した。

「ところで、夏苗の魔法はどうなつてるんだ？」

「知りたいですか？」

不敵な微笑みに、大坂の背骨がぞくつと震える。

「そりや、知つてるのと知らないのとじゃ、投げ方も変わるだろ」

「それもそうですね。では、こんな実験はご存じかしら？」

夏苗はカバンの中からマグカップを取り出すと、次に小銭入れからコインを一枚取り出した。薄い緑色のカエルのファンシーキャラクターを模した小銭入れた。

「小波さん、このコイン、今はこの角度からは見えませんが……ほら、もつと近くに来て下さい」

夏苗はベンチの隅に大坂を呼び寄せると、華奢な体を大坂に密着させた。大坂も身を屈めて夏苗に目線を合わせる。火照つた夏苗の身体と、少し汗ばんだユニフォームのほのかな匂いに大坂はドキリとするが、夏苗は構わずに説明を続けた。

「こうやって、少しずつ水をコップに注いでいきます。コインが水の勢いで動いては意味がないですからね。少しずつです……」

小学校の時に、理科の実験でやった事がある。光が屈折するというアレだ。しかし、これが何だというのだろう。次第にコインの上端が現れると、マグカップが水で満たされる頃にはコインはその姿を全て確認できた。

「空気の層と、水の層。密度が違っていると、光が進む速さが少しだけ違うんです。本来、光はまっすぐ進むものですが、角度を持って光が密度の境界にぶつかると、進む方向が変わるんです。これが光の屈折です。屈折した光は、私たちに本来そこには無いものを有るものと認識させてしまいます」

「ふーん。だけど、グラウンドには何処にも水溜まりなんて無かったじゃないか」

「これは理屈の話です。実際には蜃気楼に近い現象をホームベースと、マウンドの間で意図的に起こすんです」

「はあ……」

「続きは、また後に致しましょう」

彼女はにっこりと微笑み、話を切り上げた。手に持っていたマグカップをみかんに差し出すと、みかんはぺろぺろとその水を美味しそうに飲んだ。ふてぶてしいが愛嬌のある犬だ。

2回裏のフロッグスの攻撃は、6番土浦、7番古河、8番笠間と3者連続三振。菅野の快投におじさん軍団は手も足も出なかつた。キレのあるスライダーも投げられるらしい。大坂は肩を休める暇もなく、再びマウンドへと上がる事となった。

3回表の守り。大坂のコントロールが少し乱れて球数が増えたものの、またも3者連続三振。モンキースの7、8、9番のバットも面白いうように空を斬った。3回までに、8奪三振。あまりに出来すぎなデビュー戦だ。

夏苗は、蜃気楼に近いものと言ったが、蜃気楼は空気の密度（温度）の違いによって光が屈折して海の向こうの町が宙に浮かんで見えたりするものだ。さて、その理屈からすると、ホームとマウンドの間に高温の空気層と低温の空気層がある事になる。

3回裏の攻撃は、9番の夏苗からだ。どうせ、菅野の速球に手も足

も出ないだろうと大坂は多寡を括っていたが、彼女はしぶとく四球を選ぶと一塁へと歩いた。どこかで彼女の話の続きを期待していた大坂は、自軍のチャンス到来にもかかわらず、少し複雑な心境で一塁に声援を送る。

「ナイッセ〜ン！」

夏苗は小さなガッツポーズで声援に応えた。年相応の、はにかんだ笑顔が反則的に魅力的だった。

How do you like Wednesday?
ay?

リモニア市郊外にある新リモニア駅は、長閑な田舎のターミナルステーションである。8つあるプラットフォームはそれぞれ西地区、中央地区、南地区、市内・港方面へと向かうそれぞれの路線の終着駅となっている。市内の混乱が嘘のように駅周辺は静まり返っていて、人は疎らであるが、それでも途切れる事はなかった。市内・港方面へ向かう路線は運休している様だが、他の路線は定刻通りに運行していた。間もなく南地区行きの特急列車の出発時刻だ。これに乗れば、先行するPDAの持ち主に追い付ける。茅野は2人分の切符を買おうと特急列車に乗り込んだ。

「——すると、君の友達は、高校時代の親友ってことか」
「そうでやんす」

一度気を許すと、何でもかんでもペラペラと喋る青年だ。目の前のメガネの青年が言うほどの信頼関係が、この小一時間で築かれたとは考え難いが、今は好都合だ。

矢部という青年は、大坂という青年のこともまた信頼しているようだ。こちらの信頼関係は、うらやましい限りの青春が背景にあり、矢部が嘘をついていないのであれば、まがい物ではないだろう。聞くところによれば、矢部と連れの大坂という青年がこの島にやって来たのは、本当に偶然に偶然が重なっただけのようだ。ならば、綿密に練られているであろう雷神バットの盗難との関係は無さそうだ。

「そういえば、驚いたでやんすね。あの船にはポートランドが乗っていたでやんすよ！ オイラ、偶然見たでやんす」
「ああ、そうみたいだな……」

また偶然か。茅野は流れる景色を眺めながら平静を装った。これ程の偶然を平然と並べている青年を、果たして信用できるだろうか。もつとも、綿密に練られた計画を実行する作業員にも到底見えないのだが……。

「大坂君は、ポートランドに会えたでやんすかねえ」

「どうだろうな」

「でも、ポートランドを先に発見したのはオイラでやんすよ」
「へ」

乗客が少ないとはいえ電車の中だ。いい年齢の男子が、もう少し静かにできないものだろうか。茅野は、売店で買ったナッツを口に運び続けた。

「だから、大坂君はポートランドに会いに……あ、思い出したでやんす！」

「おい、少しは静かに……」

「間違いないでやんす！ それで、その時にぶつかった……」

「あくわかったわかった。もぅいいから黙っててくれ」

「聞・く・で・や・ん・す！ その時に、ぶつかった女の子がきつと犯人でやんす」

「そんな訳ないだろ！ ん？ 何だって!？」

「だ・か・ら！ その時からPDAが無いんでやんす！」

「そうか！」

「そうでやんす！」

「そういう事は、もつと早く言ってくれよ。で、特徴は？」

「う・ん。とつても可愛かったでやんすくむふふ」

「貴様の主観は聞いてねえよ！」

「ピンクのワンピースを着ていたでやんす！」

「他には？」

「超ミニだったでやんす！ パンツが見えるかと思つたでやんす！

でも、不思議と見えなかったでやんす！」

「おい！ 馬鹿にしているのか？ 服なんて着替えたらわからんだろ？」

「身長とか、何歳くらいとか、芸能人だと誰っぽいとか、そういう奴だよー！」

「う・ん。あんまり覚えてないでやんすね。背はちっちゃかったでやんす」

「あ、の、なあー！」

電車は3つ先の駅で、先行する鈍行列車に追いつくらしい。今は、矢部のPDAを取り戻し、大坂という青年と連絡を取る事が先決だ。雷神バットを盗み逃亡したポートランドに迫るにはまだ時間がかかりそうだ。それまで、当局の目を逃れながら行動しなければならぬ。我ながらタフな旅路になりそうだ。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

北地区のほぼ中央の丘陵地帯に位置するハミットヒル市街地にあるハミットヒル駅は小規模ながらショップ、ピングモールが併設されていて、改札を潜らないでも列車の待ち合わせ時間を利用して買い物を楽しむ構造になっている。飲食店はもちろん、衣料品店、書店など様々な施設が軒を連ねていた。

茅野は無邪気にも土産物店の前で立ち止まった矢部をたしなめながら、すこし憂鬱な気分を味わう。目標人物はいまだに発見できない。

しかし、駅構内にいるのは間違いないだろう。とはいえ、誤差半径が10mを超えるGPS精度では前を歩く矢部の記憶だけが頼りだ。

「この辺りだよな」

「そうでやんす。この辺りにご当地ガンダーロボシリーズが……」

「お前は、自分がどういう状況なのかわかってるのか？」

「わかってるでやんす！ でもピンクのドレスを着た女の子なんて、どこにもいないでやんす」

「当たり前だろ！ お尋ね者がそんな目立つ格好でうろついている訳……そうか！ 付いて来い！」

「何でやんすか、偉そうに」

茅野は振り返ると、近くにあった衣料品店に踏み入った。奥で電卓を叩いていた若い女性店員が驚いて顔をあげる。無理もないだろう。街に繰り出せば茅野は屈強な大男の部類に入る。派手な柄物のアロハシャツをまとっていきり立つ茅野の形相は、とても堅気の人間のそれとは思えない。

「ここにピンクのドレスを着た若い女は来っていないか？」

「……ど、どちらさまでしょう?」

「ああ、失敬。こういう者です」

茅野はチノパンから身分証を取り出した。この島では運営本部の警備員は警察官と変わらない権限がある。

「これは、失礼いたしました。先程、いらっしやいました。なるべく地味な格好をご所望でしたので、あちらのカーディガンとデニムパンツ、それと、こちらのTシャツをお召しになって帰りましたよ。ボーイッシュなコーディネートも良くお似合いの方でしたね。スタイルも良かったので、色々お勧めしたかったのですが、なんでも、次に出る特急列車に乗るとかで急いでいらっしやいましてね」

「次の特急!」

「ええ。たしかそう仰っていましたが……」

「ありがとうございます。おい! 矢部! 行くぞ」

茅野は土産物店の前で目を皿にしている矢部を呼ぶと、ホームへと続くコンコースを急いだ。時間がない!

◆ ◆ ◆

タワービルの某階にあるオフィスルームは朝から大騒ぎだった。上席者達は臨時会議を繰り返し、下っ端も部署から部署へと走り回っている。忙しいのはデスクでブラックコーヒーをすすする原村も同じだ。朝淹れたコーヒーはとっくに冷めきつている。ブランド物のグレーのスーツに白いブラウス、ダークブラウンのソバージュを束ねパソコンに向かう出で立ちはキャリアOLそのものだ。

原村のデスクの電話が鳴る。朝からこの状況である。オフィスのどの電話で誰が出ているかなんて誰も気に留めない。原村も非通知表示に気を留めることなく電話を取った。

「はい、中ノ鳥島野球大会運営本部管理部でございます」

『もしもし、原村か?』

「ちよっ、啓吾?! みんなあなたを探してるわよ?」

原村は周囲の様子を慎重にうかがう。

「どうしたの? 何があったの?」

電話越しの相手は、何かを言い淀んでいる。

「すぐに戻って来て。今ならまだ戻れる」

同期で入社した27歳の男は彼女の提案を拒否した。彼は無茶をするけど、無計画に動く人間ではない。

「どういうこと？」

そして、かつての恋人はひとつだけ頼まれてくれと言う。

「いいわ、1つだけよ」

現在の社内での立場と、過去の感情と様々なものが彼女の周囲を回る。見慣れたオフィスの景色がぼんやりとしてくる。しかし、今社内でも誰が一番に連絡を取りたがっている人物が要求してきた事柄は、あまりにも拍子抜けする事柄だった。

「なに？ ガンダーロボ？」

それでも、彼は真剣だった。

「いいけど、そんなもん拾ってどうするの？」

嫌な予感がした。このままでは取り返しが付かない事になる。引き留めるなら、今しかない。

「わからないわけないでしょ？」

そう。引き留めなければ――

「ちよっ、ちよっ！ 啓吾！！」

電話が切れた。オフィスは相変わらず慌ただしいままだ。室長の佐久は会議中だ。今すぐ報告する義務はない。原村はマスクを立ち上がると、学生時代の後輩を尋ねるべく階下の警備部に向かった。

第8次招待選手を乗せたセントラルバード号の座礁炎上事故の対応に追われて大わらわの管理部に対して、今回の事故の責任を問われる警備部の雰囲気は重苦しかった。事務所に入ると、茅野の相棒でもある箕輪に出迎えられたが、彼の表情も疲れきっていた。それもそのはずだ。最も信頼していた上官が、突然失踪したのだから。

「箕輪さん、南木曾と少し話したいんだけど」

「構わない。奥の部屋を使ってくれ」

案内された応接室に、学生時代の後輩と入る。小さなテーブルを挟むように黒皮張りのソファが4つ並んでいるだけの、小ざっぱりとした部屋だ。

「今回は、大変だったね」

「いいえ…」

南木曾が首を振ると栗色のショートボブが揺れる。普段はチャームポイントであるたれ目と長いまつ毛が、今日に限っては彼女の辛そうな表情を強調していた。おっとりしていて、あまり感情は表に出さないタイプの彼女が落ち込んでいる事が明らかに見て取れた。それもそのはずだ。目の前でクインテット（星5つ）レアアイテムが盗まれてしまったのだから。

「あたし、あんなに大事なものを運んでるなんて知らなかったんです」
独り言をつぶやくように、南木曾は吐露した。

「なぎちゃんに責任を感じる事はないわ。私も知らなかったし」

原村は、何かとんでもないものが本土から運ばれてくるらしいという噂を聞いていたが、ここは話を合わせる。

「だけど、茅野主任が行方不明だって聞きました」

「大丈夫。彼なら平気よ」

「だといいんですが」

「ねえ、その時の事、詳しく教えてくれない？」

南木曾は不安そうに、原村を見返した。原村は、じっと目を見開いて南木曾の答えを待った。

「こんな事を言って、信じてもらえるかどうかわかりませんが、思い出せないんです。あたし、その時の事」

「そう」

「でも、ひとつだけ覚えてるんです。ピンクのワンピース……」

「え、なに？」

「顔まではわかりませんが、あたしと飯田さんが駆け付けた時に、ピンクのワンピースを着た女の子と鉢合わせたんです。でも、その後の事は何も……」

「わかったわ。ありがとう。あと、ひとつ聞きたいんだけど、これから船に行く事って出来ないかしら？」

「できますよ。あたしも、現場に行けば何か思い出すかもしれないですし」

「じゃあ、決まり」

ナンバーワンの三才山は会議中、ナンバーツ一の茅野は失踪中。舵取りのいない警備部は抜け殻状態だ。箕輪も南木曾の外出を引き留める理由はなかった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

同じ頃、同じビル最上階の会議室では、大会運営本部の臨時役員会議が執り行なわれていた。円卓を囲む十余名の年齢・性別はまちまちだ。

「三才山君！ 今回の失態にどうけじめを付けてくれるんだね？」

先程から、捲し立てているのは管理部室長の佐久だ。短身痩軀で、禿げかけた頭を残り少ない頭髪で隠しているが、実際は隠し切れていない。華奢で小柄な佐久が、大柄で厳つい三才山を責め立てる様は、円卓に向かう他の人物には滑稽で仕方がない。そんな周囲の空気には目もくれず、三才山も毅然と答えた。

「主任である茅野の進退を窺うのは尚早だと申し上げております。事態の全容を把握しないまま、迂闊に事を進めては『ピンクⅡパンサン』の思う壺です」

「おたくの茅野君はねえ、今朝方自宅から管理部のパソコンに不正にアクセスして自分のIDを完全に削除していったんだよ。それに、そのピンク…何だ？ よくわからんがピンクなにがしにしたって、実態が丸でわからないじゃないか。聞くところによると、彼の自宅にあったメモ書きらしいじゃないか。そんな物が、何の証拠になるんだね？」

「まあまあ……」

問答を制したのは上座に陣取る若い茶髪の青年だ。

「7つあるうちのクインテットスターアイテムが1つ『ピンクⅡパンサン』の手に堕ちたところで、僕達の計画に何の支障もないよ。なあ、神高？」

「はい。大勢に影響はございません」

若い茶髪の青年の隣に座る妙齢の女は、にこりと愛想笑いを浮かべた。笑ったのは口元だけだ。目は笑っていない。

「…ですが、クインテットレアアイテムの流出は憂慮すべき事態です。警備部は雷神バットの回収を最優先で行ってください」

「尽力いたします」

「管理部はシステムを復旧させた後、直ちに北地区予選を開幕してください。リミットは今週の水曜。どうでしょう?」

「承知しました」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

茅野と矢部はホームへと続く階段を駆け上がる。発車のベルが聞こえる。先に力が尽きたのは茅野の方だった。体力には自信があったが、よくよく考えてみれば昨日の夜はまともに寝ていない。気が付くと、前のめりに倒れはじめた身体の制御がきかなくなっている。足が上がらず、身をよじって受け身を取るのが精いっぱいだ。意識が遠のいていく。

バタン!

突然後ろから聞こえた音に矢部が振り返ると、あろうことか茅野が階段を転げ落ちていた。

「やんす!」

茅野は一番下まで転がり落ちた。後を追うように矢部も階段を駆け降りた。

「何してるでやんすか! 早く起きるでやんす!」

「あ……ああ」

茅野は起き上がろうと試みたが、思うように身体が動かない。

「誰か! 誰か助けるでやんす!」

「馬鹿! お前はIDを持ってないんだぞ? もし、それが見つかったら——」

「わかってるでやんす! でも、茅野さんが怪我してるでやんす!」

「俺の事はいい! お前があの子を見つけて出してPDAを取り返せ。俺の端末がズボンのポケットに入っているから持っていけ。俺は後で新しいヤツを買って、それに連絡するから。いいな」

「よくないでやんす」

本当に聞き分けのない男だ。茅野は薄れる意識の中で考える。こ

の男を説得する方法は何かないものだろうか。

「よく聞け。ハミットヒル限定のご当地ガンダーロボキーホルダーとタオルハンカチは俺が買って置いてやる。俺も少し休めば大丈夫だ。だから行くんだ」

「あと、ボールペンと耳かきもでやんす」

「いいだろう」

「合点承知でやんす！」

茅野は遠ざかる矢部の足音を聞きながら目を閉じた。目を閉じると意識がどこか遠くへと飛んでいく。少し休みたい。緊張が解けた彼の身体は、そのまま深い眠りへと誘われていった。

M i r a g e Z o n e

「YOUハ カナエノコトガキナリマス！」

「……っ！」

背番号42の大男が耳元で突然囁いた。大坂は返事にならない返事をするのが精いっぱいだった。隠す事はないと大坂をあしらった後で、ガツテムは続けた。

「モンキースノバッターハ ウツノガヘタデスネ バットボールガ コンナニハナレテマスヨ」

ガツテムも、モンキースの打棒の粗末さを感じていたようだ。顎の下と鳩尾（みぞおち）付近に両手をかざしてニヤリと笑った。

キンという鈍い打球音が響くと、小さな放物線がキャッチャーミットに収まる。どうやら、送りバントは失敗らしい。1番打者の鹿島は水平にバットを構えたまま悔しそうにしていたが、キャッチャーの小山は少しだけ帰塁が遅れた夏苗を見逃さなかった。一塁へ矢のような鋭い送球が転送される。

よく鍛えられている。大坂とガツテムも、卒のないモンキーズの守備に感心しかけた時だった。

ファーストの外藤が、捕球寸前のミットを引つ込めたのだ！

鋭い送球は、そのまま夏苗の頭を直撃すると、ヘルメットを真つ二つに割ってファールグラウンドを転々とする。割れたヘルメットの破片の緑色が、黒土の上に散乱する。夏苗は朦朧とする意識の中でボールの位置を確認すると、すぐさま身を翻して二塁を目指した。いい判断だ！

しかし、ライトの佐賀のカバーリングのタイミングが絶妙だった。ファールグラウンドを大きく回り込んだ佐賀が白球を拾い上げた時、夏苗は両塁の中間地点を少し過ぎたくらいだ。この距離とタイミングで刺せる肩を佐賀が持っているのならば、わざと遅れてカバーリングした佐賀の術中ということになる。

「滑れ!!」

大坂が叫んだ。夏苗は頭から二塁に滑りこむ。

佐賀のレーザービームが、ショート足尾のグラブまで一直線で届けられると、足尾はグラブを夏苗の後頭部に強く叩きつけた。

「アウト！」

殴りつけたと言ってもいいだろう。

「夏苗！」

思わず大坂が叫ぶと、モンキースナインにギロリと睨まれる。この一瞬、飛び出そうとした大坂の足がすくみかけたが、体よくガツテムが彼の肩に手を置いた。ガツテムは黙って首を横に振った。

ラフプレーがあつたものの、夏苗は一人のプレイヤーとして勤めあげたまでだ。度を超えた心配は、むしろ彼女のプライドに障るだろう。大坂は、今すぐ駆け寄りたい衝動をぐつと堪えた。一方の夏苗はすくつと立ち上がると小走りでベンチまで帰って来た。

「平気か、夏苗？」

「うん。大丈夫。いつもの事だから。小波さんも気をつけて下さいね」

夏苗はそう言い残すと、ベンチの奥へと消えていった。

奥にはチームドクターの永瀬がいる。永瀬も、かつてはフロッグスでプレイした選手だった。しかし、今年の試合でモンキースの選手と交錯した際に肘を痛めてしまい、それ以来、戦列を離れている。今日はチームドクターとしてフロッグスナインに同行していた。

続く2番の筑波が呆気なく三振に終わると、4回表の守りへとフロッグスナインは散っていく。大坂は一塁々上のガツテムとキャッチボールをしながら、夏苗が戻るのを待った。

◆ ◇ ◇ ◇ ◇

中盤に差し掛かり、2点差で負けているモンキーズベンチに徐々に焦りの色が現れ始めた。打者一巡したが、大坂攻略の糸口が全く掴めない。ベンチから見ると、それは何の変哲もない打ち頃の直球なのだが、打席に立った者は口をそろえて「ボールが急激にホップした」「落差のあるフォークを投げる」「いやいやキレの良いナックルだ」などと説明した。

「何かしらの魔道術だろう。爺さんがそれを良しとするとも思えない

が…」

赤髪に青いバンダナを巻いた男、チームリーダーの漁火が呟いた。しゃがれた声が、独特の威圧感を持ってベンチに響く。メンバー表交換時に届いた対戦相手のデータに「NO DATA」の男が2人いた。高額な上納金で「PROTECT」をかける事も出来るという噂を聞いたことがあるが、こんなケースは初めてだ。

「本部に問い合わせましたが、該当する人物は存在しないの一点張りです」

スキンヘッドの大男が漁火のもとに歩み寄る。佐賀だ。彼は、野太いドスの効いた低い声で話す。

「僕の名前は出したのかい？」

「はい。ですが…」

「まあいいだろう。いずれにしても、僕らは今日の試合を落とすと大変な事になる。その理由は、君自身が一番よく知っているね」

「はい…」

「元をただせば君が播いた種だ。君自身で刈り取ってほしい」

「はい」

「もちろん、僕も協力を惜しむつもりはない。ただ、君が手を抜くというのならば、僕だって考えはある。僕も明日から野球ができないのは御免だからね」

無表情だった佐賀の表情が少しだけ引きつった。この男は3回裏のセカンドへの送球についての話をしているのは明らかだ。

漁火はポケットからマルボロを取り出して、指先で火を灯し一服くゆらせる。そして、ほとんど表情が変わらない佐賀の顔色を窺いながら煙を吐くと、真正面から彼を見据えて話し続けた。

「いつもの君ならば、あの娘の頭を狙う事くらい造作もないだろう。鉦一のフォローに免じて今回は不問にするが、あまり僕を苛立たせてくれるな。まさか情が移ったわけではあるまい」

鉦一はショートを守る足尾の名前だ。

「鉦一は頭がいいからな。ただ足が速いだけの1番打者じゃない。何かしら、手掛かりくらいは見つけてくるだろう」

最後に漁火は独り言のように呟くと、ベンチの壁でタバコの火を揉み消した。4回表は、その足尾から攻撃がはじまる。足尾が左の打席に入った。

大坂はゆつくりと上体を起こすと、大きく振りかぶる。ゆつくりと足をあげて、軸足に体重を乗せると、少しずつ重心を前に倒しながら一気に腕を振り抜く。

初球。大坂のリリースと同時に、足尾は身を屈めるとバットを水平に寝かせてセーフティーバントの構え。すると、前に突き出してバットを支える足尾の左手の先が氷水に腕を突っ込んだ時のように冷えていく。指先の感覚があつという間に奪われた。

「……！」

予想外の出来事に驚いた足尾は、咄嗟にバットを引いた。

「ボール！」

「ちよつとタイムー！」

足尾が打席を外すと、中腰だった主審が立ちあがって両腕をあげた。タイム。

足尾がヘルメットを脱ぐと、真っ白に脱色したマッシュルームカットが現れ、彼は額の汗を拭った。ぎよろりとした大きな瞳は、彼のエキセントリックな外見を強調している。大きな両耳では、大小3個ずつのゴルドのピアスが揺れている。そして、彼の大きな鼻に埋められているダイヤモンドのピアスもいやらしく光っている。

曲がりなりにも東地区の常勝軍団が、このまま手を拱いているわけがない。一巡してヒットがなければ当然の揺さぶりだ。大坂はじつとボールを見つめたまま困惑している夏苗を促した。

しかし、動揺していたのは夏苗だけではない。足尾は凍るような腕の冷たさを振り返りながら思索していた。何かある。やはり、魔道術なのか。動揺しているのはキャッチャーだが、今日から登録されたピッチャーも余程怪しい。足尾はスパイクの土をゆつくりと払い、靴紐を丁寧に締め直すと、改めて打席に入った。

夏苗は変わらず低めいっぱいの位置でミットを構えた。大坂が2球目のモーションを起こす。身体のパネを最大限活用して投げる。

少し球速も乗って来ている自覚がある。

第2球も足尾はバットを寝かせると、三塁線上のやや深い所に狙いを定める。伸ばした左腕が凍りついて感覚を奪われるが、上手にバントを決めるための基本は利き腕の微妙な力加減ではなく、柔らかく膝を使うことだ。

ファーストとピッチャーが前に出てくる気配がするが、やはり今度もサードの反応は鈍かった。うまく転がせば楽々一塁までたどり着ける。

しかし、ボールはベース手前でわずかに変化したように見えた。もう少しだけ、バットの芯寄りに当てなければ狙った方向へは転がらないだろう。左手でポイントの修正を試みたが、悴んだ左腕が思うように動かない。

コンッ！

鈍い音を立てて、打球はピッチャーの左前方に転がる。同時に、足尾は一気にトップスピードに達して一塁を目指す。大坂はマウンドを駆け降りながら逆シングルで捕球すると、ファーストへと向き直る。速い…！握り変えている暇はなさそうだ。大坂はそのまま地肩だけでファーストに転送する。だが、送球が少し高く浮いてしまった！

ガツテムがその長身で伸びあがって、何事もなかったかのように捕球すると、ベース目掛けて突っ込んできた足尾を身軽な動作で避けながら、カバーに回っていたセカンドへとボールを転送した。アウト。さすがは元プロだ。このあたりの身のこなしは熟練している。

「ナイピーダヨ ワンナウトネ！」

ダイヤモンドを一周したボールを夏苗から受け取る。一死走者なし。

続いて、2番打者の渡良瀬が右の打席に入る。ひよろりとした長身で、眠そうな目をした色白の男が右の打席に入る。手足も長い。この男からは、いまひとつ覇気の感じられないが、それが却って不気味だった。

初球、第2球とこの男はあっさり見送った。ノーボール2ストライ

クと簡単に追い込んだ。やはり夏苗は真ん中低めのストライクゾーンにミットを構えた。

第3球。渡良瀬のスイングは呆気なく空を斬った。しかし審判のコールは……

「インターフェア！」

「……!？」

打撃妨害。守備側が打者を妨害した場合に、打者に一塁が与えられるルールである。夏苗のミットが渡良瀬のバットに当たっていたようだ。勝つためには手段を選ばないという、試合前の夏苗の言葉が大坂の脳裏に浮かぶ。一死一塁。

青いバンダナの男、漁火が右の打席に入る。3番打者の彼の能力はファイヤースターター。夏苗曰く、彼が直接、あるいは間接的に触れたものならば任意のタイミングで発火させる事が出来るらしい。その発動範囲はおよそ100m。打った打球を、捕球寸前に発火させるファイヤースターターは、彼の十八番らしい。

本投間に冷気の層を作り、蜃気楼のようにボールの虚像を作り出す術を彼女はミラージュゾーンと名付けていた。風のないよく晴れた日には、その能力は最大限に発揮され打者を翻弄する。

漁火は、このからくりで初回の顔合わせで気が付いたようだ。しかし、まだ核心には至っていない。チタン合金の金属バットを融解寸前まで加熱して、打席に立ち素振りをすると、ホーム付近の冷気が攪拌されていく。仕組みはわからないが、この冷気が一役を担っているのは間違いないだろう。事実、一巡目でバットに当てたのは漁火だけだった。

初めてのランナーを背負った大坂は、漁火の腹の内などは知らずに、セツトポジションに入る。ランナーを出して、はじめて夏苗はコースの指示まで出してきた。

大坂が、クイックモーションを意識して第1球を投じる。やや甘く入ったインコースの直球をジャストミートされると、痛烈なライナーがサードを襲った。サード土浦の守備範囲だが……

火の出るような打球とは、よく言ったものである。夜空を斬り裂く

流星の如く、打球は突然火を吹いた。痛烈なライナーはそのまま土浦のグラブを焼き切ると、レフト線の芝生を焦がしながらファールグラウンドを転々としていく。

「フェア！」

やがてボールを覆う炎は消えたものの、打球は勢いをそのままにレフトフェンスまで到達して大きくクツションした。間もなく、レフトの一番深いところから中継するショート井伏の所まで返って来る。フロッグスナインは特別足が速いわけではないし、肩が強いわけでもないが、このあたりの無駄の無い連携は熟練の技を感じることができ。井伏の返球も絶妙だ。大坂は三塁ベース近くの内野グラウンドで井伏の送球をカットし振り返る。一塁走者の渡良瀬は、既に三塁を蹴っていた。

アウトにできるタイミングだが――

菅野の躊躇ない右肩へのデッドボールがあった。ファースト外藤のスルーにより、キャッチャーからの送球は夏苗の頭部を直撃した。二塁上では殴りつけるような足尾のタッチプレイがあった。ガツテムはうまくかわしたが、足尾はセーフティーバントの時に一塁上での交錯を狙っていた。渡良瀬の狡猾な打撃妨害もあった。

次に起こるクロスプレーがどのようなものになるかは、想像に難くない。大坂の脳裏にそれが過ぎった時、本塁上で構える夏苗に投げる事を躊躇せざるを得なかった。どう考えても本塁封殺の局面だが、一瞬の迷いが絶好のチャンスをふいにした。渡良瀬は、悠々と本塁を駆け抜ける。大坂は本塁へ偽投して振り向くと、二塁を大きくオーバールンしていた漁火を牽制した。

4回表、モンキースは1点を返して1―2。なおも、走者二塁。

「タイムくださいー！」

大坂は主審に告げた。

茅野は暖かい布団の上で目を覚ました。こんなに心地よい眠りは久しく経験していなかった。いつもは、当直室の硬いマットの上だ。見慣れない天井にハツとして茅野は起き上がる。綺麗に片付いていて、手入れも行き届いている四畳半の和室だ。障子窓からは明るい光が漏れているが、時間はわからない。階下から聞こえる「やんすやんす」という独特の語尾に、思いがけず現実を引き戻された。

「貴様！」

勢いよくふすまを開けると、ダンと大きな音が響く。案の定、瓶底メガネの青年がそこにいた。

「こんな所でいったい何やってるんだ！ PDAは取り返せたのか？

ああっ!?!」

「ちよ、ちよっ！ 暴力反対でやんす」

茅野は矢部の胸ぐらを掴むと、力任せに壁へと叩きつけた。ダンと再び大きな音が響く。

「他人の家で暴れないでもらえるかしら」

振り返ると、一人の美女がそこに立っていた。腕を組んで、眉を吊り上げているから、怒っていると考えていいだろう。よく見ると、昨日訪ねた洋服屋の店員だった。

「あ、すいません、これには深い事情がありました……」

我ながら、ダサイ釈明だと茅野は苦笑した。ひとつため息をついてから、矢部から手を離れた。

「そうでやんす！ 命の恩人でやんすよ！」

「すまん」

茅野は家の主の女に向き直り、手当と一晩の宿を借りた礼を述べた。女も納得したようだ。女は口を開いた。

「で、例のピンクのドレスの女性は見つかったの？」

「見つかってないでやんす。茅野さんが階段で転んで電車に乗れなかったでやんす」

「俺に構わず行けと言っただろ！」

「怪我人を置いて立ち去るほど落ちぶれちゃいけないでやんす」

「メガネが一丁前の口をきいてんじやねえ」

「メガネは関係ないでやんす!」

「ちよつと、ちよつと二人とも、これ以上続けるなら表に行つてちよつとだ」

茅野と矢部は再び女に謝ると、ここまでの経緯を説明した。主に矢部が喋ったが、矢部の話はだいたい事実が捻じ曲げられていたので、茅野が訂正して補足した。

「だけど、この島で他人のPDAを盗むなんてどういう神経してるのかしら?」

PDAの紛失は重罪だが、それを盗むとなれば更に重罪である。この島で使われるPDAには指紋による本人認証機能があるから、他人のPDAを所持していても何のメリットもない。

「それに、おかしいじゃない? どうして本人が持ち歩いていないPDAが位置情報を発信してるの?」

「そこなんだよ、お譲さん」

茅野の端末に表示された赤い丸印は、北地区の南のはずれにあるヲヌマという町に停滞していた。北地区を出るとなれば、この町のゲートを通らなければならない。ヲヌマのすぐ南には南地区北端のカイシテイがあるが、東西南北各地区への出入りはIDのチェックが求められる。ここを通過されると、矢部を連れての追跡は困難になる。

「ねえ、茅野さん。仮に、矢部さんの指紋を完全に複製できたとして、それを使ってPDAを起動させる事は出来ないかしら?」

「それは無理だ。実は、この端末が感知しているのは指紋だけじゃない。静脈の形状だとか心拍数だとか発汗量だとか、そんな物まで計算して本人認証して、ご丁寧にも本人の体調まで表示されるんだ」

茅野のPDAにはDCDBCという彼のデータの隣に黄色い顔を模したキャラクターがくるくると回転していた。

「さつきから、何の話をしてるでやんすか?」

「どうして矢部さんのPDAが、持ち主もいないのに動いているのか

な？って話」

「お前、パーティーの最中に指紋を取られたりとか、そういう事はなかったのか？」

「オイラの指紋を取って、どうするでやんすか？」

「指紋認証をしなけりやPDAは電源入らないだろ？」

「……？ そうなんでやんすか!？」

「はあ？ そんな事も知らなかったのか？ オリエンテーションのいっち番最初に説明あったよなあ？」

「聞いてないでやんす」

「お前まさか、自分の指紋を登録していないのか？」

茅野は額に手を当ててうな垂れた。そうかそうか。そういうことか。世紀の謎もこんなに呆気なく解決するものか。オリエンテーションの初っ端から、居眠りだか余所見だかしていた矢部はPDAに指紋登録をしていなかったのだ。それで、PDAが無い無いと騒いでいるのだから、心の底からオメデタイ男である。

「お嬢さん、迷惑かけましたね。先を急ぎますんで、失礼します。このご恩は、またいずれ」

「ちよつと待って。これからどうするの？」

「ヲヌマに行きます。それで、こいつのPDAを取り返します」

「ヲヌマまでどうやって行くつもり？」

女が折り畳んだ朝刊を投げてきた。

「私、それ読んだから。卒倒するかと思ったわよ。あなた警備部のお偉いさんのね。もつと恩を売っておきたいから、ヲヌマまで車で送るわ」

朝刊には茅野と橘の顔写真が大きく載っていた。記事の内容は、リモーア港座礁事故後に行方が分からなくなっている2人を発見したい、本部に連絡してほしい旨が記されていた。幸いにも、良心的な記事で雷神バットの盗難などには触れていなかった。もつとも、運営本部がそんな事態を公にするはずもないが。

女は加藤京子と名乗った。年のころは30歳手前といったところか。見かけによらず着痩せするタイプらしく、斜めに掛けたシートベ

ろうことは想像に難くない。進は整った顔に憂いた表情を浮かべて続けた。

「やはり、甲子園って特別な所なんでしょうね。兄は埼玉第八が勝ち進んで来なかった事を非常に悔いていました。兄は深紅の優勝旗を手にして、9球団競合のドラフトでジャイアンツに入団。新人王、最多勝、最優秀投手、沢村賞、最多奪三振…あらゆるタイトルを総なめにしてメジャーへの移籍も時間の問題。そんな兄が高校2年の秋大会に一本だけ打たれたサヨナラ打のリベンジが出来ていない事をいまだに悔いてるんです。……あ、やっぱり変わってますね」

進は口元に手を当ててくすくすと笑った。そんな青年を白衣を身にまとった初老の男は、悲しそうな眼差しで見つめている。胸元の名札には「科学部博士 武井田」と記されていた。彼は長い間ドイツに滞在していたらしく、日本語が少し訛っている。

「君だって、悔いてるんじゃないのかネ？ 2年連続で甲子園出場。最後の夏は優勝こそ逃したがプロ入りは内定していたんだ。しかし、君がユニフォームに袖を通す事はなかつタ」

「やめてくださいよ。過ぎた事を悔いたって仕方ないじゃないですか」

「そんなに簡単に割り切れるものカイ？」

「きつと、これも運命なんですよ。初めから、こうなるっていう……」

進は言葉に詰まったが、表情を歪めたり、涙を流したりする事はなかった。不貞腐れていたり、諦めている様子でもなかった。ただ、悟ったように運命を受け入れる覚悟を決めているようだ。

「私の手術の成功率は40%です。それでも、やりますか？」

「今、何%の確率があるろうと数時間後の未来から見たら、その数字に意味はありません。意味があるとしたら、それは失敗した時に責任逃れするための口実です」

「……」

進は冗談のつもりで言ったが、大町には皮肉に聞こえたようだ。

「すみません、言い過ぎました」

「いや、いいんだ。今までに、何人もの不幸な選手たちを見てきた。し

かし私はその事を悔いた事は一度もナイ。科学の進歩には犠牲も必要デス」

「冷たいんですね」

「進君は選択肢を選ぶ事が出来ル。これは、とても大事なコト。やっぱりやめると一言いえば、私は手術をやめル。そして、今まで通りの治療を続けル。時間がかかるかも知れないが、日常生活に支障がないところまでは回復できル。でも、これは私が決める事じゃナイ。責任逃れと言われれば、否定はしないが、進君の意思で選んで欲シイ」

進は暫く黙った。そして、どこか投げやりな気持ちで島に来ていた自分に気が付くと、胸の奥から熱いものが込み上げてきた。進はベツトから起き上がると、深々と頭を下げた。

「博士、お願いします」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

加藤京子の運転は荒かった。荒かったというより、下手くそだった。峠道は舗装の崩れかけた悪路だったという事もあり、ヲヌマの町に着く頃には茅野も矢部もグロッキー状態だった。

「だらしないわね」

加藤は呟くと、路肩に車を停めてドアのロックを解除した。二人とも崩れるように車から飛び出すと、外の新鮮な空気を胸一杯に吸い込んだ。

「失礼しちゃうわ…」

少し遅れて加藤も車を降りると、ポーチからタバコを取り出した。ヲヌマまではまだ少しある。ちようど良い休憩だ。

「タバコは身体に毒だぜ」

「知ってる」

「お医者さんのセリフじゃねえな」

「何のことかしら？」

車のルーフ越しに茅野は加藤を見やった。加藤は構わずに、マルメンライトに火を点けた。

「足首と肩のテーピングが完璧だ。素人にはここまできかない」

「島の女なら、テーピングくらい巻けて当然よ」

「そうか。そうだな…」

旅の恩人を、これ以上詮索しても仕方ない。茅野が別の話題にしよ
うとした時だ。

「京子さんは、お医者さんと言うよりは看護婦さんでやんす。看護婦
さんに巨乳は相性抜群でやんすくむふふ♪」

「その話はもう終わったんだよ！ いい加減にしろ！」

茅野は矢部の鳩尾に一発極めた。

「い、痛いでやん…す」

「それより、ヲヌマに着いてからなんだけど、何かアテはあるの？」

「それなんだ。俺は顔が割れちゃってるし、こいつはID不携帯だ。
お譲さんを巻き込むのは本意じゃないんだが…」

「いいわ。手伝ってあげる。袖触れ合うも多生の縁って言うでしょ」

「話のわかる娘さんで助かるよ」

「その代わりと言っては難なんだけど、後で調べてほしい事があるの。
お願いしていいかしら？」

「俺に出来る事なら、構わんよ」

「話のわかるおじ様で助かるわ」

「おじ様？ 俺まだ30代だぜ？」

「30超えたらみんなオジサンよ」

「そういうもんかね…」

茅野は頭を掻いた。茅野は加藤にタバコを一本ねだると、それを銜
(くわ) えて慣れた手つきで火を点けた。メンソールの刺激が肺いっ
ぱいに広がる。

「それ終わったら出すわよ」

「ガッテンでやんす」

「うい…」

束の間のドライブも、もうすぐ終わる。ヲヌマで橘みずきの身柄を
拘束して事情を聞かなければならない。そして、矢部のPDAを取り
戻したら大坂に連絡してもらおう。彼の安否はわからないが、チャ
ド・ポートランドや雷神バットの所在に近づく事が出来るはずだ。そ
れが叶わなければ、茅野は元の生活に帰る事ができない。

Living Dead

4回表、モンキース漁火のタイムリリーフで1点返されたところで、大坂はタイムを宣告した。内野手がマウンドに集まる。

「悪い。夏苗」

大坂は、出来る限り軽い口調で言うように努めたが、声が少しだけ上ずった。幸いグラブで口元を覆っていたから、声がくぐもって、あまり深刻な調子にもならなかった。

「いいの。気にしないで。私だって、怖かったんだから」

夏苗はミットで大坂の胸を突いた。

「次は、投げるからな」

「お願いね。もう1点もやれないし」

夏苗は微笑んだ。しかし、少しだけ寂しそうだった。少し寂しそうだったのは、投げるのを躊躇った大坂への失望だったのか、次は投げると宣言した大坂への抗議だったのかは、大坂にはわからなかった。「それより、今の見たでしよ。あれがファイヤースターター。一定以上の打球速度があれば、野手が捕球する直前に打球が火の玉みたいに発火するの。もちろん、ピッチャーライナーだって例外じゃないから、気をつけてね」

夏苗は早口でそう告げると、そのまま本塁へと走っていった。マウンドを離れる夏苗の姿が、ひどく儂く見えた。大坂は夏苗を呼び止めて、ミラージュゾーンの弱点が破られたのかどうかを確認したかったが、そんな弱気な言動ははばかられた。

ミラージュゾーンが攻略されたのではないかという大坂の心配をよそに、モンキース打線の4番佐賀、5番菅野は手も足も出さず二者連続三振。後続をピシヤリと抑えて追撃を許さなかった。漁火のヒットは、ただの出会い頭だったのだろうか。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
「佐賀君。どういう事なのか説明してくれないか」

漁火はベンチに帰るなり、チームの主砲である佐賀を呼び止めた。スキンヘッドの巨体が硬直している。

「僕が何故、あの隙だらけのバッテリーから盗塁もせずに二塁で留まっていたかわかるかい？」

「そ、それは、自分が打って…」

「そうだよ。君が打てばヒット一本で帰ってこれるんだ。二塁にいようが三塁にいようが変わらない。だけど、それだけじゃない。あの大坂という新入りピッチャーの球筋をじっくり観察させてもらったんだ。何の変哲もない棒球じゃないか。どうして打てない？」

「それは…」

愚直にも言葉に詰まる佐賀を、漁火は半ば呆れた表情で見返した。

「もういい。しっかり守ろうぜ」

佐賀はこういう時に、適当な言葉ではぐらかそうとしたり、その場しのぎの嘘をつく事はなかった。彼は、はぐれ者の集団であるモンキースの中で、漁火が信頼する数少ない人物の一人だ。しかし、その佐賀の馬鹿正直さがモンキースに重たい枷を背負わせてしまったのも事実である。その責めを、一番感じているのは佐賀自身だ。漁火には、それがよくわかっていたし、それ故、その佐賀を見捨てる事が出来ずに、今日までモンキースを指揮している。

5年前。佐賀には歳の離れた妹がいた。彼女は身体が弱く病気がちで、余命もいくらもないと医師から宣告されていた。彼女の残り少ない命を救うには手術が必要だったが、手術には金がかかった。当時から真面目な性格の佐賀は、一生懸命働いた。働いて働いて働いた。それでも、手元に残るのは僅かな額だった。妹の入院や治療とて高額な費用が請求されていた。

そんなある日、彼は街頭の一枚のチラシに目を奪われた。「集えー！」何の変哲もないキャッチコピーだ。地元球団サンシャインモンキースの募集広告だった。当時の東地区は8球団あって、上位2球団が秋に行われる本戦への出場権を手にしていて、地区予選を突破すれば運営側から賞金が出る。本戦で活躍すれば、さらに賞金が出る。絵に描いたような舞台に夢を抱かない若者は、この島にはいなかった。

かくして、佐賀の入団が決まると、彼はメキメキと頭角を現した。

同期入団の菅野の存在も大きかった。彼らの熱心な姿勢はチーム全体に良い刺激となつて、その年の東地区予選を制覇した。

しかし、本戦での野球はそれまでの地区予選とは全く異なるものだった。どんな打者も打てない魔球を投げるピッチャーがいるかと思えば、どんな魔球も打ち返すバッターがいた。佐賀も菅野も、彼らの野球に目を奪われ、心を躍らせた。若い2人は、彼らの内に燦ぶる「魔道術」を磨こうと誓い合った。

ところが、佐賀には——佐賀の妹には——もう時間が残されていないかった。



4回裏の攻撃は3番大坂の打順から始まる。しかし大坂は、先の本塁封殺の場面を思い返すばかりで、全く打席に集中できていなかった。考えたところで、過去が変わるわけではない。何の結論も出てこない。しかし、もし投げてクロスプレーにでもなれば、夏苗はやはり、大なり小なり怪我を負う事になっていただろう。

「スリーボール！ ツーストライク！」

一方の菅野は、打ち気の無い大坂に対してカウントを悪くして苦しんでいた。カウントはフルカウント。

あまり、制球は良くないのかもしれない。主審のコールで、大坂はふと我に返りバットを短く握り直す。そして、鬱憤を晴らすかの如く150 km/h台の速球に必死で喰らい付いていった。ファール、ファール、ファール…

菅野の9球目。正直、手が出なかったのだが、ボール半個だけ外に外れた。

「フォアボール」

大坂は、一塁へと歩いた。

無死でのランナーだったが、前の打席に場外本塁打を打っている男との勝負をバッテリーは避けた。敬遠気味の四球で、ガツテムも一塁に歩かされる。5番井伏の送りバントで一死二、三塁とするも、モンキーズは6番土浦を敬遠し満塁策をとる。7番古河はチェンジアウトでタイムングをかわされてセカンドゴロ併殺であえなくフロツグ

スの攻撃は終了した。

2—1。1点差のまま、試合は中盤の5回に突入する。

フロッグスナインが5回の守備に散ると、一塁側のベンチはヤソジ一人になる。愛犬のみかんはベンチ奥の日陰で気持ちよさそうに眠っている。誰かのPDAがブーンブーンと振動しながらベンチの上を滑っていく。確か、あの辺りには大坂が腰を掛けていたはずだ。

キン！と甲高い打球音がして、ファーストのガツテムがこちらに猛ダッシュをしてくる。ヤソジは目を細めて上空を見上げて、打球の軌道を確認した。そして、ゆっくりと立ちあがるとベンチの奥へと下がった。ガツテムはベンチの中に倒れ込むように飛び込んで、ファールフライをキャッチした！

「いいぞー！ 新人ー！」

巨漢のガツテムの機敏なプレイにスタンドも大いに沸いている。気が付けば、内野スタンドは地元チームの行く末を見守るべく、パライの村民が集まっていた。

「大丈夫かい？ あまり無茶してはいけないよ」

「ノープロブレムデース」

ヤソジも、この男の野球センスには感心していた。初めの打席の特ダホームランが印象的だが、細かいプレイのひとつひとつも洗練されている。この男の正式な選手データが、島内のバンクに存在しないのは不可解だが、おそらく総合評価はAランク。本土ならば「一流のプロ野球選手」として活躍していてもおかしくはないだろう。しかし、それだけのステータスを得たであろう選手が、なぜこの島にやって来たのだろうか？

そして、今マウンドに立つ青年のデータもまたバンクに存在しない。まだまだ伸びしろは感じられるが、おそらく総合評価はCランク。この程度の選手なら、島内にいくらでもいる。残念だが、彼の實力では本戦での活躍は難しいだろう。しかし、夏苗のミラージュゾーンを機能させるには、彼くらいの制球力があれば充分だ。今日の試合の勝利のために、パラキフロッグスの存続のために、彼らは必要な存在なのだ。

7番塩原、8番小山は三振に倒れて、フロックスは5回の守備を終えた。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
話を5年前に戻そう。

本戦に出場して魔道術のヒントを得た佐賀と菅野の活躍もあって、モンキースはこの年の本戦上位入賞を手中に収めかけていた。東地区では十数年ぶりの快挙だった。チームメイトは勿論だが、東地区の住人も大いに喜んだ。しかし、モンキースの4番打者だけは結果に満足していなかった。これに気が付いたのは盟友の菅野だ。

「元氣ないじゃないか」

「ああ…」

シーズン最終戦前夜の練習のクールダウンで柔軟をしている時だった。結果にこだわるストイックな佐賀の姿を菅野は評価していたが、同時に喜ぶべき時には喜びを分かち合って欲しいとも思っていた。

「明日の最終戦。3打数3安打なら首位打者になれる」

「みたいだな。でも明日対戦する山口は相当手強いぜ。タケちゃんもここままでよくやったんだ。充分だよ」

「まさか、タイトルを獲らなきゃ意味がない」

「そうだな」

菅野は、佐賀がタイトルにこだわる理由を知っていた。地元の病院で兄の帰りを待つ殊勝な妹の事情は菅野もよく知っていた。

「金のために、野球をやるのって変かな…」

「野球をやる理由なんて、人それぞれだろ。それに、お前が野球をやるのは金のためじゃない。妹のためだ」

「そう。俺はマリイの為に、ここままでやって来たんだ」

菅野の背中を押す佐賀の手が止まる。

「おい、もう少し押ししてくれ…って、何だそれ？」

振り返ると、佐賀が色とりどりの丸薬が粒入った小さな瓶を手に携えていた。

「魔力増強剤」

「馬鹿野郎！ そんな物、どこで手に入れたんだよ」

「しっ！ 声大きい」

「持ってるのがバレるだけで登録抹消だぞ？」

「知ってる」

「いや、知らないね。それに一度でもそんな物に頼れば、副作用で身体がボロボロになって、とても野球なんか出来ない身体になっちゃうんだぞ？」

「わかってる」

「じゃあ、何でそんな物持ってるんだよ。そんな物使ったら、お前の妹だって——」

——悲しむぞ！と言おうとして菅野は言葉を飲み込んだ。佐賀の置かれている境遇を理解したからだ。彼の妹には来年はないのだ。命を落とすくらいならば、悲しんでもらった方がマシだ。佐賀はそう考えるはずだ。タイトルが獲れなかった事を、この男は一生悔いて生きるに違いない。そして、菅野は一瞬だけ同情して、佐賀から目を逸らせた事を激しく後悔した。

佐賀は、瓶の蓋を開けると一気に飲み干そうとしていた。菅野は必死で佐賀を制止したが、細身の菅野の力では筋肉質な佐賀はビクともしなかった。

「オレにも寄せせ！」

苦肉の策だった。菅野は一瞬の隙を突いて佐賀から瓶を奪い取ると、残りを一気に飲み干した。

翌日の最終戦は菅野のノーヒットノーランと佐賀の3打席連続アーチで幕を閉じた。佐賀は見事首位打者に輝いたが、後日、禁止薬物の使用が発覚するとタイトルは剥奪された。そして、その晩、兄の不正を知った妹はショックから立ち直れぬままに息を引き取った。

登録抹消はおろか野球権（島で野球をする権利）を剥奪されてもおかしくない状況だったが、後日届いた本部からの通達は、結果として事態を更にややこしい方向へと導いた。この通達は、呪詛のように東地区の野球を衰退させていく結果となった。

『今後サンシャインモンキースが東地区予選リーグで敗戦した場合、

その理由の如何を問わずチームを解散処分とする』

解散したチームに所属するすべての選手の野球権は失効する。安易なチームの結成や解散を抑制するためのルールは当時から存在していた。

その後の佐賀と菅野の野球人生は生きる屍状態であった。薬の副作用で、次第に彼らの魔力は消滅したが、二人で分かち合った十字架は、幸か不幸か彼らの野球能力までは奪わなかった。

「――5回裏、先頭の8番笠間が空振りの三振に終わりました、菅野は今日7つ目の三振を奪いました。これでワンナウト。そして、9番龍ヶ崎がバツターボックスに入ります。昨日、リモーア港にて起こりましたセントラルバード号の座礁事故関連の臨時ニュースがありました都合で、中ノ鳥島アイランドリーグ東地区予選サンシャインモンキース対パラキフロッグスの模様は、この時間からの放送となります。どうか、ご了承ください。イーストタウン中央放送の制作でお送りしております。実況は私、荻窪譲二、解説は八回王子こと、炎のセツトアップー日野隆男さんでお送りしてまいります。日野さん、宜しくお願い致します」

「どうもお」

「さて、日野さん。東地区リーグの優勝はモンキースに既に決定しています、今日は消化試合……と言いたいところなのですが、フロッグスが敗れますと2シーズン連続勝ち星なしという事になります。これは、リーグの規定で解散という事になってしまいますが、どうご覧になりますか？」

「東地区は元々球団数が少ないので、試合数も少ないですから、条件としましては他の地区よりも厳しいかも知れませんが……」

「初球、インコース外れてボール。菅野は、かなり厳しいところを突いてきました」

「ですが、ここまで7試合、全ての試合を棄権しているとなりますと、チーム存続自体が難しいというのが現状ではないでしょうかねえ」

「ですが、今日のフロッグスは2人の新人選手が急遽エントリーされて、9人揃いました。そして、初回に早速、この新人2人の働きにより鮮やかに先制。えーと、デッドボールで3番大坂が出塁しますと、後に続きます、4番のガツテムが超特大の場外先制2ランで鮮やかな先取点。凄まじい飛距離でした」

「凄かったですねえ。160mは飛んだんじゃないですか？」

「菅野の第2球は、またインコースボールッ、これで2ナッシング。あ

れだけのホームランはなかなかお目に掛かれませんかよ」

「それほど広くないパラキ村営とはいえ、敷地の外まで飛んだ記憶はないですねえ。暗黙の了解と言いますか、東地区では純粋に腕力と腕力の勝負を好みますので、魔道術をほとんど使いませんからねえ。」

「守りましても、フロッグス先発は大坂。球速はここまで最速133km/hですから、力でねじ伏せると言うよりは、巧くかわしている印象です」

「大坂君、コントロールは悪くありませんが、まだまだピッチャーの経験は浅いんじゃないですかね？ フォームが安定しない分、球の出所がわかりにくいのもかもしれません。このまま9回まで抑えらるとなると決め手に欠きますが、上手いことモンキース打線を抑えているようですし、今のところはイイ調子ですねえ」

「さあ、菅野の3球目、足が上がって……あつと！ これは危ない！

龍ヶ崎の後頭部付近を投球が通過しました。間一髪です。今日も制球が定まりません。ピッチャーの菅野、ボールが先行して3ボールナツシング」

「今のは危ないですねえ」

「しかし、ゲームを組み立てる事の出来るピッチャー、試合を決める事が出来るバッター、この両者の補強は大きいのではないのでしょうか？」

「でしようねえ。ヤソジさんのスカウティングには恐れ入りますよ」

「フロッグス監督の品野ヤソジさんは、打席に入ります龍ヶ崎夏苗さんのお祖父さんでもあります。かつては、中ノ鳥島野球リーグの黎明期の中心選手でした。伝説の風神打線の立役者でもあります。日野さんも対戦した経験があるとか」

「いやあ、当時はハッキリ言って投げたくなかったですね。既に全盛期を過ぎていたとはいえ、神懸かり的なバットコントロールは健在でしたからねえ。どこに投げてでも打たれる。本当に投げにくい打者でしたよ」

「さあ足が上がって、菅野の4球目は…ボール！ ストレートのフォアボール。日野さん、中盤に差し掛かりまして菅野のピッチング如何

でしょうか？ コントロールに苦しんでいますか？」

「昨季の本戦では制球難で自滅するケースが目立ちましたけれど、今日に限ってはフロッグスの打撃陣もタイミングが取れていませんからねえ。それほど心配はないと思いますよ。逆に、フロッグスが付け入る隙があるとすれば、その辺りじゃないでしょうか。ボール球に手を出してピッチャーを助けない事です」

「さて、フロッグスの打順は先頭に返りまして1番鹿島。今日は三振と送りバント失敗。前の打席は送りバントに失敗していますが、ここも送りますでしょうか？」

「まあ、1点差ですからねえ。手堅く送りたいですねえ」

「鹿島は送りバントの構えです。一塁へ牽制セーフ！ ファースト外藤の厳しいタッチ。龍ヶ崎も頭から帰塁します。…どうでしょう、ここでスチールとかはありますか？」

「カウントによってはあると思います。ですが、フロッグスとしてはランナーを溜めてクリンナップに繋げたいですからね。あまり無理はしない方がいいと思いますよ」

「サインが決まりました。菅野の足が上がって、第一球：外角外れてボール！ 一球外しました。簡単にはバントをさせませんね」

「次の筑波君もそれほど打撃がいいわけじゃないから、素直にアウトはもらっておいた方がいいですよ。変に駆け引きをして歩かせたら、それこそピンチが広がりがねません」

「ネクストバッターズサークルに控えます筑波は、今日2三振です。1番か2番のどちらかが塁に出れば、大坂、そしてガッテムへと打線がつながっていきますフロッグス打線。菅野の第二球：インサイド、膝元決まりました。152km/h。1ボール1ストライク。モンキースとしては消化試合ですが、フロッグスはチームの存続をかけた大一番。そんな一戦であります。フロッグスとしては、ここで追加点が欲しいところ」

「その通りです」

「何とかランナーを先の塁へ進めたい鹿島。依然としてバントの構え。菅野の第3球。足が上がった、投げました。送りバントはピッ

チャー正面！振り返ってセカンド送…あゝっ！ 送球が後ろに逸れている！ センター渡良瀬がカバーに入っています。ワンナウト1塁2塁。記録はショートのエラー。ショートのエラーが記録されました！ 日野さんからアウト1つもらってという話もありました…」

「タイミングはねえ。微妙なところですけどねえ。焦る所じゃないですよお」

「フロッグスは思わぬ形でチャンスを広げました。打席には2番の筑波が入ります。ゲッツーだけは避けたいところ」

「そうですね」

「2塁牽制、セーフ！ あつと、足尾がボールをこぼしていますが、すぐに拾い直します」

「大事な場面ですからね。集中して欲しいですね」

「ショートの足尾が、マウンドに駆け寄って菅野に直接ボールを手渡し。何かを耳打ちしています。そして？ サードの漁火にも何かを告げています。おやおや？ タイムですか？」

「タイムですね」

「ここでタイムを取りますモンキース」

「いい判断だと思いますよ」

「牽制のサインが合いませんでしたかねえ…？ マウンドに内野陣が集まります。ショートの足尾は、白いマツシユールムカットです。セカンドの中禅寺は顔に大きな傷跡があります。ファーストの外藤は長ランにマスクの出で立ち。サード漁火は赤髪に青いバンダナを巻いています。こうして見ますと、モンキースの内野陣は人相悪いですねえ」

「そうですね。でもまあ、一度試合が始まればプライベートで何をやっていようが関係ありませんからね」

「さて、マウンド上に内野陣が集まりましたして試合が中断しております。

一旦CMです——」



東地区に入ると車内のカーステから聞こえる音声がクリアになっ

てきた。ファミリータイプの軽乗用車に4人乗りをすれば、嫌でも山道のドライブはエンジンに負担がかかる。ドライバーの技量が乏しければ尚更だ。運転席の加藤京子も、慣れない長距離ドライブに苛立ちを募らせていた。

「東(地区)に行くって言ったのはあなた達よ!? 何なのこの体たらくは?」

振り返れば、助手席の橘みずきも、後部座席の茅野と矢部もぐつたりと車窓を眺めていた。

ハミットヒルから南へ約80km、2時間ほど車を走らせると広大な田園風景が現れる。北地区の最南端、中ノ鳥島のほぼ中央に位置するヲヌマタウンは農業が盛んで、島内の稲作収量の約40%を占めている。一带は周囲を山に囲まれた盆地地形で町を横断するように川が流れている。その川に沿うようにヲヌマの市街地が形成されていた。

ヲヌマでは橘みずきの姿を容易に発見できた。

「あら、遅かったじゃない」

野球帽にディアドロップのサングラス。田舎のカフェテラスにこんなに前衛的なファッションの女がくつろいでいたら、嫌でも目立つ。

「お前は何様のつもりだ」

「何様はお互い様。素直に上に報告すればいいものを、真相を暴く為に単身で組織から逃亡ですって。ドラマの見すぎじゃない?」

「世の中そんなに甘いものじゃないんでな。それより、こいつのPDAを返してもらおうか」

「いいわよ。はい」

橘はそう言うとかバンからPDAを取り出して、矢部に手渡した。「指紋くらい登録しておきなさいよね。はい。初期化は済んでるか」

PDAの初期化が済んでいるという事は、中のデータがクリアされているということだ。もつとも、そうしなければ矢部の指紋を登録し

直す事は出来ないのだが、つまり、そのPDAでは大坂の所在を知ることができない。事情を理解した茅野の表情が紅潮する。

「なんて事をしてくれたんだ」

「あら。そんなに簡単に情報にありつけるとでも思った？ 悪いけど一緒に来てもらおうわよ」

「何の話だ？」

「このままだと、雷神バットは遅かれ早かれ誰かの手に堕ちるわ。クインテットスターよ？ いくら秘密にしたって、どこから情報は漏れるものよ。漏れなくても勘のいい人間ならば気が付くでしょうね。そうになったら、我先にと鵜の目鷹の目の奪い合いが始まるわ。だから、そうなる前に取り戻すの。協力してくれるかしら？」

確かに、筋は通っている。断れば雷神バットは戻らない。茅野には他に良い選択肢が思いつかなかった。

「ひとつ聞かせてくれ。『遅かった』と言ったな？ 俺達が追って来るのは折り込み済みだったのか？」

「だいたい計画どおりね。2つ想定外だけど」

橘はサングラスを外すと悪戯っぽい笑みを浮かべて続けた。

「あなた方とは、特急列車の中で合流する予定だった。だけど、それは叶わなかった。どうしてかしら？」

「ううむ。それはだなあ…」

茅野が答えあぐねたが、矢部がここぞとばかりに割って入る。

「茅野さんが階段で転んだでやんす」

「…馬鹿野郎。余計な事を言うんじゃない」

「本当の事でやんす」

「ふふふ。面白い人たち。まあ、いいわ。もう1つの想定外は…」

そして橘は、加藤京子を見やった。

「私はお邪魔かしら？」

「あらあら、とんでもない。あなたの、コーデイネート割と気に入ってるんだから」

「そりやどうも」

「それに、今となつては好都合よ。私と茅野さんの人相書が島中に出

回ってしまったから、なるべく人目は避けたいの。車を出してもらえ
ると有り難いんだけど」

「礼は、弾んでもらうからね」

加藤は立ち上がると、テーブルの隅にある伝票を手に取り、茅野と
矢部の間に突き出した。茅野と矢部は顔を見合わせると、間もなく矢
部が首を横に振った。茅野は、あまり綺麗ではない捨て台詞を吐きな
がら伝票を奪い取ると、店のカウンターへと不機嫌な足取りで向かっ
た。

「ところで、これからどこに行くんでやんすか？」

「パラキ村よ。実は、あまり時間が無いの」

店員の通報を受けて警備部ヲヌマ支部の人間がカフェに到着した
のは、4人が既に店を去った後だった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「——さて、CMの間にゲームは再開しまして、2番筑波は、早くも追
い込まれております。5回の裏、1アウト一塁二塁と追加点のチャン
スです。3番大坂、4番ガツテムを控えまして大事な局面ですが、送
りバントが2度続けてファールとなってしまう、カウントは1ボール
2ストライク」

「筑波君もバントが苦手なわけではありませんから、菅野君の球威が
勝ってるんでしようねえ」

「次に控えます大坂は、今日はデッドボールとフォアボール。バッ
ティングは、どうなんですか？」

「前の打席を見る限りでは、菅野の速球に喰らい付いてファールで粘
りましたからねえ。目は慣れてきていると思います。いい勝負が期
待できるのではないでしょううか」

「ネクストバッターズサークルから、真剣な眼差しで戦況を見つめま
す大坂小波。菅野のサインが決まった。第4球を、投げました！ ス
リーバントオ！ 三塁線を転がる！ 漁火前進、漁火前進！ フェア
です！ 捕って一塁送球…アウト！ 2アウトです。2アウト二塁
三塁で左のバッターボックスには大坂が入ります——」

Runners In Scoring Position

「――3番 ピッチャー大坂 背番号1」

追加点のチャンスに、一塁側スタンドも大いに盛り上がる。試合開始から1時間以上が経過して、内野スタンドはほとんど埋まっている。外野にもピクニックシートを敷いた老夫婦などが日陰でくつろいでいた。かつては、ここに集まる誰もが例外なく、フロッグスの緑色のユニフォームに憧れ、あるいは袖を通し、青春のページを綴った同志だ。

村に突然2人の男が漂流してきて、彼らが解散寸前のフロッグス入団を快諾した。それほど広くないパラキ村で、そのニュースはあつという間に伝播して、今朝には村中の知るところとなった。一度は諦めた村の希望が、ぎりぎりの所で救われるかも知れない。そんな期待に球場内が包まれ始めていた。

村中の期待を一身に背負って5回裏2死二、三塁で、打席には大坂が入った。

「素敵な横顔ね、イイ男じゃないの〜」

一塁側スタンドの中列付近に陣取った千代に友人の美和が話しかける。ショートを守る井伏の奥さんだ。

「そうね。でも、少し優柔不断で頼りないかな」

「4回表の事を言ってるの？ あれは優しさの裏返しよ」

「だったら良いんだけど…」

「千代さん、ずいぶんと厳しいじゃない。夏苗ちゃんのお嬢さんに：とか考えてるんじゃないの？」

「そ、そんなことないわよ」

「お似合いだと思うけどな」

「ちよつと、美和、やめてよ」

「ごめんごめん。でも、あの子、いい眼つきをしてる。なかなかいいわよ、あれだけの男前は」

◆ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
高校時代、得点圏打率が5割を超えていると言われた事があったが、特別に意識した事はなかった。得点圏にランナーがいてもいなくても自分出来るバッティングは同じだからだ。背伸びをしたりする必要はない。

そして、大坂は打席に立つ時の緊張感が好きだった。その打席、その局面の言い得ぬ興奮が鼓動を高ぶらせ、感覚を研ぎ澄ませる。2アウト、走者二塁三塁は絶好のお膳立てだった。右手に握るバットをくると回して、スパイクで足場を均す。大きく息を吸い込んで、2人の走者と内外野の位置を確認する。センターは少し右寄りだが、後はほぼ定位置だ。夏苗も鹿島さんも、それほど大きなリードは取っていない。この局面は、余計な事を考えずに打つだけだ。

初球は、外郭いっぱい直球。ストライク。ベルトのやや上だが、捕手のミットが小気味よい音を立てて、いまだに衰えない球威をアピールした。やはり速い。大坂はゆっくりと息を吐き出した。

今度はキャッチャーが内寄りに構えるのがわかる。菅野はここまです逆球が多いが、打者に当てることは厭わない投球だ。しかし、満塁でガツテムに打順を回す事が得策と考えるだろうか。菅野が第2球のモーシヨンを起こす。

案の定、ベルトの高さに力のない直球がやって来る。右足を踏み込んでしつかりと体重の壁をつくる。あまりの絶好球に身体が少し開きかけるが、何とか踏ん張って体勢を保持する。そして、真芯で白球をしばきあげる！……はずだった！

ブンッ！

ある筈の手応えが無く、バランスを失って身体がよろめく。

バシン！

振り返ると白球はキャッチャーミットの中だ。

「ストライークッ！」

SFF。打者の手前で縦に鋭く落ちる変化球で、フォークと比較すると変化は小さいものの、球速が速く、打者はストレートとの判別が難しい。最近では楽天田中投手のウイニングショットとしても有名。

対応も悪くない。特筆すべき点は何もない。特徴が無いのが特徴。そんな選手だ。彼の投球には何かトリックや魔道術があるのではないかと疑ったが、どうやらそれはキャッチャーである龍ヶ崎の能力らしいということが濃厚だ。はじめは足尾のしようもない言い訳かとも思ったが、漁火さんの説明通りならば辻褄が合う。そして、もしその通りならば、これ以上フロッグスに点を与える余裕はない。

スプリットを投げたいのは山々だが、あいにく三塁走者がいるから小山さんも落ちる球種は多用したくないだろう。スライダーにもしつかり付いてきている。すると、残る選択肢はひとつしかない。

◆ ◆ ◆ ◇ ◇
「——日野さん、そうしますとここはストレートの一本勝負ということになりますか？」

「おそらくそうですねえ」

「さあ、菅野がサインに頷いて……第6球を、投げました！」

——キーン！

「……少し詰まっているが、ふらふらつと面白い所に上がっているっ！セカンドバック、ファーストも追いかける、ライトも前進してくる！しかしこれはセカンドの頭上だ、ライト前ヒット！三塁ランナーの龍ヶ崎は楽々ホームイン！そして二塁ランナーもホームへ突っ込む！ライト佐賀は強肩だぞ!!」

◆ ◆ ◆ ◇
——ビュオオンッ！

一塁をオーバーランした大坂の耳元を白いレーザービームが通過していく。低い弾道の送球がダイレクトでキャッチャーミットに収まると、小山は滑り込んでくる鹿島を跳ね飛ばした。

「アウトオッ！」

大きなジェスチャーと共に主審が高らかに宣告すると、球場内の歓声が溜息へと変わった。3アウトチェンジ。大坂がヘルメットを外して、額の汗を拭いながらベンチへ戻りかけた時、彼の歩みが止まった。

本塁で憤死した鹿島が倒れたまま起き上がらない。

「永瀬え！」

ヤソジが大声で怒鳴ると、ベンチ裏からチームドクターの永瀬が飛び出してきた。携えた救急箱が揺れてガチャガチャと音を立て、丈の長い白衣の裾がヒラヒラと揺れながらグラウンドを横切っていく。

「鹿島さん！ 鹿島さん！」

悲鳴にも似た夏苗の声が、静まり返ったパラキ村営グラウンドに響いた。よく通る声はキャッチャーの適性だが、今のこの状況においては、悲痛な事態を際立たせる演出効果にしかない。

「…んっ。ああ、夏苗ちゃん、ごめんねえ。頼むからそんな悲しい声は出さないでくれ」

「でも、鹿島さんが……」

「わしの事はいいんだよ。心配しないでくれ。でも、どういう訳だか右足がちつとも動かんのじゃ。ほれ、この通り」

鹿島は寝そべったまま身もだえして見せた。右足は相当痛むはずだ。夏苗を気遣ったの行為に、彼を困んでいるフロッグス一同の心が痛む。

「鹿島さん、ジツとしてください」

鹿島の気丈な振舞いを永瀬が制する。件の右足を持ち上げて、状態を確かめる。非常によくはない状態だ。最悪の場合、後遺症も残るだろう。兎に角、これ以上のプレイは不可能だ。

「担架を…」

この瞬間、フロッグスナインは事情を理解した。鹿島の足の具合はもちろん心配だが、このままでは選手が1人足りなくなってしまう。試合を成立させるには、9人の選手がグラウンドに立たなければならぬ。

「永瀬君、冗談じゃよ。頼むよ」

鹿島は慌てて立ち上がりとしたが、すぐにバランスを崩して倒れそうになる。寸での所でガツテムが肩を差し伸べて転倒は免れたが、鹿島は苦悶の表情を浮かべていた。再起不能と診断されることよりも、今ここで試合を棄権しなければならぬことの方が辛かった。長く紡がれた村の歴史が途絶えることよりも、ここにいる3人の若者の

将来が摘まれてしまうことの方が耐えられなかった。

「タンカーハイリマセーン ワタシガハコビマース」

ガツテムはそのまま鹿島を担ぎあげると、ベンチへと歩きはじめた。

「選手コータイデース ミスターヤソジガセンターヲヤリマース」

「おいおい。わしゃもう足の状態が…（それにヤソジはファーストネームじゃ～；）」

「チームノピンチデース キリヌケルノガカントクノツトメデース」

「しかしだなあ…」

ヤソジは天然芝の外野グラウンドを見やると目を細めた。高く昇った常夏の太陽光線を反射して、キラキラと緑色の芝生が光り、葉面から蒸発した水蒸気が陽炎となって揺らめいている。そのフィールドは果てしなく広がる砂漠のようにヤソジの目に映っている事だろう。球場までやっとの思いで辿り着いたヤソジにとっては無茶な要求だと、ガツテムを除くフロッグスの一同には感じられた。

ヤソジは深く目をつむり、大きく息を吸い込んで、そして吐き出した。そして、愛する孫娘に決意を告げた。

「夏苗。スパイクを取って来てくれないか」

「おじい様!」

「いいんだ。こうでもしないと、大坂君やガツテム君に顔向けが出来ない」

祖父と孫娘のやり取りをガツテムは意に介していない様子だった。むしろ、当然という風に右往左往するチームメイトを眺めていた。時々、何を考えているかわからない男だ。大坂は言葉に詰まっていた。この老人を炎天下のグラウンドに立たせる事には気が咎めていた。しかし、ここで野球人生が終わることも、とても受け入れる事は出来ない。矛盾する自分の気持ちに折り合いをつける事が出来ていないようだ。

「……そうだ!!」

ベンチの重い空気を絶ち切るように、夏苗が素っ頓狂な声をあげる。そして、彼女はカバンをあきると、ひときわ小さなフロッグスの

レプリカユニフォームを取り出した。

『ええ〜っ!!』

一同が驚愕したのは言うまでもない。彼女は手際よく愛犬のみかにそれを着せると、グラウンドへと飛び出した！

「フロツグス 守備の交代をお知らせ致します。センター鹿島に代わりまして みかん 1番センターみかん 背番号100」

Like a bird flying down

滑空するフリスビーを見事にキャッチしたり、投げたゴムボールを取って戻ってきたり、訓練された芸を巧みにこなす賢い犬にお目に掛かる事はあるが、野球をする犬がこの世界にどれだけいるだろう。マスクをかぶる龍ヶ崎夏苗の愛犬みかんがセンターの定位置で行儀よく座っているが「彼」にどの程度期待できるだろうか。

犬の脚力ならば、相当広い守備範囲を期待できるが、柔らかいフリスビーならともかくスピンの掛かった硬球をダイレクトでキャッチする事は叶わないだろう。某国民的子供向けアニメに登場する犬が巨大なパンの顔を大遠投するシーンを見た事があるが、それはおとぎの国の中でのこと。

「6回！ しまつていきましょーっ！」

夏苗が元気良く叫ぶと、愛犬はワンと一度だけ吠えて呼応した。チームメイトの負傷に沈みがちなムードを覆い隠すように他の野手もそれぞれの言葉で呼応した。

右打席にモンキースの9番打者、中禅寺が入る。レフトの筑波さんはほぼ定位置だが、ライトの古河さんが大きくセンター寄りに守備位置を取り、ライトの定位置付近はガラ空きである。ライト方向に運ばれれば長打確定という布陣だが、よくよく考えれば、ここまで外野に飛ばされたのは4回の漁火のタイムリーツーベースだけだ。今となつては、ミラージュゾーンは頼もしい限りである。

夏苗はポンとミットを叩いてしゃがむと、これまで同様に打者の膝の高さで構えた。



打席に向かう直前に、キャプテンの漁火の口からフロッグスバツテリーの能力について説明があった。生まれも育ちも東地区の俺には魔道術などという物は、遠い異国の超能力でしかなかったから、本戦ならばともかく、地区予選での魔道術という仮説には少々驚かされた。

漁火の説明によると、マウンドから本塁の間で蜃気楼のような現象

が起きていて、ボールが本来の軌道とは異なっていて見えるのだという。もしも、その通りなら視覚したボールの数個下を叩けばミート出来る事になる。とにかく、ここまでバットに当たるとは気が配らないのだから、ダメ元で言われた通りにやるしかなさそうだ。

マウンド上の大坂が、大きく振りかぶる。コントロールを重視した相変わらずの野手投げだが、ボールのキレは回を重ねるごとに増しているように見える。とはいえ、まだまだ力半分のいつでも打てそうな直球……の1つ下を叩く。ブン！

「ストライーク」

次は、2つ下を叩く。ブン！

「ストライーク ツー」

あつさり追い込まれるが、今、成すべき事は墨に出ることではない。今度は3つ下を叩く。バットがボールの上端を掠める手応えがあった。湖の底に深く沈んでいた宝箱を探り当てた気分だ。

コッソソ！ 打球は前に飛んだが、これはキャッチャーの守備範囲だ。龍ヶ崎が機敏な動きで打球を処理する。彼女も、ただの箱入り娘という訳ではないようだ。いや、もはやフロッグスの秘密兵器と言わべき存在だ。

「ボール4個だ」

「OK」

次の打者に、情報を引き継ぐ。さて、後は若い連中のお手並み拝見だ。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

夏苗が野球を始めた10年前、東地区は今よりも野球が盛んだった。夏苗の父親はフロッグスのエースピッチャーとして活躍していた。シーズン中は遠征、オフはキャンプに忙しく交流はあまりなかったが、夏苗は素直な気持ちで父親を尊敬していた。

そんな彼女に野球を教えたのは、母方の祖父のヤソジだった。彼は既に現役を引退して、第一線から身を退いていたが、かつては東地区にこの人ありと名を轟かせた大選手だったらしい。

いつも優しい祖父と一緒に、家の庭先でやるキャッチボールに、当

時の彼女は夢中だった。そして、しばらくすると、彼女の好奇心は自然と外の世界に向けられていった。

「夏苗も、みんなと一緒に野球がしたい!」

ある日の午後、彼女は思いを祖父に吐露した。優しい祖父はそれを快く聞き入れてくれると思っただが、意外にも祖父は認めてくれなかった。

「夏苗、これは大事な事だからよく聞きなさい。野球は危険なスポーツだから女の子がやってはいけません」

「なんで? 夏苗はキャッチボールできるよ!」

「ものすごい速さで飛んでくる打球を受け止めたり、体の大きな選手とぶつかったりするんだぞ?」

「夏苗へーきだもん!」

「すっごい痛いんだぞ?」

「大丈夫!」

「そうか。すっごい嫌な思いをする時があると思うけど、それでもいいの?」

「いい! 夏苗はみんなと野球がしたいの!」

嬉々として告げる無邪気な笑顔を、ヤソジは寂しそうな表情で見守った。夏苗は今でも、あの時の祖父の言い得ない表情を覚えている。子供なりに、荊の道は覚悟していたつもりだった。しかし、それからの野球人生は、彼女の想像を充分に超えて辛いものだった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「——これもまたファール! 足尾、粘ります。これで5球連続のファールチップ。肩に、足に、わき腹に: 鋭い打球が龍ヶ崎に襲いかかります。さすがに辛いかな龍ヶ崎。俯いたまま……いや、立ち上がってピッチャーの大坂に返球します」

「キャッチャーは打者から一番近いポジションですからねえ。気の毒ですが、耐えるしかありませんねえ」

「投げる大坂も、忍びない表情を浮かべていますが、ここは投げるしかありません」

「大坂君にねえ、空振りを取れる決め球があればいいんですがねえ……」

できずに泣いてしまった。

泣き止むと、かつて彼女に忠告した祖父の事を思い出した。祖父は、きつとこの時の事を予見していたのかもしれない。今まで支えてくれた祖父にお礼を言わなくては。彼女は使い慣れたグローブをカバンに詰めると、丘の上の祖父の家へと走った。祖父は庭の植木の手入れをしていた。祖父は充血した夏苗の瞳を見て、すべてを悟ったようだ。

「キャッチボール、しようか」

「はい、おじい様」

普通のキャッチボールだった。肩が温まるまでは、お互いに山なりの送球だが、少しずつ距離を伸ばしていき、やがて矢のような送球を応酬した。ドンくさいチームメイトとは違って、ヤソジはボールをこぼす様な事はなかった。

「どれ、座ってみようかな」

「……!？」

「いいから、投げてみなさい」

言われるがままに、夏苗は高く足を上げると渾身の一球を投じた。高めに浮いたが、彼女としては充分満足がいく投球だった。

「ボール……」

「……?？」

祖父の意図がわからなかったが、彼は「低く低く」とジェスチャーでサインした。夏苗はもう一度、モーションを起こす。もう二度と投げる事はないだろう。大きく振りかぶって、思い切り右腕を振り抜いた。右打者から見てアウトローいっぱいのストライク。会心の投球だったが、祖父はミットを動かさず、茫然とそれを見送った。

スピンの効いた直球が、グラブを構える祖父の膝元を通過する。パリーン!

祖父の後方で、彼が大切にしていた盆栽の鉢が悲しい音を奏でた。

「……、ごめんなさい！ おじい様……」

「いや、謝らなければならぬのは、ワシの方じゃ」

「……?？」

「今まで、気が付いてやれなくて悪かったな」

「いいの。楽しかったから」

「何を言ってるんじや。夏苗の野球人生はこれからじゃよ！」

「……どういう事？」

その後の祖父の告白は、あまりにも驚くべき内容だった。

「この島に暮らす人間にはなあ、不思議な力が宿るんじや。大半の人間は、自分にどんな力が与えられたのか気付かずに、あるいは気が付いていても、充分その力を発揮できずに人生を終えてしまうんじや。前者は諦めがつくからまだいいが、不幸なのは後者じや。力を持って余して制御できず自滅する者もいれば、力の使い方を使って悪さを働く者もいる。夏苗みたいに周囲との違いに戸惑ってコンプレックスを抱えてしまう者もいる」

「何の話をしているの？」

「魔道術じや。語源は『惑う』からきている。その力に人は戸惑い、欲望に誘惑される」

「そんな、まさか……私に？」

「ああ。大事なのはそれをコントロールする精神力と、夏苗自身にブレない覚悟があるかどうかじゃ」

「ブレない覚悟？」

「ああ、何があっても、どんな状況でもブレない覚悟じゃよ」

◆ ◆ ◆

マスクをかぶりなおした夏苗は、主審からボールを受け取ると、今までと変わらずボールを返してくる。グラブを伝わる衝撃もこれまで通りで衰えておらず、彼女の気持ちはまだ折れていないことがよくわかる。続けざまに至近距離でファールチップを受けているにもかかわらずだ。大坂は夏苗のサインを確認するが、これも変わらず低めの直球だ。これしか選択肢のない自分が不甲斐ない。試合前にカーブの投げ方を教わったが、あれは子供騙しだ。とても投球術に折り込める代物ではない。

頼むから打たないでくれ。大坂は祈る思いで7球目を投じる。しかしながら、130 km/hの直球は慣れた人間ならば気持ちよく弾き

返せるレベルの棒球だ。ましてや、同じコースに繰り返し投げていれば素人でもいずれタイミングが合うだろう。大坂の祈りも虚しく、ファールチップはミットの土手を掠めて夏苗のプロテクターを直撃した。夏苗は両手を地面に突いて呻き声をあげた。

大坂はたまらずにマウンドを降りかけたが、夏苗はすぐにボールを拾い直してそれを拒んだ。矢のような返球が、大坂の心にも突き刺さる。ここで負けるわけにはいかないのは夏苗も同じらしい。彼女のプライドに、どうにか報いたかった。

1球、高めに外してはどうだろう。いや、ミラージゾーンは低めのコースでこそ威力が発揮される。間違って甘く入れば、間違いなく長打だ。これは却下。

逆に、ワンバウンドするような暴投はどうか。いやいや、バットには当たらないかも知れないが、満身創痍の夏苗が捕れる保証はない。後逸すれば振り逃げだってある。これも却下。

殊勝にも夏苗のサインは低めのストレート。これしかないから頷くしかない。グローブの中でボールの縫い目に指をかける。打ち取らなくてもいい。何とか打者の打ち気を逸らす術はないだろうか。目を閉じて考える。思い付かないのなら思い出せ。ヒントくらいはあるはずだ。

前のイニングの第3打席、菅野の勝負球はストレートだった。厳しいインコース攻めだったが、詰まりながらもライト前へと運んだ。しかし、組立ての中のSFFには反応できなかった。三塁にランナーを置いて、バッテリーも慎重になったのか決め球にこそしなかったが、もう一度投げられて見極める自信はない。初見の変化球に満足に対応できる打者なんてほんの一握りだろう。そうなると、付け焼刃のカーブもどきでも武器にはなるのだろうか。狙い澄まされている直球よりはマシかも知れない。

大坂はユニフォームの左袖に触れてサインを解除すると、そのまま投球モーションに入った。夏苗のミットは低めに構えられたまま動かない。大坂の右腕から、ドロップとした山なりのカーブが放たれる。緩い大きな弧を描いて、外郭からストライクゾーンを目掛けてスルス

ルとボールの軌道が変化していく。ブレーキの効いた投球に、タイミングを外された足尾はどうする事も出来ず、ただただ棒立ちだ。空を舞う一羽の渡り鳥が水面に静かに降り立つかのように、アウトローいっぱいのコーナーを白球が掠めて、地面すれすれで夏苗のミットに収まった。苦し紛れの一投は、どんぴしゃりのウイニングショットとなった。足尾が天を仰いだ。

「ストライーク！ バッターアウト！」

足尾が見逃し三振に倒れて2アウト。モンキースの2番打者渡良瀬が打席に入る。

しかし、ボール4つ分という視覚的な差異がわかったところで、すぐにこれを修正して打つことなど誰にでもできる芸当ではない。渡良瀬はボールがバットを掠めることなく三振に倒れて、3アウト。

6回表を終わって1対3。フロッグスが2点リード。

6回裏の攻撃。4番ガツテムは前の打席と同様に敬遠気味の四球で歩かされる。続く井伏が手堅く送りバントを決め、一死二塁とするも後続が続かず、フロッグスの攻撃は0点に終わった。

7回表、モンキースの打順は3番漁火から。漁火はここまで2打数の1安打。前の打席にレフト戦へのタイムリー二塁打を放っている。サードを強襲した打球が突如として火を吹く様は、最新のCGを駆使したSFファンタジーの世界だ。レフトのライン際に今も黒く残る芝生の焦げ跡が、それがホログラムの虚像ではなかった事を証明している。

大柄な選手が目立つモンキースにおいて、身長が170cmに満たない漁火は体格に恵まれているとは言い難い。足尾のように、並はずれたバットコントロールや俊足を持ち合わせているわけでもない。そんな彼が、モンキースの中軸を張れるのはファイヤースターターのおかげと言えるだろう。魔道術は術者に大きなアドバンテージを与えるのだ。



そもそも、中ノ鳥島は地図から抹消され、人々の記憶から忘れ去られた島である。どういうわけか、島には不思議な力を宿す人々が暮らしていたが、平穏に暮らしたいという彼らの願いと、事実を明るみにしたくない政府の利害が一致して、今もなお、一部の人間にしかその存在が知られていない。

余談だが、島に住む上級魔道術者たちの働きによつて、航路を見失った船や飛行機がうっかり迷い込んだり、衛星写真などに島の様子

が見きれたりすることはないらしい。

この島に野球が持ち込まれたのは、およそ100年前。ほとんど娯楽と呼べるものがなかった島で、それは瞬く間に広がって、いつしか島内全域でチームが結成されて、いたるところにグラウンドや練習施設が建設された。やがて、本土からプロモーターとして当時の財閥系企業である猪狩コンツェルンを招き入れて島内対抗野球リーグ（現在の中ノ鳥島アイランドリーグ）が開催された。戦後は中堅スポーツ用品メーカーであるミゾットスポーツも協賛する形となり、練習機材などの性能が飛躍的に向上して、今もなお、本土のプロ野球に劣らない熱い戦いが繰り広げられている。

一方で、この島で野球を語る上で欠かすことができないのが魔道術である。魔道術の使用に対する是非論は、今でも島内にくすぶっているが「投げる」「打つ」「走る」「捕る」などのプレイヤーとしての能力の範疇という捉え方が大勢を占めていて、それらを磨く事もまた、この島で野球をする上では重要な項目となっている。

魔道術の野球への応用が進化するにつれて、競技としてのバランスが失われることが懸念されていたが、これは現状あるものについては例外なく解決されている。かつて消える魔球を投げた投手は、ボールがストライクゾーンを通過していない（審判が確認できないためストライクのジャッジが出来ない）という理由により認められず、その魔球を封印したし、故意に火や雷を起こして敵チームの選手を攻撃すれば暴力（妨害）行為とみなされて退場や出場停止などの処分が科せられる。つまり、野球ルールの範囲内で魔道術を使うという事が前提となっているのだ。



7回の先頭は3番打者。漁火が右打席に入る。

漁火も幼少期は発火現象をコントロールできずに、近所でボヤ騒ぎがあるといつも周囲の輦蹙（ひんしゆく）を買う日々だった。医者から処方された魔力抑制剤によって周囲への被害を抑える事は可能だったが、野球に応用するとなると簡単な事ではなかった。漁火もまた魔道術に惑わされ、苦悩を味わった一人なのだ。

大坂の初球は、緩やかなカーブ。ストレートを待つ打者のタイムミスを外すために速度を抑えた良いボールだ。狙いは良い。しかし、コースが甘い。

漁火は慎重にテイクバックをしてミートするポイントを見極めると、鋭いスウィングで一閃する。

——カキーン!

センター前に抜けるかと思われた打球を、赤茶色の投手用グラブが遮る。しかし、グラブの中のボールは勢いを止めることなくグラブの中で暴れ、火を噴いた。半ば反射的に伸びあがった左腕が熱く燃え上がるのが大坂にはわかった。炎はグラブを焼きながらアンダーシャツに引火してユニフォームごと燃やす。身悶えするほどの熱さが大坂に襲いかかった。一瞬にして、大坂の全身が炎に包まれた。

「うわあああつ!」

たまらず大坂が叫ぶ。

「おい! 漁火! やりすぎだろ!」

大坂の背後から、井伏が抗議するが、漁火も戸惑っているようだ。

「そ、そんなつもりじゃ……」

「小波さん……!!」

「ダメデス 夏苗サンモマキゾエニナリマゝス」

大坂に抱きつかんばかりの夏苗をガツテムが引き留める。夏苗は目に涙を浮かべて抗議するが、ガツテムは黙って首を横に振るだけだった。

一人の若者が火だるまになっているにもかかわらず、それを前にして、誰も手を出す事が出来なかった。ただひとり、ベンチの中でヤソジだけが立ち上がると、ベンチ前に並べられたバットのうちの一本を手に取った。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

死に直面した極限状態では、脳の働きが活性化して周囲の景色がスローモーションで見えることがあるらしい。ゆっくりと、しかし確実に燃え広がる炎を大坂は感じていた。

『ピッチャーライナーも例外じゃないから、気をつけてね』

全身が炎に包まれた大坂は、今更のように夏苗の台詞を思い返していた。

——今更、何に気をつけなければいい？
危機的状況にもかかわらず、毒づく余裕があった。

しかし、火の勢いは強まるばかりだ。体をに纏わりつく熱は今までに経験した事がない程だ。視界が赤い炎で染まり、カラカラにのどが渴いていく。俺はこのまま死ぬだろうな。生きたいという本能とは別に、理性が冷静に分析している。

——頼む！ 誰かこの火を消してくれ！

「誰かって、誰のことだい？」

——おまえは誰だい？！

「今の状況で俺が誰かってのはそんなに大事な事かい？」

——理屈っぽい奴だな。

「俺もそう思う。だが、今は一刻を争う。無駄話はやめよう」

——勝手な奴だな。

「何とでもいうがいい。もう一度聞く。誰かとは誰の事だ」

——誰でもいいんだ！ 夏苗でも！ ガツテムさんでも！

「生きるか死ぬかの顛末を、誰かに委ねるのか？」

——そんなつもりはない！

「ならばどうして火を消さないんだ？」

——自分で出来ればとつくにやっている！

「自分で出来なければ、誰かに委ねるのか？」

——じゃあ、どうすればいい？

「生きる方法は誰かに教わるものじゃない。自然と体得するものだ。心臓の動かし方を誰かに教わったか？ 呼吸の仕方を誰かに教わったか？」

——それとこれとは話が違うだろ！

「そうかな？ よく考えてみる。ヒントは既に与えられている」

——まさか、魔道術……？

「察しがいいな」

——でも、どうやって？ オレは呪文も魔法陣も教わってないぞ！

「くどいな。しかし、死んでもらっては困るから、もう一度言うぞ。心臓を動かすように、呼吸をするようにやればいいんだ。呪文も魔法陣もいらない」

——どういうことだ!?

「……」

——おい！ 一体どういうことなんだ!?

「……………」

——!?

誰かの声はもう届いてこなかった。臨死体験において、もう一人の自分が助言してくれたのかも知れない。

不意に大坂は空気の揺らめきを感じた。僅かだが、それははつきりと大坂の皮膚から伝わって来る。空気の揺らめきは次第に大きく膨らんでいき、やがて大坂の全身を包むと炎を一瞬だけ掻き消した。

しかし、次の瞬間には大量の酸素を取り込んだ炎が再びくすぶり始めて、更に勢いを増して燃え上がるうとしていた。

——解き放つならば、今しかない。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

マウンド上で立ち尽くしている投手を包み込む業火が、一陣の風と共に消えていく。アンダーシャツやソックスは焼け落ちてしまったが、あれだけの炎に包まれていたにもかかわらず、ユニフォームは裾が少し焦げているだけで無事だった。スパイクやグラブも少し煤けているだけだ。

ゆつくりと大坂が視線を上げると、一塁ベンチ前でバットを並べ直しているヤソジと目が合う。

「ヤソジさん。おかげ様で助かりました」

「いや、大坂君の力があってこそじゃ」

「夢中だったので、何が何だか……」

大坂は少し残念そうに俯いたものの、確かな手ごたえは感じているようだ。

「カウンターマジックの一種じゃろう。魔道術を打ち消す術はいくつか存在するが、その中のいずれかじゃろう。扱いは容易ではないが、

きつと役に立つはずじゃ」

ヤソジは静かにバットを置くと、またベンチの中へと引き返した。大坂がグラブの中の黒焦げになっていているボールを審判にアピールすると、呆気にとられていた審判も気を取り直してアウトを宣告した。1アウト。

続いて迎えるは、4番打者の佐賀だ。一時は騒然とした球場内だが、再び言いしれぬ勝負の緊迫感に包まれる。フロッグスが2点リードしているが、ミラー・ジュゾンが見破られた今、これはセーフティリードと言えるのだろうか。

慎重になったバッテリーは、初球のストレートを外郭に外して様子を窺う。佐賀はボールの軌道をじつと睨みつけるように追いかけて、微動だにせず見送った。この打者に小細工は通用しない。ストレートでもカーブでも、少しくらいのボール球でも彼は容易く捉えるだろう。

全てを見透かしているかのような、鋭い眼差しで佐賀は大坂をギリと睨んだ。大坂はすつと視線を逸らして夏苗のサインを確認する。大坂に怯んだつもりはなかったが、視線が交錯する事を避けた時点で、もう勝負がついていたのかもしれない。

大坂が投じた73球目は低めのストレート。ここまで、数多くの三振を築き上げてきたストレートは、この日最速の134 km/hを記録した。しかし、佐賀の渾身のスウィングが容赦なくそれを弾きかえず。

乾いた打球音が響く。

大きくフォロースルーした佐賀は、上がった打球の角度を確認しながら、ゆつくりと一塁方向へと歩きはじめ。そしてその手応えに満足すると、小さく頷いて一塁ベースを回った。

大坂も、はじめて打たれたホームランの弾道を、ただ見送る事しか出来なかった。

7回表、モンキースが1点を返して2-3。なおもモンキース攻撃中。

C l o s e p l a y

「——佐賀がダイヤモンドをゆっくりと一周しましてホームイン。主砲の一振りで一点差に詰め寄りました。回は終盤の7回を数えています。お聴きの中ノ鳥島アイランドリーグ東地区予選モンキース×フロッグスの模様はイーストタウン中央放送の制作でお伝えしております。実況は私、荻窪譲二、解説は八回王子こと稲妻セツトアツパー日野隆男さんです。いやあ、日野さん、打った瞬間のホームラン。如何でしたか？」

「完璧に捉えていましたねえ。大坂君も今日最速の134 km/hを記録していますから、悪いピッチングではなかったと思いますが、佐賀君の方が一枚上手だったということではないでしょうか」

「さて、打席には5番菅野が入ります。今日は第一打席、第二打席ともに三振に倒れております。菅野は投手ですが、それほどバッティングを苦手に行っているわけではありません。今シーズンは打率3割を記録して好調を維持しています」

「このチームは、どうしても佐賀君の打撃センスや漁火君のファイヤースターターが目立ってしまいましたが、菅野君にしても、この後の外藤君にしてもいいバッターが揃っていますからねえ。大坂君も気が抜けないと思いますよ」

「大坂の初球は膝元ストライク。漁火のファイヤースターターを受けて、直後に佐賀からホームランを浴びました。投げる大坂の心境に変化は考えられますか？」

「追われるプレッシャーというのはあるでしょうねえ。2点差と1点差では気の持ちようが違います。それに、モンキースは徹底してガツテムとの勝負を避けていますから、フロッグスはこれ以上の追加点を期待できないでしょう。そうなりますと、この1点は是が非でも守らなければならぬ1点になります。そういう意味でも、佐賀君のホームランが与えた心理的影響は大きいのではないのでしょうか」

「大坂が第2球を：投げました。打ちました！ピッチャーの横、ショート右、ショート井伏が回り込みます。軽快に捌いて2アウ

ト

「今のも何気なく捌いています。井伏君はいい所で守っていますね」
「確かに、抜けていてもおかしくない当たりでした。菅野は悔しそうにベンチに下がります。そして、6番外藤が右の打席に入ります――」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
6番外藤もタイミングこそ外さなかったが、ミートしきれずキャッチャーへのファールフライに終わった。

7回裏の攻撃は菅野の容赦ない投球によつて、8番笠間、9番龍ヶ崎と2者連続三振。打順がトップに返るも、夏苗の愛犬みかんがバットを振れるわけもなく（一応打席に入った）こちらも三振に終わった。
8回表。大坂はこの日はじめての四球で先頭の7番塩原を歩かせる。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
「――ボール！ フォアボール！ よく見ました。大坂は今日初めてのフォアボールです」

「ここまで粘り強く投げてきましたが、やはり8回9回を投げ切るとなりますと、スタミナとそれを補う精神力、あるいは経験といったものが必要になってきますからねえ。ここが踏ん張りどころですねえ」
「同点のランナーがフォアボールで塁に出ました。打席には8番小山が入りますが、早くもバントの構えです」

「エンドランもありますよお」
「大坂が第1球目のモーション、足が上がって……投げた！ ランナースタート！」

「あちやう、これは酷い……」

「二塁は楽々セーフ！ 完全に盗まれました」

「無警戒でしたねえ」

「バントと決め込んでしまったかバッテリー。これは痛い盗塁を許してしまいました。一方で、一瞬の隙を逃しませんでした塩原。得点圏にランナーが進みます。さあ、一打同点の場面です。カウントはノーボール1ストライク。今の盗塁はどうご覧になりますか」

「大坂君はクイックを意識してましたけれど、何と言いますか、経験の浅さが露呈してしまいましたねえ。やはり、急造のピッチャーなのかも知れません」

「しかし、7回までモンキース打線を2点に抑えてきました。ここまですで14奪三振」

「そうですねえ、これはラッキーだけで出せる結果ではありませんねえ……」

「…大坂が第2球を、投げました。これは当たり損ない、セカンド真正面。笠間が丁寧に捌きます1アウト。セカンドランナーは三塁へ進みます。試合中も、ディレクターの小金井さんが走り回って大坂、そしてガツテムの情報を探してくれているのですが、未だに見つかっておりません。この2人ですが、第8次招待選手という可能性はありますか？」

「ちよつと考えにくいですねえ。昨日の座礁事故の後、招待選手は皆運営本部が用意した宿泊施設で一夜を明かしているはずですから、その後、朝一番でこちらに出向いても、試合開始の10時にパラキ村までたどり着く事は不可能でしょう」

「そうですね。朝一番でリモアを出ますと、到着はお昼前後になりますか」

「ええ。それに仮に間に合ったとして、東地区リーグ敗退が決まっているフロッグスにエントリーする必要性はありませんからねえ」

「打席には9番の中禅寺が入ります。しかし、投手経験が浅いとはいえ、ここまでのらりくらりとモンキース打線を封じてきております。ランキング上位に登場する事はないにしても、これだけの選手が、今までノーマークというのも考えにくいですね」

「うーん。あるいは、花いちもんめルールかな……」

「花いちもんめですか……？ 大坂の初球は外に大きく外れました。ボール」

「最近はリーグ戦が高度化して選手のトレードはオフにやるのが主流ですが、昔は勝ったチームが負けたチームから1人ないし2人指名して選手を横取りする通称『花いちもんめルール』というのがあったん

です」

「へえ。そんなものがあつたんですか？」

「現状のルールでは生涯の移籍の回数に制約がありますので、移籍には二の足を踏む選手が多いのですが、かつては試合終了後に負けたチームから勝ったチームに選手が移籍する事はよくあつたんです」

「大坂の第2球は低めに決まってストライク」

「お察しのよう、これだとあまりに戦力の格差が開いてしまうので、現在のルールになっている訳ですなえ」

「では、花いちもんめルールは今も有効、という事ですか？」

「なくなつたという話は聞いてないですからねえ。だとすると、このように考えては如何でしょうか？ 第8次招待選手の2人がこっそり宿泊先のホテルを抜け出して、東地区の田舎球団に入団。翌朝の最終戦で優勝チームに惜しくも敗れる。すると、フロッグスは解散してしまうから、花いちもんめルールの話も出てくるでしょう。そうすれば、モンキースも力のある2人は欲しいですから、この2人は労せず本戦出場権を得る事が出来る」

「大坂の第3球は大きく外れてボール。これで2ボール1ストライク。いや、日野さん、ならば初めからモンキースに入ればいいのではないですか？」

「……Σ(？□？；)」

「ボールが先行しております。苦しそうな表情の大坂。肩で息をしています。同点のランナーが三塁にいます。一度帽子を外して、額の汗をアンダーシャツで拭きました」

「……ああ、球数も80球超えましたので、ここは踏ん張りどころですよお」

「さあ、注目の第4球を……投げました！ スクイズだッ！ ボールはピッチャー正面に転がる！ 大坂が前に出て、グラブトスで本塁へ転送！ 間に合うか!? ランナーがキャッチャーに激突！ タッチは……!?!」



三塁走者がスタートを切ると、打者がバットを寝かせた。今更、投

球のコースを器用に外す技術なんて大坂は持ち合わせていない。まして、事前にそんな打ち合わせもしていない。ただ、ちよつと回転の甘いストリートは金属バットに当たり、跳ね返ると、その軌道を変えてピッチャー方向に戻ってきた。この場合、出来ることは限られている。

ここで同点に追い付かれる訳にはいかない。リトルリーグから高校野球までを経験した大坂の野球選手としての本能がそう告げていた。左腕をいっぱい伸ばしてグラブにボールを乗せ、手首を返すようにボールを押し出す。次は投げると約束したから投げた訳じゃない。キャッチャーが自分より年下の女の子だとか、ランナーが危険を顧みないプレイスタイルだとか、そんな事は考えなかった。

捕球してからブロックまで、流れるような美しいプレイだった。しかし、ベース目掛けて滑り込む走者は、ベースを塞ぐ彼女を避けたり、スライディングの勢いを抑えたりすることなどできない。本塁上に鈍い音が響いて、土煙が舞い上がった。

そして、球場の空気が一瞬のうちに凍りついた。一人の少女が本塁の後方に跳ね飛ばされたまま動かない。

「夏苗ー」

大坂は、本塁を駆け降りた勢いをそのままに夏苗のそばに駆け寄った。彼女はぐったりと仰向けに横になっていたが、ミットからボールはこぼれていない。さすがの執念に、大坂も舌を巻いた。

「アウトー」

主審の宣告と共に、大坂の後方から声がした。

「ボール2つ！早く！」

振り返ると打者走者は二塁を目指して走っていた。大坂は夏苗のミットからボールを拾い上げると、二塁ベースカバーの井伏へと送球した。幸い、打者走者の中禅寺はそれほど足が速くなかった。井伏は器用にスライディングをかわしながら、走者にタッチすると平然とした装いで大坂達のもとへ駆け寄って来た。

「大丈夫か？」

気がつくとも永瀬もそばに来ていた。しゃがみ込んで、夏苗の様子を

診ている。今日は忙しい人だ。

「軽い脳震盪を起こしているだけです。少し休めば大丈夫でしょう。今、担架を持ってきますので……」

「ソレニハオヨビマセ〜ン」

立ち上がる永瀬をガツテムが制した。そして、大坂を肘で突いて促した。

「オヒメサマダツコデ〜ス」

「え、あ、いつ、いきなり何ですか!？」

「イヤナラ ワタシガハコビマ〜ス」

ガツテムは黒くて太い腕を、おもむろに夏苗の首筋と腰元に廻した。透き通るように白く、折れそうなほどに細い首筋が、徐々に傾いていく。ヒロインのその姿を見て、言い様のない感情が大坂の中で少しだけ疼いた。それは嫉妬と呼ぶにはあまりにもあつさりとしていて些細な感情だったが、しかし確実に大坂の心の中に沸き起こっていた。

「いや、俺が運びます」

大坂はガツテムを制して夏苗を持ち上げた。彼女は思ったよりも軽く、彼女の肌は思ったよりも柔らかかった。

8回表、モンキースの攻撃を終えて2―3。フロッグスのリードはわずかに1点。

A Drama without Scenario

亜熱帯特有の焼きつけるような日差しが空の一番高い所から降り注いで、黒土のグラウンドを照らしている。島内に数多ある球場の中で、パラキ村営グラウンドのマウンドは特別高いわけではないのだが、そうは言ってもグラウンドの中で一番高い所にあるマウンドは太陽のエネルギーを余すことなく取り込んで、上に立つ一人の青年の体力を容赦なく奪っていることだろう。

マウンドに立つ青年は顔から噴き出す汗を拭ったが、またすぐに次の汗が噴き出してきて、彼の首筋を伝いアンダーシャツの中へと消えていく。アンダーシャツの中に充満しているであろう不快感は想像に難くない。ここまで一人で投げてきたのだろうか。

インニングは9回表。外野手に至っては2人しかいない。一塁側のベンチには監督と思しき人物と松葉杖の男が確認出来るが、彼らが試合に出ることはなさそうだ。センターの定位置に犬が一匹行儀よく座っているが、彼がいかなスーパードッグだったと見積もったとしてもチーム事情は推して知るべしだ。

無死満塁のピンチにも関わらず、監督は微動だにせずに試合の行方を見守っていた。万策尽きて打つ手が無いのだ。試合の行く末はマウンドに立つ大坂という一人の青年に委ねられているようだ。しかし、彼はとうに限界を超えている。勝利は目前だが、その道のりは遙かに遠く、険しく、困難を極めるであろう。

打席に入るのはモンキースの4番打者の佐賀だ。彼は魔道術に一切頼らずに本戦でも常にトップ10入りを果たす猛者だ。勝負勘の鋭さと類稀なバッティングセンスは折り紙付きである。この好機をみすみす逃すような打者ではない。

スコアボードには、既に青いランプが2つ灯っていた。勝負は下駄を履くまでわからないと昔から言うし、こと野球に関して言えば筋書きのないドラマなどと形容されることも多い。

しかし、この状況だ。

背番号1を背負った青年が投げた次の球は、変化球が高めにすつぽ抜けたボール球。スコアボードに青いランプがひとつ追加される。客観的に見れば、勝負の行方は明らかだ。しかし、野球は筋書きのないドラマである。

「あの馬鹿……」

一塁ベース後方のファールグラウンドにある機材などを搬入する通用口から、ボールが勢いよく紛れこんできて、プレイが一時中断した。続いて、メガネの青年が練習用の野球ユニフォームのまま、勢いよく柵を乗り越えて現れた。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

オイラ達がパラキ村営グラウンドに到着したのはお昼すぎの一番暑い時間帯でやんす。試合の経過は道中のカーステレオで聞いていたでやんすから、さっそうとお助けマン矢部が参上！といきたかったでやんすけど、あいにく加藤京子さんの運転がど下手くそで、球場に着する頃にはみんなグロッキーでそれどころじゃなかったでやんす。

勝負の行方に興味のない茅野さんはさっさとスタンドに行っちゃたでやんすけど、オイラはそんなに薄情者じゃないでやんす。親友のピンチには駆け付けるでやんす。あわよくば、遅れて登場するでやんす。なるべく、ドラマチックに、タメを作って、勿体ぶって登場するでやんす。ヒーローとは往々にしてそういう宿命でやんす。

……あっ！

「なにやってるの!? そんなのも捕れないの?」

「キャッチボールで変化球を投げるなでやんす!」

ひとつ言い忘れたでやんす。オイラのPDAを盗んでおいて謝りもしないこの女の子は橘みずきちやんでやんす。ちよつとカワイイからって調子に乗つてるとてもムカつく女の子でやんす。でも、悔しいでやんすけど今の大坂君には彼女の助けが必要でやんす。昨日の敵は今日の友みたいな展開は王道でやんすけど、現実世界でそれをやられると結構鬱陶しいでやんす。

転がっていくボールを追いかけながら柵を乗り越えると、黒土のグ

ランドでやんす。よく整備されていて、ふわふわしてスパイクが刺さる感触が心地いいでやんす。オイラは自慢の俊足を飛ばしてカッコよく球場入り……あれ？ 違うでやんす！ そんなつもりじゃないでやんすよ！

「ちよつと君！ 何やってるんだ?! 試合中だぞ！」

審判に怒られたでやんす。大坂君に合わせる顔が無いでやんす。

敵チームと思われるモンキースの選手達に散々野次られ、スタンドを埋める観客の失笑を買った後で、オイラは満を持してセンターの守備についたでやんす。ついでにピッチャーも交替でやんす。女の子のピッチャーにどれだけの投球が出来るかわからないでやんすけど、さつきキャッチボールの最中に投げられたスクリーンボールはかなりイイ線っていたでやんす。オイラも初見では打てるかどうかかわからないでやんす。というか、十中八九打てないでやんす。悔しいでやんす！ ムキーツ！

よく見ると、キャッチャーも女の子でやんす。みずきちちゃんとは違って、清楚な雰囲気がいかにもお嬢様といった感じでやんす。艶やかな黒い髪に、大きな黒眼が印象的な美人さんでやんす。とても野球をやる女の子には見えないでやんす。

そんなこんなで投球練習が終わったでやんす。みずきちちゃんの投球フォームは小柄な体格を目いっぱい使ったサイドスローでやんす。右打者はあれだけ角度をつけて内角を抉られたら一溜まりもないでやんす。それに加えて、外角に逃げながら落ちるスクリーンボールが決まれば鬼に金棒でやんす。認めたくないでやんすが、いいピッチャーでやんす。2球続けて、そのスクリーンボールが決まってあつという間にフルカウントでやんす。

でも、相手打者の佐賀も侮れないでやんす。あのスウィングなら、少しくらい芯を外しても柵越えは間違いないでやんす。2球ともスクリーンボールを強振してきたでやんす。自分のバッティングに自信がある証拠でやんす。オイラ、用心の為に少し後ろに下がるでやんす。

「矢部君、そこから刺せるの？ サードランナー足あるよ」

セカンドにいるのは大坂君でやんす。口調は穏やかでやんすけど、まだ目を合わせてくれないでやんす。大坂君は内野ならどこでも出来る守備の達人でやんす。もちろん、バッティングもピカイチでやんす。でも、ベースランニングはオイラの方が速いでやんす。

「オイラより速くなければ平気でやんす」

「じゃあ、もっと前に来て」

「……」

オイラ、何も言い返せないでやんす。試合を中断された事を、きつとまだ怒っているでやんす。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

そんなに細かい指示まで出さなくてもいいのに。元々のチームメイト同士とはいえ、内外野の綿密な連携に対し私は内心毒づいていた。バットに当たらなければ関係ないんだから。2球続けてのスクリュー。2球目はさすがにポイントを修正してきたけど、私のスクリューはもう一段階ギアを上げることが出来る。目の前のキャッチャーが初見で私のウイニングショットを取れるかどうかかわからないけど、そんなことに興味はない。ただ、打たれるのはシャクだから、手を抜くつもりはないけど。

外角へ逃げるスクリュー。我ながら完璧な投球だ。例え見逃されたとしても、低めいっぱいに決まるコース。とつとこの試合を終わらせて、雷神バットを頂戴して帰るんだから……。

——キンツ！

乾いた金属音にハツとして私は振り返る。あり得ない！ 私の本気のスクリューが簡単に弾き返されるなんて！

合わせただけのバッティングだが、打球は前進守備の大坂さんの頭上を越える。そして、センターの矢部が躊躇なく前に突っ込んでくる。何やつてるの？ 右中間を破られたら長打コースよ？ そんな初歩的な打球判断も出来ないの？ いや、違う。彼は事前に右中間を詰めていたようだ。横っ跳びで打球をダイレクトで抑えていた。

「矢部君、ここまで！」

大きなアクションで大坂さんがボールを呼んでいる。矢部もすぐ

に起き上がると、大坂さんの胸元目掛けて渾身の返球でそれに応えた。

「ノーカット！」

キャッチャーの龍ヶ崎さんが叫ぶと、大坂さんはひらりと矢部の送球をスルーした。ワンバウンドで龍ヶ崎さんのミットにボールが収まると、丁度ランナーの足尾が本塁に飛び込んできた。足から滑り込む。スパイクの刃を立てた危険なスライディングタックルだ。危ない！

「アウト！」

主審のコールは、あくまでも事務的なものだった。でも、龍ヶ崎さんは本塁付近でうずくまったまま動かない。彼女の左足は、ユニフォームが千切れて出血していた。どうして、そんなに無茶をしたの!?

あれよあれよという間に人が集まって来るのを、私は本塁後方からただ眺めていた。混乱に乗じて、バットを盗み、黙って立ち去るつもりだったけど、気が咎めるのはどうしてだろう。

私は、誰もいない一塁側ベンチにのバットケースに刺さっている雷神バットを一瞥したが、身体は自然と本塁を死守したヒロインの方へと向かっていた。人だかりの中に入って、そして声を掛ける。

「……龍ヶ崎さん、大丈夫？」

彼女はにっこりと微笑んで、私の問いかけに答えた。この人たちは、心の底から野球が好きなのだ。だからこそ、ひとつのプレイにすべてを賭けて戦うことが出来るのだ。

でも、好きなだけで戦い抜けるほど、この島の野球は甘くない。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

パラキ村営グラウンドの一塁側ベンチを訪れると、長身の老人と、松葉杖をついた壮年の男が試合の状況を眺めていた。9回表、ノーアウト満塁。私は野球をやった事はないけど、島の女なら野球のルールくらいは心得ている。絶体絶命の大ピンチという奴だ。

「はじめまして、加藤京子と申します」

手短に挨拶をすると、私は早速2人の選手の登録を長身の老人に提

案した。

「それは渡りに船じゃが……」

老人は困った様子で、松葉杖の男を顔を見合わせた。いきなり信用しろというのも無理な話だろうか。

「ちよつと失礼」

私が松葉杖の男の右足に触れると、彼の右足が碧い光に包まれる。松葉杖の男は驚いている様子だ。

「な、なんですか……」

「動かないで」

「ほほう、これは珍しい」

老人は要領を得たようだ。間もなく、彼の右足から光が消えると私は手を離れた。

「如何ですか？」

「どうもこうも……」

松葉杖の男は、困惑している様子だ。

「鹿島君、松葉杖はもういらぬはずじゃ」

「……何と？」

鹿島と呼ばれた男は、恐る恐る松葉杖を手から離してベンチに立て掛けた。

「あれ？ 何ともないぞ……」

鹿島は私と老人を交互に見つめて、驚いた様子だ。そして、ベンチの中で飛び跳ねて喜びに浸り、私に礼を述べた。

「とんでもないです。ところで、代わりと言つてはなんですが……」

「いいでしょう。2人の名前とIDを教えてくださいますか」

試合は間もなく再開した。素人目に見ても、橘みずきのスクリーンボールのキレ味が鋭い事はよくわかった。テンポの良い投球で、あつという間にフルカウントまで追い込む。口も達者だが、腕も確かなようだ。

だが、次の投球で彼女のスクリーンボールはあつさり弾き返される。さつきまでの強振から一転して、コンパクトな軽打にベンチから溜息が漏れた。前進しているセカンドの頭上を越えて打球は外野ま

で飛んでいく。スタンドからは悲鳴が聞こえる。

しかし、センターに入った矢部がかなり前に詰めていた。ジャンプ一番。ダイビングキャッチを決めると、ホームへの好返球。タッチ、アウト。これ程のファインプレーを間近で見せられれば、鳥肌が立つというものだ。2アウト一塁二塁へと状況が変わる。強力な助っ人が参戦し、あと一人。誰もがそう思うところで、試合は予断を許さなくなる。今のクロスプレーでキャッチャーが負傷したようだ。

医務室から、長い銀髪の青年が飛び出してきた。急ぐ彼を老人が呼び止めた。

「紹介しよう。加藤京子さんじゃ。彼女は白魔術が使える」

「えと、僕は用なしですか？」

「そうは言うたらんよ。孫娘を頼む」

「わかりました。京子さん、力を貸して下さい」

「ええ、私でよかったです」

私は優しい気持ちで微笑み、永瀬と名乗った青年に続いてグラウンドに向かった。

彼女の状態は予想以上に酷かった。傷口が深く出血が止まらない。私は担架を要請した。永瀬も同意見のようだ。

「だ、大丈夫です。あと、アウト一つだけ……だから」

育ちが良さそうだが、随分と芯の通った女の子だ。意識を保つだけでも大変なはずなのに、しっかりと私の目を見て訴えてきた。

「白魔術……で、何とか出来ませんか？」

何とかしたいが、傷口を塞ぐのには時間がかかる。これ以上の出場は不可能だ。彼女は悔しそうな表情で歯を食いしばりながら担架に横たわると、医務室へと運ばれていった。彼女は他のチームメイトがいる前では涙一つ零さなかった。

医務室の小さい窓からベンチの様子を見やると、選手たちがベンチ前に集合して沈痛な面持ちで老人を取り囲んでいた。しかし、老人は選手たちを激励している様に見えた。この老人には、もう一つ策があると私は直感した。

まだ試合は終わっていない。棄権するには、まだ早すぎる。

Game Set

「ん？… この反応は……」

パソコンモニターがたくさん並んだ地下の監視室で、四路智美は唸り声をあげた。東地区の最西端、南地区との境界に位置する小さな尖塔が彼女たちの拠点だ。

「ちよつと金さん」

「ハイアル」

金と呼ばれたのはグレーのチャイナ服姿の背の高い男だ。肩幅が異様に広く、分厚い背筋がチャイナ服の生地をパンパンに張り詰めさせている。馬のように縦長の輪郭の顔は、糸のように細い目と丸く大きな鼻が独特の存在感で彼の表情を作り上げている。決して不男というわけでもないが、どちらかと言えば三枚目顔である。

「コレはS級魔道術か、クインテットスターレアアイテムの反応アル」
「そうなのよ。でも、場所がね……」

「パラキ村!? あり得ないアル」

「パラキ村は、今日東地区リーグの最終戦をモンキースと戦ってるけど、魔道術を使うとすればBランクの漁火くらいだわ。おかしいでしょ?」

「とりあえず、大佐に報告アルネ」

「うん。それもそうね……」

金は入口の扉を窮屈そうに頭を屈めながらくぐり、研究室を去っていった。

「あの取って付けたような中国語訛りは、どうにかならないのかしらね」

扉が閉まる音を確認すると、智美は小さな声で呟いた。

間もなく、豪快な笑い声が扉の向こうから聞こえてくる。大佐だ。智美は椅子から立ち上がると、気をつけの姿勢で大佐を出迎えた。

「お疲れ様です！大佐」

「ガハハハハ！ うむ。御苦労である」

大佐と呼ばれるこの男は意味もなく大声で笑い声をあげている。

しかし、組織をまとめる人間としての彼の品格を疑いたくなるのは、その笑い声だけではなかった。

「大佐、服着てくれませんか?」

「ガハハ! 何を言うかね四路君。この島はいきさか暑すぎるのだよ」

「ならばそろそろエアコン直してもらえませんか?」

「エアコン? そんな物に頼っているから君はいつまでも貧弱なのだよ。ガハハハ!」

大佐は大声で笑いながら上半身に力を込めて、鎧のような自身の筋肉を強調した。丸太のような二の腕に大きな力瘤が盛り上がり、巨大な大胸筋がピクピクと揺れている。

四路は額に手を当てて、深く溜息をついた。

「もういいです。大佐…」

「うむ。良かろう。ところで用件はなんだね。まさか吾輩の鍛え上げた肉体が見たいという下衆な望みではなかろう」

「ええ、勿論。これをご覧いただけますか」

「…? な、なんだこれは?」

「Sクラスの魔道術、もしくはクインテットスターのレアアイテムが使われた可能性が高いです。おそらく後者でしょう。解析の結果、属性は雷です」

大佐の青い瞳にモニターの光が反射して映る。普段は己の肉体を鍛え上げる事と、新作のプロテインのことしか考えていない様な男だ。名前はルコフスクロシユツスキー。しかし、彼は元々ロシア海軍の諜報員だった男だ。口元を左手で覆い、ブロンドの口髭を撫でる様は絵になる。黙っていれば、いい男だ。

「ムムムツ! でかしたぞ四路君。これでエアコンを直せそうだ」

「やった☆ …って、新しいの買わないんですか? クインテットスターですよ!」

「いや、実はトレーニングマシンも新調したいんだ。ガハハハ!」

「はいはい。そうですか……」

「金よ。今すぐ出発だ! 今日忙しくなるぞ! ガツハハ!」

四路は上機嫌で部屋を後にするルコフスクを見送ると、再びパソコンへと向き直った。パソコンモニターには東地区と南地区の境界付近の監視映像が映し出されている。表の顔は東地区と南地区の境界にあるゲートの監視センター。島の秩序を守る存在だ。当然、島内で流通するレアアイテムのチェックも厳しくここで行われている。しかし、裏の顔は島内のレアアイテムを不正に奪取し転売する盗賊団なのである。

彼らの経緯を説明するには、猪狩コンツェルンがこの島に介入するよりも前の歴史を紐解かねばならない。その昔はブラッドバタフライという財団がこの島を支配していた。島民は彼らに奴隷のごとく扱われ、搾取され続けていた。しかし、介入当時の猪狩コンツェルン側もその全体像を全て把握する事は困難であった。その為、一部の組織は解体されないままに事業の立ち上げが行われていたのである。黒い歴史の名残が、今もまだこの島には残っている。



パラキ村営グラウンドの一塁側ベンチ前には円陣が出来ていた。集まった者は、おおむね暗い表情を浮かべて俯いたままだ。3―2、1点のリードを守って9回二死まで漕ぎつけたにもかかわらず、試合を続けることができない。2人目の負傷者を出して、これ以上試合を続けることに意味があるのだろうか。そんな思いが、ベンチを支配していた。まだ年端もいかない少女が、血を流して倒れた。度重なるラフプレイにもめげることなく気丈に振る舞う彼女の姿は、いつの間にかチームの心の支えにもなっていた。そんな彼女が、ついに力尽きた。ここで諦めたら、チームは解散である。しかし、元々のフロツグスのベテランメンバーは既にそれを受け入れる心の準備が出来ていた。決して、はじめから勝負を棄てていたわけではないが、ここまでの善戦は、これまでの対戦成績を考えれば上出来なのだ。

一方で、今日加入した面々の様子はそれぞれに異なっていた。大坂は、ヤソジの依頼を引き受けた時に腹は括ったつもりだったから、黙っていた。矢部も、そんな大坂の様子をちらりと見ただけで、何も言わなかった。橘は、円陣の一番後ろで我関せずとばかりに、きよろ

きよると球場の様子を眺めているだけだった。

そして、この状況を受け入れることのできない人物が1人いた。ガツテムである。彼が、一歩前に出て、口を開く前に、ヤソジは指揮官として口を開かねばならなかった。

「私が出よう」

力強い指揮官の決意を、誰も否定することはなかった。かつて、パラキフログスの中心選手として一時代を築き上げ、その盛衰を見守り続けた男が、衰えた自らの身体に鞭を打ち、ゆつくりとグラウンドへと歩き始める。180cmを越える長身がとても小さく見える。フログスのベテラン選手たちにとっては、そんなヤソジの姿は見るに堪えられないものではなかった。自分達の不甲斐なさを歯を食い縛って悔やみ、こみ上げる嗚咽を必死でこらえる事しか出来なかった。

「待つて下さい！」

声と共に、永瀬がベンチへと飛び込んできた。重かった空気が一掃され、皆が一斉に振り返る。永瀬はユニフォームに着替えていた。しかし、彼は肘を痛めてボールが握れないはずである。その永瀬が右腕をぐるぐると回して、拳を勢よくグラブに叩きつけた。

「加藤さんに治してもらいました。完治にはリハビリが必要ですが、1イニングくらいならば、何とかなるでしょう」

永瀬はもともと守備の名手だ。今の状況で、これ程心強い交代要員はいない。

振り返ったヤソジの表情は、嬉しさと寂しさが絶妙な比率で混ざりあつて、とても感傷的なものとなっていた。永瀬の登場は朗報なのだが、グラウンドに出る事を引き留められたのは今日2回目だ。人生を野球に賭けてきた男にとって、それは何を意味するのだろうか。

「……そうか。では、永瀬君はセカンドに入りなさい。大坂君はキャッチャーだ。やれるか？」

「はい」

あくまでも、厳かにヤソジは采配する。もう、あの頃のようなプレイはできない。ヤソジはにわかを感じた喪失感を、そつと心の片隅に仕舞っておく事にした。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
試合はフロッグスが1点のリードを守りきって終了した。そして、フロッグスは解散の危機を辛くも免れた。しかし、試合終了後、重大な事実が審判団から明らかにされた。

「只今のサンシャインモンキースの敗戦をもって、中ノ鳥島野球リーグ規約第0章特例事項第1項を適用し、サンシャインモンキースを解散処分と致します」

モンキースナインは知っていたのだろう。黙ってそれを聞き入っていた。だが、ファンは黙っていなかった。「何だそりゃ!? 聞いてないぞ!」などと三塁側スタンドからは汚い罵声や野次が飛んでいる。次第にそれらはうねる様なブーイングへと変化していった。一塁側スタンドも、喜ぶに喜ばずざわつき始める。

「ちよつと待って下さい」

甲高いしゃがれた声が審判団に詰め寄った。赤髪に青いバンダナの男、漁火だ。

「漁火さん、今更何を言うんだい?」

「いや、違うんだ。昔、花いちもんめっていうルールがあつただろ」

「勝利チームの了承があれば、敗戦チームから試合後に移籍することができるアレですか?」

「そうだ。ソレだ。この2人を推薦したい」

「……わかりました。少々お待ち下さい」

主審は漁火から推薦状を受け取ると、一塁側ベンチへ向かった。

間もなく、漁火の所にスキンヘッドの用心棒と全身タトゥーの男が現れた。佐賀と菅野だ。

「今まで本当に、ありがとうございました!」

大男が2人深々と頭を下げる。

「いいって事よ。それより推薦状書いといたから、2人分」

大男が2人顔を見合わせて、目をパチクリさせている。

「今まで楽しかったよ。こちらこそ、ありがとうな……」

漁火は尻ポケットから煙草を取り出して2人に背を向け、一服くゆらせた。

「先方のOKが出れば、お前らは今日からフロッグスの一員だ。頑張れ」

先に状況を飲み込んだのは菅野だった。

「え!? でも、元はと言えば俺達があんな事をしたから……」

「言うな! 言ったらこの場で焼死体にするからな」

1秒遅れて佐賀も気がついた。

「だけど、俺達……」

後手に回った佐賀は、上手く言葉を紡げない。

「誘惑に負けて、魔が差すことはあるだろう。だけど、お前らはちゃんと反省して、それを償ったんだ。今日まで野球を続けてきたことがその証拠だ。責任は俺や当時のキャプテンの中禅寺さんにある。お前達が気にすることは何もない。それに、これはチーム全体の総意だ。俺達は、今後もお前達が野球をする姿が見たい。それだけだ」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

ベンチ内の掃除をしていたヤソジが審判団に呼び出されている。頭の悪そうな犬はベンチ脇の日陰で気持ちよさそうに眠っている。大坂や他の選手はせっせとグラウンド整備に余念がない。医務室の小窓からは、バットケースの位置は死角になる。

橘みずきは自分のバックからピンク色の光沢のある風呂敷包を取り出して広げると、バットケースからクリップテープの先端が少しだけ解れているポッキーバットを見つけて、手際良く包んだ。すると、不思議な事に、その風呂敷包みは徐々に色を失って消えていく。透明な風呂敷包みを担ぎあげると、橘みずきは一塁側ベンチを後にした。

ヤソジは審判団から小さな紙切れを受け取っていた。バックネットの前で2人の大男が泣き崩れている。あんなに素直な心の持ち主から、どうして野球を奪う事が出来ようか。

「わかった。漁火君よろしく伝えてくれ」

橘みずきが一塁ベンチを出て、通用口を抜けるとグラウンド横の駐車

場に差し掛かる。左肩に掛かった透明な風呂敷包みの感触を確認しつつ、思わずニヤけてしまった表情を引き締める。球場の敷地を出ると、見るからに怪しい1台のバンが路肩に停車していた。

「げ、怪しすぎる……」

橘は注意深くそのバンの横を通り過ぎた。スモークフィルムの窓からは中の様子は窺えない。小走りでのこの場を立ち去ろう。橘がそう決意した時に、バンのスライド扉が急に開いて、橘の右腕が何者かに掴まれると身体ごと車の中に引きずり込まれた。大声を上げようとした時には口は塞がれていた。必死で抵抗を試みたが、腕力ではとても敵いそうになかった。足をばたつかせて、振り払おうとしても及ばなかった。意識が薄れていく中で、左腕から滑り落ちそうになる風呂敷包みの感触を手放さないようにすることだけが、彼女にできた唯一の自由だった。10秒としないうちにスライド扉が再び閉められると、黒塗りのバンは走り出した。



解散を免れた安堵感と、解散に追い込んだ罪悪感がフロッグスの選手達の心に複雑な陰影を刻んでいた。荒れたグラウンドを整備しながら、それぞれの心も整理して、各々が納得のできる所に自分の気持ちを収めていく。やるかやられるかの勝負で勝ったのだから、誰かを責めたり、誰かに責められたりする覚えなど無いのだ。

それぞれが清々しい気分ベンチに帰って来る。

「そういえば、みずきちゃんがないでやんす」

イーストタウンのショップで買ったまだ新しいスパイクを磨きながら、矢部が大坂に話しかけた。大坂もヤソジに借りた内野手用グラブを鞆にしまい、荷物をまとめていた。

「そういえば、ろくにダウンもしないでどっか行っちゃったなあ。結局、マウンドもオレ一人で整備したし……」

大坂が愚痴った頃合いで、アロハシャツを着た眼つきの鋭い男がベンチ奥の扉から入ってきた。人相の悪さと、思い詰めたような表情からモンキースの選手がかち込みに来たのかと大坂は身構えたが、よくよく考えたらそんな男は向こうのベンチには居なかった気がする。

「初めまして。君が大坂君だね」

「はい…」

「私は、こういう者だ」

予想に反して丁寧な物腰に、大坂は肩透かしを食らった気分になる。中ノ鳥島野球リーグ運営本部警備部主任茅野啓吾。提示されたPDAにはそう表記されていた。

「チャド・ポートランドという男を知っているかね？」

「ええ、知ってるも何も、あそこでトンボ掛けしてますよ」

大坂は振り返って一塁ベース付近で入念にグラウンド整備をしている男を指差した。茅野は非常に驚いた様子だったが、すぐに気を取り直して、大坂に簡単に礼を述べると、肩を怒らせてのしのとガツテムの所まで歩いて行った。

「オイラ、あの人嫌いでやんす」

「そうなの？ ……でも、矢部君」

「何でやんす？」

「来てくれて助かったよ。ありがとう」

「えへへへ。照れるでやんす」

メガネの相棒は締まりのない笑顔に、大坂は爽やかな笑顔で応えた。

「よくもやってくれたな。チャド・ポートランド」

茅野はガツテムのすぐ後ろに仁王立ちした。ガツテムの手が止まって、彼の身体が一瞬だけ硬直した。トンボ掛けで屈んでいた身体を起こすと、ガツテムは茅野の方に向き直った。

「今ノ私ハ チャドポートランドデハアリマセ〜ン」

「この期に及んで屁理屈をこねるのか？ まあ、いいだろう。雷神バットを返してもらおう。その為に俺はここまで来た」

「ソレハデキマセ〜ン」

「ふざけるな！ だいたい貴様……」

茅野の握りしめた左拳が震えている。思わず飛び出した右腕がガツテムの胸ぐらを掴んだところで、ヤソジが佐賀と菅野を引き連れ

て戻ってきた。さながら助さん格さんを引き連れた黄門様といったところである。

「どうしたんだい。揉め事かね？」

「いや、これには深い、事情が…」

ユニフォームを掴む右腕が力なく下がる。

「茅野君と言ったかね。君にもやむにやまれない事情があるだろうか。深く詮索はしないよ。じゃが、グラウンドの中で揉め事を起こすのなら、ワシにも考えがある。あまり事を荒立てれば君の立場も良くないんじゃないのかね？」

すべてを見透かしたようなヤソジの言動に、茅野はすっかり意気消沈してしまった。

「では……その、現物だけ確認させて頂いてもよろしいですか？」

「結構。ガツテム君、見せるだけなら文句も無かろう」

「モチロンオフコースデース」

このあと、彼らが必死で雷神バットを探したのは言うまでもない。

第二章

Get Back the Treasure

「みずきちゃんがいないでやんす！」

矢部が取り乱して喚いた。茅野は不愉快そうな舌打ちでそれに応えたが、ガツテムに対する怒りをぶつける事に気を取られ、そもそもの目的である雷神バットと橘みずきへの注意を怠った自分への憤りも感じていた。

「オカシイデウス ミスタチバナノゲンザイチガ ワカリマセウシ」

自分のPDAを操作しながらガツテムも困惑している。さしあたっての目的は茅野もガツテムも同じなのであろう。茅野はこの状況を悟ると、ガツテムに説明した。

「たとえチームメイト同士でも、先方が通知拒否に設定すれば現在位置はわからないようになっていいるんだ。くそつ。折角ここまで来たつてのに……」

「マダソレホドトオクマデハイツテナイハズデウス サガシテミマシヨウ」

荷物を抱えてベンチを出ようとするガツテムを菅野が呼び止めた。

「どうかな。実は球場の外に見慣れないバンが停車していたんだ。スモークを貼っていたから中の様子はわからなかったが、ちよつとヤバい雰囲気だったぜ。自分で言うのもなんだが、俺たちみたいなチンピラとはわけが違う。悪い事は言わない。深入りしない方がいいと思うぜ」

「刺青の兄ちゃんよお、これは『はい、そうですか』って引き下がれるような問題じゃねえんだ」

茅野が厳しい口調で菅野に告げた。菅野は少しぼつが悪そうだしばらくの沈黙に、ベンチの中の空気が重くなる。

「……お2人さん、なにか当てはあるのかね？」

状況を見かねて、ヤソジが口を開いた。この問いかけに茅野が応じる。

「監督さん、ピンクⅡパンサンという人物、あるいは組織をご存じありませんか?」

「はて、聞かない名前じゃが…」

「では、東地区で5つ星レアアイテムを闇に流せるようなコネクションのあるチームとか……」

「そんな物騒なチームはこんな田舎にはないよ。しいて言えば、さつきまで戦っていたモンキースじゃが、彼らは今日で解散じゃ。雷神バットを手に入れたところで一銭の得にもならない。そうじゃろ?」

ヤソジが佐賀と菅野の方を見る。今度は佐賀が答えた。

「ああ。地区予選で1敗でもすれば解散という状況だったから、ただでさえ本部からのアイテムの監視は厳しかったんだ。非正規のルートで仕入れようものなら、ゲートのルコフスクが黙っちゃいないだろうな」

普段は寡黙な佐賀が、珍しく冗談を交えて弁を振るう様をみて、菅野は少しだけホツとしていた。このチームならば、案外早く馴染めるかも知れない。そう感じる事が出来た。そして、ハハハと苦笑して合いの手を入れた。

話に置いていかれそうな大坂が矢部に囁き尋ねる。

「矢部君、ゲートって何?」

「東西南北各地区の境界にある関所みたいなものでやんす。通過するときにIDと手荷物のチェックが行われるでやんす」

「どうやらお困りのようね」

医務室の扉が開いた。加藤京子が出てきて、ベンチの中の視線が集まる。

「ああ、夏苗ちゃんの傷口は塞がったわ。しばらく安静にしていれば、今夜には元通りよ。あと、茅野さん、矢部君、橘みずきに服を売ったのは誰だと思ってるの?」

「どういうことだ?」

「あくっ! でやんす!」

「さすが矢部君。察しがいいのね」

京子はにっこりと微笑んだ。

「全然わからないでやんす！」

ズコーン!! 吉本新喜劇にも劣らないリアクションをとった後で京子は続けた。

「実は、彼女の服のボタンに発信機を仕込んでおいたの」

「一体、何だつてそんな……?」

「茅野さん、今知りたいたのは私が発信機を仕込んだ理由かしら?」

薄々感じていたが食えない女だ。茅野は愛らしく微笑む京子への評価を改めた。暖かい春の昼下がりに公園のベンチで同じ事をされたら、妙な感情を抱きかねないが、今はそんな甘いシチュエーションではない。

「彼女は海岸沿いの道路を西へ進んでいるわ。この速さだと、車での移動と考えると良さそうね。それに、このルートだと途中に大きな町はないから、直接ヴォクスルトのゲートに到着する事になりそう」

「それはおかしいな。運営本部は雷神バットの盗難は公表していないが、未登録のレアアイテムを持ったままゲートを通過することは出来ないはずだ」

「なにか有りそうね……」

「トニカクオイカケマシヨウ!」

みずきの行動を訝る茅野と京子だったが、ガツテムの意見には異存はないようだ。それぞれが荷物をまとめ始める。

「オイラ達はどうするでやんすか?」

「うーん、行ってみようかな……」

少しだけ考えて、大坂も同行する事を決めた。夏苗の容態も心配だが、島を出る為には大会に出場して優勝しなければならぬ。優勝するためには、強力なアイテムがあるに越したことはないだろう。火を吹くボールや、視覚上でボールの軌道を歪める様を目の当たりにして、底の知れない大会のレベルに期待と不安が大坂の中を交錯していた。

「オイラ達も行くでやんす!」

「遊びに行くんじゃないぞ。わかってるな」

「はい、もちろん」

茅野の問いかけに答える大坂の表情は、今まで以上に引き締まったものだった。

「待ってよ、私の車は4人しか乗れないわ」

「じゃあ、そのメガネ！ お前は走ってついて来い！」

「それは、あんまりでやんす」

「良かったら、俺たちの車を使ってください」

菅野が車のキーを差し出した。

「これから、遠征も増えるだろうからって、漁火さんが…」

「でも、これ誰が運転するの？ 私は無理よ」

「それならご心配なく。俺と佐賀が交代で運転します。荷台を改造してありますんで、皆さんはそちらでくつろいでいて下さい。あ、シャワー室もありますんで遠慮なく使ってくださいね」

「すごいでやんす！ 秘密基地みたいでやんす!!」

矢部が両手を上げて子供のようにはしゃぎ喜んだ。他の面々もお互いに顔を見合わせて、これから始まるであろう奪還劇に備えてベンチを後にした。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

ビュオン！ ビュオン！ ビュオン！

「フンッ！ フンッ！ フンッ！」

トレーニングルームに素振りの音が響く。半裸の男が、黙々と素振りを続けている。額、首筋、肩、二の腕、胸筋、腹筋、背筋…露出する肌という肌から噴き出す汗が雫となって飛散し、上気した男の体温を周囲に拡散させていく。

「大佐！ ちょっと、大佐！ もうやめて下さい！」

四路智美が勢いよく扉を開け放つと、トレーニングルームに飽和していた熱気が彼女に襲いかかる。むせ返るような男の汗の臭いは、年頃の女の子にはそうそう許容できるものではない。利発そうな大きな瞳を横に逸らすと、彼女はゲホゲホとむせ込んだ。彼女の赤みがかったブラウンに染めたミディアムショートが揺れている。

「計器が…、げほっ、計器がっ…!!」

「何だね。3時のおやつならもう済んだであろう」

「違う！ ケーキじゃありません！ 計器です！ それ、オヤジギヤグですよ！」

「すまん。だが、そんなに怒る事もなからう」

「……こ、これは失礼いたしました」

「それで何だね」

「実は、大佐が素振りをするたびに、敷地内の観測機器の測定値が異常値を示しているんです。見てください」

智美は携えていたバインダーを差し出した。

「ほう。これは素晴らしい！ さすが、クインテットスターだ！ ガハハハハ！」

「笑ってる場合ですか！ こんな事してたら施設内の電気系統に負荷が掛かってブレーカーが落ちちゃいますよ？」

「うむ。すまなかった。報告ご苦労である。ところで四路君」

「はい、なんでしょう？」

「この雷神バットは、誰が、どうして手に入れるつもりだったんだろうなあ」

「そりゃ、もちろん大佐がタダで手に入れるつもりだったんでしょ？」

「うむ。そうに違いない。ガハハハハ！」

ルコフスクは笑いながら握りしめたバットを誇らしげに眺めた。

「大佐ア〜！ 大佐ア〜！」

2人のもとに金が駆け込んできた。深刻な表情だが、訛ったイントネーションは少し間が抜けて聞こえる。

「おやおや、金君ではないか。血相を変えてどうしたのだね」

「ゲートに、フロッグスの連中が集まってきてイルネ」

「何!? もう気づいたのか。さすが、信濃ヤソジは侮れん男よ。適当にあしらっておいてくれたまえ」

「フロッグスだけじゃないアル。警備部の茅野もいるアル」

「…何と、それは厄介だな。要求は何だ？」

「恐れながら申し上げるネ、盗んだ雷神バットを返せと言ってるアルヨ」

「ムムツ！ 橘みずきについては？」

「不思議なコトに、それにはあまり触れてこないネ」

「なるほどな。金君、これはおかしい事だと思わないかね？」

「そうアルカ？」

「四路君はどう思う？」

「人質の安否よりも雷神バットの返還を優先するのは気に入らないですな…」

「そうだな。ならば、ここは一興設けようではないか。雷神バットを賭けてフロッグスとの試合を行う。それで勝てなければ、奴らも納得して帰るだろう。久しぶりの試合だ。腕が鳴るな金君。波水出君にもそのように伝えてきてくれたまえ。ガツハハハ！」

ルコフスクは豪快に笑いながら金を見送ると、智美の方へ向き直った。そして、声のトーンを低く抑えて彼女に告げた。

「四路君。時間がある時でいいんだが、雷神バットの正規ルート…つまり盗まれなかった場合に、本当は誰の手に渡るはずのものだったのか調べておいてくれないか。くれぐれも、慎重にな」

「承知しました、大佐」

「ところで四路君。これからシャワーを浴びようと思うのだが、一緒に来るかね？」

「丁重にお断りします」



東地区と南地区の境界にある2つのゲートのうち、沿岸部側にあるヴォクスルトゲートは中世ヨーロッパ建築を彷彿とさせる尖塔がシンボルだ。塔を囲むように平屋の官舎が並んでいて、その一端が道を塞ぐように建ち、敷地全体が巨大な門のような構造になっている。

道路に面している赤いレンガ造りの巨大な門は2階ほどの高さがある。その一角にある窓が開いて一人の人物が顔を出した。

「あらやだ〜！ 色男がいつぱ〜い♪」

甲高い声だが、それは紛れもなく男の声だ。どうやら窓辺の人物は女装している男らしい。少々濃いめだがメイクもばっちりだ。茅野が一步前に歩み出ると、イラツとする表情を微塵も隠すことなく女装の門番に告げた。

「ここに、橘みずきがいるな」

「やだ〜！ 怒ってる〜！ でもそれも魅力的よ♪ 橘みずきって誰かしら？ アタシ女には興味ないの」

茅野の眉間のしわが深くなり、こめかみに青筋が浮かぶ。

「雷神バットはどこだと聞いてるんだ」

「そんなに怒らないで。雷神バットなら、アタシ達が預かってるわよ。だけど、持ち主がわからなくて困ってるのよね〜」

窓辺の女装男は、特別中性的な魅力を備えている訳ではない。メイクで上手く誤魔化しているが、元々は年相応のオジサン顔である事が窺える。唇に人差し指を当てて、上目遣いで考え事をする仕草に、茅野の苛立ちゲージが上昇していく。

「それは俺たちのものだ。返してもらいたい」

「それは出来ないわね。アナタ達のものだって言うなら、許可証を見せてみなさいよ。カルテットスター以上のレアアイテムの所有には運営委員会への登録と許可が必要な。アナタ達も知ってるでしょう？」

「ああ、確かにそうだ。だが、そいつは運営にすら登録されていない超がつくレアアイテムだ。まだ許可証なんて誰にも発行されていない」「そんなの信じられる訳ないでしょう？」

浮気した男の釈明に取り合わない女のようなテンションの男に、再び茅野の苛々が募る。

しばらく窓辺の女装男と茅野の間の均衡は破れなかった。しびれを切らせた菅野がトラックの運転席から叫んだ。

「茅野さ〜ん。トラックで突っ込んでしまししょうか？」

「それも悪くないかもな」

「ちよつと、乱暴は嫌よ〜」

「話し合いで解決しないんだ。仕方ないだろう」

取り乱すそぶりを見せる女装男の背後に、グレーのチャイナ服姿の背の高い男が現れて、女装男に何やら耳打ちをはじめた。

「やだ♪ それ、いいわね」

女装男は頬の横でポンと両手を合わせ、嬉々としてチャイナ服姿の

男を見送った。

「ちよつと、アナタ達聞きなさい。今夜、一戦交えましょう♪ お互いの言葉で解決できない時は、お互いのカラダで理解するの。勝った方が雷神バットをもらうの。恨みっこなし。どうかしら?」

「ひとつ確認するが、勝負は野球でするんだよな?」

「あらやだ♪ ナニを想像してるの?」

「お〜い、菅野。肩は大丈夫なのか?」

「ええ。京子さんのおかげでダブルヘッダーでも完投出来ますよ」

「おい、ガツテム。ヴォクスルトフットレイクスは大会にこそエントリーしてないが精鋭揃いだ。簡単に勝てる相手じゃないが、勝機はあるだろう。やるか?」

「オフコースデス! ベースボールノウラミハ ベースボールデリベンジシマス!」

茅野は再び門番の女装男の方に向き直った。

「約束は守ってくれるんだろうな?」

「女に二言はなくてよ。場所はレイクサイドスタジアム。時間は18時からでいいかしら」

「わかった」

女装男は愛想をいっばいに振り撒いて手を振り、やがては窓際から投げキッスを投下すると、あどけなさが逆に毒々しい笑顔のまま窓を閉めた。夕暮れ時とはいえ、ゾクツと背後に感じる悪寒を残された一同は禁じえなかった。

Cocktail Ray

宵の闇に眩しく灯された照明によって、球場内は昼間とほとんど変わらない明るさになる。これから始まる夜の宴を彩るその光には、そのカクテル光線という名は相応しいといえよう。

東地区の玄関口、ヴォクスルトにあるレイクサイドスタジアムは両翼102m、センター120mと東地区では最大級の規模を誇る球場である。その名の通り、湖畔に位置するこの球場は、時折湖から吹き付ける強風が球場内を渦巻いて選手たちを惑わすことでも知られている。

ここに本拠地を構えるフットレイクスは、中ノ鳥島野球リーグには加盟していない非公式チームである。しかし、シーズンオフの交流試合の参考記録とはいえ、最近10試合のチーム防御率は1.55、チーム打率は.298という実力を備えたチームだ。中でも防御率0.85を誇るエースのルコフスクロシユツスキーと打率.405を誇る金玉句という投打の両雄の存在が光っている。

1回表の攻防。先攻はパラキフロッグス。先頭打者の矢部が右の打席に入る。ナイター照明が分厚いメガネのレンズに反射してキラリと光る。ほぼ垂直にバットを立て打席に立つ居住まいには、さすがに甲子園経験者といった落ち着きが垣間見えて凛々しい。

「プレイボール！」

主審は茅野が務める。警備部に所属する茅野は、当然といえば当然だが、公式審判員のライセンスを保有している。主任クラスになれば、更に上位資格であるS級ライセンスとなり、S級ライセンス保有者が主審を務めた試合は、申請するだけで準公式戦として認められることになっている。

「さて、これがどういう意味かわかるかね？ メガネ君」

マウンド上に陣取る上半身裸の男が大きく振りかぶる。先発はルコフスクロシユツスキーだ。両腕を高く上げただけで、強靱な肉体がムキムキと盛り上がって彼の逆三角形型のシルエツトが強調された。左足を高く上げ、右足一本で体重を支えると、タイトのように張

り付いていたユニフォームを破かんばかりに太腿やふくらはぎの筋肉が一気に膨張する。次の瞬間、弾丸のようなストレートが矢部の胸元目掛けて放たれた。

ズバン！

「ストライク！」

キャッチャーのミットから煙のようなものが立ち昇っているのは、きつと目の錯覚ではないはずだ。一筋の、白い煙のようなものが閉じたミットの隙間から確かに溢れていることを矢部は認めた。

「バット振らなきや当たらないわよん♪」

キャッチャーはゲートにいたあのオカマちゃんだ。名前は波水出輝人。相変わらずのオネエ口調である。

「あと、そのメガネは変えた方がいいわね。折角の色男が台無しじゃない」

「う、うるさいでやんす……」

それほど間隔を置かずに、ピッチャーのルコフスクは2球目のモーションに入った。上半身裸のエースは何かを語りかけている。

「東地区はモンキースが解散して優勝チームが存在しないんだ。この場合は、東地区で『公式戦およびそれに準ずる試合』での勝率が一番高いチームが本戦への出場権を得る事が出来る事になっている」

再び弾丸のようなストレートが矢部に襲いかかる。今度はアウトコース。

ズバン！

「ストライク！」

立ち姿こそ様になれど、矢部にも3年のブランクがあつた。それほど厳しいコースではなかったが、内外角に投げ分けられた直球に身体が反応できない。簡単に追い込まれた。しかし、簡単に終わってはいけない自覚が矢部にはあつた。

「そのメガネ、どこで売ってるの？ まさか特注？」

「静かにするでやんす！ 気が散るでやんす」

「釣れないわねえ、女の子にモテないわよ」

ルコフスクが3球目のモーションを起こす。彼は、またぶつぶつと

独り口上を述べているが、グラウンドレベルでは誰も聞いてはいないだろう。好意的に解釈すれば、自分を鼓舞するために、自分に言い聞かせているといえるだろうか。

「つまりだ。この試合に勝てば勝率10割がの我々が東地区代表ということになるのだよ！ ガハハハハ！」

どや顔のエースの投球は、またも渾身のストレート。再びアウトコース。しかし、これはボール1つ分ベースの外。矢部は何とか見送るが――

ズバン！

「ストライーク！ バッターアウト！」

「……やんす!?!」

「よっしやくっ！ ガハハハハ！」

ルコフスクがマウンド上で上機嫌に吠え、高らかに笑い声をあげた。キャッチャーの波水出も少しばかり驚いた様子だが、審判は機械ではなく人間だ。このくらいの「癖」は許容されるだろう。自軍有利に働いたジャッジに波水出が抗議する理由はない。しかし、打席に立つ矢部は納得がいかない様子だ。眉を吊り上げて茅野を睨んだが、茅野は取り合わない。1アウト。

矢部は顔を真っ赤に染めてベンチへと戻ってきた。

「ムツキーツー！ あり得ないでやんす！ 鼻屑でやんす！」

「どうしたんだい、矢部君?」

ネクストバッターズサークルへ向かう足を止めて、大坂が矢部を呼び止めた。このままベンチへ戻っては顰蹙（ひんしゆく）だ。結果が出ない苛立ちを、会って間もないチームメイトにぶつけてはいけない。

「オイラ、やっぱりあの人嫌いでやんす！ ボール2つは外れていたでやんす！」

「そんなに!?!」

「ボール2つは言い過ぎたでやんす。でも、1つは外れていたでやんす。これは信じて欲しいでやんす」

「一度嘘をついた人間に、信じてくれと言われてもなあ……」

大坂は、腰に手を当ててため息交じりに答えた。

「この通りでやんす」

矢部が額の前で手を合わせて頭を下げている。

「ボール1つくらいならジャツジする審判もいるんじゃないかな？」

「そうかも知れないでやんすけど……」

「先発の菅野さんはあまりコントロールが良くないんだ。だから、ストライクゾーンが広いのは俺たちにとっていずれ有利に働くはずさ。茅野さんも、それがわかっててジャツジしてるんだと思う」

「それでやんすかねえ？」

「きつとそうだよ——」

メコッ！

鈍い音がして、ボテボテの打球が転がった。2番打者の永瀬が一塁へ向かって走り始めるが、ボールは既にルコフスクのグラブの中だ。ボールが弧を描いてファーストのミットに収まる。2アウト。

永瀬はしよんぼりと肩を落として、大坂のところまで歩いてくる。「とんでもない重い球だ。真芯で捉えたと思ったのに、まだ腕が痺れてる」

永瀬は苦笑いを浮かべて腕をさすっている。色白で痩身の彼の台詞は、いまひとつ大坂の心に響いてはいないようだ。同情しただけの大坂に対して、永瀬は説明を加えた。

「ルコフスクの能力はグラヴィティボール。列記とした重力タイプの魔道術なんだ。一般に球質が重いか軽いか言うことがあるけど、そういうレベルじゃないよ。通常時でも2倍程度の重さがある上に、勝負どころでは3倍〜5倍、最大10倍の重さになるって話もある。そうなたら感覚的には鉛球を打つような感覚だろうね。気をつけてね」

「ああ、わかった」

そう返事をした大坂には、ひとつの勝算があった。自分にも発現しかけている魔道術“カウンターマジック”である。これは、相手の魔道術を打ち消す能力だ。

しかし、大坂はまだ自分の能力を充分に理解していなかった。カウ

ンターマジックは条件が整った時に、あるいは相手の放つ魔道術に對抗して発動する魔道術の総称であって、そもそもカウンスターマジックという能力が存在するわけではない。相手の魔道術を打ち消すという認識は間違いではなかったが、その発動条件に彼はまだ気が付いていなかった。

「あーら、色男じゃない。アンタが一番アタシの好みよ♪」
「そりやどうも」

大坂が左の打席に入る。右手に握るバットをぐるりと回しながら、打席の足場を固めていく。マウンド上の上半身裸の大男が、ゆっくりとモーションを起こした。野球をするにはおよそ必要ないであろう筋肉群が盛り上がって、その野太い右腕から投球が放たれる。

バシンッ！

ストライク。重い球質に余程の自信があるのだろう。真ん中高め、誘うような投球だったが、大坂は自重した。見たところ何の変哲もないストレートだ。球速表示は144 km/hだが、菅野の剛速球を見続けていれば、恐るるに足らない球速だ。

「随分、余裕をもって見送るのね」

「そっちのピッチャーの噂も、聞いてますんでね」

「いいわね。余裕のある男ってステキ♪」

「……それ、どういう意味ですか？」

「一般論よ♪」

バシンッ！

ストライク。2球目もほとんど真ん中だ。この場合、キャッチャーに話しかけて打ち気を削がれたというのは言い訳だろうか。大坂は、もう一度打席に集中しなおす。

「ねえ、もし本気だって言ったら、どうするつもりなの？」

「……。」

「あらあ？ 澄ました瞳もステキなのね♪」

ルコフスクが、じっくりとタメを作って振りかぶる。その全身のバネを余すことなく活かしているとはとても言い難いが、躍動感のある豪快なフォームから投球が放たれる。

やや内寄りの絶好球。引っ張れば、外野の頭上は超えそうだ。小さなステップでタイミングを計り、腰の回転を効かせて鋭くバットを叩きだす。

「……………っ!!」

ミシッ!

感じたことのない手応えに大坂は襲われた。決して芯を外したわけではないのだが、尋常でない球威にバットが押し戻されていく。もし、140km/hを超える速度で飛来する鉛球を金属バットで打ち返すならば、きつとこんな感じなのだろう。しかし、そんな酔狂な真似をする人間は聞いたことがない。何故ならば、それは危険な行為であり、そのような表現を用いる場合は比喩表現であるのが常だ。インパクトの瞬間の衝撃が、バットの芯からグリップまで伝わり、現実のものとして大坂の手首に襲いかかる。もしこの時、大坂がそのスウィングの勢いのままにバットを振り切っていれば、彼の手首や指、そして腕は崩壊していただろう。

銀色にメッキされた金属バットがくるくると回転しながら後方のファールグラウンドへと飛び、バックネットへと突き刺さった。突き刺さったバットはくの字に折れ曲がって、その衝撃の強さを物語る。同時に舞い上がっていた白球は、やや遅れてキャッチャー波水出のミットに収まった。

大坂はバックネットの一端を掴んで、それを揺らしながら網目に刺さるバットを地面に落とした。カランカランと音を立てて、くの字型のバットは真つ二つに折れた。

「すごいボールだね」

「いやいや、木製ならともかく、金属バットを折ったなんて話は聞いたことないよ」

大坂はベンチに戻るとすかさず永瀬に話しかけた。しかし、永瀬も驚いているようだ。二塁手用のポケットの浅い青いグラブの感触を確かめているようだが、彼の所作はどこか上の空だ。

「ヤソジさん。すみません。バット折ってしまっ」

「気にするな。大坂君の責任ではあるまい。それに、形あるものはい

ずれ壊れるものじゃ。さあ、守った守った」

「はい！」

ナインが守備に散ると、ベンチには監督のヤソジとチームドクターの京子だけが残された。試合に出ないメンバーはパラキ村に残っている。彼らはそれぞれに仕事や家庭の都合があつたし、何よりも午前中の試合の疲れがまだ残っていた。炎天下の試合を戦い抜いたオジサンたちにとって（チーム存続が決定し、その打ち上げでかなりの酒が入っていたオジサンたちにとって）、ダブルヘッダーは命取りになりかねない。

「噂には聞いてましたけど、ルコフスクのグラヴィティボールは侮れませんね」

「うむ。しかし、金属バットを折るとするのは、ちと考えにくいのう……」

「北地区では金属バットだってしばしば折れる事はあつたわ」

「いや、わしが気になるのは、初回からバットを折るほどの魔道術を使う必要があるのかどうかという事じゃ。白魔術を扱う京子さんならご存知じやろうが、魔力は底なしではない」

「私達の戦意を削ぐための、挨拶代わりって所じゃないかしら？」

「ふむ。わしの考えすぎじやろうか……」



1回ウラの攻防はフットレイクスの攻撃。フロッグス先発の菅野は、先頭の綾瀬、続く三浦を2者連続の三振に切って取る上々の滑り出しだ。早速152km/hを記録して、菅野のピッチングも昼間の疲れを感じさせない。投球を受けるキャッチャーの夏苗も足の傷は癒えているらしく、機敏な動作で内外野に指示を飛ばしていた。

そして、打席には3番打者波水出を迎える。

夏苗のミラージュゾーンは、実はナイトゲームではあまり効果を発揮しない。元々の気温が低い夜間は本投間での冷気の層を作りにくく、そして、特にこのレイクサイドスタジアムに時折舞う風が、空気

の層を攪拌し、彼女の能力は非常に微々たる物になってしまふのだ。しかし、そんなデメリットも相手が知らなければ恐れたり、隠したりする必要はなく、それは一つの武器となる。菅野の投球は、打者の手で僅かに変化するムービングボールのような錯覚を打者に与え、その事実さえ見破られなければ、フットレイクス打線を抑える事は難しくないだろう。

ポコッ!

鈍い音と共に、一塁線に緩いゴロが転がっていく。ガツテムが前に出て捌き、ベースカバーに入った菅野に転送した。これで3アウト。初回の攻防を終えて、両軍無得点。

白木のバットを肩に担いで、広めのスタンスをとり深く腰を落とす。独特の構えは、ガツテムが昨年来日した当時とは異なるものだ。オープン戦から開幕にかけての彼は、力任せにバットを振りまわす三振かホームランかという典型的な一昔前の助っ人外国人の姿だったのだが、今、白銀の照明に照らし出される4番打者からは昨年春の荒削りな面影は微塵も感じられない。

オープン戦出場全16試合で本塁打11本、打率も3割8分を超え、大活躍に、当時の彼はファンはもちろん首脳陣からも期待されていたが、いざ開幕してからの彼の成績はといえば、代打出場も含めて11試合出場34打席連続無安打のまま二軍落ちという散々たる内容であった。

開幕前に敵球団に研究されたのは言うまでもないが、晴れの開幕戦で変化球に滅法弱いという現代野球においては致命的な彼の弱点が白日の下に晒されてしまったのだ。

そんな彼が、屈辱の二軍落ちと、そこから這い上がるまでのプロセスで培った苦悩と葛藤は、5月以降の大ブレイク、そして三冠王の栄光へと至る礎となっている。あの時の苦い経験は、彼の野球人生において貴重な財産となり、野球に対してストイックな彼のプレイスタイルに大きな影響を与えている。

白木のバットを肩に担いで、広めのスタンスをとり、深く腰を落とす。独特だが、決して奇を銜うような構えではない。自分自身のバッティングをとことん突き詰めて、ガツテムはこのフォームに至った。しかし、この洗練されたフォームですら完成には程遠いものだとは感じていた。上には常に上が存在することを、彼はその身を持って知っていたからだ。三冠王という栄誉を獲得した時も、そして今でも、その意識が揺らぐことはなかった。オーラとか威圧感とか、そんな言葉では語りつくせないような凄みが彼の全身からほとばしるのは、その所為なのかも知れない。

「いいカラダしてるわね♪ 惚れ惚れしちゃう」

「ユーノチームノピッチャーモ スゴイボディデース」

「そうねえ。でも、アタシから言わせれば大佐のアレはやりすぎなの。アナタぐらいが丁度いいわ♪」

2回表、先頭打者のガツテムに対して、ルコフスクが初球を投じた。甘いコースの直球に、自然と体が反応する。グラヴィティーボールとのファーストコンタクト。余計なことは何も考えずに、一気にバットを振り抜く！

メキヤツ！

白木のバットはグリップ部分を残してヘッドもろとも粉々に砕け散った。大小の木片が本塁から後方のファールグラウンドに飛散する。

バシン！

バットを粉碎してなお、ボールが波水出のミットまで届き、そして憎らしくも心地よい捕球音を奏でた。

「大佐〜 ナイスボールよ〜♪」

「ガハハハハ！ そう褒めるな。照れるではないか」

ガツテムは残ったグリップの尖った裂け目を、真剣な表情で眺めている。

「大佐のタマ、凄いでしょ♪」

「コレデハ バットガイクツアツテモタリマセーン」

木製のバットが木端微塵に砕け散ったにもかかわらず、ガツテムはネクストバッターズサークルに座る佐賀に木製のバットを要求した。佐賀は彼の要求を訝りながらも黙って白木のバットを手渡した。木製バットに拘るのは、元プロとしての彼のプライドだろうか、それとも他に何か考えがあるのだろうか。

菅野の投球をいとも簡単に場外へと運んだガツテムの長打力を佐賀は認めていたが、打撃に関して総合力で劣っていると佐賀は考えていなかった。しかし、ヤソジは迷うことなくガツテムを4番に指名した。そして、その理由が今、彼の目の前でに明らかになる。

ルコフスクが2球目を投じた――

メキヤツ！

再びバットが折れる鈍い音が響いた。しかし、今度はバットはその形状を暫くの間保持し続けた。ガツテムがフォロースルーを終えるのと、ようやく白木のバットはその先端部分から、スイートスポットを軸にして綺麗にくの字型に折れていく。そして、打球はライト線へと高く舞い上がっていた。

星が瞬き始めた夕闇を滑るように白球が飛んでいく。右翼手が懸命に打球を追いかけるが、彼は途中で打球を追いかける事をやめた。ライトのポール際、誰もいない外野席の最前列に、白球は飛び込んだ。「ガツテム!!」

マウンド上、ルコフスクの雄叫びが場内に響いた。



試合前のミーティングでは昨年のパリーグ三冠王と聞かされていた。本土での公式戦の情報がすばやく手に入るのも、マネージャー兼スコアラーの四路智美の情報収集能力のおかげだ。

「——このメガネ君が矢部明雄。途中出場でしたが好守が光りました。足が速いので、よっぽど打撃に難がなければ1番か2番での起用とみていいでしょう。そして、この帽子君が大坂小波。テキサス気味とはいえ、菅野からヒットも打っていますので打撃面も油断できません。ですが、警戒すべきは投手としての大坂小波です。終盤は変化球も混ぜていたみたいですが、ピッチングの組立ての大部分を130km/hそこそこの直球だけでモンキース打線を3安打に抑えています。とても不気味な選手です。先発は彼か菅野が予想されますが、どちらも午前中の試合の疲れが残っているでしょうから、継投策で来る可能性もあります。そして、一番気をつけて欲しいのがこの男です…」

ミーティングルームのスライド写真が切り替わる。「ガツテムこと、チャド・ポートランドです。登録と名前が違うので、うっかりすると見落としてしまいますが、昨年のパリーグ三冠王です。金さん、あなたのお兄さんとも首位打者争いをしていました。結局、最後はわずか6毛差でタイトルはポートランドが獲得しました

が、あなたのお兄さんとの競り合う中で力をつけてきた打者と言ってもよいでしょう」

「兄上よりも凄いアルカ？」

「記録上はそういう事になるわ。本塁打と打点ではあなたのお兄さんである金玉臭の成績を大きく引き離してる」

「でも兄上は30盗塁してるネ」

「そうね。ポートランドはもともと足の速い選手ではありません。盗塁も8月にダブルスチールで記録した1つだけです。台湾リーグからの移籍1年目でトリプルスリーを達成した金玉臭とはタイプの異なるスラッガーと言えるでしょう」

四路は手元の資料から目を離すと、一同へと向き直る。

「以上がフロググスの戦力分析です。もはや東地区の弱小球団ではありません」

「うむ。四路君ご苦労であった。少しは、骨のある奴がいるようだな。これは楽しみだ。ガハハ！」

ミーティングルームにルコフスクの豪快な笑い声が響いた。



ブン！ ブン！

打席の手前で2度素振りをして、佐賀は自分のフォームを確かめた。世の中には稀に天才と呼ばれる者がいる。時として、その存在に目が眩んで、自分を見失ってしまいそうになる事がある。挫折感を味わったりする事もある。

外野に飛ばすことすら難しいと言われているグラヴィティーボールを、ガツテムはスタンドに放り込んだ。彼はあえて木製のバットを選んだのだ。木製バットの“しなり”を利用しなければ、あんな芸当は不可能だ。球威に負けない圧倒的な腕力はもちろん必要だが、ボールを真芯に“乗せる”繊細なバットコントロールと、グラヴィティーボールの特性を瞬時に見極める洞察力がなければ、打球はスタンドまで届かなかっただろう。こういう物をまとめて天賦の才と人は言っ

たりする。

「佐賀ちゃん、久しぶりね。元気にしてた？」

「ええ、まあ…」

「相変わらずのシャイボーイさんね」

黒塗りの金属バットをゆらゆらと揺らしながら足場を固めると、佐賀はいつもよりも前目のポイントを意識して構える。一般的に金属バットは木製バットよりもスイートスポットと呼ばれる芯が大きく、ボールの反発力も増すため飛距離が出ると言われている。それでも佐賀は、力負けしないように打点をなるべく前に意識して打席に入った。

「あら、いい考えだわねえ♪」

佐賀の些細な変化を波水出は見逃さなかった。

「あなた、無表情だけど考え事をしている時は顔に出てるから気をつけた方がいいわよ。女の勘は鋭いんだから。差し詰めあなたの狙いはこうかしら？」

波水出が内寄りにミットを構える。打てるものなら打ってみなさいと言わんばかりの挑戦的な物言いだ。しかし、佐賀も冷静さを失ってはいなかった。波水出もここで裏をかくような性格ではない。力と力の勝負のお膳立てが整った。

ルコフスクが足を高く上げ、その足を叩きつけるように地面に振り降ろすと、彼の右腕から快速球が飛び出してくる。波水出の予告通りインハイへのグラヴィティーボールだ。佐賀はレフトスタンド上段への特大ファールのタイミングで強振する。インパクトの衝撃でバットが押し戻されるが、それも織り込み済みだ。バットを支える両手が悲鳴を上げているが、強引に手首を返してバットを振り切る。鼓膜を突き破るような音圧で金属音が響くと、白球はレフトライン際に高々と舞い上がった。

愛用していた黒塗りの金属バットは歪に変形し、真芯で捉えたにもかかわらず佐賀の両腕は痺れ、肘から先の感覚はなくなっていた。



時を少し遡って、舞台はイーストタウンの市街地の一角にあるイーストタウン中央放送の社屋内にある喫煙室にて。定時を過ぎているので、携帯PDAを片手に私用電話をする人間を咎める者はいない。「何っ!? ウチだってねえ、慈善事業やってるわけじゃないの! わかるでしょ? この後の放送予定だってあるし、スポンサーさんの絡みだってあるし、私の一存でどうにかなるもんじゃないの! ああ? 上の人間を出せだあ? 上に代わっても駄目なものは駄目なの! ガキじゃねえんだからな!」

夕暮れの喫煙室でディレクター小金井武蔵は自らのPDAに向かって怒鳴りつけていた。通話が済むのを見計らって、奥のデスクで書類を整理していたプロデューサーの松本梓が怪訝な表情で喫煙室を覗きに来た。

「どうしたの、小金井君。大声なんか出して?」

「あ、松本さん。聞かれちゃいました? 実は、オヤジの友達で酒が入るといつもこうなんです。なんでも、フロックスとフットレイクスが今夜試合をやるとかで、それを中継しろって聞かなくて……」

「いいじゃない、行ってきなさいよ」

松本はブラウスのボタンをひとつ緩めて、携えたポーチからクールライトを取り出すと、おもむろに火をつけた。あっさりとGOサインを出す松本に小金井も少々の抵抗を試みる。

「そんな簡単に言わないでくださいよ。だいたい誰が実況するんですか?」

「荻窪君が夜の報道の打ち合わせで残っているから、連れて行きなさい。あとは、18時からのトークバラエティにゲストで出る予定の奈加乃ちゃんあたりに解説をやってもらえばいいじゃない」

「奈加乃って、アイドルの高円寺奈加乃ですか?」

「そうよ。盛り上がると思うけどなあ」

「盛り上がるって言われても……」

「どっちにしても、その梓は数字が伸び悩んでるから、いいテコ入れになるでしょう。それに、フットレイクスの試合だなんて、そうそう滅

多にお目に掛かれなからね。本社と運営、あとスポンサー様には私から言っておくから、あとは小金井君に任せたわよ」

「どうなっても知りませんからね」

「何とかなるわよ」

松本は火をつけたばかりのタバコを一度深く吸いこむと、ゆつくりと吐き出しながら灰皿に投げ込み、いそいそと喫煙所を後にした。



レフト線に舞い上がった白い放物線は長い長い滞空時間をかけて飛距離を伸ばしていく。レフトポール際のフェンスいっぱい位置まで左翼手の平塚が追い付いて打球の行方を見極めている。しかし、フェンスに貼り付いていた平塚の掌がそつとフェンスから放れると、彼は小さく一歩前に出て頭上にグローブを差し出した。あとひと伸び及ばず。佐賀はがっくりと肩を落としてベンチへと下がった。1アウト。

紫色にうつ血する両手を見ながら、佐賀はベンチへと戻ってきた。黒塗りのバットは無残にも原形を留めていない。ベストを尽くしたが、力が及ばなかった。意識したわけではないが、佐賀の視線は先制点のアーテイストへと向かう。

「オシカッターデスネ」

彼はその体格には不釣り合いな屈託のない笑顔で佐賀を迎え入れた。

「アウトはアウトですから…」

力の差を見せつけられて、同情されるのは辛かった。そして卑屈になつてしまう自分が嫌だった。ぼんやりとそんな事を考えていると、突然後ろから腕を引っ張られた。

「どうしたの！ その腕」

ベンチで唯一ユニフォームを着ていない加藤の身長は佐賀よりも頭一つ分低い。ナース姿の年上女性に腕を掴まれて、佐賀は驚きたじろいた。にわかに頬が赤く染まる。下方向に腕を引っ張られて身体

がよろめく。こんな情けない姿は盟友である菅野には見られたくなかったが、運よく彼はバッターボックスの中だ。

「随分と無茶な打ち方をしたのね。まあいいわ、こっちは来なさい」

佐賀の太く厳つい腕を、加藤の白く細い手が掴むと医務室へと引張った。

6番菅野はショートへのハーフライナー、7番井伏はサードゴロに倒れて2回表のフロッグスの攻撃は終了した。

2回表の攻撃は、4番ガッツテムの本塁打でフロッグスが1点を先制した。重力系の魔道術グラヴィティボールを操るフットレイクスのエース、ルコフスクを相手に貴重な先取点となったが、試合はまだ始まったばかりである。2回ウラ、フットレイクスの4番打者、金玉匂が右の打席に入る。

体の前方にバットを傾けて立てる彼の構えは、神主が幣を用いてお祓いをする様子に似ていることから神主打法と呼ばれている。かつての三冠王、落合博満がこれを得意としていたことはあまりにも有名で、長打を狙うにはメリツトの大きい打法と言われている。

リーチの長い金がこの構えで打席に立てば、長く伸びる両腕がベースに覆い被さって、ピッチャーは相当投げづらいはずだ。この構えで、金がインコースをどのように捌くのか興味深いところではあるが、打率4割をマークしている強打者に迂闊な配球は考えものだ。夏苗は慎重にシグナルを送る。外角の低め、金のバットがギリギリ届かないところで、まずは反応を窺う。

バシン！

「ボール」

菅野の投球は外に大きく外れてボール。カんだのだろうか、無理もないだろう。見慣れない打撃フォームはもちろんだが、細く鋭い目に、長く大きな鼻、太い眉毛、顔のそれぞれのパーツが奇妙な存在感を放つ金の人相は、18m離れていて菅野にも得体の知れない抑圧を与えていた。

しかし、投げた瞬間にそれとわかるボール球では金の出方はわからない。夏苗は、もう一度同じところにミットを構える。ボールが先行しているが、まだストライクは要らないはずだ。

菅野の次の投球は外角低め。夏苗の要求よりも若干甘く入るが、悪くないコースだ。

キイーン！

「ファールボール」

鋭いライナーが三塁線に切れていく。グラウンドの一番近いポジションで金のスウィングを目の当たりにして、夏苗は言葉を失った。大きなテイクバックからの力強い一閃。そこには一寸の付け入る隙も感じられなかった。あのコースならばナチュラルに変化したように見えていたはずだ。その視差を意図も簡単に修正して、なおもあの打球速度だ。今までの野球が霞むほどに、目の前の打者とのレベルの違いを見せつけられて、夏苗の中に危機感と恐怖が芽生えた。少しでも甘く入れば、持っていかれる！

この島には、これ程の打者がどれほど居るのだろうか。このフィールドにおける、キャッチャーというポジションの意味を改めて彼女は考えさせられていた。ひとつ配球を誤れば、勝負の行方を左右することだってあるだろう。頭では理解していたが、心がまだわかっていなかった。襲いかかる責任とプレッシャーに、固まっていたはずの彼女の自信と決意がぐらりと揺らぎはじめる。

サインを待つ菅野に、夏苗は再びシグナルを送った。揺らぐ心を悟られないように、出来るだけいつも通りシグナルを送った。しかし、いつも通りのシグナルは、結果として読まれやすく単調な配球になってしまう。その事に気がついた時には後の祭りだ。

カキーン！

三遊間を痛烈なラインドライブが抜けていく！ レフトの鹿島が丁寧に打球を抑えて、金は一塁に到達する。

「す…すみません、菅野さん」

「打たれたのは俺だ。どうしてお前が謝る」

「いや、その……」

配球がどうだと偉そうに口にする程の試合経験がない自覚が夏苗にはあった。だから、あとの言葉が続かなかった。

「何だよ。言いたい事があるなら言えよ」

菅野に他意はなかったが、180cmを超える長身の刺青男に見下ろされて、夏苗はうまく言葉を紡げない。

「ハッキリしない奴だなあ……」

こんな時は、何とさえいいのだろうか。上手く言葉を紡げない自

分が情けなく思えた。何か言わなければならぬ事があるはずだ。しかし、それが何なのか、咄嗟に出てこない。もどかしい思いを胸に押し留めたまま夏苗は定位置に戻り、マスクをかぶり直す。ノーアウト走者一塁で、打席には5番ルコフスクを迎えた。



目の前にいる中国系の男がじりじりとリードを広げている。ナチュラルに変化するミラージュゾーンを初見で捌く感性は見事としか言いようがない。類稀なバッティングセンス、オリジナリティ溢れるバッティングフォームはもちろんだが、塁上でのステップの取り方まで瓜二つだ。行方のわからない双子の弟がいると、かつてライバルに言われた事があったが、まさかこんな所で会う事になるうとはガツテム自身思いもよらない事だった。

「ヘイ ユー！」

「何アルカ？」

「ユーノ ブラザーハ バファローズノ金玉臭ナノカイ？」

「そうヨ。貴方はライオンズにいたネ」

「ヨクシツテマスネ、コノ島ノヒト アマリ私ノコトシリマセ、ン」

「この島の人は、自分たちの野球にしか興味ないからナ」

ザザザーツ！ パシン！

「セーフ！」

思わぬ邂逅を喜ぶのもいいが、兄と同じならば、この走者には足があることを忘れてはならない。絶妙なタイミングで菅野は牽制球を交えてきた。ユニフォームの土を払いながら、むくつと金が起き上がる。

「兄上は元気にしていたカ？」

「スゴイ元気ヨ、シーズンチュウニ女性関係ノスキャンダルガ写真週刊誌デパパラッチサレテ謹慎クラツタ時期モアリマシタヨ」

「それは兄上らしいナ……」

そう言い残すと、金は一気に二塁方向へ駆けだした！

「ハシツタヨォ〜！」

英語圏訛りのイントネーションで、ガツテムの声がグラウンドにこだました。その直後、乾いた金属音が響いて、打球は右中間を真つ二つに破っていった。



クッションボールをセンター矢部が捌いてセカンドの永瀬に返球したが、金は既に本塁を駆け抜けていた。ルコフスクは楽々と二塁まで到達。スコアは1―1。

このタイムリーを切っ掛けに菅野の制球が突如として乱れる。続く6番厚木、7番平塚への連続四球の後、8番秦野のレフトへの犠牲フライで1点献上。9番川崎から三振を奪い調子を取り戻したかに見えたが、1番綾瀬に甘く入った球を痛打され、走者一掃のタイムリースリーベースを浴び、さらに2点献上。この回4点を失ったところで、内野陣がマウンドに集まった。

「すまない」

菅野が一言詫びると、内野陣からは励ましの声を送られた。ファーストガツテム、セカンド永瀬、ショート大坂、サード井伏。一言ずつ月並みだが力強い言葉が送られた。菅野を立ち直らせる気の効いたセリフなんて誰も持ち合わせていなかったが、バックで守る仲間がいる事が伝わればここは十分な場面だ。

しかし、一人の少女は唇を噛みしめ、涙がこぼれないように前を見つめるのが精いっぱいだった。それでも、彼女は自分の思いをここで告げる事を選んだ。もう、自分一人で抱えたままプレイは出来なかった。

「私じゃ、投げづらいですか?」

「はあ?」

菅野の口から、間の抜けた声が漏れた。内野陣の誰ひとりとして、彼女の言葉は予期していなかった。

「私じゃ、投げづらいですか!？」

「そんな事ねえよ。全部俺のコントロールミスだ。夏苗ちゃんはよくやってくれてるよ」

「でも、小山さんに比べたら的だって小さいし、肩だって弱いし、リードだって素人みたいなものだし……」

あつさりと逆転を許して精神的に参っていたのは菅野も一緒である。試合中に弱気な言葉を並べたてる夏苗に対して、菅野は口をポカッと開けたまま声にならない声を発するだけで戸惑いを隠せない。

「夏苗……」

次のセリフを担ったのは、かつてチームを甲子園まで導いたキャプテンだ。チームの状態を見極めて声をかけ、士気を高めるのはまとめ役に求められる資質の一つである。マウンドの沈黙を大坂が破った。

「夏苗、野球は一人でやるもんじゃない。9人でやるんだ。お互いがお互いの弱点を補って、お互いの長所を活かす。それがチームだ。だから、能力が劣ることに引け目を感じる必要なんてない。菅野さんだって夏苗のリードが気に入らなければ首を振るし、オレも今朝の試合で夏苗が投げづらいなんて一度も思わなかった。だから、もつと自信を持ってやって欲しい」

「でも、夜の試合では『ミラージゾーン』もたいして役に立たないわ」

感極まった夏苗の瞳から一筋の涙がこぼれ、頬を伝っていく。にわかに震える夏苗の声を聞いて、大坂も放っておくわけにはいかない。

「夏苗のキャッチャーとしての価値はそれだけかい？ もしそうだったら、ヤソジさんは他の誰かにキャッチャーを任せたはずさ。オレだっていい。オレは、夏苗より肩が強い自信はあるし、セオリー通りのリードくらいはできる。それでもキャッチャーは夏苗なんだ。だから、オレ達はそれを信じて戦うしかないんだよ」

大坂は夏苗のヘルメットにグラブを優しく乗せて微笑んだ。不意に目を瞑った夏苗の目蓋から、さらに涙があふれてくる。昼間の闘志溢れるプレーからは想像もつかない夏苗の弱い一面に、大坂はいとおしさを覚えると同時に、周囲の刺すような視線に気がついた。

「……ちよつと、気障でしたかねえ？」

「かなり気障だったよ（笑）」

永瀬は大坂の背中をクラブでポンと叩いて答えると定位置へと戻っていった。

「だいぶなく」

井伏も顔をクラブで熱い熱いと仰ぐ仕草をしながら、マウンドを去っていく。

「YOUハ カナエノコトガ……」

「あく！ わく！ それ以上言わないで〜！」

大坂を茶化しながらガツテムも一塁方向へと歩いていく。

「……ありがとうな。お前がいるチームに入れてよかったよ」

「それは勝つてから言ってくください」

「それもそうだな」

最後に菅野と言葉を交わして大坂も定位置へと戻っていった。



「今、マウンドから何か聞こえなかったか？ ミラージュゾーン？」

夏苗のよく通る声が、一塁側ベンチにかすかに届いていた。ベンチの端に陣取っていたルコフスクと、スコアラーの智美がそれに気がつく。

「大佐も聞こえましたか？」

「ああ。何だろう。気になるな」

「ミラージュ……ミラージュ……蜃気楼の事かしら？」

「ムムツ！ 鋭いな四路君！」

「和訳しただけですけどね」

「ガハハハ！ 細かい事は気にするでない！ 良いではないか」

「ノリで褒められても嬉しくないだけです」

「うむ。それは済まなかった。しかし、ミラージュゾーンとは一体何なんだ!？」

「言われなくても調べてますよ。魔道術か何かですかね？」

四路は自分のPDA端末を起動して検索をかける。

「……運営のバンクにはそんな魔道術は登録されていないみたいですね」

「ならば、魔道研究所のメインコンピュータのデータを拝借して……」

「そんな事を私のPDAでやったら即お尋ね者ですよ！ ゲートにあるステルスコンピューターなら何とかなるかも知れませんが……」

「そうか。四路君のような優秀なスコアラーがベンチから居なくなるのは惜しいが、吾輩の直感がどうもそれを許さなのだ」

「そうです。部下はそうやって褒めるんです。そして命令は迅速かつ明確に下すものです」

「良からう。四路君。今からゲートに戻ってミラージュゾーンについて調べてきてくれたまえ。何か分かったら逐一吾輩に報告してくれたまえ」

「はい、かしこまりました、大佐！」

「それで、スコアは誰が付けるのかしら？」

バツティンググローブをはめながら波水出がルコフスクに尋ねる。

「……ムムッ！」

どうやら、指揮官はそこまで考えていなかったようだ。しかし、四路専用の小さな椅子に腰かけるルコフスクの表情は満更でもないようだ。



打席には、2番の三浦が入る。第一打席は三振に倒れているから、次の波水出ほど手強い打者ではないが、それは1番の綾瀬も同じ事だ。彼には手痛いタイムリースリースベースを打たれている。公式戦には登録されていないチームだとは聞いていたが、打撃も走塁もよく鍛えられている。

「プレイ」

主審の茅野がコールすると、再びスタジアムは緊張に包まれる。

タイムを挟んで、菅野は冷静さを取り戻しつつあった。パシンと響くミットの捕球音に確かな手ごたえを感じ、決して調子が落ちている訳ではない事を確認した。

ストライクが先行して、指に掛かるボールの感触に心地よささえ感じていた。最後は外角いっぱい。審判によつてはという微妙なコースだが、今日の主審は寛大だ。

「ストライクッ！ バッターアウト！」

2回ウラの守り。フロッグスは4点を失って1―4。雷神バットの行く末を賭けたこの試合はフロッグスにとっては苦しい展開となった。

Frogs in the Well

「――2回を終わりました1―4。序盤から大きくゲームが動いておられます。EBCナイター中継、今夜の放送は予定を急ぎよ変更いたしましたしてフロッグス対フットレイクスの模様をお伝えしております。どうか、ご了承ください。実況は私、荻窪譲二。解説にはアイドル野球ユニット『プリーティージャーズ』OGの高円寺奈加乃さんをお招きしてお伝えしております。奈加乃さん、改めましてこんばんは」

「こんばんは！」

「ガツテムの技ありと言いましようか、バットを折りながらもライトスタンドまで運ぶホームランで試合が動いたかと思えば、すぐさまフットレイクス打線が菅野を捉えて逆転、そして突き放すという、見どころの多い展開になってまいりました」

「見応えはありますが、フロッグスの選手はダブルヘッダーなので、やはりコンディション的に不利かも知れませぬね」

「そうですね。フロッグスは、モンキースから移籍の菅野・佐賀を含めまして午前中に東地区リーグの最終戦の死闘を終えたばかり。テンポの良い試合ではありましたが、先発の菅野の投球数は100球を超えています」

「強化系や回復系の白魔術がないと、ピッチングにも影響が出る数字ですよね」

「魔道術の使用は敬遠されがちな東地区の野球事情ではありますが、菅野と佐賀の魔力査定はG判定、つまり魔道術が使えないという事をご存知の方も多いかと思えます。そうになると、やはりどこかで継投ということとは考えにあるのでしょうか、序盤から苦しい展開となっております」

「登録のメンバーを見る限り、投手としての登録は菅野選手と橘選手だけのようですが……」

「実はショートの入ります大坂が、午前中の試合でフロッグス側の先発を務めています、9回途中まで2失点14奪三振という素晴らしい内容でした」

「14奪三振ですか!」

「見る限りでは130km/h台の打ち頃の直球でモンキース打線をバツサバツサと討ち取っていました」

「それは、ちよつと信じられないですね……。メンタルや視覚に作用する魔道術の使い手ということでしょうか?」

「調べた訳ではないので、何とも申し上げられませんが、見てる方はどうして打てないの? と、ヤキモキするような投球術でした」

「それは興味深いですねえ。橘選手もデータがありませんが……」

「橘は9回途中、ノーアウト満塁からのリリーフでしたが、無失点で切り抜けております。サイドスローからのスクリーンボールが印象的でした」

「それは頼もしいですね。それにしても、フロッグスはたった一夜で、チームのイメージががらりと変わりましたね」

「かつては、東地区の老害などと揶揄される事もありましたが、パラキ村の伝統を絶やすまいと若い選手が集結しております。スターティングオーダー9人のうち、実に半分以上の5人が今日登録のメンバーです。残る4人も龍ヶ崎は今日が初のスタメンマスクですし、永瀬は長い間怪我で戦列を離れていましたから、ベテランの2人以外は新しいメンバーと言ってもいいでしょう」

「モンキースが解散してしまいましたから、東地区代表最有力候補と言ってもよいと思います。本戦への出場を見据えるならば、今日の戦い方、つまり魔道術にどのように対処していくのかは非常に重要になりますね」

「さて、打席にはフロッグスの8番バッター鹿島が入りました。かつてはフロッグスのリードオフマンとしてパラキを沸かせた男ですが、今夜は下位打線での登場です——」



「鹿島さん! 先頭出ましょう!」

そうは言ったものの、夏苗には打席に立つ男の背中がひどく頼りな

いものに見えた。かつてはフロッグスのリードオフマンとしてパラキを沸かせた男も、今となつてはただの野球が好きなオジサンでしかない。今日の試合に出る事が出来たのも、酒の弱い彼が、ほどほどの酒量に抑えていたからヴオクスルトまで同行できただけなのである。

初球はインコースのストリート。鹿島は大袈裟に腰を引いて避けるが、茅野のジャツジはストライク。そんな弱腰の鹿島だが、夏苗には彼を責めることはできない。慣れ親しんだ野球ボールならばともかく、それが鉛ほどの衝撃を伴うとなれば、恐怖を抱くのは知覚のある動物として抗えざる反応である。実際に目の前で何本もバットが折れている。

ガツテムはスタンドに、佐賀は外野深くまで打球を飛ばしたが、それは彼らが特別に秀でた能力と研ぎ澄まされた感性和を備えていたからに他ならない。好きな野球を楽しく出来ればいいと昨日までプレイしてきた中年男に、それを求める道理はないだろう。

2球目は高めのストリート。球速表示は141km/h。しかし、完全に振り遅れてしまっている。それが現実である。

「よし来い！」

鹿島が打席で気合を入れるが、それもどこか空回りしていて虚しい。自分たちの見てきた、やってきた野球が少しも通用していない。井の中の蛙大海を知らずという言葉が頭に浮かんでくる。「FROGS」という胸に刻まれたユニフォームが、その想いに拍車をかける。「ストライーク！ バッターアウト！」

茅野の声を聞いて夏苗はゆつくりと立ち上がった。

「夏苗ちゃん。面目ない。バットに当たらなけりや、魔道術以前の問題だな」

「鹿島さん……」

圧倒的な力の差を見せつけられ、鹿島も弱音をこぼしてしまう。どんな劣勢でもポジティブに振る舞う彼の口から弱音がこぼれるのは、夏苗の記憶にはあまりなかった。ベンチに帰る鹿島の背中がひどく寂しく見える。ついつい沈みかかる気持ちを奮い立たせて振り返ると、鹿島が去って空席となったバッテリーボックスが彼女を待っている。

た。

「お願いします」

一礼して打席に入る。バットを一番短く持って、コンパクトなダウンスウィングをイメージする。しっかりとミートして、センター返しをイメージする。

「お嬢さん、いらっしやい」

マスクをかぶる波水出が、不敵な笑みを浮かべながら夏苗を打席に招き入れた。



「——先頭の鹿島が倒れて、打席にはラストバッター龍ヶ崎が入ります。黒塗りの木製バットをかなり短く持ちまして、何としても塁に出よう。そんな姿勢がうかがえます」

「龍ヶ崎選手は両チームを通じて唯一の女性プレイヤーですよ。是非、頑張っていたきたいです」

「奈加乃さんは、かつての西地区代表プリティーガールズの選手として本戦出場の経験もありますが、龍ヶ崎選手はどのようにご覧になりますか」

「そうですね。龍ヶ崎選手は女性としては標準的な体格ですが、野球選手として考えるとかなり華奢な部類に入るでしょう。体格や、純な筋力のハンデ……詰まる所は性差のハンディキャップは今後克服していかなければならない壁となると思います。女性選手にとつては永遠のテーマではないでしょうか？」

「さあ、ワインドアップポジションから大きなモーション、ルコフスクが第一球を投げました！ 低め外れてボール。ボールが先行します。1ボールナッシング。一般的に女性選手の方が魔道術に秀でていると言われる事もありますが、その辺りは如何ですか？」

「魔力の根源は精神的な強さに依存すると言われていきますから、そこに男だからとか女だからという線を引くのはナンセンスだと思えます。ですが、女性選手は先程申し上げました通り様々な性差のコンプ

レックスを克服して這い上がってきた選手が多いですから、その説もあながち間違いではないと思います」

「ルコフスクが第2球を投げました。外の球に手を出しますがボールは前に飛びませんで、一塁側のファールグラウンドを転がります。カウント1―1。龍ヶ崎はバットを一度手から離しまして、ぶらぶらと手を振っております。険しい表情。これは痛そうですね」

「あれだけ短くバットを持っていますから本人にもその意識はあると思いますよ、簡単にこの打席を終わらせてしまつてはダメですよ」

「何か、グラヴィティボール攻略の糸口はありますか？」

「一筋縄ではいかないと思いますが、早め早めで仕掛けていきたいですね。グラヴィティボールは3倍、5倍と奥の手を残しています。球質を重くする程に魔力の消耗も大きいので、序盤からは多用したくないと思いますよ」

「ルコフスクが3球目のモーションを起こします。足が上がって、投げました！ 打ちました！ 低めのボールを上手くミートしましたが、これは打球に勢いがありません。セカンドの金が回り込んで、そのまま一塁へ転送……アウト！」

「センター返しを意識していたと思いますが、力負けしてしまった印象ですね。この辺はバッテリも徹底していますね」

「徹底したグラヴィティボール攻勢に、フロッグス打線は沈黙したまま2アウト。打順はトップに戻ります。右の打席に矢部が入りました。ここまで一巡していますが、ルコフスクの投球はすべてストレートです。過去の試合を振り返っても変化球を投げたという記録はありませんが、どうご覧になりますか？」

「グラヴィティボールに絶大な自信と信頼がある証拠だと思います。軌道を曲げて打者の目先を変えたり、緩急を使ってタイミングを外す必要性がないのでしょうか。面倒な駆け引きをしないで、打たせて取った方が負担も少なくして確実にという事でしょうね。元々の長打のリスクが極めて低いわけですし、勝負どころでは3倍、5倍とギアを上げていけばいいわけですからね」

「ルコフスクの初球は外角外れてボール。セーフティバントの構え

を見せました。矢部も揺さぶっていこうという狙いがあるのでしようか」

「打撃に変化をつけて、相手の様子をうかがうのは良い試みだと思います。矢部選手のように足の速い選手であれば特に効果的だと思います。しかし、ルコフスク選手クラスの術者は他の地区では珍しくありませんからね。逆に言えばルコフスク選手のグラヴィティーボールに手古摺るようですと、東地区予選を突破できても本戦を勝ち進むのは難しいと思われます」

「ルコフスクが第2球を投げました！ もう一度セーフティーバントの構え。バットを引きますが今度はストライク。カウントは1―1の並行カウント」

「それでも、東地区はなかなか魔道術が浸透しませんよね？ どうしてですか？」

「それについてなのですが、弊社のアンケートでも魔道術の使用に“抵抗がある”と“やや抵抗がある”を合わせますと、ここ数年減少傾向にあるものの、毎年60%を超えています。東地区では、かつての魔力暴走事故で優秀なプレイヤーが何人も選手生命を絶たれています。5年前には不正魔力増強アイテム使用疑惑で、東地区選手会会長が更迭されました。何と言いましようか、東地区には魔道術に対しての嫌悪感や背徳感のようなものが根強くあるんです」

「魔力暴走事故は50年以上も前の話じゃないですか！ 当時と比べれば魔道術の研究は遥かに進んでいますし、魔力暴走事故だって術者のキャパシティーを超える魔道術をチームぐるみで酷使し続けた結果、精神や肉体が耐えきれず練習中に魔力が制御不能になって、選手達が重篤な疾患を負ったという話ですよ。今はPDAの体調管理システムで魔力を数値化して健康被害が出ないように運営本部が監視しているんです。そんな事は起こり得ないというのが運営本部の見解です」

「ルコフスクの第3球は高め外れてボール。カウント2―1。……ですが、当時のショックは今でも拭い去れないものがあります。実際に、後遺症によって満足にプレイできていない選手もいますから、理解を得るのは難しいところですよ」

「それは、そうかも知れないですけど、このままでは、東地区の野球が日の目を見る事はありません。暗い過去を引きずったままでは、未来の栄光は勝ち取れないと思いますよ」

「こう言った議論は、イーストタウンの飲み屋街でも日々酒の肴になっっている訳ですが……ルコフスクが第4球のモーシヨン、振りかぶって、投げました！ セーフティーバント！ しかしこれはピッチャー正面です。ルコフスクが丁寧に掴んで一塁へ送ります……3アウト。フロッグスこの回は3者凡退で攻撃を終えました。矢部は、ちよつと淡泊でしたねえ？」

「打者有利とされるカウントでしたからね。もっとチャレンジしてもよかったと思いますが」

「3回表フロッグスの攻撃は無得点に終わりました。1―4でフットレイクス3点のリードは変わりません。この後もEBCナイター中継をお楽しみください——」

中ノ鳥島において、夜間のゲートの出入りは制限されている。だから、夜のゲートは専ら暇で退屈で平和なものだ。稀に許可なく不正に出入りしようとする輩もいるからゲートの警備員という職業は油断が出来ないが、そんな不屈き者がいれば即時御用となる。

東地区と南地区を結ぶゲートは2か所ある。その一翼を担うヴォクスルトの警備は鉄壁と特に評判が良い。元軍人で自らの鍛錬にも余念のないルコフスクの指揮の下で、こんな田舎のゲートには過剰とも思える訓練を積んだ屈強な警備員達が、執拗ともいえる態勢で監視の目を光らせているのだから、それはたとえ話でも何でもなくネズミ一匹、ゾウ一匹通さない程の鉄壁を誇るのだ。その上、ルコフスクの重力系黒魔術によって張り巡らされた数々のトラップは侵入者があれば即座に彼らを拘束してしまうのだ。

そんなヴォクスルトの警備も今夜はいささか手薄である。そうは言っても、必要な人員は配置されているし、彼らも現場を任せるには十分に優秀な警備員達であるから、戦力が不足している訳ではない。何が手薄かと言えば、不測の事態に判断を下す最高指揮官が現場にいないということくらいだ。しかし、その程度の事で機能に支障をきたす程この組織は脆弱ではない。

……はずだった。

軽のミニバンがゲートの入り口に近づく。ゆつくりと徐行しながら裏門を潜ると少し様子がおかしいことに運転手の四路は気がついた。裏門にも当直の警備員がいるはずだ。四路は運転席から顔を出して警備員室をのぞき込んだが、当直の警備員の姿はなかった。彼女は警戒心を強めてハンドルを握ると、右足をそつとアクセルに乗せた。

ゲートの敷地に入ると警備員専用の小さな駐車スペースがあるのだが、彼女はそこを通り過ぎて敷地内の最も東寄りに位置する管理棟の入り口付近に愛車を停車させた。静かすぎるヴォクスルトゲートの状況を不審に思いながら、しかし、ただの思い過ごしだろうという

祈りを込めながら彼女はエンジンを切り、車から降りた。

静かだ。まったく人のいる気配がしない。夜の小学校に忍び込む女生徒のように、四路はゆっくり入口の扉をひいた。暗く続く廊下に月明かりが差し込んだところで、彼女ははっとして振り向いた。どの部屋にも電気が点いていないのはおかしい。その場から確認出来る他の建物も確認したが、どの窓からも明かりは漏れていない。何かが起こっているかと彼女は理解した。彼女はすぐさま暗い廊下を走り、地下へと続く階段を駆け降りた。PDAが照らす小さな明かりだけを頼りにして、地下の監視室へと急いだ。



レイクサイドスタジアムの試合は3回ウラを迎えていた。先頭打者の波水出が右の打席に入る。初球、2球目と低めに外れるとカウントは2ボールナツシングとなる。すると唐突に波水出が口を開いた。マスクを被っている時もささやき戦術よろしく積極的に打者に話しかけるが、打席でもキャッチャーとのコミュニケーションという名の揺さぶりを怠らないようだ。

「随分と窮屈なリードをするのね」

「……」

相変わらずオカマのような独特の粘り気のある喋り方だ。波水出の指摘に夏苗は思い当たる節がない。波水出の問いに答えることなく、夏苗はマウンド上の菅野にシグナルを送った。次の投球は外角に外れてボール。これでカウントは3ボールナツシング。

「夏苗ちゃんって、男の人とお付き合いました事あるのかしら?」

「それが今関係あるのかしら?」

「あるわよ。大あり」

どう考えても心理的動揺を狙った揺さぶりだ。真に受けてはいけない。しかし、その話題は17歳のうぶな女子の心を揺さぶるには最もシンプルかつ効果的な話題だった。夏苗がミットを構えるのを一瞬だけ躊躇すると、間合いを嫌った菅野がプレートを一度外した。

「3歩下がって歩けとは言わないけど、相手に自分の考えばかり押し付けていてはだめよ。相手に気持ち良くなってもらう事も、お互い上手くやっていくためには必要じゃないかしら？」

「何の話よ？」

夏苗は少し不機嫌そうに答えた。夏苗のミットの位置は相変わらず打者の膝よりも下だ。昼間ほどの効果はないとはいえ、打者を惑わすミラージュゾーンは活きている。菅野の球威があれば、低めに集めて打たせて取るピッチングが計算できるはずだ。

「ボールフォア テイクワンベース」

夏苗の注文通り菅野は低めに投球を集めたが、ストライクゾーンを通過しなければ意味がない。4球目も明らかかなボール球となつてしまった。波水出はファールグラウンドにバットを転がすと、一塁へと歩いた。ノーアウト走者一塁となり、前の回にヒットを打っている金が右の打席に入る。

腕を前方に伸ばしてゆったりと構える神主打法。ガツチリとした肩から伸びる筋肉質な二の腕が引き締まり、その力強さがうかがえる。

先頭打者をストレーターのフォアボールで出してしまったバッテリーとしては、どうしてもストライクが欲しい場面。夏苗のシグナルはストライクからストライクになるSFF。

ここぞとばかりに一塁走者の波水出が初球からスタートを切る！

無警戒だった。波水出は二塁に悠々到達した。金は落差のあるSFFの軌道を確認するようにじつくりと見送った。無死二塁。ファーストストライクの代償としては、あまりに大きな損失である。

2つボール球を挟んで4球目。やや甘く入った内角のストレートを金はセンターへ弾き返した。予め深く守っていた矢部がフェンス際で掴むと、波水出はタツチアップで三塁に到達。捉えたはずの打球がわずかに芯を外されて、打球がスタンドまで届かなかったことに金は悔しそうにベンチへと下がった。

ナイトゲームでもミラージュゾーンは通用しているが、扱いが難しい。制球難の菅野ならば尚更である。低めにコントロールできれば

いいのだが、少しでも甘いコースでは痛打される。上半身裸のルコフスクが打席に入ると、夏苗は再び低めにミットを構えた。



「魔道術は、つくづく恐ろしいのう……」

フロッグスサイド、三塁側のベンチでヤソジが不意に呟く。

「どうかしたんですか？」

ミラージゾーンを駆使して辛くも強打者を打ち取ったように見えた京子には、ヤソジの言葉の意図がわからない。

「便利な物があると、つい人はそれに頼りすぎてしまう。このままでは、夏苗は魔道術に惑わされてしまう。いや、もう既に惑わされているんじゃないか？」

「魔力を酷使しすぎということですか？」

「そうは言うたらんよ。今の夏苗は、魔道術に惑わされて大事な事を見落としている。京子さん、菅野君の持ち味は何だと思っかね？」

菅野は初球は高目にすっぱ抜けてたが、すっかり151km/hの球速をマークしている。それを見届けた後で、京子は答えた。

「やはり、150km/hを超える直球でしょうか」

「うむ。まさにその通りじゃ。それを活かすためには、コントロールなどを気にせずにストライクゾーンのと真ん中目掛けて力一杯投げるのが一番良いと思わないかね？」

「でも、それではミラージゾーンが機能しない……あ、そうか！」

「そうじゃ。夏苗は自分のミラージゾーンばかりに気を取られて、菅野君の持ち味を潰してしまっているんじゃないよ」

「なら、そうと教えてあげればいいじゃないですか？」

「京子さんは誰かに説教された事と、自分で気がついた事とどっちの教訓が自分にとって重みがあるかね？」

「……そりゃあ、自分で気がついた方が良いに決まっています。でも、今のままじゃ、夏苗ちゃんも菅野君も共倒れよ」

「ふむ。ここで倒れるようじゃ、先が思いやられるのう……」

地下の監視室に全力疾走で辿り着いた四路は、息を整える間もなくルコフスクのPDAへと発信をかけた。呼び出しコールの間に予備の電源を立ち上げると、それぞれのモニターに明かりが次第に灯っていく。起動画面にパスコードを入力して、セキュリティを解除すると、端のモニターから順に敷地内の様子が映し出されていく。長い呼び出しコールの後に、電話が繋がった。

「大佐！ 大佐！ 大変です!!」

『どうしたんだね？ 随分、取り乱しているじゃないか』

「取り乱しますよ。ゲートが何者かに襲われてまして」

『ハハハ！ 冗談はヨシ子さん』

「大佐、それ、一周して面白いかと思ってたら勘違いも甚だしいですよ……って、冗談じゃないんです！ 警備員が全員薬か何かで眠らされているみたいで」

『うむ。なかなかのノリ突っ込みだったな。ノリ突っ込みは求められる頻度の割に、素人がやると滑るリスクが非常に高いから、使いすぎるのは考えものだよな。でも、心ある人ならばその勇氣は買ってくれるだろう……って、何っ！ 侵入者か!？』

「わかりません。さっきまで停電していたのでカメラの映像も残っていません」

「……………」

画面越しに各フロアーの状況を確認していく。いつも賑やかな敷地内の映像が静まりかえっている。照明が復旧していないエリアは暗視カメラに切り替わっているが、侵入者らしい人影はない。武装している警備員も所々で倒れている。彼らも眠らされているだけだろう。目立った外傷はない。

「試合を中断した方が良いのではないのでしょうか？」

『それはダメだ』

「何故ですか？」

『今夜、このタイミングでゲートが襲われた。奴らの狙いは何だ？』

「まあ、大佐の留守を狙っての物奪りとか……」

『違うな。四路君。我々の迎撃システムはそんなに軟じやない。そのリスクを冒してまで欲しいものがあると思うかい?』

「そりゃ、やっぱり雷神バットの噂を聞きつけて……」

『噂? そんな情報がどこから漏れる? 今、ここに雷神バットがある事を知っているのは我々とフロッグスの連中、そして橘みずきくらいだ』

「そうか! 橘みずきの奪還!?!」

『概ね正解だ。おそらく、橘みずきはそこにはもういないだろう』

「ですが、西の隔離棟には特に異常はありませんよ。施錠もされていきます」

『どうだろうな。吾輩のグラヴィティートラップを掻い潜ってるんだ。相当な黒魔術者がいる可能性が高い』

「ならば、尚のこと試合を中断して応援を……」

『ダメだ。奴らの本命は雷神バットだ。橘みずきを解放してめでたしめでたしとはならないだろう? こいつが欲しいに決まっている』

「まさか、大佐はそれを見越して今日の試合を……?」

『いや、この試合はただやりたかっただけだ。実戦も久しく無かったからな』

——嘘だ。大佐は、初めから予期していたのだ。

『兎に角、試合中ならば奴らも手は出せまい。しばらく時間が稼げる。四路君は、念の為隔離棟の様子も確認してきてくれ。くれぐれも慎重に頼むよ』

「かしこまりました」

——違う。今すぐ球場に引き返して、奴らの素性を暴かなければならない。

素直に上司の指示に従うよりも、自分の直感を信じた方が良い事は時にはあるものだ。



2死三塁、打席には6番打者の厚木が入る。前の打席は四球。

初球はインハイにストレート。明らかなボール球だったが、今日最速の154km/hが記録された。バシンとミットに掛かる圧力が夏苗を痺れさせる。

2球目、3球目とアウトローにストレートを重ねてカウントは2ボール1ストライク。

4球目。夏苗は今日始めて自らインハイにミットを構えた。キレのあるストレートが打者の胸元を襲う。

キンツ!

詰まった打球が高く上がった。

「オーライ!」

菅野が夏苗を制して飛球をキャッチ。3アウト。三塁走者波水出は残塁に終わった。

Counter Rockets

「——ECBの制作でお伝えしております。東地区リーグ予選のエキシビジョンマッチ、フロッグス×フットレイクスの試合は4回の表、フロッグスの攻撃へと突入してまいります。打順は上位打線、この回先頭の永瀬大河が右のバッターボックスに入りました。3回までの序盤が終わりまして1―4という得点状況です。ここで、解説の奈加乃さんにお尋ねしましょう。フットレイクスが3点をリードして、これから中盤の攻防に突入していきます。追いかけるフロッグスとしてはどのような展開を期待したいですか?」

「そうですね。ルコフスク選手からの大量得点は難しいでしょうから、今のうちになるべく点差を縮めておきたいですね」

「緑色のヘルメットから肩のあたりまで伸びる銀色の髪が、風にさらさらと揺れております。この永瀬は、ここ数年ケガで戦列を離れていたようですが、どのような選手でしょうか?」

「とても器用な選手だと聞いています。内野はどこでも出来るようですし、外野手としての出場経験もあつたと記憶しています。打撃もバントなどの小技から、状況によっては長打でチャンスメイクしたりと多彩ですね」

「データを見てみますと、得点圏打率が・195と極めて低いようですね……」

「メンタルが弱いというよりは、ここ一番の場面で打球が野手の正面だったりする事の方が多い印象がありますね。運がないと言いますか、これは彼の魔道術の影響もあると思います……」

「ルコフスクの初球はほぼ真ん中。ストライク。カウントはノーボール1ストライクです。そういえば、永瀬は魔道術を使いましたっけ?」

「派手さがないので、あまり知られていないようですが、故意に幸運を呼び込む非常に珍しい能力の使い手です。本人はハードラックと名付けているみたいですが……」

「幸運を呼び込むのにハードラックですか?」

「呼び込んだ分のラツキーは、後で清算しなくてはいけないらしいんです。ですから、一度魔道術を使うと、暫くは不運が続いてしまいうみたいですね」

「それで、ハードラックですか……。ルコフスクが第2球を投げました。高めの球、空振り。カウントはノーボール2ストライクです。追い込まれました。しかし、運を操作するというのは、傍目には分かりにくい能力ですね」

「能力に関係なくラツキーだったりアンラツキーだったりという事もありますからね。ですが、あまり目立たない能力だからこそ東地区でも使い易かったという側面があると思います。それに、この能力で永瀬選手は選手生命を一度絶たれていますからね」

「一昨年の肘の負傷のことですか？　これは、モンキースの走者と激しく接触した際に負ったものと記憶していますが……」

「走者と接触する直前の打席で、彼はチームを同点に導く2ラン本塁打を打っていますよね」

「言われてみれば、そうですね。ですが、永瀬は試合後のインタビューでは、能力に関しては一切触れていませんね」

「これが能力によるものなのかどうか証拠がないと言われればそれまでですが、可能性を否定する事も出来ません」

「同点2ランの代償が選手生命というのは、ちょっと釣り合いが取れないような気もしますが……。ルコフスクが第3球を投げました。高めの球ファール。バックネット方向に打球が転がります。腕に伝わる衝撃に表情を歪めております永瀬。かなり痛そうですね。それにしても、グラヴィティーボールは重そうですね」

「前に飛ばすだけでも難しいはずですよ。永瀬選手には長打もあると申し上げましたが、本質的には中距離打者ですからね」

「ボールカウントはノーボール2ストライクと変わりません。追い込まれています永瀬。対しますルコフスクが第4球目のモーションを起こします。波水出のミットは外、ルコフスクが第4球目を……。投げました。打ちました。しかし、これもまたファール。カウント変わらずノーボール2ストライク。追い込まれてから2球続けてファール

で粘りました。球数を稼ごうというよりは、力負けしている感じでしょうか」

「そのように見えますね。それに少し粘ったところで、このピッチャーの魔力や体力を削ったりというのは難しいでしょう」

「3倍のグラヴィティーボールは10球まで、5倍は2球まで、そして10倍は最終回限定で1球までという公式の発表がありますが、ルコフスクは球威が2倍のグラヴィティーボールには球数制限を設けていません」

「試合展開によつては多少前後していますから、この数字はあくまでも目安ですね。3倍を15球投げて5倍を1球という試合もあります」

「魔力が尽きなければ、という事ですか？」

「そういう事でしようね」

「何とか、ランナーを溜めてクリンナップまで繋ぎたい永瀬。さあ、ルコフスクが振りかぶります、足が上がって、投げました。インコース、ファール。今度は足に当たりました」

「うわあ、これは痛そうですね……」

「丁度くるぶしの辺りでしょうか。自打球が当たりました。これはツイてないですねえ。一塁コーチボックスから龍ヶ崎がワールドスプレーを手に持ちまして駆け寄ります。ただでさえ球威のあるグラヴィティーボールですから、痛いでしょうねえ」

「相当痛いと思いますよ」

「足へのダメージが、心配される所ですが……今、永瀬が立ち上がりました」

「大丈夫なようですね」

「龍ヶ崎もコーチボックスへと下がります。プレイ再開です。茅野球審がコールしました。波水出のミットはほぼ真ん中に構える。ルコフスクが第6球を投げました。今度は大きなスウィング、ファール！ 打球はバックネット方向です。カウントは変わらずノーボール2ストライク。奈加乃さん、追い込まれていますが強振してきましたね」

「中途半端なスウィングでは前に飛ばないという判断でしょうね。タ
イミングは合っていますので、ひよっとすると一本出るかも知れませ
んよ」

「フットレイクスの内野はほぼ positioning ですが、外野はかなり浅い守り
の守備陣形です。これは、外野まで飛ぶことはまずないだろうという
判断と見てよろしいですか？」

「そうですね」

「さて、ノーボール2ストライクと追い込んでいますが、粘られてい
ます、マウンド上のルコフスク。大きなモーションから、第7球を、投
げました。おおっと、セーフティーバントだ！ 三塁線面白い所に転
がる！ ライン際だが、打球の勢いが少し強い。しかし、ボールに不
規則な回転が掛かっている。ピッチャーもサードも見送りますが、打
球は切れま……っ!」

「フェアだ！」

「切れません！ フェアーです！ 永瀬は一塁にヘッドスライディング
グ。意表を突いた、素晴らしいセーフティーバントが出ました！
ノーアウト！ ノーアウトランナー一塁です！ 良い所に転がりま
したー！」

「お見事！ ツイてますね」

「これは、運を味方につけるハードラックが発動したという事になり
ますでしょうか？」

「うーん、こればかりは本人に聞いてみないとわかりませんが……
まあ、そうですね！ でなければスリーバントはないですよ！」

「いささか地味な能力ではありますが、それはともかく、ノーアウトで
のランナーが出塁しました。打順は3番の大坂が左のバッターボツ
クス。初回の打席は金属バットがバックネットに突き刺さるハプニ
ングがありました。非常に球質の重いグラブヴィンテージボールですが、
あそこまで持って行かれるものでしょうか？」

「5倍、10倍となれば無い話ではないと思いますが、2倍であそこま
でというのは不自然ですね。ですが、黒魔術には相性というものもあ
ります。例えば同じ刺激を受けても、痛いと感じる人と気持ちいいと

感じる人がいるように、黒魔術にも効きやすい人と効きにくい人という個人差は存在します。彼の場合は、アレルギーとも言えるくらい過敏に反応してしまうタイプなのかもしれません」

「ルコフスクの初球はど真ん中ストライク。じっくりと見送ります大坂」

「もし、そういう体質だとしたら、無理に手を出して、腕を折ったりという怪我也心配ですね」

「そう言えば、午前中のモンキース戦でも漁火のファイヤースターターであわや火達磨というシーンがありました」

「漁火選手のファイヤースターターの火力はせいぜいグローブのポケットを焼き切る程度です。人を一人火達磨にするとなれば、さらに大きな火力が必要となるでしょう。この場合は、上級魔法の申請を運営本部にしなければなりません」

「大坂は、黒魔術に極端に弱い……という事になりますか？」

「ええ、弱いという表現が適切かどうかはわかりませんが、今の段階では、そう考える妥当ではないでしょうか」

「ルコフスクが第2球を……投げました。低めに決まってストライク。追い込みました。微動だにせずに見送ります大坂。黒魔術に弱いという話がありました、ここで何もしないと言うわけにはいきませんよね？」

「その辺は大坂選手も分かっていると思います。最低でも、永瀬選手を得点圏に送りたいですね」

「しかし、カウントは既にノーツーです。ノーアウトランナー一塁。一塁ランナーは永瀬。あまり、大きなリードは取っていません。打席の大坂は2球続けて見送りました。どうでしょうか？ 初回の打席のイメージが残っていますか？」

「金属バットが2つに折れてしまう程ですからね。その感触やイメージが残っているのは間違いないと思います。ですが、ルコフスクとの対戦はこの後も中盤、終盤とあるわけですから。何もしないというのは、得策ではないと思いますよ？」

「ルコフスクが第3球を……投げました。ストライクツ！ 見逃がし

三振！ 3球三振！」

「ちよつと勿体ないですね」

「……おや？ 大坂が何か茅野球審に抗議していますねえ。納得いかない表情。今の投球は、明らかにストライクに見えましたが……」

「カウントを勘違いしていましたかね？」

「はあ……？」

「2球目なんですけど、少しぼんやりしていた様にも見えましたから、もしかすると、ですが」

「だとしますと、あまりにもイージーミスです」

「集中してもらいたいですね」

「渋々といった表情で、ベンチへと下がります大坂です。さあ、1アウトですが、一塁にランナーを置きまして打席にはこの男。ガツテムが右の打席に入ります。ややオープンスタンスの構えです」

「先程のホームランもありましたから、警戒されていると思いますけど、一本期待したいですね」

「外野は、定位置よりもやや後ろ……いや、キャッチャーの波水出が前に出るように指示を出しています。これは、3倍や5倍のグラブイティーボールがあるという事でしょうか？」

「これだけ早い回から使ってくるのは珍しいですね」

「それだけ本気という事でしょうか。勝負事には妥協を許さない性格でもルコフスクは知られております。この人は風貌や言動から、直情的な熱血漢だと思われがちなのですが、至る所に策を巡らす智将派でもあるんですよね」

「とてもそうには見えませんがね」

「ここは勝負どころと踏みましたフットレイクスのバッテリーです。さて、足が上がって第1球を、投げました。外、外れてボール。1ボールナツシング。…今のは意図的に外しましたか？」

「ええ。ガツテム選手も様子を伺いましたね。お互いに様子見といったところではないでしょうか」

「さて……奈加乃さんは、ガツテムについてはどのような印象ですか？」

「何と言っても、初見でグラヴィティボールをスタンドまで運ぶ打撃センスの高さですよ。あの太い腕からのパンチ力は勿論ですけど、魔道術への対応力も申し分ありません。多かれ少なかれ修羅場を経験している選手だと思います。彼が今まで島のタイトルランキングに登場していないのが不思議なくらいですね」

「このガツテムついてなのですが、弊社の調べによりますと、昨年は本土のプロ野球チームに所属していたのではないかという情報があります」

「では、第8次招待選手ということですか？」

「第8次招待選手の名簿データは水曜日の北地区リーグ戦開幕と同時に公表されることになっておりますので、まだ確認が取れないのですが、可能性はありますね」

「だとしたら、なんでこんな田舎のチームに？」

「ルコフスクの第2球はストライク。高めの球。これで1ボールストライク。……それが全く分からないですよ」

「そういえば、大坂選手・矢部選手・橘選手もデータがないですね」

「あくまでも推測なのですが、彼らも第8次招待選手なのではないかということですね。午前中の解説には日野さんにお越し頂いていたのですが、激戦区の北地区を勝ち上がるよりも、比較的勝ち抜きやすいであろう東地区で登録した方が得策だという判断があったのかもしれない。いずれにしても、フロッグスは今日の試合で解散を免れました」

「でも待って下さい。東地区の代表はフナシーズですよ？」

「そう……ですね。首位のモンキースが解散してしまいましたから、勝率の一番高いフナシーズが自動的に東地区の代表という事になります。そうなりますと、フロッグスの本戦出場は早くても来年からという事になりますねえ」

「招待選手が最初の1年を棒に振るといふのは、解せないですねえ……」

「ルコフスクが第3球を投げました。低めいっぱい。ストライク。1ボール2ストライクと追い込みました。選手のモチベーションと言

いますか、勝ち進んで本土に帰ろうという意識は、年を追うごとに薄らいでしまいうらしいですからね」

「島で生まれ育った私たちには、わかりにくい感情ですね」

「さて、奈加乃さん。ここまでは、ボール、ストライク、ストライクという配球ですが、4番のガツテムに対しまして、ルコフスクの投球内容に変化はありますか?」

「コースを意識してると思いますよ。ストライクゾーンに3倍のグラヴィティーボールを投げ込んでカウントを整えました。3倍は球数は節約したいでしょうから、この後は2倍のボール球を打たせて、あわよくばダブルプレイという配球になると思います」

「その、ルコフスクがリストバンドで額の汗を拭きます。上半身は裸です。逆三角のボディイーが唸りを上げる。第4球を、投げました!

低めに外れてボール。ツーエンドツー。並行カウント。今のは2倍でしたか?」

「2倍ですね」

「2倍のグラヴィティーボールを、スタンドまで運んでおりますガツテムの第2打席。2倍の非常に重たいボール球を見極めた上で、3倍の更に重いストライクに的を絞らなければなりません。これはもう今日のターニングポイントと言っても良いでしょう。1アウト一塁です、チャンスを広げることが出来るか、あるいは一発長打あるのでしょうか」

「外野がかなり前進していますからね。ガツテム選手の打力を侮っていないか心配ですね」

「さあ、ルコフスクがセットポジションから、第5球を、投げました! 低めの球を、打ちました! バットが折れています、セカンド金のグラブを掠めて、鋭い打球が浅い外野の間を抜けていく! 永瀬のスタートが若干遅れています、サードコーチャーの矢部が大きなモーションでGOサインを送ります! ガツテムも一塁を回って二塁へ向かう。ようやくセンターが打球に追い付きますが、永瀬は三塁も蹴った! ボールは中継に帰ってきただけ! 永瀬は悠々ホームイン! ガツテムは二塁でストロップします」

「ボール球……でしたねえ」

「低めのボール球を、上手く掬いあげました」

「ボール球ならば2倍と読んで、ガツテム選手はそれを狙ってましたねえ」

「バットは折れましたが、ましても技ありの一打。バッテリーの配球を逆手にとつての貴重なタイムリーツーベースで2―4！ 反撃の狼煙が上がります！」

「この1点は大きいですよ」

「非常に大きな1点が入りました。しかし、まだ2点差あります。打席には、先程はレフト、一番深いところまで飛ばしています。佐賀が右のバッターボックスに入りました——」

A Hypothesis of Counter — Magic

初回の第1打席にバットを弾き飛ばされたイメージが強く残っていた第2打席は、確かに慎重になっていた。無死で永瀬さんが出塁していたが、追い込まれるまでは迂闊に動きたくなかった。オレの気持ちを知ってか知らずか、ルコフスクは1つ2つとテンポよくストライクを重ねた。

「ストライーク！ バッターアウト！」

ところが、2つめのストライクで主審の茅野さんはアウトを宣告した。この人はひよつとすると野球のルールを知らないかも知れない。オレの口からは危うく審判を侮辱する言葉が飛び出しかかっていた。「いつまで熱くなってるでやんすか！ 見つとも無いでやんす！」

三塁コーチを務める矢部君の忠告がなければ、オレはいつまでも主審である茅野さんに抗議し続けていただろう。悪くすれば退場になっっていたかも知れない。

高校時代に苦楽を共にした矢部君があそこまで言うのだ。素直にベンチへ下がるのが正解のはずだ。いつだって本気の彼は、誰かを冷やかしたり騙したりすることを良しとしない性格だ。状況に納得はできなかったが、審判も一度「アウト」と言ったのだ。今ここで楯突いたところで、オレに得がないことは明らかだ。

狐に抓まれた気持ちのままベンチに戻ったが、誰もオレの三振（この場合は、二振と言うべきか？）に疑問を抱いていないようだ。ちらりと加藤さんが記録していたスコアブックを覗くと、確かに3球分のチェックが入っていた。いずれも見送りストライクのチェックだ。そんなはずはない。俺は2球しか見送っていないはずである。

1球ぶんの記憶が丸々喪失しているのだろうか。それとも、敵チームと主審を巻き込んだのドッキリだろうか。悶々とした気持ちのままベンチの中をうろついていると「カキーン」という乾いた打撃音がベンチまで届いた。4番ガッツテムが右中間を破るタイムリーツ―

ベースを放っていた。あれだけの重い球を、よくもまあ平気で打ち返すものだ。それも、木製バットである。三冠王の称号はダテじゃない。

「あれじゃあバットが何本あっても足りねえな」

ベンチの端で独り黙りこむオレを不憫に思ったのか、井伏さんがオレに話しかけてきた。不意を突かれたオレは井伏さんと一度合った目をすぐに逸らしてしまった。見送り三振を責めにきた訳ではないだろうが、打席で何もせずに終わった以上、少し後ろめたい気持ちがある。それとなしにグラウンドの方を見ると、生還した永瀬がキャッチャーの波水出からさつきまでバットだった木片を受け取っている。ついでに強烈なボディータッチを肩に尻にと浴びせられていた。はじめのうちは永瀬も愛想よく応酬していたが、エスカレートするにつれて逃げるように永瀬はベンチへと帰ってきた。それを見届けた波水出は、次の攻撃対象を打席の佐賀へと移している。佐賀が露骨に迷惑そうな態度で応じると、ようやく波水出もマスクを被って定位置に座った。

「波水出もよくやるよ。悪い奴じゃないんだけどね」

井伏さんもその様子を見て苦笑いだ。井伏さんはフロッグスの初期メンバーの中では最も野球の腕が確かだった。堅実な守備とシュアーな打撃が持ち味で、今夜は7番サードでの出場である。42歳の厄年で、既にピークを過ぎてしまっているが、そこはベテランの経験と技術で上手く補っている。そんなナイスミドルだ。

「打席で、何か言われたのか？」

井伏さんの問いかけに、オレはまだ答えていなかった。きっと、陰気に俯いたまま物思いにふけっている無礼な若者にみえている事だろう。

「いや、特に……」

これでは答えになっていない。しかし、打席での奇妙な体験を、今ここで告げて良いものだろうか？ おかしな奴だと思われるのではないだろうか？ この場合、矢部君はどう答えるだろうか。試しに脳内シミュレーションしてみよう。

「矢部くん、実はオレ、打席で2球しか記憶がないんだ」

「えー!! 大変でやんす! 大坂君が記憶喪失でやんす!」

そうだ。彼は間違いなく取り乱して、不用意に周りに言い触らすだろう。これではダメだ。しかし、隣にいる落ち着いた雰囲気のないスミドルならば、若者の馬鹿らしい悩み事にも付き合ってくれるだろうか。

キン!

ボテボテのゴロが三塁線を転がる。佐賀は初球をファール。

「そんなにかんでたら、打てるものも打てないぞ!」

井伏さんの言う通り、この打席の佐賀さんは少々かかり気味だ。午前中の試合のような打席での落ち着きがないから、きつとルコフスクも投げやすいだろう。きつと、この人は冷静に相手を見て物を言う人柄なのだろう。オレは思い切って打ち明けてみることにした。もしかすると、みっともない言い訳にしか聞こえないかも知れない。

「井伏さん、打席で記憶が飛ぶ事がありますか?」

「ん? 何の話だ?」

「実はオレ、2ストライク分しか記憶がないんです」

「さっきの打席のことか。いやにあっさり見送ったから、気にはなっただ。怖じ気ついちゃまったのかと思って心配したがな」

「怖じ気ついてなんかいないです!」

「わかってるよ。だが、記憶が飛ぶとなると厄介だな。今のが初めてか?」

「はい……」

「そうか……」

井伏さんは短く答えて暫く黙った。少し表情が陰しくなったような気がする。

沈黙に耐えられなくなったオレは、試合に集中するふりをしてマウンド上のルコフスクをぼんやり眺めた。どうして上半身裸なのだろうか? 今更ながらに素朴な疑問が湧いてくる。ピンク色に上気した肌から湯気のようなものが立ち昇っている。

「黒魔術対策の基本は、その発生源と術式を突きとめる事だ」

井伏さんもグラランドをの方を見ながら話し始めた。

「――漁火のファイヤースターターだとか一目見てわかる黒魔術ならば話が早い。ルコフスクのグラヴィティーボールは見た目では分からないが、コンタクトがあれば正体がわかる」

このオジサンは、何の冗談を言っているのだろう。トンデモナイ事を立板に水の如く並べ喋っている。昨日までのオレならば、きっとそう感じたはずだ。しかし、今のオレはそうではない。この島には魔道術という異端の能力が存在していて、オレはそれを身を持って体験させられていた。

「――だが、厄介なのは目に見えないし、直接コンタクトもない魔道術だ。夏苗ちゃんのミラージュゾーンがいい例だ。原因がわからなければ対応が後手になって、いずれは致命傷になりかねん。何より、未知なものと戦っているという精神的負担がチームの士気に与える影響は言うまでもないな」

オレはもう既に、魔法とファンタジーが日常に存在するRPGの世界の冒険者になっているらしい。ゲーム冒頭の酒場かどこかで初心者に世界観を解説するチュートリアルのおっちゃんと言伏さんが重なって見えてくる。魔道術という得体の知れないものに遭遇して、少々の期待を抱いてこそいるが、その代わりにいくらかの危険に晒されている。全身火達磨になり、金属バットが皮のボールに弾き飛ばされ、今度は数秒間の記憶が飛んでいるようだ。それは、虚構だからこそ許容できた世界だ。

「――そして、俺の知る限り敵チームにも味方チームにも記憶を飛ばすような能力者はいない。そうになると、誰かが外部からこの試合に干渉した事になる」

「外部から干渉？ そんな事が出来るんですか？」

「可能だ。でも、普通の試合ではそうはならない。観客がプレイを妨害したり手助けしたりしてはいけないのは本土でも一緒だと思うが、中ノ鳥島のルールブックでもそれは明記されている」

バックネット裏に報道クルーが詰めていた事は確認したが、この試合に観客はいなかったはずだ。オレは黒魔術の発生源を突き止めな

ければという衝動に任せて振り返ってベンチを去ろうとしたが、勢いよく振った右腕を井伏さんに掴まれた。

「待て。話はこれからだ」

キン！

渾身のスイングも虚しく、佐賀の打球はショート正面に転がっている。ワンバウンド、ツーバウンド……。ショートを守る厚木は危ない捕球動作から、上体を軽く捻ってスナップスローで一塁へ転送した。アウト。ガツテムは二塁釘付けで、2アウト走者二塁。打席には6番菅野が入った。

2アウトだ。菅野さんには悪いが、ルコフスク相手に菅野さんが粘ったり繋いだりという事は考えにくい。佐賀さんですら簡単に打ち取られたのだ。守備の間に記憶が飛んだりしてはたまったものではない。オレは井伏さんの手を振り解いた。

「でも、このままじゃ、おっかなくて守ってらんないですよ」

「大坂君の気持ちも良く分かるが、闇雲に動くんじゃない」

井伏さんは、もう腕を掴もうとはしなかった。掴んで強引に引き留めようとはしなかった。もう少し落ち着いたらどうだ。直接言葉に出さない分だけ、井伏さんの気持ちが伝わってくる。この人は、余計な事は言ったりやったりしない人なのだろう。

「そもそも、記憶を飛ばすような能力があるとしたら、それはとても強力な黒魔術だ。その辺のBランクCランクの魔力ではとても扱える代物じゃない。少なくともAランク、悪くすればSランクの術者だ。そんな奴と鉢合わせでもしたら、ただじゃ済まないぞ」

そうだ。再び記憶が消えるかもしれない。そうなれば、きつと返り討ちだ。今のオレは冷静に自重しているわけではない。恐怖で足がすくんでいる。AランクやSランクという評価基準がどの程度のものなのかは分からないが、手も足も出ない存在であろうという事は理解できた。

「あと、村長とも話したんだがな——」

村長とはヤソジさんの事だ。今は現職を退いているのだが、井伏さ

んは村長と呼んで慕っていた。井伏さんは、丁寧に言葉を選んで話を続けた。

「――大坂君の能力は、相手の魔道術を大幅に増幅させてしまうか、もしくは完全に消滅させてしまうかのいずれかだと思う」

どっちなんだ!?! オレは露骨に態度に出ていたらしい。

「戸惑うのも無理はないな。前者ならただ厄介なだけの能力。反対に後者ならほぼ無敵の能力だ。しかし、この両方の性質を持った能力だとしたらどうだ?」

だとすれば、扱いづらいことこの上ない。

「そんなに嫌そうな顔をするな。落ち着いて考えるんだ。あの場面、さっきの大坂君の打席で大坂君の記憶を飛ばす目的は何だと思う?」

「そりゃ、オレを警戒して、三振が取ればラッキー……。いやあ、それは無いか。それが出来るなら、オレじゃなくてガツテムさんに魔道術をかけるべきだった」

「ご名答。他に理由はあるかな?」

無いだろう。だいたいオレの能力は効きすぎてしまうか、無効化するかのいずれかだ。この仮定が正しいとして、無効化されるかもしれない魔道術を、リーグの規約を破ってまで使うリスクは大きい。しっかり効いたとしてもオレが審判に抗議した事で事実が発覚するのが関の山だ。もつとも、あの状況であればオレでなくても抗議をするだろう。

「そもそも、オレでなくても打席に立つ人間の記憶を奪うメリットがないですね。審判に抗議されれば不審に思う人間が現れて、外部からの干渉が発覚してしまうかも知れない」

「確かに。それは変だな」

これは見えざる敵が想定していなかった事かも知れない。いや、想定していなかったと考えるのが自然だ。冴える直感に心音が高く脈を打った。もし、オレにだけ黒魔術が効き過ぎていたのだとしたら。あの瞬間、記憶を飛ばされたのは球場にいた全員であり、オレの記憶だけが余計に飛ばされていたのだとしたら。それは、とある完璧な計画に綻びが生じた決定的瞬間となり得るだろう。

「どうだ、何かわかったのか？」

「井伏さん。もし、オレにだけ魔道術が効きすぎていたとしたら？」

「……ん？ それは、みんなの記憶が飛んでいて、大坂君の記憶だけが余分に飛んでるって事かい」

「その通りです」

「いやあ参ったねえ……」

井伏さんは緑の野球帽を被り直して耳の後ろ辺りを掻きむしった。白髪の混じる短い前髪が後退し始めて、広くなっている額が露わになる。

菅野さんは2ストライクまで追い込まれているものの、何とかグラヴィティーボールに喰らい付いていた。タイミングは合うのだ。ただ、打球が前に飛ばないのだ。それがもどかしい。

しかし、この試合で全員の記憶を飛ばす目的は何だろうか？

雷神バットの行く末が掛かっているとはいえ、今夜の試合はリーグ戦の結果には関係のないエキシビジョンマッチである。まさか、雷神バットが狙われているのだろうか。雷神バットはそれほどまでに価値のあるもののだろうか。

そもその発端は、このバットがガツテムさんの船室の入り口に立て掛けてあったことだ。今思えば、ピンクⅡパンサンを名乗る添え書きが非常に怪しい。茅野さんは、これを取り戻すために武装して船室の前に現れたし、島の北の端から東の端まで強行軍でやって来た。橘みずきは、単身これを持ち去ったが、どういう訳か今はルコフスク達が所有権を主張している。ちなみに、橘みずきの行方は未だにわかっていない。

雷神バットを狙う誰かが、球場にいる全員の記憶を飛ばしたと仮定してみよう。球場に忍び込んで、ルコフスク達が所有する雷神バットを奪ったのだ。フットレイクスベンチはその事実におそらくまだ気が付いていない。全員の記憶を完璧に同じだけ飛ばしていれば、彼らの完全犯罪は成立していたであろう。しかし、ここにいる馬鹿な一人の男が事実をややこしくしてしまった。オレ一人が、鍵を握らされてしまっている。この鍵で開く扉が、どこへ続いているのかわからない

が、今更無関心を装う事は出来そうもない。何故ならば、二塁々上にいる男が扉の先へ行きたがっているのだ。彼は、この大会で優勝しなければならぬと言ったし、この試合に勝つて雷神バットを取り返す事に躍起になっているからだ。

カキン！

力のないポップフライが内野に上がった。セカンドの金が声をかけて内野陣を制すると、グラブにボールが吸い込まれる。スリーアウトチエンジ。

4回表の攻撃を終えてスコアは2―4。フロツグスの反撃は1点にとどまった。

How to Breakthrough the Gravity Trap

四路が現在いるヴォクスルトゲートから、ルコフスク達が試合をするレイクサイドスタジアムまでは車でおよそ15分。これから、四路は敷地の西端に位置する隔離棟の様子を確認して、ルコフスクへ状況の報告を行わなければならないのだが、ここから敷地内を往復して戻るだけでも15分はかかるだろう。合計30分。30分あれば、試合はどれだけ進むだろうか。この30分の間、彼らは何をするつもりだろうか。

彼らとはもちろん、ゲートを襲った奴らの事である。奴らはルコフスクが配置した防御システム「グラヴィティートラップ」を掻い潜り敷地内に侵入し、何の痕跡も残さずにこの場を立ち去っている。

四路が見たところではグラヴィティートラップは問題なく作動している。トラップの基本構造は簡単だ。登録されたIDを持たない者が建物（あるいは敷地内）に侵入すると、局所的に超重力場が発生して侵入者を足止めする。この時、侵入者はその場に立っていることすら困難になり、悪くすれば転倒しただけで骨折や内臓破裂などの重傷を負う事になる。うずくまる侵入者を周囲のシャッターが取り囲むように閉まり（あるいは地中に埋められたコンクリート壁がせり上がり）包囲して、一時的に侵入者を拘束する仕組みになっている。もし、これらのシャッターや壁をこじ開けたり、破壊したり等の抵抗があれば、元軍人であるルコフスクが嗜好を凝らしたガスや火器などによる制圧措置が待ち構えている。

西の隔離棟のエントランスも、例外なくグラヴィティートラップが作動した痕跡がある。四路が扉の横にあるセンサーにPDAをかざして暗証番号を入力すると、ガラガラと音を立ててシャッターがゆっくりと開いていく。既にモニターで確認していた事だが、やはりそこには誰もいなかった。

これまでも、いくらかの不屈き者がトラップの強行突破を試みて

大怪我を負った事があつた。しかし、何の痕跡も残さずにここを通り過ぎた例は今までにない。外で倒れる警備員の姿を見れば、侵入者があつたことは明らかであるというのに。

「一体どうやって……？」

四路は周囲の警戒を怠ることなく隔離棟のエントランスに足を踏み入れた。彼女の存在をセンサーが感知すると、間もなく照明が点灯しエントランスの全体が見渡せるようになる。赤褐色のレンガのような石を積み上げた壁面に囲まれたエントランスには奥へ続く扉が3つある。小さな窓のある右の扉は職員の詰め所だ。左側にある簡素な木製の扉は倉庫だ。そして、正面にある鉄製の重厚な扉の向こうに上へと続く階段がある。

オートロックの鉄製の扉を開けると、ここにもまた赤褐色のレンガを積んだ階段がある。そして、階段を登りきった2階にも1階と同じような黒い鉄の扉がある。敷地内で唯一監視カメラの無いこの部屋は、滅多に使用されることは無いが、プライベートが保たれるため、ゲストルームとして使用したり、今回のように捕えた人間のうち、危険性が小さいと判断された人間を一時的に勾留するために使用される。コンコン。四路は扉をノックする。今のところ、聞こえるのは四路自身の呼吸音だけだ。少し乱れた呼吸音を四路は整える。

コンコン。もう一度、四路はノックする。これも反応がない。

そつと、四路は扉を開ける。ギギギイという蝶番の軋む音が石の壁に響く。扉を小さく開けて中に人影のない事を確かめると、今度は大きく開けて白くディスプレイが光るPDAで中の様子を照らしだした。

ギイイイ、イイ……

あまり手入れされていないベッドに、埃を被った机、牢屋よりは少しはマシな程度の家具が並んでいる。バケツにモップ、最低限の清掃用具があるのは、この住人に自分で掃除をしるよという無言のメッセージだ。部屋の中は、夜の冷気で冷え込んでいた。ここには、橘みずきの姿は無い。実際に自分の目で確かめても、まだ信じる気にはなれなかったが、この部屋に隠れるスペースなど存在しない。さらに、

この部屋には窓がない。スパイが脱出劇に使うような換気口もない。どのように橘みずきはこの部屋を脱出したのだろうか。壁をすり抜ける能力でもなければ不可能だろう。

「能力か……」

部屋の中をくまなく調べた四路は何かを思い出して部屋を後にした。急ぎ足で階段を降りる。背後で蝶番がギギイと軋む音と、オートロックがカチャリと錠を掛ける音を聞き届けながらエントランスを横切る。もう一度、東の管理棟まで引き返す。そもそも、試合を中座してまでゲートまで飛んできた理由が四路にはあつた。ミラージュゾーンについても調べなければならぬ。



雷神バットがルコフスクの手に渡るとなると話がややこしくなる。ゲートキーパーには独立してレアアイテムを取り扱う権限が与えられているからだ。彼らから、正規の方法で雷神バットを取り返すとすると、運営本部を経由する正式な書類の応酬が必要となる。ルコフスクが、返答を渋ったり遅延させるような事があれば、その分だけ雷神バットの回収が遅くなってしまう。この事態は何とかして避けたい。

一方で、フロッグスサイドに雷神バットがあれば、言葉は悪いが、力づくで取り返せばいい。未登録のクインテットスターだ。没収する理由はいくらでもある。つまり、この試合はフロッグスに勝ってもらわなければならない。それさえあれば差しあたつての問題はないだろう。まあ、ここまで事態が悪化すれば、厳しい処罰は避けられないだろうが、今ならまだそれだけで済むはずだ。

序盤の2回に菅野がつかまつた時はどうしたものかと考えたものだった。それが以降の彼は見事に立ち直つた。5年連続東地区代表となったチームのエースの實力は健在だった。4回ウラの投球も危なげないもので、フットレイクス下位打線をまったく寄せ付けず7番、8番、9番と三者凡退にまとめ上げた。試合の流れは、フロッグスに傾きつつある。

しかし、ルゴフスクもなかなかの好投手である。5回表のフロッグスの攻撃を7番、8番、9番の下位打線とはいえピシヤリと3人で締め、簡単には流れを渡さない。憎らしい程の快投が続いた。

それにしても、この波水出というキャッチャーが捕球のたびに「うふん♪」とか「あはん♪」とか気持ち悪い声を上げるのは何とかならないものだろうか。不用意に注意して絡まれるのも御免だから、しばらくは黙認するとうしよう。とにかく、このまま行けばフロッグスに勝機はある筈だ。

5回ウラ。フットレイクスの打順は1番からの好打順だったが。菅野は1番綾瀬、2番三浦と連続三振に斬って取った。中盤に来てストレートのキレが増しているように見える。龍ヶ崎のリードも序盤の及び腰なそれとは異なり、インハイからアウトローへのストライクゾーンを広く使った配球で菅野の持ち味を上手く引き出している。

3番の波水出が右の打席に入る。元を糺(ただ)せば、龍ヶ崎の頑ななリードを崩しにかかったのはこのオトコだ。一瞬のコンタクトで選手の特徴を見抜き能力を引き出す。指導者としてはどれだけ優秀な事だろうか。その奇抜なルックスを除けばの話だが。

「あら、審判さん、何か言ったかしら」

「いや、何も……プレイ！」

まったく考えている事までお見通しか。その観察力があるからこそ、扇の要を任されているのだろう。打者としての波水出もその観察力を存分に発揮している。菅野の投球が増え、情報量が増えれば増えるだけ波水出有利となる打席。2ボール2ストライクからの高速スライダーを波水出のバットが捉えた。

カキン！

打球がサードの右側を抜けたかに思われたが、ショートの大坂のスタートが早かった。波水出の打球も芯を食っていたから、決して悪い当たりではない。それでも大坂は正面まで回り込んで打球を抑えていた。軽快にステップを踏んで一塁への正確なスローイング。これは一朝一夕で身につくものではない。長年に渡る鍛錬で身体に染みついていなければ出来ない動きだ。

だがしかし、どうも不自然だ。あの位置の打球を正面で捌くとなると、予めサード寄りの深い所に守備位置をとっていないければならぬだろう。センター返しを得意とする波水出が、あれだけ狭い三遊間を狙い撃ちするだろうか？ また、経験豊富な大坂が、データがほとんど無い打者に対して何の根拠もなく二遊間を極端に広く開けるようなポジションニングをするだろうか。

不自然と言えば、大坂には4回の第2打席で奇妙な抗議をされている。彼は、船に乗って来たメンバーの中では一番の常識人だと思う。野球の覚えのある真つ当な思考の人間が、あんな無益な抗議をするだろうか。彼の動きには少し気をつけた方が良くかもしれない。何らかの能力の片鱗が彼に牙を剥き、あるいは彼を手助けしている可能性がある。予期しない能力が発動された時でも、審判はルールに基づいたジャッジを行い、試合を進めなければならないのだから。



東の管理棟に戻った四路はステルスコンピューターで魔道術の検索を掛ける。検索先は運営本部直轄の魔道研究所のデータバンクだ。検索と言えば聞こえはいいが事実上のハッキング行為だ。もしバレるような事があれば、タダでは済まされまいだろう。

様々な暗号データの羅列から、必要な情報を探し当てていく……先にヒットしたのは「壁をすり抜ける」能力だ。野球への応用名はピンクボール。ピンク色に輝くボールがバットをすり抜けてしまうらしい。こんな物理法則を無視した能力はもちろんSランク魔道術だ。術者名はピンクⅡパンサン。

「聞かない名前……」

これだけの能力者ならばタイトルランキングに絡んでいてもおかしくないだろう。バットに当たらないのだ。三振の取り放題だろう。余程、チーム事情に恵まれていないか、あるいは、能力の発動条件に大きな制約でもあるのだろうか。いずれにしても、こんなチート能力がほいほい使われてはたまらない。四路は側にあるメモ用紙に能力

と術者の名前を控える。

しかし、これだけでは説明がつかない。壁をすり抜ける能力だけでは、グラヴィティートラップを回避できない。仮に、10倍の重力に耐えうる強靱な肉体の持ち主だったとしても、トラップ内を不用意に動きまわれれば麻酔弾や催眠ガスなどの二次トラップが発動する仕組みになっている。橘みずきの奪還には複数名が関与していることになる。それも、かなりのレベルの黒魔術者だ。

四路は左手をキーボードに添えたまま、右手で目頭を覆い、指の間から暗号解読のプログラムのソースが流れていくモニターを眺めながら考えた。敵は思ったよりも強大かも知れない。ルコフスクが言っていた通り、雷神バットの当初の納品先についても調べておく必要があるそうだ。ピピピツと電子音が鳴り、暗号解読が終了した事を知らせる。

「……………っ!!」

解読結果に四路は再び驚かされた。

ミラージゾーンの前は17年前に引退していたからだ。そして、現在彼女は行方不明らしい。名前は品野珠恵。能力の詳細は……データなし。

これらを確認したところで、モニターを軽快に流れていた暗号解読コードが突然停止して、赤字のエラーコードが猛スピードで流れ始めた。

「……………これ以上の深追いは禁物ね」

四路は予め用意しておいたソースを入力して、侵入した痕跡を消し去っていく。やがてエラーコードが消えて、モニターには通常のデスクトップ画面だけが残された。彼女は大きく深呼吸をすると、椅子の背もたれに寄り掛かったまま背伸びをした。そして、紺色のタイトスカートのポケットに手を伸ばすと、彼女はPDAを取り出してルコフスクのIDを呼び出し、そのまま耳にあてた。

プルルルル。プルルルル……………

しかし、呼び出し音が鳴るばかりでルコフスクが応答する様子がない。守備の最中なのだろうか。

ルコフスクは試合中なら大丈夫だと言ったが、きつとこれは方便だ。Sクラス能力者が試合終了まで、指を啞えて球場の入り口で出待ちをしている画はとても想像できない。奴らはとても周到に準備をしていたように思える。

ならばと四路は考える。ベンチにもメンバーが控えている状況で、どうやって部外者が雷神バットを持ち出すのだろうか。テレキネシスでそーつと持ち出そうか。いやいや、ベンチの中をバットが勝手に動いていれば、誰もがその光景に驚き不審に思うに違いない。

雷神バットを失うだけならば、それほど大きな損害は無いだろう。しかし、今夜の試合は雷神バットを賭けた勝負である。万が一、雷神バットを失った状態で試合に負けるような事になれば、これは取り返しつかない事態になる。試合の結果により、あらかじめ決められた物品の取引が成り立たなかった場合は、それと同等と認められる金品で補填されることになる。後から、無かったことにはできないのだ。7つしかその存在が確認されていないクインテットスターの価値を想像するだけで、彼女は気が遠くなりそうだった。

居ても立ってもいられなくなった四路は携帯ラジオのスイッチを入れた。試合の経過を確認せずにはいられない。今夜の試合は東地区でネット中継されているのが幸いである。

Don't think, Feel

「——現在、一塁々上にいます矢部はサードへの内野安打で出塁。ドン詰まりの当たりが功を奏しました。闘志溢れるヘッドスライディングも印象的でしたね」

「そうですね。あのようなプレイがあると、チームの士気も高まりますからね」

「さて6回表のフロッグスの攻撃は、先頭の矢部が出塁しまして、ノーアウトランナー一塁。そして、打席には2番の永瀬。今夜の永瀬は2打数の1安打です。前の打席はセーフティーバントで出塁していましたが、この打席は既にバットを横に寝かせて送りバントの構え。2点差ありますが、セオリー通り送ってきますでしょうか？」

「今のところ、ルコフスク選手のグラヴィティーボールとまともに勝負できているのは4番のガツテム選手だけですからね。ランナーを進めて、彼まで繋ぎたいですね」

「そのガツテムですが、今夜は2打数の2安打。ソロホームランとタイムリーヒットで2打点と当たっております。打席の永瀬も、ここは奇を衒わずに、きっちり決めたい場面です。ルコフスクがセットポジションから、第1球を……投げました！ バントしましたが、ファール！ 送れません。カウントはノーボール1ストライクです。やはり、グラヴィティーボールですと、簡単には送らせてもらえませんか？」

「そうですね。当てるだけでは球威に押し負けてしまいますから、感覚的にはプッシュバントの近いものがあるのではないのでしょうか」

「永瀬はもう一度バントの構えを見せています。その永瀬をちらりと一瞥しましたキャッチャーの波水出。ルコフスクがセットポジションに入る。さあ、足が上がりつつ第2球を……投げました！ バントしたか？ これはピッチャーへの小フライになる！ ルコフスクは前に……!? 出てきません！ ワンバウンドさせてから打球を処理。落ち着いて二塁へ送球、アウト。そして一塁にも転送……ダブルプレイ!! 1—6—3と渡りまして2アウトランナーなしと変わりました。」

いやあ、奈加乃さん、勿体ないですねえ」

「ルコフスク選手は、あえてグラヴィティーボールを投げませんでしたね」

「普通のストレートという事ですか？」

「ええ。永瀬選手がボールの勢いに負けないようにと強くバットを出した分だけ、打球の勢いを殺せませんでした」

「それで、中途半端な小フライになったわけですね。この辺りも、駆け引きがあつたのかどうか……」

「ルコフスク選手の打球処理もしたたかでした」

「さあ、試合の流れが、フロッグスサイドに傾きかけていたところではありましたが、ぐつとまたここでイーブンに、あるいはフットレイクスサイドに傾くのではないか、そんなプレイでした。2アウト、ランナーが無くなりまして、打席には3番大坂が入ります。回は6回の表です。スコアは2―4でフロッグスが2点のビハインド。今夜の大坂はキャッチャーへのファールフライと三振です。ルコフスク相手に少し分が悪いでしょうか」

「グラヴィティーボールとは言っても、完全無欠な黒魔術ではありませんから、何とか糸口を見つけ……」

カキンッ！

「――初球打ちいいっ!! ライトへ打球が上がっている!! 風に乗って打球がぐんぐん伸びていくぞ! 伸びて!! 伸びて!! ……これはどうだ?!!」



情報というものはいつも正しいとは限らない。嘘の情報に惑わされ、踊らされ、時には騙され、大きな損害を被る事もある。だからと言つて、耳を塞いでいては、何も得ることはできないだろう。知らない事に居直つて努力を怠れば、いつか痛い目を見るだろう。与えられた、あるいは得た情報の真偽を確かめる方法は一様ではないが、最も確かな方法は、自分の目で確かめる事だ。百聞は一見に如かずとは古

よりの諺である。

7つあると予言されていたクインテットスターレアアイテムの最後の1つ「雷神バット」が発見され、第8次招待選手団と一緒に島に移送される。それは田舎町の酒場の口が達者な常連客の与太話でしかなかったが、信じるに足る根拠がないわけではなかった。常連客は虚実交えて語り、酒の席を楽しんでいるようだが、その嘘を覆うリアリティーがあまりにも緻密で巧妙で辻褃の合うものであれば、それを嘘と決めつけるのはいささか野暮というものだ。信じてみるのが男のロマンだろう。周りの人間も面白がって尾ひれを付けるものだから、話はいつの間にか膨らんでいく。

さて、第8次招待選手団を乗せた豪華客船セントラルバード号が制御不能に陥り港に衝突・座礁したのは昨日の事だ。これにはクインテットスターレアアイテムが乗っていたという。だとすれば、一部の礼儀知らずな者どもは鵜の目鷹の目で群がり、物盗りに走ったことだろう。そして、警察はこれを根こそぎ検挙して回っただろう。しかし、検挙されるのは下つ端のチンピラどもだ。クインテットスターレアを狙う大物に、そんな迂闊な末路は似合わない。彼らは、もつと用意周到な計画を立て、抜かりのない準備をして、慎重かつ大胆に事を運ぶはずだ。

翌日、それはつまり今日の事だが、船の警備責任者の男と、乗客の女が一人行方をくらましている事が公表された。さあ、与太話の現実味が加速していく。オセロゲームのように、さつきまでの嘘が現実塗りに替えられていく。今朝方、ヲヌマのカフェテラスで茅野と橘が同席している姿が目撃されたようだ。彼らの目的は一体何だろうか。いや、考えるのはやめよう。それは彼らにしか分からないことだ。しかし、想像してみよう。想像といっても、ジョン・レノンみたいに、理想郷を想像するわけではない。どちらかと言えば、ブルース・リーの到達した境地に近いだろうか。まあ、それは兎も角、彼らは混乱するリモア港を尻目に、南へと進路を取った。これはつまり南地区、あるいはそれを通り越して東地区に用事があるということが想像できる。

今日は南地区では大きなニュースが無かったのに対して、東地区では少々の、しかし多くの島民にしてみれば取るに足らない事件が起きていた。いままでメンバーすら揃わなかったパラキ村の弱小球団が、5年間土付かすのモンキースに勝利したのである。これによってフログスは解散を免れたが、反対にモンキースは突然の解散を宣告された。モンキースが負ければその時点で解散というのは、その筋では良く知られた話だったので、事情通であれば事情通である程、この結果には驚かなかつたであろう。だが、今日は違う。雷神バットの移送に大会運営本部が失敗したらしい今日は、些細な変化に敏感でいなければならぬ。

そんな中で、フログスとフットレイクスのナイトゲームが突如決行された。フログスはダブルヘッダーの強行日程だ。さあ、そろそろ核心に迫っているのではないかという手応えを感じるのではないだろうか。その手応えを胸に秘めた一人の男が今、レイクサイドスタジアムに到着した。

ピチピチに身体に張り付いた派手なサイクルジャージに、これまたよく目立つ赤いヘルメットの男は彼の愛車であるロードバイクにまたがって球場の正門に到着した。急遽決まったエキシビジョンマッチ、バスも鉄道もないと田舎の球場に観客などいない……男はそう考えていたが、どうやらその考えは甘かつたらしい。敷地内の駐車場の端に一人の少女がたたずんでいる。男はロードバイクから降りると、一人で立ちすくむその少女の前へと歩みを進めた。

少女は心ここにあらずで、ただぼんやりとそこに立ち尽くしていたが、自転車を押しながら歩いてくる派手な格好の男に気がつく、二人の視線が自ずと交錯した。

やがて、少女のかぶる緑色の野球帽が突然の風に飛ばされて、アスファルトの地面を転がっていくが、彼女はそれを拾おうとはしなかった。かなり明るい金色のショートヘアが風にあおられて、美しく乱れた。男は地面に転がるその野球帽を拾い上げた。緑地の野球帽には白色でFの刺繍が施されていた。それは男にとっても見慣れた口

ゴマークだった。そのロゴを冠するチームは今日、解散の危機を乗り越えたばかりであった。

「お嬢さん……！」

赤いヘルメットを外しながら男が呼びかけた。ヘルメットの中から汗にびっしり濡れている赤茶色の癖っ毛が現れて、長い前髪が彼の目元のあたりまでうねうねと降りてくる。男は我ながらキザな呼びかけだったなど自嘲的に笑ったが、少女はその笑顔に少し安堵しているようだった。やがて、彼女も微笑んだ。

派手なデザインのサイクルジャージはオシヤレとは言い難いが、かといって奇抜だったり野暮ったい印象もない。目の前に現れた男は悪い人間ではないのだろうと少女は感じていた。

「ありがとう……！」

少女は礼を述べながら帽子を受け取ったが、警戒心を解いたわけではないようだ。大きな瞳が男の人物像を見極めようとして、遠慮がちに上下する。色白で華奢な首筋はネイビーのタートルネックで包まれている。アンダーシャツのコントラストが暗闇に浮かびあがって、彼女の美しい容姿が際立った。

男もまた慎重な対応を心がけたが、事情通の彼は先手を打つ事ができた。

「あなたは、橘みずきさんですね。こんな所で何をしているんですか？ 試合はもうとっくに始まっていますよ？」

「そうね、まったく私ったら何をしているのでしょ……！」

彼女は否定しなかった。しかし、橘みずきの様子が少しおかしい。ひどく落ち込んで見えるように見える。確かに、彼女は先発メンバーからは外れている。何か事情があるのだろうか、あまり触れて欲しくないのだろうか。彼女は話題を変えるように質問を返してきた。

「あなたこそ何をしに来たの？ こんな地の果てまで野球観戦？」

「そうですね。当たらずとも、遠からずといったところでしょうか！」

橘の境遇が芳しくない事を知ってか知らずか、男は意地の悪そうな笑みをへらへら浮かべて曖昧に答えた。橘がここで取り乱せば男の思う壺であったが、橘もまたポーカーフエイスで目の前のサイクル

ジャージの男との会話に挑むことにした。事あるごとにうねうねの前髪をいじる仕草が気が散って仕方ないが、今はそれどころではない。

「とても、試合に興味があるようには見えませんが」

「ご明察です。ですが、あなたには少し興味があるかも知れないですね」

男が握手を求めてきたが、咄嗟に橘は手を払いのけた。

「この状況でナンパ？ 馴れ馴れしく触らないですよ！」

「これは失敬。申し遅れましたが、私は元イーストタウンタワーズの保谷掟と言います」

「イーストタウンタワーズ……？」

「ご存じないのも無理はありませんね。イーストタウンタワーズは東地区で最も歴史のあったチームでしたが、残念ながら一昨年の大会を最後に解散していて、今は存在しないチームです」

保谷と名乗った男は饒舌に喋ったが、橘にはあまり関心がない事だった。この男を無視して橘は立ち去りたかったが、だからと言って、こんな夜中に行くあてなどなかった。橘は黙って男の言葉に耳を傾ける事にした。

「私の事は興味ありませんか。まあ、仕方ありませんね」

いちいちカンに触る喋り方をする男だと橘は思った。こちらの事はお見通しで、反応を伺いながら話を紡いでいく態度がハナにつく。「では、こんなお話はご存知でしょうか。昨日、島の外からこの夏の本大会に向けて何人もの選手が招待されています。外地とは縁の薄いこの島ではとても珍しいことですが、前例がないわけではありませんん」

「それがどうかしたの？」

「私も含めて、島の人間は皆歓迎していますよ」

保谷は暖かい笑みで答えたが、橘の作り笑顔は凍りついたままだ。しかし、保谷は構わずに核心へと話しを続けた。

「それから、ご存知かはわかりませんが、1本のバットがこの島に持ち込まれました」

「……」

「島の噂好きな人間はもうこの話題で持ちきりです。そのバットはとも価値のある物で値段はともじやないがつけられないでしょう。そして、運営本部の不手際でそのバットは現在行方不明のようです。まあ、そんなヤバい事を表沙汰になんてできませんが、運営本部を巻き込んだ争奪戦が始まるのは時間の問題でしょうね」

「何を……知ってるの?」

「何も知りませんよ。あくまでも、根拠のない噂話です」

「そうなの……」

橘は小声で相槌を打った。そして不安そうな表情でうつむき、自分の慎ましい胸元から、程良く引き締まったヒップまでのラインを目で追いかけた。やがて、彼女は視線を上げて保谷を見上げる。よく見れば、そこまで顔立ちが悪くない男だった。性格は悪そうだったが、頭は悪くないのだろう。少しだけなら頼ってもいいかもしれない。

「……ピンクⅡパンサンという男を知っていますか?」

「……!? 知らないな」

「船の上で、彼に声を掛けられたんです。彼の指示で私は行動してしました。甘い言葉に誘われて、我ながら浅はかだったなと後悔しています。それから、もう一人病弱そうな人と行動を共にしていました。名前はわかりません。その人は、ピンクⅡパンサンに『オーさん』と呼ばれていました」

「オーさん?」

保谷の表情がにわかになんだが、球場入口の自販機の明かりが逆光線となり、橘はその表情を上手く確認できなかった。保谷のわずかな疑念は、橘に悟られることがなかった。

「どこかの国の王様なんですかね? だったら『さん』付けは変ですね」

「そうだな……」

オーという名前は有り触れてはいないが、名前やニックネームとしてあっても不思議ではない。しかし、オーという名前は、この島では禁忌に等しい。迂闊に口に出すことすら憚られる名前だ。島の外か

ら来て知らなかった可能性もあるが、周到な準備を進めていたであろう彼らが島の事情に疎いとは考え難い。

「その、オーという男、何才ぐらいだった？」

「えっ？ 顔はほとんど包帯で覆われていてよく見えなかったけど、声の感じからすると30代から40代といったところかしら」

世の中には知らない方が良い情報もある。知らぬが仏。知りすぎた男がトラブルに巻き込まれていく悲劇は古今東西尽きることはない。過ぎたるは及ばざるが如し。保谷はこれ以上は関わらない方が良くないと直感した。とても、一端の情報屋が抱え込んでいい事案ではない。

「そうか。時に橘さん、こんなところで立ち話もなんだから試合見ながら話しませんか」

「げっ!! オヤジギャグ……そういうの流行らないですよ」

一陣の冷たい風が二人の間を通り過ぎた。保谷は後ろにあった自販機のホットコーヒーをおごって許しを請うことにした。

Purple ”O”

「大坂君、ちょっといいかね？」

6 回表の攻撃前の円陣が解けると大坂は監督のヤソジに呼ばれた。フットレイクスの3番打者、波水出の打球はレフト前に本来なら抜ける当たりだったが、大坂は楽々回り込んでショートゴロに仕留めたのだ。彼のファインプレーをチームメイトは口を揃えて称えたが、ヤソジだけは厳しい表情のまま大坂を迎えた。

「実はですね——」

5 回ウラ、波水出の第3打席。菅野の投球に対して波水出はセンターから右方向を意識しているスイングだった。力任せにバットを振り回せば長打も十分狙える大柄な体つきだが、そのバッティングスタイルは本人のポリシーに反するらしく、彼は頑なに右打ちに徹していた。その事には、大坂も薄々感付いていたから、どちらかと言えば二遊間に意識が行っていた局面だ。

夏苗のサインは内へ切れ込むスライダー。これは、次の投球を活かすためのインサイドワークだったと思われるが、まあバッテリーの意図はともかく、結果は外角から甘く入る投球となってしまった。

波水出はこれを見逃すような打者ではない。力強い波水出のスウィングに、深く腰を落とす大坂の緊張感が一気に高まる。当初の予想に反して三遊間を強い打球が襲い、大坂が打球を追うのに見切りを付けたその時だった。

大坂を取り巻く、すべての時間が止まったのだ！



ダメ元でグラブを出す井伏さんも、捕球態勢に入る鹿島さんも、立ち上がり指示を出す夏苗も、打球の行方を確認してスタートを切る波水出さんも、みんなの動きが一斉に止まった。

打球は……!?

打球も三塁アンツーカーの少し後ろ、地面から30センチほど跳ね上がったところで停止している。あの時、あの場で視線を巡らせて、動いているのはオレだけだった。今思えば、色々見ておくべきものはあったはずだが、あの時のオレは純粹な野球少年でしかなかった。いや、もう少年なんて歳じやないから、野球バカといったところか。誰が見ても内野の間を抜けたであろうヒット性の当たりを止める達成感は何度味わっても心地の良いものだし、かつて身体に刷り込まれていたノックにより、打球は追いかけるものだと、この足が、身体が考えずとも動いていた。あと数瞬、ボールが止まってくれば！ 球際でその経験を何度した事かわからない。その数瞬が、いま、ここに降りてきた。その誘惑に、ただただ乗せられただけのオレは、やっぱり馬鹿だったと思う。



大坂は、素手でボールを掴んだが、それは空中に浮かんでいるにも関わらず、万力で固定されているかのようにピクリとも動かなかった。

突いても叩いても動かない。停止した時間の中で、動く事を許されているのは自分だけらしい。まさかこのまま世界が永遠に凍りついてしまうのではないかという不安に大坂は襲われたが、同時に、これが程なく終わってしまうかもしれないという疑念も湧き起こった。あるいはコンマ1秒後には、世界は急に動きを取り戻すかもしれない。そして、波水出の打球速度を脳内で反芻する。とても素手でキャッチできる打球ではなかったはずだ。慌てて一時停止しているボールから手を離し、思い立った大坂は打球の正面に回り込んで、しっかりと腰を落として基本の捕球姿勢を取った。

間もなく、時間が戻って来た。どれだけの時間が経過したのだろうか。そもそも、止まっている時間を計測することは可能なのだろうか。体感的には数分の出来事だったが、今となっては、その時間を計測する術は無い。

ミットの中に、確かな重みを感じた大坂は大きくステップを踏んで一塁ベースに入ったガツテムのもとへと送球した。

ヤソジは黙ってベンチに腰をかけて、腕組みをしたまま大坂の説明を聞いていた。すべて聞き終えたヤソジは、直立不動の大坂に座るように促すと、ぽつりぽつりと独り言のように喋りはじめた。

「……そうか。実は、時間を止める魔術は禁忌とされているの。他の一般的な黒魔術と区別するために暗黒魔術と呼ばれているんじゃない。周りに与える影響が大きすぎるからの。しかしまあ、今は能書きを並べても仕方あるまい。暗黒魔術の話はひとまず置いておくとして、時に大坂君、覚悟はいいかね？」

ヤソジは改めて大坂の方へと向き直った。黒々とした瞳を宿した目を細めると、目じりの細かい皺が深く刻み込まれていく。才気ある若者を見出した時というのは、その潜在能力を何とか引き出して、彼の将来性を期待してしまうものだ。



この回先頭の矢部はサードに緩いゴロを転がした。フットレイクスの三塁手が猛ダツシュで前進してくる。しかし、捕手と三塁手の間あの近辺は、実は矢部のヒットゾーンでもある。バッティングの調子が戻らない時も、超高校級のエースと対峙した時も、あのエリアに転がった打球がたびたび内野安打となった。高校時代、特別打撃に秀でていたわけではない矢部がレギュラーとして定着できたのは、泥臭いながらも、ここぞという局面では結果を残してきたからだ。

打った直後のスタートは衰えていなかった。少し緩くなっているウエストに、かつての韋駄天の面影は無いが、一番打者としては及第点のスピードを維持したまま一塁ベースへと矢部は飛び込んだ。

「セーフー」

間一髪の内野安打でも、教科書通りのクリーンヒットでも出塁は出塁である。むくりと起き上がった矢部は、トレードマークの分厚いメ

ガネをかけ直すと、三塁側ベンチへ自分の功績をアピールした。中盤の6回、2点差を追いかける場面。言うまでもなく、このランナーは大事に進めたい。

ポコン！

しかし、2番打者永瀬の送りバントはピッチャーへの中途半端な小フライになった。スタートを躊躇した矢部の動きを視界に捉えたルコフスクは、ショートバウンドでこれを捌くと、すぐに二塁へ転送して流れるようなダブルプレーが完成した。これは、仕事の合間で野球をやっている人達がにわかに来るようなプレイではない。日頃から、様々な状況を想定した練習を重ねていなければ、咄嗟の連携プレイは叶わないだろう。

大坂が打席に入ったのは、そんな局面だ。2死走者なし。

ランナーがいなくなってしまったのは惜しいが、ここで手を拱（こまね）くわけにはいかない。大坂が現在の状況を優位に進めるためには、キャッチャーの波水出に何かを悟られる前に事を起こさなければならぬ。狙うは初球だ。

ヤソジに覚悟を問われて、答えに窮した大坂だったが、後戻りすることは考えていなかった。そうなれば、自ずと答えはYESである。大坂の答えを聞いたヤソジは以下のように続けた。

「大坂君の能力は言ってみれば終生免疫のようなものじゃ。おたふく風邪とか、麻疹とか、子供の時に一度かかってしまえば大人になってからもかかる心配はない病気と似ているかもしれない。はじめの一撃は、人よりも過敏にアレルギーのような反応をしてしまうが、一方で、二撃目以降は打ち消してしまう能力である可能性が高い。あくまでも、ここまでの結果を踏まえての仮説じゃが、さつきは確かに暗黒魔術を打ち消したんじや。次の打席で、試してみるといい」

一度経験した魔道術は、二度目は効かないようだ。大坂にも心当たりがないわけではない。

では、グラヴィティーボールが打ち消されたルコフスクの投球が如何なるものなのか。考えるまでもない。140Km/h台中盤の何

の変哲もないストレートである。高速スライダーやSFFも意識しながら打つ150km/h台のストレートよりも余程打ちやすい。

大坂は球種に狙いを絞って左の打席に立つ。目の前でチャンスを潰された後で、集中力を維持することは容易ではないが、大坂は新鮮な気持ちで打席に立つ事ができていた。

ルコフスクの初球は膝元へのストレート。このコースを打つコツは脇を締めてコンパクトに振り抜くこと！

カキイーン！

スタジアムに乾いた金属音が響いた。ライト方向に高く舞い上がった打球が、レフトからの風に煽られて伸びていく。

白球はライトフェンスを直撃すると、大きくクツションして外野グラウンドを転々とした、ボールが内野に戻る間に大坂は三塁まで到達していた。

予想外の長打にフットレイクスの野手たちがざわついている中、マウンド上の男は一切の動揺を見せなかった。

「お主、なかなかやるではないか！ ガハハハハ！」

ベースオンストップの大坂にグローブをかざして、豪快に笑って見せた。

「ちよつと！ 笑い事じゃないわよ！」

タイムを取った波水出が、大きな身体を揺らしながらマウンドへ駆けっていく。

「何で、グラヴィティーボールを投げなかったの？」

「投げたさ。でも、あいつは何かコツを得たように見える。底の知れん男よ」

「褒めてる場合?! 次はガツテムよ。どうするの?」

「波水出君。まだ我々が2点リードしているが、このゲーム、次の1点を取った方が制するとは思わんかね?」

「勝負したくないなら、はっきり言いなさいよ」

「別に、逃げる訳じゃないんだがな……」

「何ツンデレみたいな事言ってるのよ！ ここは勝負に決まってるじゃない。周りを良く見て。今の三塁打でチームに動揺が広がって

るわ。ここでガツテムを敬遠すれば、傷口を広げるわよ。3倍と5倍でカウントを整えて、10倍でケリをつけましょう。きっちり引導を渡すのよ」

「それも一興だな。しかし、波水出君はそれで大丈夫なのかね？」

「アタシは平気よ。丈夫だけが取り柄なんだから」

「うむ。ならば安心だ。どうやら、吾輩は部下に恵まれているようだ。ガハハ！」

「アタシへの気遣いなんて無用よ。後できっちり返してもらうんだから」

波水出はミットをパクパクさせてルコフスクの分厚い胸板を揉みほぐす仕草を見せてからホームへと踵を返した。ルコフスクは波水出に余計な気を回した事を後悔しながらロジンバックを拾い上げ、掌の上で弾ませながら波水出の後ろ姿を見送った。確かに、力を出し惜しみをするような展開ではない。この局面で勝負を提案してきた波水出はやはり漢だとルコフスクは思った。



「——さっき、時間が止まったとか言っていますんでした？」

スコアブックに三塁打を記録した加藤がヤソジに尋ねた。

「いかにも」

「時間を止める術者なんて、私は1人しか知りませんが……」

「奇遇じやのう。ワシも1人だけ心当たりがある」

「……パープルIIオーですよね？」

「ほほう、ご存知かね？」

「野球超人伝の最後の1ページの解釈を巡り大会運営本部と争いになって、最後は登録抹消（この島では極刑に相当）となった反逆者だと教わりました」

「うむ。概ねその通りじゃ。野球超人伝最後の1ページの解釈は、今も意見が分かれるところじゃが、彼の見解は異端じゃったからの」「異端？」

「ああ、パープルオーの導いた結論は運営本部の転覆じゃよ。そんな物騒な解釈を運営側が認めるわけにはいかないじゃろう。彼も誤りを認めて、意見を取り下げれば良かったものを、彼は自分の意志を貫き通した。半分意固地になっていただけじゃろうが、一方で、それは彼の絶対の自信の裏返しとも受け取れた。とにかく、そんな愚かしい解釈は日の目を見ることもないまま、闇に葬り去られたんじゃよ」

「ヤソジさんは、パープルオーの解釈は正しいと思いますか？」

「どうじゃろうな。直接見たり聞いたりした訳ではないからの。ただ、簡単にペテン師と決めつけてしまうのは、ちと惜しいとは思わな
いかね？」

「そうですね……」

メキャット！

またしてもバットが折れる音が響く。ボールは勢いよくファールグラウンドを転がって、ヤソジ達が陣取る三塁側ベンチへと飛び込んだ。「危ない！」チームメイトの叫び声に、加藤の言葉が掻き消されて、ベンチの中を硬球が弾んだ。

佐賀がのしのしとベンチに戻ってくると、バットケースから残り少なくなつた木製バットを引き抜いて、ガツテムへと手渡した。

「今のが3倍か？」

「タブンソウテース サンバイヲフェアーグラウンドニ飛バスノハシナンノワザデース」

打席の外で2回素振りをして新しいバットの感触を確認してから、ガツテムは打席に入った。2死ながらも走者三塁。3倍のグラヴィティーボールに対応しつつある男の打撃センスに期待を寄せて、ベンチの中が静まり返る。ヒット1本出れば、それでいい。

ルコフスクの第2球目が指先から放たれると、それは確かに黒い尾のようなものを引いていた。

パキャン！

聞いた事もない怪音を残して、バットが木端微塵に砕け散る。

「ストライーク！」

しかし、ボールは波水出が確かにキャッチしていた。パーンと皮が

張り裂けるような捕球音が響く。

「あふん♪」

波水出は今まで通り奇妙な喘ぎ声をあげて捕球していたが、切羽詰まった表情だ。彼の頬を冷たい汗が伝っていく。これまでの饒舌は影を潜めて口数も少ない。この変化を打席のガツテムは見逃さなかった。グラヴィティーボールは投げるルコフスクよりも、受ける波水出の方に負担が大きいのだ。今のおそらく5倍のグラヴィティーボールだ。そして、次の決め球が10倍のグラヴィティーボール。

「グラヴィティーボールノタマカズセイゲンハ ルコフスクノマジックポイントニイゾンシテルワケデハナイノデスネ？」

ガツテムはそう言い残して打席を外すと、次のバットを取りにネクストバッタースサークルに座る佐賀の元へと向かった。しかし、佐賀からは木製のバットを受け取らずに、佐賀が愛用している黒い金属バットを受け取る。佐賀のバットを一振りしたガツテムは、黒く光るバットの重さを確かめるように、じっくりと眺めた。

一般的に長距離打者はバットの遠心力を利用してボールを遠くまで飛ばせるように、先端に重心のあるトップバランス仕様のバットを好んで使う事が多いと言われている。しかし、意外にもそのバットはバットコントロールを重視するミドルバランス仕様となっていた。これは、次のガツテムの考えにぴったりの仕様だった。

「コレヲ オカリシマース！」

「おい、何の真似だ？」

「次ハ タブン10バインノグラヴィティーボールガキマース」

釈然としない佐賀を尻目に、ガツテムは打席に入る。この刹那に、10倍グラヴィティーボールの攻略法を思い付いたというのだろうか。それとも、木製バットでは太刀打ちできないがための苦し紛れを選択なのか、佐賀には分からなかった。

カウントはノーボール2ストライクだが、絶対的なウイニングショットがあれば遊び球は不要だ。そして、チームの得点源である4番打者は、そのウイニングショットを確実に仕留めなければならな

い。

いつもよりやや広いオープンスタンスを取ると、ガツテムは黒く光るチタン合金のバットを下段に構えた。構えたというよりは、ただバットを持つているだけだ。ぶらぶらとバットを揺らしてタイミン
グを計っている。

「何を考えているか知らないけど、10倍はそんな思い付きで打てるほど甘くはないわよ」

「ヤツテミナケレバワカリマセーン」

「うふふ、無駄よ♪」

波水出は不敵に笑うと、ミットをポンと叩いて中腰になりベルトの高さでミットを構えた。

第3球のモーシオンをルコフスクが起こす。右手に握るボールから魔力が溢れて黒い煙に覆われる。弓のように全身を大きく撓（しな）らせて、鞭のように腕を振り降ろす頃には、黒い煙の間から赤い火花がバチバチと迸（ほとばし）り、ボールの威力が増幅されていく。やがて、砲弾のような直球がルコフスクの右腕から放たれた。

ガツテムは、向かってくる黒い揺らめきと赤い火花の中に潜む白球を見定めながら、バットを担ぎあげると、そのまま真下に向けて一気に振り降ろした。

バゴオーンツ！

ホームやや前方。爆発音が響いて大量の砂礫が舞い上がった。舞い上がった砂礫が爆風に乗って飛散し、三塁から二次リードを拡げる大坂にも襲いかかる。右腕で顔を覆いながら前方を確認するが、ホームの様子は土煙に霞んでわからない。ルコフスクがマウンドを駆け降りる影が本塁方向に消えていく。

ルコフスクがホームへ走るといふ事は!?! いやいや、考えるまでもない。2アウトなのだから、打ったらゴーだ。大坂も三塁アンツーカーの土を蹴った。



人影のないバックネット裏のスタンドに保谷が入ると、グラウンドからバゴンツという爆発音が響いて、思わず耳に手を当て表情を歪めた。

「無茶な打ち方をしやがる。しかし、それでいて、理に叶ってもいる……」

保谷が感心しているところに、やや遅れて橘も到着した。

「何があったの!?!」

鉦で薪を叩き割るようにガツテムがバットを振り降ろすと、ホーム前方の地面がクレーターのようになり、大小の砂礫とともに土煙が舞い上がった。グラウンドレベルでは視界が遮られているだろうが、上からは選手たちの動きが良く見える。バットを地面に叩きつけたガツテムは一塁へ走りだした。三塁走者の大坂もするするとベースを離れてホームを目指す。

物体に働く力は速度と重さに比例するから、それらを最小限にとどめるためにボールの真上から叩きつけるのは理屈の上では正しい選択だ。

しかし、それを生きたボールでやるとなれば別の話だ。真上からバットを振り降ろすという事は、バットの軌道とボールの軌道の交差するポイントは一点でしかない。このポイントを見誤ればボールはバットに当たらないし、当たったとしても、少しでもポイントが外れていれば、ボールの勢いにバットが弾き飛ばされてしまうだけだ。

ホームベースの前で波水出がきよきよと周囲をうかがっている。どうやら、ボールを見失っているらしい。

「下だ!・下っ!」

ルコフスクが大声で叫んでいる。言われるがままに、波水出は抉れた地面に両手と両膝を突いてまさぐり始める。よく耕された赤土の中に波水出がボールを発見すると、彼の視界に大坂の姿が現れるのはほとんど同時だった。

地面深くに突き刺さったボールを波水出は掴み揚げると、そのまま体を大きく捻って大坂の背中にタッチした。

大坂もまた、ボールを拾い上げる波水出の姿を捉えていた。咄嗟に

体を捻って、ベースの大外を指先が掠めるように本塁に滑り込めば、追いタッチの形になる。

本塁上に折り重なる大坂と波水出が主審の茅野を見上げる。大坂のスライディングで再び舞い上がっていた土埃が晴れると、茅野の右腕がすつと横に広げられた。

「セーフ」

茅野が短くコールした。

6回表、フロツグスが1点を返してスコアは3―4。なおもフロツグスの攻撃中――

The Reason

「今の、セーフだったか？」

バックネット裏のスタンドに腰掛けた保谷がぼそつと呟いた。わざとらしい物言いは、明らかに横に腰掛けた橘の意見を伺っている。魔道術を絡めた熱戦が繰り広げられるグラウンドとは異なり、ひんやりとした夜風が観客席では少し肌寒く感じられる。試合は一時中断して、茅野をはじめとする審判団が本塁前の抉れた地面に土を盛っているところだ。

「わからない。よく見てなかったけど、追いタッチだったでしょ？」

確かに、追いタッチはランナーの進行方向とタッチする野手の動きが同じ方向になるから判定がわかりにくいところだ。しかし、一番近くで試合を見ていた人間がセーフと言ったのだから、それはセーフであるべきだ。もつとも、橘にとっては目の前の試合の1つのプレイの判定がどうあろうと、あまり関心事ではない。

「全然興味なさそうだな？」

「そうね……」

「応援しないの？」

「うん。もういい、かな……」

橘は上の空で相槌を打った。赤土と少量の水を調合して、審判団がグラウンドの土を固めていく光景を虚ろな目で眺めている。荒れたグラウンドは、手際良く整地されていくが、橘の心はどこか荒んでいた。「この試合、どっちが勝つんだろうな？」

「どっちでもいいんじゃない？」

私にはもう関係のない、と橘は静かに答えた。頼る宛てがなくなつて後については来たものの、馴れ馴れしく話しかけてくる保谷が今となっては鬱陶しい。雷神バットはピンクⅡパンサン達が持ち去ってしまった。今、フットレイクスのベンチにあるのは精巧に作られたレプリカである。

「この試合、雷神バットをかけてるんだよね。じゃあ、仮にフットレイクスが勝ったでしょう。この場合は、ルコフスク達は雷神バットがレ

プリカにすり替わってしまった事に気がつかず、初めからレプリカを掴まされていたと勘違いしたままに事は終わるだろう。もし気が付いたとしても、あとの祭り。ルコフスクに打つ手はなく、ピンクⅡパンスンの思惑通りでめでたしめでたしだ」

「それで？ フロッグスが勝ったら？」

「うくん、フロッグスが勝った場合の方が、話がややこしいんだ」

橘の口ぶりは退屈そのものだ。気が強い性格もあって、余計にキツイ印象を受けるが、保谷は構わずに続けた。

「フロッグスが勝った場合、ルコフスクは雷神バットを渡さなければならぬ。エキシビジョンマッチとはいえ、試合前の契約は覆らないだろうな。午前中の試合で、本物の雷神バットの威力を知ってるガツテムや、生き字引のヤソジはすぐに贖物だと気が付くだろうね。そうなれば、そこでひと悶着は必然だな」

「そういう場合はどうなるの？」

「それはわからないよ。普通なら雷神バットと同等の価値のあるアイテムと交換して所で手を打つだろうが、クインテットスターレアアイテムと同等の価値を補償となると、その辺のレアアイテムだけでは不可能だろうな。取引を反故にされたことをフロッグスが運営本部に訴える事もできるが、そんな事をすれば運営本部が契約自体を差し押さえるだろう。まあ、約束を守れなかったルコフスクを更迭するくらいなら出来るかも知れないけど、そんな事してもフロッグスは一銭の得にもならない。それに、今回の騒動に一枚噛んでいたとなったら、フロッグスもお咎めなしとはいかないだろうからな」

「私、雷神バットが、そんなにすごい物だったなんて知らなかった」

「ああ、島の間人からすれば、宝くじを当てるようなもんだからな。いや、それ以上だ」



橘がピンクⅡパンスンに出会ったのはセントラルバード号の船の上だ。オリエンテーションの後の懇親パーティーに参加せずに甲板

で潮風に当たっているところに、彼は現れた。彼は船の整備員の恰好をしていたから、はじめはナンパでもしに来たのかと思ったが、実際はそうではなかった。2メートルは超えているであろう長身にサイズの合う作業着が用意できなかったらしく、裾からは彼のへそとよく鍛えて割れた腹筋が覗いていた。

会った当初の彼は、大会での優勝を約束するからある計画に協力してほしいと持ち掛けてきた。彼の計画は、船内のある倉庫から1本のバットを盗んでくるというものだったが、その内容はあまりにも荒唐無稽だった。

「あなた、頭おかしいんじゃないの?」

橘は、首が痛くなるほどの大みみず男を見上げると、物怖じ一つせずに告げた。彼は、倉庫の壁をすり抜けて盗んでくると言い放ったのだ。腹を抱えて笑う橘をピンクⅡパンサンは困り顔で見下ろしていた。

「悪い話ではないと思いますが?」

「それは、そうだけど、壁をすり抜けるって……あなた、エスパーなの?」

橘は仕方なく冗談に付き合う事にした。いい加減、船旅に退屈していたところだ。この船のどこかに雷神バットと言う伝説のバットがあつて、それを手に入れることができれば、島での大会で楽々優勝できるだろうと彼は説明した。橘は優勝賞金に興味はなかったが、どうせ参加するなら勝った方がいい。

そして、その直後、彼の言葉が冗談ではないことが判明する。

「……そろそろですね」

彼方の水平線を横切っていく名もない島々を眺めていると、ピンクⅡパンサンは突然もたれかかっていた手すりから身を起こした。何の予告もなく動き出した大みみず男に橘は驚いたが、彼の足が甲板の床に沈み込んでいることに更に驚かされた。橘はぽかんと口を開けたまま、大きな瞳を更に大きく見開いて首を上下させた。既にくるぶしの辺りまで、彼の身体は沈み込んでいた。

「嘘でしょ……」

ピンクⅡパンサンが少しずつ甲板に沈んでいく姿を、橘は呆気にとられて見送る事しか出来なかった。彼の足が、膝くらいまで沈み込むと、橘とピンクⅡパンサンの視線がほとんど同じ高さになる。

「島まではまだ距離があるので、今の魔力ではこのくらいのスピードが限界ですが、島が近くなれば、もっとスムーズに事を運べます。さあ、あなたも早く……」

ピンクⅡパンサンが橘の手を取ると、橘の足も徐々に床に飲み込まれていった。プリンのようなひんやりとして柔らかいものに包まれている感触に指先から覆われていく。やがてそれは脹脛、膝、太腿へと下から順番に侵食していく。それと同時に、橘の視線の位置も低く低くに下がっていく。

「しばらく目を閉じていて下さい」

橘が目を閉じると、やがて頭のとっぺんまでプリンのような柔らかい感触に包まれる。宙に浮かんでいるようなその感触の中を、下に下にと身体が降りていくのを感じる事ができた。しかし、やがてその感触が終わると橘の身体はスンと重力に引つ張られて勢いよく降下した。支えを失った身体に橘は慌てふためいたが、間もなくピンクⅡパンサンの両腕が彼女を受け止めた。

突然起こった摩訶不思議な出来事に、橘は抗議する事も忘れて目を白黒させていた。ピンクⅡパンサンは橘を優しく降ろすと。そこは船の最上階。懇親パーティーが催されている大ホールに続く廊下の一画だった。

「橘さん。あなたにお願いがあります。これはとても大事なお願いです。実はもう一人、私の仲間が船内に潜伏しています。しかし、彼はIDを持っていない。IDが無ければ船を降りる時のチェックをパスできないのは承知していますね。そこで、あなたには未登録のPD Aをひとつ用意して頂きたい」

「未登録の？ そんなの有る訳ないじゃない！ 私のはオリエンテーションの時に登録してしまったわ。他の人もそうじゃないかしら？」

ピンクⅡパンサンは大ホール入口の扉の方に視線を投げかけながら話を続けた。

「あの中にいる全員が、言われたとおりに登録手続きを完了させたと思えますか？」

「それは、あれだけ居れば1人くらいは……」

居るだろうか？ 橘の頭の中で素朴な疑問が沸き上がる。ここに集まった人間は1億円欲しさに集まった、言ってみれば目的のハッキリしている人達だ。事情はそれぞれに抱えているだろうが、登録しなければ話が先に進まない。1億円を求めて誰もが目をキラキラ輝かせている中に、そんなあまのじゃくが居るとはとても思えなかった。「惜しいですね。2人います。2人のうち、どちらかのPDAを拝借してきていただきたい」

「ドサクサに紛れて盗んで来いって事？」

「方法はお任せ致します」

ピンクⅡパンサンは2枚の写真を手渡した。彼の口ぶりは終始丁寧だったが、どこか気を許してはいけなない雰囲気は橘は感じていた。彼は更に続けた。

「もちろん、報酬はご用意いたします。しかし、あなたは金目の物に興味はなさそうだ。いかがでしょう？ 神童裕二郎と会う場所を我々が用意するというのは」

「どうして、それを知っているの？」

「私が、闇雲に声を掛けたと思いますか？」

思わない。橘は首を横に振った。しかし、これは願ってもいないチャンスだ。そして、ジャージ姿の自分の身なりを思い出した。こんな恰好では、場内で浮いてしまうに違いない。

「ねえ。着替えてきても、良いかしら？」

「もちろん。もし良ろしければ、これをお召しください。サイズもぴったりに仕立ててあります」

「ピンクⅡパンサンにピンクのドレス。悪くないわね。でも、スカートの方、ちょっと短すぎないかしら？」

「そのくらいの方が、魅力的ですよ。では、私はこれで失礼いたします。夕食後にあなたのお部屋に伺いますので、それまでにPDAを用意しておいてください」

大みみず男は長い手を振りながら去っていった。

橘も褒められて悪い気はしなかった。2人のうち、トロくさそうな方に橘は狙いを定めると、大ホールの扉を開け放った。勢いよく開いた扉に警備員がギョツとしていたが、彼はすぐにまた正面を向くと直立不動になった。

ホール内を見渡すと、壁際でくつろぐ彼らをすぐに見つけることができた。彼らは、ちやうど移動を始めたところだった。通りすぎるウェイターからシャンパングラスを受け取る様はぎこちなかったが、彼らはホール中央の人混みに紛れていく。願ってもいないチャンスを見すみす逃すような橘みずきではなかった。



橘は深くため息をついて顔を上げると、黒いバックスクリーンの電光表示されたスコアボードが目に入る。1イニングだけとはいえ、ともにプレイした仲間の名前がそこには連ねられていた。彼らは1点ずつ、苦しみながらも反撃を繰り返して試合を棄てていない。

諦めないで立ち向かうのは言うほど簡単なことではない。今の自分に置き換えてみる。胸に手を当てて、自分が島に赴いた理由をもう一度確認する。

「神童……神童裕二郎を知っていますか？」

「知ってるも何も……」

神童裕二郎は島を代表するサウスポーエースだ。知らないはずがない。西地区のあるチームでタイトル争いを現在進行形で繰り広げている。地区予選を突破して本大会にも出てくるであろう大本命だ。保谷は簡潔に説明した。

「神童のファンなのか？」

「ええ……。まあ……」

「同じ左ピッチャーだもんな。それに、あの甘いマスクだ女性ファンも多いのも頷ける。でも、意外とミーハーなんだな」

この島に神童がいる。それも西地区で活躍しているらしい。それ

がわかったただけでも大きな収穫だ。橘は保谷に礼を述べると立ち上がった。

「おい、待てよ。こんな夜中にどこに行こうってんだい？」

「どこでもいいでしょ？」

神童の話をした途端に橘の瞳に躍動感が生まれた。ただのミーハーな野球少女にしては切り替えが早すぎる。これは何かわけありかと保谷の推察に構うことなく、橘は野球選手にしては華奢な尻に付いた砂を払っている。

きつと、この世間知らずな少女は神童に会いに行くべく球場をいますぐ飛び出していくだろう。

「何か考えでもあるのか？」

「あなたには関係ない」

確かに、保谷には関係のないことだ。しかし、このまま夜道に飛び出して、野盗に襲われでもすれば寝覚めが悪い。引き止める筋合いはないが、このまま見送るわけにもいかない。

「……ひよつとして、神童と勝負したいのか？」

我ながら素っ頓狂な質問だと保谷は思ったが、橘にはよく効いたようだ。すでに球場を去ろうとしていた彼女は足を止めて、保谷を振り返った。

「フロッグスが勝てば、神童と戦えるかもしれない」

「何言ってるの？」

あながち的外れな質問でもなかったらしい。橘は食いついてきた。

「ただし、君がフロッグスのメンバーであることが条件だ」

「……いい、今更、どんな顔をしてチームに戻ればいいのか？ 私は雷神バットを盗んだ張本人なのよ」

「ダメ元で事情を話して、誠心誠意謝ればいいじゃないか」

それが、君の目的ならばね。と保谷は付け加えた。そして、今すぐフロッグスベンチに戻ってリリーフするように提案したが、橘は首を横に振った。

「この試合、雷神バットの顛末も気になるが、もう一つ大事な意味があるんだ。もしフロッグスが勝てば遠征プレーオフの権利が発生する。

ゲートのチームに勝てば隣接する地区の球団とプレーオフが可能になる。どういうことかわかるかい？ 東地区のルールでは本戦およびそれに準ずる試合での勝率が最も良いチームが地区代表の権利を有する事になるから、ここを突破すれば、フロッグスにも東地区代表となる目が出てくる」

「何なの、その都合の良いルール!？」

「都合良くなかないさ。フロッグスはここまで1勝7敗。今日の試合に勝っても2勝7敗。最低でも5連勝しなければ勝率が5割に戻らない。シーズン佳境の南地区にプレーオフを受けてくれるチームが5つもあるかどうか知らないし、試合が成立したとしても、フロッグスの戦力が及ぶかどうかはわからない。でも、本戦出場の可能性もゼロではなのが現状さ。本戦に出場できれば、いずれ神童裕二郎と対戦する日も来るかもしれないな」

彼は島の人間ならば誰しも戦ってみたいエースの一人だと保谷は続けた。

審判団がホームベースから放射線状に石灰でラインを引き始めた。試合は間もなく再開されるだろう。

橘はスタンドを後にして、通用口の階段を一步步降りる。真っ直ぐ進めば球場の外に出るが、右の廊下を進めば三塁側のベンチ・控室へと繋がっている。球場の形に従って緩いカーブを描いている廊下は、とても長い道のりに思えた。引き返すのは簡単なことだが、行かなければならない事情がある。島を訪れる目的は人それぞれだが、彼女もまた1億円に目が眩んで参加した訳ではなかった。その目的を果たさずには帰ることなどできない。その決意だけが、彼女の歩みを前に進める力となっていた。

本塁前の地面が大きく抉れてしまった。その後の始末は当事者達でやってもらいたいところだが、グラウンドに妙な細工をされるのも困りものだ。中ノ鳥島において、こういう場合は試合に関与しない第三者がグラウンド整備を行うのが通例である。レイクサイドスタジアムにはグラウンドキーパーは常駐していないから、それは審判団の仕事と相成った。

30 cm程の深さに抉れた地面は、グラヴィティーボールの凄まじい威力を物語っている。これを魔道術に頼ることなく弾き返したガッツテムの打撃センスには驚くばかりだが、荒れたグラウンドを元に戻す事がとても手の掛かる作業であることも、理解して頂きたいところだ。とはいえ、パラキ村営グラウンドでトンボ掛けをしていた彼の手付きを見れば、彼も人並み以上の苦労と経験を重ねていることは想像に難くない。愚痴るばかりでは捗らないので、作業を進めることにしよう。適量の水と赤土を混ぜながら地面を固めていく。漸く周囲の地面と馴染んで見分けがつかなくなってきた。後はトンボで均して、バッテリーボックスと一墨線、三墨線を引いて出来上がりだ。



いい塩梅に地面が締め固まった頃に、茅野のPDAが持ち主に着信を告げた。発信元は非通知だ。茅野は通話ボタンを押すと、恐る恐る耳に近付けていく。忘れてはいけない、彼は運営本部から逃亡中の身である。表向きこそ行方不明者の搜索依頼だが、油断はできない状況なのだ。

しばらくの沈黙の間にも、茅野の心音がドクンドクンと高鳴って、喉がカラカラに乾いていく。やるせない自らの立場に茅野は苛立ちを覚えたが、ここで取り乱しても始まらない。冷静に心を落ち着かせたところで、受話器の向こう側からは聞き慣れた同僚の声が聞こえた。声の主は原村だった。

『……もしもし？ 啓吾？』

「なんだ、原村か。脅かすなよ……」

茅野はホッと胸を撫で下ろした。茅野は安堵の表情を浮かべると、グラウンド整備の手を休めて現場を離れた。

『なんだとは何よ！ こっちだつて必死で探してたんだから。この電話だつてバレたらどうなることか!』

声を潜めてこそいるが、原村は少し興奮しているようだ。茅野は原村を労った後で、落ち着くように促すと、頼んでいた探し物について切り出した。そして、トンボを担いだままバックネット際まで移動する。

「……で、どうだった？」

『あつたわよ。でもこれ、ただのロボットの玩具じゃない。こんなもの拾つてどうするの?』

「まあ何だ、ちよつと、物好きな友人がいてな。状況が落ち着くまで預かっていてくれないか？」

『それは構わないけど、いつまでこんな事を続けるつもり?』

「心配するな。そう長くはかからないはずだ」

『啓吾が強がる時は、いつも上手くいっていない時よ』

「そう責めてくれるな」

茅野はおどけて答えたが、上手く笑う事が出来なかった。茅野の動揺を察した原村の口調が穏やかなトーンを取り戻した。

『いいから聞いて。雷神バットの奪還に特務部が動き始めたわ』

「特務部か。それはまずいな……」

『まずいなんてもんじゃないわよ！ 特務はあなたの身柄も拘束するつもりよ。こっちじゃ三才山隊長の責任問題にも発展しているの。佐久室長がご機嫌なのは良いんだけど……』

「あの二人は昔から犬猿の仲だからな。どっちかが凹めば、どっちかはご機嫌さ。今までもそうだったじゃないか」

『何を呑気なこと言ってるの？ あなたが逃亡しているせいで三才山隊長の立場も危ないのよ？ わかっているの?』

「わかってるよ。でも、あの人はそんなにヤワな人間じゃない」

『全然わかってない!』

再びヒートアップした原村の金きり声に、茅野は思わずPDAから耳を遠ざけた。原村は茅野の身を案じている旨をすぐ後で呟いたが、それは茅野の耳には届かなかったようだ。

「……ところで、特務部は誰が動いてるんだ?」

『神高龍よ』

「ああ、あのマザコン青二才か。俺も舐められたもんだな」

『またそうやって強がる。神高は目的のためには手段を選ばないわ。汚れ仕事も平気でやる』

「噂は聞いているよ……」

茅野は額に手を当てながら天を仰いだ。暗闇に青白く光るナイター照明が眩しい。茅野はカクテル光線を凝視して想いを廻らせた。このまま、どこか遠くへ逃げ去ってしまおうか……?」

『ねえ、ひとつ聞いていい?』

「何だ?」

『どうして逃げたの?』

「直感だ」

『えっ?』

「直感だよ。雷神バットがなくなって、そのままおめおめと申し訳ありませんでしたって頭を下げて事が収まったと思うかい?」

『だからって、逃亡なんて無責任すぎる』

「そうかもな。これじゃ、筋が通らない。反省はしてる。でも、後悔はしてないぜ」

『何カッコ付けてるのよ。バカ!』

「……っ!」

茅野が何かを言おうとする前に電話は切れた。言いかけた言葉を茅野は飲み込むとPDAを胸ポケットにそっとしまい、トンボを担いでバックネットを離れた。

残された審判団が丁寧にラインを引いている。間もなく試合を再開できるだろう。



「——ようやく、グラウンド整備が終わった模様です。フットレイクスのナインが守備に散っていきます。一塁ランナーのガツテムも、大きな身体を揺らしましてダイヤモンドを横切ります。ECBナイター中継。今夜はフログス×フットレイクスのエキシビジョンマッチの様子をお伝えしております。実況は私、荻窪譲二。解説にはプリティーガールズOGの高円寺奈加乃さんをお招きしております。さて、高円寺さん、状況を整理しましょう。6回表、フログスはキャッチャー波水出のフィルダースチョイスで1点を返しまして、スコアを3―4としました。これで1点差です。記録こそフィルダースチョイスとなりましたが、グラヴィティーボール10倍を攻略したと、言ってもいいですかね？」

「結果として1点もぎ獲りましたからね。土煙で視界が悪くなったのは不可抗力だったと思いますが、あの視界の悪い状況で波水出選手が一塁に投げるのは無謀というものです。一塁にカバーに入った選手も視界がほとんど効いていなかったでしょうから、目に見えるランナーに直接タッチを試みる判断は間違っていないかっただと思います」

「なるほど。丸腰で——魔道術を使わずに魔道術を攻略する際に、我々はよくこのような表現を使いますが——グラヴィティーボール10倍を攻略しました。グラヴィティーボール10倍はルコフスクの必殺と言ってもいい切り札です。この後の彼の投球に何か影響はあるでしょうか？」

「ルコフスク選手は、あまりそういう事を気にするようなタイプの選手ではないと思います。大坂選手に三塁打を打たれた後も笑い飛ばしていたくらいですからね。むしろ、変化があるとすれば、波水出選手のインサイドワークの方ではないでしょうか？」

「それはどういう事ですか？」

「次の打席で、ガツテム選手と勝負するか否か……ということですよ」

「ガツテムとの勝負を避ける局面が今後あり得るということですか？」

「そうですね。ただ、どの程度まで避けるかは決めかねていると思います。というか、後続の佐賀選手の調子次第ではありますが……」
「佐賀が凡退するようだと、フロッグスの追加点は難しいという事ですね」

「平たく申し上げますと、その通りです。ルコフスク選手と勝負出来ているガツテム選手が得点源である以上、フロッグスは彼と勝負せざるを得ない舞台を用意したいですね。今が6回ですから、彼の打席は悪くてももう一度回ってきます。この時に、ガツテム選手が敬遠、あるいは敬遠されないうまでも無理な勝負をしないという選択肢、そういう可能性をこの打席でどれだけ排除できるかが鍵になりますね」

「さて、投球練習が終わった模様です。5番の佐賀が右のバッターボックスに入りました。今日はレフトフライとショートゴロ。まだヒットはありません。佐賀もまた丸腰での魔道術攻略には定評がありません」

「佐賀選手の場合は勝負勘の鋭さと正確なバットコントロールが持ち味ですね。リーグ本戦でも、Cランク程度の魔道術には対応していますから、打てない事もないと思いますが……」

「情報を補足しますと、通常のグラヴィティボールがDランク。そして、グラヴィティボール3倍はCランク魔道術というのが運営本部公式のランキングであります。もちろん、これだけで魔道術の優劣が決まるわけではありませんが、ひとつの目安と言いましようか、魔力の強度を計る物指しの役割を担っています。中にはSランク越えの特Sなんていうランキングもあるようですが、ああ、これは奈加乃さんの方がご専門でしたね？」

「特Sというと暗黒魔術の事ですかね？ さすがに、私も特Sランカーとは対戦した事はないですよ。そもそも、特Sランクは使ったのかどうかすら我々にはわからない事が多いですからね」

「ルコフスクがセットポジション。じっくりとタメを作ります。まだ投げません。……まだ投げない。ようやく投球モーションを起す。第1球を投げました！ 打ちました！ ピッチャーライナーッ！ 捕りました！ 素晴らしい反応を見せましたルコフスク。これで3

アウト！」

「これはルコフスク選手の打球反応を褒めるしかありません」

「途中グラウンド整備を挟みましたが、フロッグスが1点を返しました。得点は3―4。1点差まで詰め寄りまして、6回表の攻撃を終えております。佐賀の調子は、どうご覧になりましたか？」

「ちよつと、今のコンタクトだけでは何とも言えませんね……」

「判断できませんか。さて、これから6回裏のフットレイクスの攻撃が始まりますが、フットレイクスサイド1塁側ベンチ前に円陣ができています。これは、珍しい光景です」

「そういえば、今日は今まで円陣は組んでいませんでしたね」

「1点差に迫られて、今一度気を引き締め直そう。そういう狙いが、あるいはあるのかも知れません。長身の金玉匂が円陣の中央に居るルコフスクと二言三言会話を交わしまして、円陣を抜け出します。そして、ゆっくりと打席へと向かいます。握りしめる長いバットが黒く光っております。妖しい雰囲気です」

「……」

「……スコアボードを見ますと、フロッグスが1点ずつ追い上げていく展開です。流れが徐々にはありますがフロッグスに傾き始めているのかな？ そんな印象ですが如何ですか？」

「終盤までに1点差まで漕ぎ着けることができたのは、とても大きいですね。1点差ならば、ルコフスク選手のグラヴィティーボールがいかに強力といえども望みはありますからね」

「ですが、この金という選手も非常に強力なバッター。気を抜けませんね」

「そうですね。本戦でも通用する実力を十分備えている打者だと思います」

「さて、投球練習が終わった模様です。茅野球審がプレイボール。菅野がゆっくり第1球のモーション。振りかぶって……投げました！」

キィー——ン！

「インコースの球初球打ちイッ——！ 物凄い角度で打球が上がっている！ レフトは一步も動けません！ 文句なーしっ！！ レフトスタンド最上段に突き刺さりました！！ コツコツと、コツコツと積み上げてきたフロツグスの反撃を嘲笑うかのような一閃で突き放しました！ 3—5!!」

「3回あたりから配球がワンパターンなので、気になってはいたので、ちよつと安易に入りすぎましたね」

「決して、甘い球ではありませんでした。しかし、初球のインハイを撃ち砕きました。……おや？ ここで？ 背番号82番、品野監督がベンチから出てきました——」

The better choice

油断大敵とはよく言ったものである。スポーツに限らずどの分野に於いても、一瞬の気の緩みが勝負の明暗を分けることは語り尽くされて久しい。フットレイクスの4番金玉句は6回まですべての打者が見送っていた初球のインハイを、容赦なく捉えた。

菅野のリリースの瞬間、その白球が決して自らの構えるミットには届かない事を夏苗は悟った。金のテイクバックはあまりにも隙がなく、そして自信に満ち溢れていたからだ。こうなると夏苗には金の打ち損じを祈る事しか出来ない。しかし、最近10試合で4割をマークしている強打者のスウィングは、そんなに生ぬるいものではなかった。

狙い澄ました一閃が、夏苗の頭上で煌めいて、白球は夜空高くに舞い上がった。

迂闊だった。しかし、後悔は先に立たない。ダイヤモンドを一周する金を背に、誰が誰とでもなく、内野陣はマウンドに集まった。

「あそこまで飛ばされたら逆に気持ちいいってもんだな」

井伏がレフトスタンドを振り返りながら引きつった笑みを浮かべている。

「打たれたのは仕方ありません。切り替えていきましょう」

永瀬の口ぶりもどこか上の空だ。試合の流れの中で、この1点は重くのしかかってくるのは明白だ。序盤の大量失点から、やっとの思いで1点差まで漕ぎ着けたばかりでの痛恨の失点である。点差は2点に広がった。フットレイクスのエース、ルコフスク相手に残り3回であと1点ならば何とか取り戻せるのではないかという望みが、あっさり蹴散らされる。

「マダ試合ハ オワツテイマセーン」

しかし、この試合で最も勝利に拘り、そして、最もチームに貢献している男はひたむきに明るく振る舞った。ふて腐ったり、誰かを責めたりする事もなかった。何となく沈みそうなチームの士気が、その一言で拭い去られていく。今ここで、勝負を捨てれば、これまでの苦勞

が水の泡となってしまうのは、ここにいる誰もが承知の事だ。

一同が顔を見合わせて、口には出さないうながらもお互いの意思を確認したところで、輪の外から声が掛かった。

「主ら。ちよいと聞いてくれまいか？」

三墨側のベンチから杖を突きながら、ヤソジが姿を覗かせている。

「菅野君。ここまで、よくやってくれた」

「じーさん、悪いな。折角いい流れだったのに……」

「いや、気にする事はない。勝負は時の運じゃからのう……」

菅野を励ましたところで、ヤソジは言い淀んだ。しばらくの沈黙に、一同は再び顔を見合わせたが、思い当たる節はない。

「……おじい様、仰りたい事があるなら、仰ってください」

「うむ。よかろう」

夏苗に促されて。ヤソジがようやく口を開いた。

「……橘君。出てきなさい」

ヤソジの視線に促されて、内野陣一同は三墨側ベンチ奥の扉に注目した。橘みずきは午前中の試合が終わった後、雷神バットを持ち逃げした女だ。一体、どんな心境でのこのこ戻って来たのだろうか。ましてや、今や雷神バットはフットトレイクスの手に渡っている。そもそも、彼女が余計な事をしなければ、この一戦だって必要のないものなのだ。ゆつくりと扉が開いて、フロッグスのユニフォーム姿の橘みずきが現れた。

彼女は俯いたまま、扉の前から動かない。すぐに謝罪の言葉があれば、まだいくらか穏やかに事は運んだかもしれないが、黙って俯いたままの彼女の態度は、好印象と呼べるものではなかった。しかし、今の状況を鑑みるに、橘のリリーフも選択肢としてそう悪いものではない。モンキース戦での快投は、誰もが記憶するところだ。監督の考えを、選手たちはすぐに理解した。彼女を受け入れるのであれば投手交代、受け入れないのであれば菅野続投。

ここでの判断基準は2つあるだろう。まず1つは、純粋に戦力として橘みずきにリリーフするかどうかだ。菅野に比べて球速の劣る橘へのリリーフが裏目に出る可能性は勿論否定できないが、キレ味鋭い

スクリーンボールと、低めへのコントロールは彼女の大きな武器である。これは、条件をクリアしていると言っているだろうか。

もう1点は、一度チームの和を乱した存在を受け入れるのかどうかということ。中ノ鳥島の野球リーグには教育思想的な概念はないから、選手の人柄だとか性格だとかは彼が持ち合わせている能力や技術に比べれば軽視されがちである。これは、お互いの利害が絡んだビジネスのそれに近い。しかし、野球は団体競技である。いざという時に、信頼関係に不安や亀裂が生じれば、大なり小なりプレイに影響が出るものである。

「オイラは菅野さんの続投で良いと思うでやんす！」

矢部は早々に結論が出たらしいが、この島では野球が生活の全てであり、生き甲斐である。勝利や敗北という結果の重みを理解している島の人間は軽はずみに判断をしかねていた。クインテットスターレアアイテムの威力を知る人間にとっては、これは今後の選手生活に関わる重大な決断となり得るのだ。

誰もが納得する形で、誰もが納得できる答えを導き出せるのは、今の場には一人しかいないであろう。彼は島の外から伝説に謳われるバットとともに現れた。そもそも、この男がすべての発端なのだから、彼の意見には誰も異存はない。彼こそが雷神バットを最も欲している、つまり、この試合での勝利を最も欲していて、尚且つ、この試合で最も活躍している男である。

ガツテムはファーストミットに右手の拳をポンと打ち付けると、ひとつひとつの日本語の意味を確認するように静かに切り出した。

「ライジンバットハ　モトモト私ノモノデハアリマセン　私モ誰ノモノナノカワカラズニ持ツテキテシマイマシタ　ダカラ私ハ盗マレテモ文句ワイエル立場デハアリマセン」

そう前置きした上で、ガツテムはミットをクイクイと振って楯を招き入れた。

「ヘーイ！　ミズキタチバナ！　Come here！」

信じられない。そんな驚いた表情で橘みずきは顔を上げた。大きく見開かれた瞳が充血して潤んでいる。茫然と立ったまま動かない

橘の肩を叩いて、ヤソジは彼女をグラウンドへと促した。マウンドへ駆ける橘の胸元には三日月形のペンダントが揺れている。彼女はマウンドの前で立ち止まると深く頭を下げた。

「本当に、すみません……」

消えてしまいそうな声はどこか虚しく、説得力に欠けるものだった。しかし、今ここで求められているのは、礼節を弁えた態度でも謝罪の言葉でもない。

「ミズキタチバナ！ コノ試合デ勝テバ 雷神バットハカエツテキマス スベテチャラニナリマス ダカラ コノ後ノフットレイクスヲゼロニ抑エテクダサイ 約束デス」

ガツテムは橘を咎めたり諭したりしなかった。現状を鑑みて最善を尽くす為のシンプルな結論だ。体裁や感情に左右される事なく、目的のために必要な事をやるだけ。彼の野球に対する姿勢は、いつもストイックでドライだ。

「打たれたら、承知しないからな」

菅野はそう言い残すと、橘にボールを渡した。三塁側ベンチに向かいながら、やり場のない気持ちをベンチ前で待ち構えるヤソジにぶつける。

「おい、じーさん。代えるならもつと早く代えてくれよ！」

「そう絡みなさんな。菅野君が抑えている状況じゃ、誰も納得しなからう」

「それもそうだけど、今の1点はでか過ぎる……」

菅野はベンチに戻り、どつかりと腰をおろすとタオルで顔の汗を拭った。

「それにしても、思ったほど持たなかったな……って、冷たっ！」

菅野が左肩を回しているところに、背後からチームドクターの加藤京子がアイシングを当てる。

「それは、きつとこの刺青のせいね」

「何だよ！ 刺青が悪いってのか？」

「そうは言っていないでしょ。でも、その刺青のせいで回復魔術の効きが弱まってしまったのは間違いないわね。だから、あなたの肩も思っ

た程は回復していなかった」

「この刺青はなあ、俺の決意の証なんだ。もう、二度とあんな事には……」

「いいから聞いて。私の見立てだけど、その刺青には魔力を抑制する結界のような力があるわ」

「そうかもな。二度と魔道術には頼らないって戒めで彫ったんだ」

「誰に彫ってもらったの？」

「それはお前には関係ないだろ」

「そうね。詮索する気はないけど、そこまで言うのなら、私の回復魔術にはあんまり期待しないでね」

「わかったよ」

菅野はアイシングを肩に巻きつけてマウンドの投球練習に目を移した。160cmに満たない小柄な体を目一杯使ったのサイドスローが躍動している。「パシンツ」と小気味よい音を立てて捕球する夏苗のミットは少しもブレていない。

「俺にも、あのくらいコントロールがあればなあ……」

独り言のように菅野はつぶやいた。コントロール。それは予てからの菅野の課題でもある。



ピッチャーが代わって、吾輩の打席と相成った。

リリースした橘みずきは菅野と同じ左投手だが、上から投げ降ろす菅野とはタイプが異なり、横からの角度をつけた投球が特徴だ。球速は恐れるに足らないが、外角へ逃げながら落ちるスクリーンボールは厄介だ。彼女が如何にして隔離棟からの脱出を図ったのかはわからないが、今はそれはどうでもいい事だ。

グラウンド整備の間に、四路君からの報告メールに目を通した。ゲートの被害状況云々あるが、実害はそれほど大きくないようだ。今はもう少し試合に集中する事にしよう。彼女からの情報によればミラージュゾーンは20年近くも前に存在した魔道術らしい。本投間に冷

気の層を作って、蜃気楼のように実際の球筋とは異なる軌道を打者に錯覚させるといふものだ。無風の晴天時にその効果は最大となるが、強風時やナイトゲームでは効果が半減してしまうらしい。そして何より、ベルトより上の高さの投球では、能力の性質上気象条件に関係なく錯覚が起きないという実にトリッキーな能力だ。

金はその高めの球を見事にスタンドまで運んだ。

ならば、吾輩も低めを捨てて――

「パシン！」

「ストライーク！」

――などと、悠長な事を言っている場合ではない。ビシッとアウトローいっぱいに初球を決めてきた。ただのアウトローではない。今日の審判の癖で甘くなっているアウトローいっぱいに決めてきたのだ。あの小娘、なかなかやるではないか。

ストライークが先行して2球目は一転してインコース高め。しかし、これに怯む吾輩ではない。

悔つたな小娘ども！ 渾身の一打をお見舞いしてやる!!

「キィー――ン！」

「ファールボール！」

「大佐ア、見逃せばボール球アルヨ」

わかっておるわい！ 小娘どもはなかなか策士ではないか。吾輩の打ち気を逆手にとつての投球術。敵ながら天晴れである。

ノーボール2ストライークと追い込まれてしまったが、吾輩にカウントなど関係ない。実際に打つのは追い込まれようが、早打ちだろうが唯一球のみ。まさしく一球入魂。いざ尋常に勝負と参ろう。

3球目は初球と同じコース。外角低め。ミラージュゾーンなどに臆しているは埒が明かないというものだ。そう、確か四路は実際の軌道よりも高めに浮いて見えると言っていた。ならば、少し下を叩けばいいだけの事。ミラージュゾーン、敗れたり！

「ブーン！」

「ストライーク バッターアウトオ！」

吾輩としたことが、何と言う様だ。決して失念していた訳ではない

が、あれほどの変化とは……。橘のスクリューは低めに合わせたはずの吾輩のバットのさらに下をすり抜けていった。まずいこれでは部下達に合わせる顔がない。

「ちよつと、あつさり手玉に取られてんじやないわよ？」

「大佐、カッコ悪いアル」

「……面目ない」

吾輩はバットケースにバットを戻す。大丈夫だ。雷神バットが我々の手の内にある以上は、問題ない。



この後、試合は両投手の好投により両軍無安打のまま9回まで展開する。

3―5のまま迎えた9回表、フロググスの攻撃は3番大坂からの打順となる――

Can you play P W A P U R O w
ithout Akiyo Yabe ?

「先頭出るでやんす！」

オイラは三塁コーチズボックスから左打席の大坂君に声援を送るでやんす。試合は大詰めでやんす。9回表の最終回の攻撃はオイラの親友、大坂君からの攻撃でやんす。スコアは3―5で2点負けているでやんす。この状況でオイラの足を絡めた機動力野球が展開できないのは心の底から悔しいでやんすけど、オイラはチームメイトを信じて出来る事をやるだけでやんす。

相手投手のルコフスクの初球は外角低めに外れてボールでやんす。前の打席に長打を打たれているからバッテリーも慎重に入ったみたいでやんす。ずっしりと重そうなグラブヴィンテージボールがキャッチャー波水出のミットに収まって、白い煙が一筋ゆらりと立ち昇ったでやんす。

聞くところによれば、大坂君にはもう魔道術が覚醒しつつあるみたいでやんす。羨ましい限りでやんす。オイラはそんなのゲームや小説の中の2次元の話だけだと思っていたでやんすから、もうドキドキわくわくが止まらないでやんす！ 夢のような世界でやんす！

大坂君の能力はどんな魔道術も打ち消すカウンターマジックでやんす。どっかで聞いたことある能力でやんすけど、その強さは某ライトノベルで実証済みでやんす。話が逸れたでやんすけど、とにかく、大坂君にはもうグラブヴィンテージボールは通用しないでやんす。

「ピッチャービビってるでやんす！」

ルコフスクの2球目も外に外れてボールでやんす。とても投げづらそうでやんす。前の打席で内角球を打たれているから外角中心のリードになっているみたいでやんすけど、大坂君には内も外も関係ないでやんす。

どんな強打者にでもクセはあるでやんすから、好きなコースや苦手なコースは付いて回るものでやんすけど、大坂君にはそれがほとんど

無かったでやんす。高校時代にコースや球種別にデータを取った事があるでやんすけど、ここまで偏りのない選手は他にいなかったでやんす。

大坂君は本当にバランスのとれた良いバッターでやんす。大学で野球をやっていないなかったのが不思議なくらいでやんす。大学の4年間があれば、オイラの身内鼻肩を差し引いたとしても、プロからの声が掛かっていてもおかしくないくらいの実力は備えていたはずでやんす。その証拠に、2年の秋大会であの猪狩守からサヨナラヒットを打っているでやんす。猪狩守は今や押しも押されぬジャイアンツのエースでやんす。オイラは大坂君が猪狩守と同じ舞台に立っていない事がとっても悔しいでやんす。野球を続けていれば、今頃きつとライオンズで一軍半くらいの活躍はしていたと思うでやんす。

“カキーン!”

“ビュオーン!”

「矢部君! ぼさつと立ってるると危ないよ!」

強烈なライナーがオイラに襲いかかってきたでやんす。オイラの抜群の反射神経がなければ、きつと無様な姿を晒していたでやんす。大坂君も人が悪いでやんす。きつとオイラの顔がニヤけていたのを見逃さなかったでやんす。

「ちやんと前に飛ばすでやんすよ!」

ごめんごめんと謝る大坂君はとても楽しそうでやんす。オイラもまたこうやって野球ができる事が嬉しいでやんす。嫌な思いや辛い思いもしてきたでやんすけど、オイラはまたこうして野球を始めたでやんす。

“カキーン!”

さっきのファールが振り遅れたわけでも、押し負けたわけでもない証拠に、すぐに快音が響いたでやんす。ルコフスクの4球目を大坂君のバットが真芯で捉えたでやんす。左中間に上がった打球はフェンスダイレクトの当たりとなって、大坂君は悠々二塁到達でやんす。

「ナイバッチでやんす!」

ノーアウト二塁となつて、右の打席にはガツテムさんが入つたでやんす。ホームランが出れば同点でやんすけど、きつとそれは難しいでやんす。

ガツテムさんは第1打席でライトポール際にホームランを打っているでやんす。木製バットの“しなり”を利用してボールの勢いを吸収した上で力づくでスタンドまで運んだでやんす。アーティストの名に相応しい芸術的なホームランだったでやんす。

第2打席はボール球を叩いての二塁打でやんす。ストライクには普通のグラヴィティーボールよりも更に重い3倍グラヴィティーボールしか来なかつたでやんすから、リードを逆手に取つた頭腦的なバッティングだったでやんす。そうは言つても、ボール球は本来打てないからボール球なんでやんす。それを打ち返したガツテムさんのバッティング技術は流石でやんす。ボール球とはいえ普通のグラヴィティーボールは2倍の重さがある事も忘れてはいけないでやんす。

そんなガツテムさんの閃きが冴えたのが第3打席でやんす。ルコフスクの奥の手である10倍グラヴィティーボールを攻略したでやんす。あんなむちやくちやなピッチングされたらゲームバランスが崩壊してしまうでやんすけど、ガツテムさんは喰らい付いたでやんす。佐賀さんの金属バットが原形を留めていなかつたでやんすから、その衝撃は推して知るべしでやんす。キャッチャー波水出の野選の間に大坂君が生還したでやんす。この試合のオイラ達の得点は、すべてガツテムさんのバットから生まれているでやんす。

そんな唯一の頼りであるガツテムさんのバットにも、今回は頼れそうにないでやんす。波水出が立ち上がつて、大きくベースから離れているでやんす。仕方ないでやんす。一塁が空いているでやんす。

「ちちゃんと勝負するでやんす！ 卑怯でやんす！ ムキー!!」
オイラがコーチズボックスで喚いたところで戦況は変わらないでやんす。



「――ボール。フォアボール。ガツテムを一塁へと歩かせましたバッテリー。ここはセオリー通りと言いますか、仕方ないでしょうか」
「そうですね。この後のバッターにはヒットがありませんから、ある意味当然の策でしょうね」

「ECBの制作でお伝えしておりますフロッグス対フットレイクスの試合もいよいよ大詰めです。実況は私、荻窪譲二。解説は球界のアイドル、高円寺奈加乃さんをお迎えしております。9回表フロッグスの攻撃はノーアウト一塁、二塁と変わります。そして、右の打席には佐賀が入りました。かつては、と言いますか今朝までは、モンキース不動の4番だったわけですが、今夜はルコフスク相手にいい所がありません。ここまでレフトフライ、ショートゴロ、ピッチャーライナー……」

「決して悪い当たりではありませんでしたけどね」

「では、ここまでのグラヴィティーボールの球数をおさらいしておきましょう。前にも申し上げた通り、3倍以上のグラヴィティーボールには球数制限があります。手元の資料では、3倍は10球、5倍は3球、そして10倍は1球までという公式発表。これは、魔力の消耗が限界を超えないようにという配慮から設定されているものです」

「はい、そうですね。魔力の総量を数値化したものをマジックポイント、イニシャルを取ってMPと言ったりしますが、このMP消費量がルコフスク選手のキャパシティーを超えない範囲で球数制限が設けられているんだと考えられます」

「ここまで、3倍は3球、5倍と10倍はそれぞれ1球ずつ投げているから、理屈の上ではルコフスクは持ち球として3倍を7球と、5倍を2球を残している事になります。残り3人で必要なストライクは9つです。このすべてを3倍と5倍で取る事も可能です。現時点でのルコフスク有利は揺るがないと考えていいでしょうか？」

「そうですね。更に申し上げますと、佐賀選手と比べて後の橘選手、井伏選手は大きく打力は落ちますから、バッテリーとしては、ここを切り抜けてしまえば何とかなるという思いはあるでしょう」

「手元の資料によると佐賀のパワーはA判定ですが、後に続きます橘と井伏はE判定です。フロッグスとしては、佐賀のバットで同点あるいは逆転を狙いたい所ですね」

「そうなんですけどね、荻窪さん……」

「はい、何か気になりますか?」

「佐賀選手の第1打席は真芯の当たりを思い切り引つ張ったにも関わらずスタンドまで届きませんでした。ですから、ホームランで逆転というのは考え難いんです」

「では、長打で同点というのは如何でしょう。第1打席はフェンス際まで飛ばしていますよね……?」

「外野の守備位置を見てください。長打警戒でかなり深く守っています。あの布陣では間を抜く事はまず不可能でしょう。そして、一塁ランナーのガツテム選手はあまり足が速くありません。フトトレイクスの外野陣も守備には定評がありますから、この走力では残念ですが本塁生還は期待できません」

「ガツテム選手を敬遠した時点で決着がついた……という結論でしようか?」

「野球は筋書きのないドラマと言いますから、あまり断言はしたくありませんが、フトトレイクスの対応も抜け目がありません……」

「ノーアウト一塁、二塁。同点、あるいは逆転の可能性が見えていてもおかしくない状況ではありますが、奈加乃さんからは厳しいご指摘。2点差が、フロッグスに重く押し掛かっています。果たして、この状況を打ち破る術はあるのでしょうか? まずは佐賀のバッテリーに期待しましょう——」



「高円寺の野郎、好き勝手言いやがって!」

漁火はカウンターテーブルを叩いた。ダンツと穏やかならぬ音が響いて、店内の視線が漁火に集まる。隣に座る外藤が両手を合わせて周囲に申し訳なさそうに振る舞うと、彼らの視線が各々に散ってい

く。その様子を見て、ホッと一安心した外藤が赤髪の男に語りかけた。

「そういえば、高円寺とは一昨年対戦したもんな。えげつないバッターだったよな」

「ああ。でも、もう昔の話だ」

「プリティーガールズの3番打者だもんな。泣く子も黙るサンプラザ打法」

そう言いながら外藤は彼女の現役時代の独特のフォームを真似して見せた。

ここはサンシャインタウンの外れにある小さなバーである。モンキース解散後の打ち上げが終わり、二次会、三次会と若手選手を連れまわした後、最後に残った漁火と外藤の2人は行きつけのバーに足を延ばしていた。5人分の小さなカウンター席と、奥に4人掛けの小さなテーブル席があるだけの小さな店だ。

普段は懐かしいグラムロックが静かに流れている店内だが、今日は常連客のリクエストに応じて地元のラジオE.C.Bにチューニングを合わせている。

「でもまあ、ルコフスクといえどグラヴィティーボールの使い手だ。佐賀ちゃんだって簡単には打てないだろうさ」

外藤は席に座り直しながら、再び漁火に語りかけた。

「いいや、俺は佐賀をそんなヤワな男に育てた覚えはない」

「……なに熱くなってるんだよ？ 酔っぱらってるのか？」

「……そうかもな」

漁火はロックグラスに残ったウイスキーを一気に飲み干すと、バーテンダーに次の一杯を求めた。バーテンダーの取りだしたボトルには南地区の特産品である事を証明するラベルが貼ってある。漁火は新しいロックグラスを受け取ると、それをぐくりと飲み込んでから続けた。

「佐賀はなあ、こんな田舎で野球やって満足するような器じゃねえんだ。もつと、高い所で揉まれて、磨かれて、それでこそ輝く打者なんだ」

漁火の目が据わり始めている。外藤は聞き役に回る事にした。

「あいつにはなあ、魔道術なんか無くたって余所と渡り合えるだけの実力が備わってたんだ。それを、誰にもらったか知らねえが、あんな物に頼りやがって！」

「漁火。5年前の事を言ってるのか？ あれはもう済んだ事だろ……」

「いいや、終わっちゃいねえよ。20歳に満たない若造がどこでどうやってあんな物を手に入れるんだよ？」

「それは……」

「あの真面目な佐賀が、簡単に誘惑に流されると思うか？」

「知らねえよ。そんなの。若いうちは色々あるだろ」

「色々って何だよ。若い時は誰だって壁にぶち当たって真剣に悩むもんだろ？」

「あー、わかったわかった。そうだな。何か辛い事があったのかもな」
「俺も辛かったんだ。特にガキの頃はな……」

外藤は何度かこの話を聞いた事があつたが、今回も黙って話を聞く事にした。少なからず伝統あるチームの歴史が今日途絶えたのだ。漁火にも思う所はあるはずだ。

漁火が幼い頃の東地区はまだ魔力暴走事故の傷が癒えていなかったから、今以上に魔道術への拒絶反応が強く残っていた。そんな中で、漁火に顕れた能力ファイヤースターターは、彼にとってはコンプレックス以外の何物でもなかった。今でこそ、彼は火力を意のままにコントロールできているが、当時の彼は能力を持って余し制御できずに悩んでいた。

周囲からはもちろん、時には親からも異端扱いされた幼少期の彼の心の傷は深く大きかった。しかし、そんな彼を救ったのが野球だった。決して楽な道のりではなかったが、彼は魔力を制御する術を会得して、コンプレックスを克服したのだ。

「——だからと言って、すぐに俺の存在が認められた訳じゃない。誰かに迷惑を掛けた訳じゃないのに、相変わらず東地区じゃ魔道術は異端者の成すものだ。当時の俺は腐っていたよ。だが、そんな俺を迎え

てくれたのがモンキースだよ。その恩があったから、俺はどんな奴の、どんな境遇でも受け入れる事ができるチームにしてきたつもりだ」

「裏切られた事もあったけどな」

「そうだな。でも、そうだととしても、救われる人間がいればそれで構わないんだ」

「その吹き溜まりのチームも今日で解散……なんだな」

「ああ。今日で、おしまいだ」

漁火はロックグラスを再び一気に飲み干した。いつもより明らかにペースの速い漁火を外藤は諫めたが、漁火は既にカウンターテーブルに突っ伏して穏やかな寝息を立て始めていた。

「ったく、言いたい事だけ言ったら寝るのかよ……」

外藤は静かな店内でラジオの実況に耳を傾けた。カウントはノール2ストライク。どうやら佐賀は追い込まれているようだ。彼はロックグラスを傾け、かつてのチームメイトの武運を祈った。

Crescent Moon

9回表――

フロックスの攻撃は無死一、二塁で5番打者の佐賀へと打席が回った。二塁には左中間にスタンディングダブルを放った大坂、一塁には敬遠で歩かされたガツテムがいる。2点を追いかける今、ガツテムは同点のランナーである。

何としても一塁走者のガツテムにホームを踏ませたいところだが、体重100kgオーバーのガツテムの走力は生憎だが知れている。フットレイクスの堅実な外野守備を考えれば、深々と外野手の間を割らなければ本塁生還は難しいだろう。自然とバットを握る佐賀の腕にも力がこもる。

キイーン――!!

――ガツシャン!!

「ファールボール!」

鋭利な金属音が響いた後に、バックネットが無機質な音を立ててボールを受け止めた。フルスイングも虚しく、佐賀にストライクが先行する。

グラヴィティーボールの使い手であるルコフスクはマウンド上に悠然と構える。そう簡単に打たせてはもらえない。ここまで3打数0安打の佐賀は重々承知の上での第4打席だ。そして、忘れてはいけない――

「佐賀ちゃん、そんなに振り回しても無駄よ。外野の守備位置をよく見てご覧なさい」

悩ましいのはキャッチャーの波水出も同じだ。強靱な地肩や狡猾なりードなど、キャッチャーに求められる適性は多くに及ぶが、俗に“ささやき戦術”と呼ばれる打者とのコミュニケーションによる心理戦もキャッチャーの適性の一つと言えるだろう。これは数字として測ったり、結果が記録として残るものではないが、敵として対峙すればなかなか厄介なものである。

「次の打者はみずきちゃんね。いくら彼女が野球のセンスに秀でてい

るからと言っても、まだ二十歳前の女の子。彼女にグラヴィティボールはまず打てないでしょうね」

ネクストバッターズサークルで俯く橘の表情は冴えない。マウンド上では頬を淡いピンクに染めて力投していたが、今では色白の肌に蒼白い影が差している。打撃はそれ程得意ではないのだろうか。佐賀も不意にそんな事を思ってしまう。

「その後の井伏さんも今夜は無安打。更に、8番の鹿島さんはバットにすら当たっていない。だからこそ自分が決めなきゃいけない。そんなところかしら？」

佐賀は黙ってルコフスクとの勝負に集中するが、凶星を突かれて表情が少しひきつる。しかし、佐賀はここで熱くはならなかった。あくまでもクールに、彼の思考回路は研ぎ澄まされていった。外野の守備位置は把握していたし、今の自分には打球をフェンス際まで飛ばす事はできない。ならば――

ルコフスクの2球目は高めの釣り球。佐賀はこれに躊躇わず反応して空振。打ち急いでいると誰もが思っただろう。しかし、したたかな波水出を油断させるには、このくらいの芝居が丁度いい。佐賀は既に考えを改めていた。求められる結果に囚われて、己の力量を見誤ってはいけない。成すべき事は、今の自分に成せる事だけだ。

強振がブラフである事は一塁々上のガツテムには伝わったらしい。佐賀は本気で打ちに行つたつもりだったが、彼クラスの強打者ともなれば、打者の打ち気などお見通しという訳だ。アイコンタクトで意志の疎通が完了した。長打はいらない。彼の目もそう語っていた。この試合で一番勝利にこだわっている男は、甘んじて敬遠を受け入れていた。決して勝負を棄てている訳ではないし、佐賀を見くびっている訳でもない。戦況を冷静に分析した上での結論は、まだ機は熟していないということ。長い経験で知っている真理は、一人の力では敵わない局面が存在するという事。

「そして、あなたにこの球は打てないわ。ガツテムを敬遠した時点で、もう詰んでるのよ。ごめんなさい」

グラヴィティボール3倍。波水出はそう予告してミットを中央

に構えた。これに力任せの勝負を挑めば、球威に押されて内野フライだろうか。それとも、打ち損ねてゲッツーだろうか。いずれにしても、まともな結果は期待できない。「詰み」だ。しかし、グラウンド上で汗をかいているのは将棋の駒ではない。人間の動きは実に多彩である。

3球目のモーションと同時に佐賀はすつとバットを短く持ち替える。波水出が視界の隅でそれに気付いた時はもう遅かった。ボールを十分に引き付けて、丁寧に弾き返す。バットコントロールを重視した時の佐賀のバッティング精度は東地区随一だ。広く空いていた一二塁間を速いグラウンダーが強襲していく！

スピンの掛かった打球は赤土の上を高速で弾んで、さらに最後のワンプアウンドは一塁側に大きくイレギュラーした。誰もが抜けると思った。だがしかし、鋭い打球は二塁手である金の長く伸びた左腕、それもグラブの先端に遮られた。

佐賀の大きな空振りに違和感を覚えたのはセカンドを守る金も一緒だった。彼もまた一流の打者として、何かを感じていた。必ず何か仕掛けてくる。天才が動く為の根拠は1%の直感だけで充分だった。猛ダツシユの金が地面にスパイクを突き立てて踏ん張ると、慣性の法則に体重を任せて身体を大きく捻ってセカンド方向に向き直る。しかし走者のガツテムと遊撃手が重なって投げる事ができない。二塁を諦めた金は小さくステップを踏み直してボールを一塁へと転送した。1アウト。一塁を駆け抜けた佐賀は天を仰いだ。

結果的に送る形となり、同点のランナーが二塁へと進んだ。一死二、三塁。しかし、打線はここより下位打線へと向かう。今宵は6番以降の打者にヒットは出ていない。橘は6回からの途中出場で、7回の第1打席は三振に倒れている。橘は左打席の手前でベンチからのサインを待った。



「あれ……抜けなかったの？」

大坂が塁上からコーチボックスの矢部に尋ねた。迷うことなく本塁を狙っていた大坂を矢部が制止したのだ。

「きつと、打つ前からスタートを切っていたでやんす。まるで未来を予知していたみたいでやんす」

「未来予知か……」

「フィクションでは最強ランクの能力として描かれることが多いでやんす」

「でも、それは無いかな？」

「どうしてでやんすか？」

「何となくけど」

「おい！ 二人とも！ サイン出すぞー！」

一塁コーチを務める菅野の怒号が飛んで、ようやくベンチからヤソジがブロックサインを送り始めた。彼はゆっくりとした動作で左肩、左肘、ベルト、帽子、ベルトの順で触れるとパンパンと2回手拍子を打った。「待て」のサインだ。

犠牲フライでも1点だが、外野まで打球が飛ぶ可能性は極めて低い。

カウント次第ではスクイズもあるだろう。しかし、これは誰にでも容易くできるものではない。大坂は6回の永瀬の送りバント失敗の併殺打を思い出していた。あのバントが決まっていれば、決まらずとも三振に終わっていれば、あの回はもう1点入っていた。

そうなれば、エンドランも有効だが……

初球、2球目ともに待てのサインで橘はノーボール2ストライクに追い込まれた。

しかし、ベンチからの指示は再び「待て」のサイン。投手だから打たせない積りだろうか？ いや、最終回だ。そんな悠長な事を言っている場合ではない。

バッテリーは1球外して1ボール2ストライクになる。

ここでようやくベンチから「サインなし」のサインが送られる。スリーバントスクイズを覚悟していた大坂はホッと胸をなでおろしたが、ベンチの意図が良く分からない。三振のリスクを負ってまで、こ

ここまで勝負を引き延ばした理由は何だろうか？

首を捻りながら大坂がリードを広げると、ルコフスクが投球モーションを起こす。そして、背後で矢部が厨二な台詞をのたまった。「みずきちちゃんのペンダントが光っているでやんす！」

大坂は矢部が何を言っているのかわからなかった。橘の胸元に揺れる三日月型のペンダントはいつも通りの光沢だが、大声で叫ぶほどに光っている様子はない。

そして、同時にあの試合の記憶が蘇る。忘れもしない、3年前の甲子園大会の一回戦だ。あの時も矢部は同じような事を言っていた。



「仕方ないさ、オレ達はここまで来れたんだ。充分だよ」

荷物をまとめて、ベンチを後にする。もう、二度とあの場所には立てないが、一度でもあの場所に立てた充実感が入り混じって複雑な心境だ。

それでも敗者とは、いつ如何なる状況でも惨めなものだ。仕方ないでは誰も納得ができない。どんな慰めの言葉も宙を彷徨って重い空気に取り込まれて、ベンチの空気はまた少し重くなる。

「嘘じゃないんだ！」

3年間貫き通した語尾を忘れて彼は訴えた。誰も彼が嘘をついているとは思っていないが、つい数分前の彼の失策がなければ甲子園初勝利を手にしていたのだ。今、一番ショックを受けているのは彼自身だ。それをこの場にいた全員が理解しているからこそ、彼に言葉を掛けたのはキャプテンであり最も親しい大坂だけだった。

センターに高く舞い上がった打球に勝利を確信した。一切の油断が無かったと言えば嘘になるが、気が緩んでしまった訳ではない。

しかし、落下点へと走る矢部の足取りが突然おぼつかなくなる。打球音とその角度を頼りに彼は何とか落下点までたどり着いたが、非情にも打球は彼の背後にポトリと落ちたのだ。

カバーに入ったライトが打球を拾い上げた時には、サヨナラのラン

雷神バット。滅多にお目に掛かれない5つ星じゃ。そして、もうひとつはクレツセントムーン。橘君のペンダントじゃな。これは1/3の確率で重力系黒魔術を無効化する優れモノじゃ。ルコフスク攻略に、これ程適したアイテムはないじゃろう。ただし、ネックとなるのは1/3という発動条件じゃ。これを見極めるのは本来不可能なはずなんじゃが、あれを御覧なさい」

ヤソジは三塁コーチズボックスに立つ矢部を指差した。

「足はこんなじゃが、目だけは今も良くてね。彼のメガネのレンズ越しならば、魔道術やアイテムの効果が見極め出来るらしい。もつとも、その事に気が付いたのは7回に橘君が打席に入った時だったかね」

「みずきちちゃんはその事を……?」

「気づいていたかどうかまでは聞いてみない事にはわからんのだ。サインが変わった意図には気が付いてくれたようじゃな」

そう言って、一塁方向をしばらく見つめた後で、ヤソジはゆっくりとベンチの中を歩き始めた。

「あれ? 待ってください。さっきレアアイテムは4つあるって言いませんでした?」

「いかにも。これが、最後のひとつじゃ」

ベンチの手前に立て掛けてあるバットケースまでたどり着いたヤソジは、おもむろにその中から1本を取り出すと、傍にいた孫娘へと手渡した。今まで誰も打席で使っていなかったバットだ。

「使い方は、わかっているね」

夏苗は黙って頷くと、バットを受け取って、白いバッティンググローブをはめながらベンチ前へと歩き始めた。

「何ですか? あのバットは……」

「風神バットレプリカ。レプリカとはいえ3つ星アイテムじゃ。なるべくなら使いたくなかったが、状況が状況じゃ。仕方あるまい。頼んだぞ、夏苗」

夏苗は祖父の言葉に振り返ると、10代とは思えない大人びた微笑みでそれに応えた。ヘルメットからのぞく艶やかな黒髪を美しく揺

らしながら、彼女は再びグランドの戦況を見守る。

最終回、フロツグスは橘のタイムリーヒットで1点を返してスコアは4―5。一死一、三塁となり打順は7番井伏へと巡る――

9回表一死一三塁。三塁には同点のランナーガツテムを、一塁には逆転のランナー橘を置いて7番井伏の打席。

何としても三塁走者のガツテムにホームを踏ませて、スコアを振り出しに戻したいところだが、体重100kgオーバーのガツテムの走力は生憎だが知れている。フットレイクスの堅実な内野守備を考えれば、生半可な内野ゴロでは本塁生還は難しいだろう。内野は前進守備。バットを握る井伏の掌にもじわりと汗がにじみ出る。

マウンド上で悠然と構えるルコフスクはグラヴィティーボールの使い手である。上手いこと内野の間を抜ければなどという甘い考えは通用しない。ここまで3打数0安打の井伏は重々承知の上での第4打席だ。

バシイン——!!

「ボール！」

スクイズを警戒したバッテリーは初球を大きく外したが、グラヴィティーボールは未だ衰え知らずのようだ。およそ皮のボールと皮のミットが衝突したとは思えない音圧に井伏の耳にキーンという耳鳴りが響く。よくもまあ、あれだけ重い球を9回まで捕り続けられるものだ。井伏は敵ながら感心していた。まずはボールが先行。カウントは1ボールノーストライク。

「やっこさんは、一死一三塁からの得点パターン、何通りあるか知っているかい？」

先に口を開いたのは井伏だ。キャッチャー波水出の「ささやき戦術」を承知していた井伏は先手を打った。もし、スクイズがあるならば井伏がフラッシュサインを送ることを事前の打ち合わせで決めている。まずは、お互いの腹の内を探り合いが繰り返られる。

「ヒットにホームラン、犠牲フライにスクイズ……あとは、そうねえ、意表を突いてホームスチールもあるわね」

「50以上あるんだとき」

「そんなにあるの……!?!」

「どうだかな。俺も数えた事はないが、守っている時は一番気を使うからな」

ルコフスクの第2球もアウトコースに大きく外れてボール。波水出から「んっ♪」という吐息のような艶っぽい声が漏れる。2つボールが先行する。しかし、井伏は構う事なく続けた。

「だが、生憎俺にはグラヴィティーボールは打てそうにない。そうなれば、必然ヒットに頼らない得点方法を考えるよな。デイレイドスチールだとか、併殺崩れなんてのもあるよな」

「エラーや暴投を誘おうたって、そうはいかないわ」

「相手のミスを期待するは性に合わないが、それでも点は入るな」

「何が言いたいのかしら？」

「いや、別に。ただ、どうすれば点が入るのか、考えているだけだ」

「考えてるだけじゃ、点は入らないわよ」

「ズドオン！」

バットに当てて転がすだけ。それすらもはばかられる程の圧倒的な球威がインコースを抉った。カウントは2ボール1ストライク。会話は弾んだが、ピンと背筋が強張るのを打席に立つ井伏が感じたのは、冷えこんできている夜風のせいだけではない。大きく深呼吸をして、黒塗りのカーボンバットをさらに短く握り直した。

左耳に触れるだけ。それだけでスクイズは敢行される。しかし、勝負どころで仕掛けるということは、何故これ程までに勇気がいるのだろうか。顎の下まで動いた井伏の右腕は、そこでピタリと止まってしまった。

「どうにも俺は、昔からバッティングが不得手でね。ガツテム君とか佐賀君とかを見ていると、本当に羨ましいよ」

「でも、一昨年は4番打ってたじゃない？」

「それはチーム事情。センスっていうのかな。どうしても越えられない壁みたいなのがある。やつこさんも、金君のバッティングには敵わないだろ？ それと同じ気持ちだろうな」

「アレはただ本能のままにバットを振り回してるだけ。来た球を打つだけじゃ、面白くないわ」

「でも、ボールは1メートルでも遠くに飛ばせた方が気持ちいいだろう？」

「やきもち妬いてもヒットは出ないわ」

「そんなことは、わかっているんだがね」

弱気になった井伏に、ここぞとばかりにバッテリーはカウントを稼ぎに来る。

「ガキョン！」

タイミングだけ合わせて井伏が軽打すると、ボールは力なくファールグラウンドを転々としていく。たとえ芯を食っていても、インパクトの瞬間は鉄球を弾き返すような衝撃に襲われた。きっと、バッテリーンググローブの中の掌は真っ赤に腫れあがっている事だろう。井伏は手首をぶらぶらと振って激痛を紛らわせた。カウントは2ボール2ストライク。

「ひよっとすると、粘ってフォアボールとか考えているのかも知れないけど、あなたの腕、いつまでもつかしらね？」

波水出の戦術がただのおしゃべりに留まらない証拠に、彼の言う事はいつもの射ている。

「あと、10年若ければなんてつくづく思うよ。ところで、やつこさんの腕は大丈夫なのかい？」

「あら、優しいのね。心配してくれるの？」

「心配はしてないさ。頑丈そうだからね。だけど、一度試合となれば、鉄球みたいなやつを100球も受けるんだ。奥の手である3倍、5倍のグラヴィティーボールだってある。何かコツでもあるのかい？」

「……そうねえ、強いて言うなら愛かしら」

じつくりと、タメを作って波水出は答えた。憂いた瞳でウィンクする波水出を井伏は黙殺した。

「はっ？ 愛で打てりや苦勞はしないよ」

ルコフスクの5球目は高目にすっぽ抜ける。波水出は少し腰を浮かせて、左腕を目一杯伸ばすとミットを高々と上げてキャッチした。三塁走者のガツテムは動かない。カウントはフルカウント。

「重いはずの球なのに、いやに簡単に捕るじゃねーか。間違つてミッ

トゴと持ってかれたら同点だぜ？」

「お生憎様。このふわふわミットはねえ、捕球時の衝撃を半減させるの。だから2倍のグラヴィティーボールならば普通のストレートと一緒にわけ」

「——ん、何だって!？」

「あら、今頃気が付いたの？」

「それで2倍のグラヴィティーボールには球数制限がないってわけか」

島の人間に宿る不思議な能力「魔道術」。人々はこれに憧れ、用い、島特有の文化を育んできた。勉強ができる人とできない人がいるように、運動が得意な人と不得意な人がいるように、仕事ができる人とできない人がいるように、魔道術にも得手不得手があった。誰にでも、思うように扱える代物ではなかった。

ところがある日、この魔道術の能力を引き出し、あるいは補助する「アイテム」がとある研究機関で開発された。これにより、人々は容易に魔道術を扱う事ができるようになった。島の人々の生活はより一層豊かになった。そして何より、野球道具への応用が進んで、この島の野球文化は革命的な進化を遂げる事になった。

ふわふわミットもその中の一つである。

「東地区の人には馴染みが薄いかも知れないわね。魔道術は才能だけど、アイテムは努力すれば誰でも使いこなせるようになるわ」

波水出の言う通り、東地区ではアイテムも魔道術に同じく消極的な考え方が占めている。この背景を説明するには50年前にパラキ村で起きた「魔力暴走事故」は避けて通る事ができない。

かつては東地区にも他の地区と同様に魔道術が繁栄しアイテムが普及していた時代があった。極東の小さな港町にあるフロッグスの黄金時代は風神打線と呼ばれ、その活躍に憧れを抱いたファンも多い。その風神打線を担ったのが、伝説のレアアイテム・風神バットである。

しかし、アイテムの使用は常にオーバードーズの危険を孕んでいると言つてよい。強力なアイテムであればあるほど、その使用には熟練を要し、また身体や精神に負担が掛かっていることは事故以前から警告されていた事だ。これらは、適正な使用方法と健康管理で予防できるとされていたが、50年前は事情が少し違つたようだ。風神バットは前例にないくらいに強力すぎたのだ。

強力すぎたアイテムは使用者の身体と精神を容赦なく蝕んでいった。そして、それがその使用者の許容量を超えた時に悲劇は起こつた。通称マジッククランプ（魔道痙攣）である。一度暴走した魔力は連鎖反応を起こして周囲に伝播して、当時のフログスの主力選手のほとんどは引退の危機に迫られた。実際に、この事故が引金となつて関係者のほとんどはバットを置いている。

関係者だけでなくファンの心にも癒えぬ傷跡を残したその事故は、いつしかタブーとなり、楔のように東地区に魔道術とアイテムへの嫌悪感と偏見を植え付けるものとなった。

「ガキイイン！」

鈍い打球音が響いて、打球が後ろに転がっていく。井伏は手首を柔軟にして、その衝撃を受け流しているが、それでも、掌、手首、肘、肩、腰と至る所にダメージは蓄積されていく。

「もう若くないんだから、無理しない方がいいんじゃない？」

「もう若くないから、後悔をしたくないんだよ」

バットを握る指先が小刻みに震えている。痛みのためにバットを握る感覚はだいぶ薄らいでしまっているが、もう一度、バットを立てて構える。ルコフスクはここまで変化球も緩急も織り交ぜてきていない。タイミングを取つて、ミートさせるだけならばそれ程難しい事ではないのだが、下手に前に転がせば併殺打の可能性がある。なまじカットができる分、この打席はいつ終わるのかわからない苦行のように長いものと感じられた。

何とかして気を紛らわせようと、井伏はマウンド上のルコフスクを見た。彼は帽子を取つて、額の汗を拭うとオールバックの金髪を掻きあげた。勝利目前の最終回だが彼もまた肩で息をしている。なるほ

ど。彼も無尽蔵のスタミナと言うわけではなさそうだ。先程から、コートボールが乱れているのも頷ける。勝機がある以上、井伏の狙いは揺るがなかった。

比較的短いインターバルでルコフスクがモーションを起こした。体中の血液が循環して大木のようにパンプアップした剛腕から7球目が放たれる。

アウトコース――

――ボール1つベースの外側!!

しかし、そこは今日のアンパイヤー茅野が何度もストライクとコースしてきたコースだ。カットしなければいけない。バットに掠るだけでいい。井伏は頭の中で念じ続けたが、身体はまったく反応しなかった。体内の神経を伝うはずの信号が渋滞していく。

これ以上の苦痛を肉体が拒絶したのか、あるいは長い経験で、そのコースのボールには手を出さないと身体に刷り込まれている為か、ボールが波水出のミットに収まるまで、井伏は彼自身の身体を動かす事が出来なかった。歯痒い一瞬は、眼だけが、ボールの軌道を逃さずに追いかけていた。

「バシイイイン!!」

大袈裟な音を立てて、ボールはミットに収まった。

「ボール! テイクワンベース」

「――!」

「――!」

茅野は、一塁方向を指差した。

「ちよっ――」

「――波水出、早くボールをよこせ!」

振り返り抗議しようとした波水出をルコフスクは大声で制止した。ゆっくりとした抑揚のあるルコフスクの声が球場内に木霊して、両サ

イドのベンチはしんと静まり返った。

波水出はタイムを取るとボールを握りしめてルコフスクの元へ駆け寄った。レガースがガチャガチャと音を立てている。

「まずは、状況を確認しようか……」

「1アウト満塁。点差は1点。ホームはフォースプレイだから少しは守りやすいかしら」

「ガハハハハ！ それがわかっていれば充分だ」

「ごめん、ちよつとアツくなつてたみたい」

「なあに、気にする事ではない。腕の悪い審判については後で本部に書面で抗議しておくでしょう。もつとも、吾輩がストライクゾーンにちゃんと投げていれば万事憂いなき事。ところで、吾輩のグラヴィティーボールはあと何球残っているんだね？」

「3倍が6球、5倍が2球よ。10倍は1度投げているけど、あの時は打たれているからまだ1回捕ることができるわ」

「ならば、この後の2人は3倍を3球、5倍を2球、最後に10倍を1球で仕留めようではないか。出し惜しみはいらない」

「わかったわ」



「——ルコフスクがポンポンと波水出の肩を叩いてマウンドから送り出しました。何だかルコフスクの方が波水出を励ましている様に見えるでしたね。解説の奈加乃さん、如何ですか？」

「先程のピッチングはどちらに判定されてもおかしくないコースでしたから、このフォアボールはピッチャーも堪えると思いますよ。下位打線を相手にピンチを広げてしまうのは嫌なものですからね」

「最後の最後の土壇場でチャンスを広げたのはフロッグス。ここは何としても結果を残したい。9回表1アウト満塁で、打席には8番の鹿島が入ります。ECBナイター中継、実況は私、荻窪譲二、解説にはプリティーガールズOG、元祖打って走れるアイドルの高円寺奈加乃さんにお越し頂いております」

「元祖ってというのは、ちょっと嫌味なキャッチフレーズですねえ」

「先駆者という敬意を込めたつもりですが……さて、奈加乃さん。鹿島は、ここまでヒットがありません。同点、サヨナラのチャンスでの打席ですが、どんなバッティングが求められますか？」

「先程の井伏選手の打席が良いお手本となるのではないのでしょうか。ルコフスク選手の投球が抜けて上擦る場面も増えてきていますし、粘ってフォアボールという形も悪くないと思います」

「満塁ではありませんが1点差です。スクイズの可能性はどうでしょうか？」

「フォアボールの後ですからね。ストライクを先行させたいバッテリーとの駆け引きはありますね。初球からでもあると思いますよ」

「さて、その初球です。ルコフスクの足が上がって、投げました！ スクイズ……は、構えだけ。バットを引いてストライク。カウントはノーボール1ストライク。今のは3倍でしょうか？」

「もう手加減は無しといった感じですね」

「こうなりますと、鹿島はなかなか手が出ないか。短い間合いから、ルコフスクが第2球を、投げました！」

《ズドンッ！》

「ほとんど真ん中ストライク！ ノーボール2ストライクと追い込まれました。小爆発でも起きたかのような物凄い捕球音。3倍、3倍と続けてきましたバッテリー」

「球数制限のある3倍グラヴィティーボールをあえて続けてきましたね。鹿島選手も諦めないで粘って欲しいです」

「1アウト満塁です。三塁ガツテムは同点のランナー、二塁橘は逆転のランナーです。カウントはノーボール2ストライクと追い込んで、ルコフスクが3球目を……投げましたっ！ 大きなスウィング空振三振!! 容赦ないルコフスクのピッチングで2アウトフルベース！

打席にはラストバッターの龍ヶ崎夏苗が入ります。彼女は品野ヤソジ監督のお孫さんですが、あのバットはひよっとして……?」

「風神バットレプリカですね」

「風神バットといえば、伝説のバット職人、初代鬼瓦棒之介の遺作とし

て知られていますが、それと同時に50年前の魔力暴走事故の引き金となった元凶でもあります。レプリカは2代目鬼瓦棒之介がその事故の償いとして、当時のキャプテン、つまり現在の監督である品野ヤソジさんに非公式に贈った物ではないかと噂されていましたが、どうやら、ここで御披露目となりそうです」

「レプリカとはいえトリオスターくらいの性能はありますよ」

「トリオスターとなりますと、扱いは難しいのではないのでしょうか？」
「この大事な場面で使うということは、かなりの練習を積んでいるのではないのでしょうか。一方で、ここまで温存してきたという事は、完璧には使いこなせていないという不安要素も抱えている裏返しでもあると思います」

「試合は文字通り最終局面を迎えております。2アウト満塁、点差はわずかに1点です——」

Trump is always be…

9回表フロッグスの攻撃は二死満塁となって、打順は9番打者の夏苗に巡る。

ここまでの夏苗は内野ゴロ1つと、三振が2つ。もともと打撃が得意ではないとはいえ、まったく結果を残せていない。

少しでも、打撃に秀でている選手がいれば代打という策もあるが、ベンチに残るのは6回にマウンドを降りた菅野と、采配を振るうヤソジと、チームドクターの加藤京子だけである。控え選手として送り出せる選手は残っていない。

しかし、フロッグスベンチには切り札が残っていた。打席に立つ夏苗が握る白木のバットは風神バットレプリカ。初代鬼瓦棒之介の遺作である風神バットを模して二代目鬼瓦が作り上げたもので、もう二度と悲劇を繰り返さない戒めとして彼女の祖父であり、現在のフロッグス監督である品野ヤソジに贈られたものである。

このバットを封印することこそが魔力暴走事故でバットを置いた選手たちへの償いであり、ファンに対してのけじめでもあった。そのバットが、いまここで、一人の野球少女の手によってベールを脱ぎようとしている。



「おじい様、あのバットはどうして使ってはいけないのですか?」

まだ幼少の夏苗には、そのバットが持つ意味は理解できなかった。

「あのバットは、風神バットレプリカじゃ」

「フージンバット…レブ、リカ? 変な名前」

「このバットのお父さんにあたるバットは、凄いバットだったんじゃないよ」

「夏苗のお父さんより凄い?」

「どうかな? お父さんも凄いからなあ」

「うん。お父さん、とっても凄いよ! うんと速い球を投げるの!」

夏苗は無邪気に父親の投球フォームを真似て見せた。夏苗の父親である龍ヶ崎希は当時フロッグスの大黒柱として活躍していた。キレのある速球と縦のスライダーが武器の右の本格派投手だった。「でも、そのバットも凄かったんじゃ。とても、ワシらが扱いこなせる代物ではなかった」

「……………」

「夏苗には、まだ早かったかな？」

「ううん。何となくわかった！ フージンレプなんかバットは危ないから使っちゃダメなんだね？」

「夏苗はものわかりがいいのう……………」

ヤソジが夏苗の頭を撫でると、夏苗は目を瞑って嬉しそうに声を上げた。祖父のヤソジに褒められる時は、幼い夏苗にとっては至福のひと時だった。



ルコフスクの初球はグラヴィティーボール5倍。ややアウトコース寄りだがほとんど真ん中への投球でストライク。夏苗は初球を慎重に見送った。5倍のグラヴィティーボールはあと1球。



時が流れて、成長した夏苗は好奇心旺盛でお転婆な一面も見せるようになる。ダメと言われれば、つい試してみたくするのが子供ならずとも人の性だ。

♪パン！ パパパン！ パアーン!!」

その夜、家中のガラス窓が一斉に割れたのだ。あまりの出来事に、まだ年端の行かない夏苗はその場で泣き崩れる事しかできなかった。おいおいと泣きじやくり、庭の芝生の上で尻餅をついていた彼女の手には風神バットレプリカが握られていた。

「何をやってるんだ、夏苗！」

一番に駆け付けたのは、その日オフだった父親の希だった。

「ごめんなさあ〜い！」

父親はすぐに状況を飲み込んだようだ。そして、彼は取り乱すことなく、優しい声で彼女を諭した。その姿は、どんなピンチでも冷静沈着に対処する彼のマウンド捌きにもよく似ていた。

「夏苗。大事な事だから、よく聞いて欲しい。このバットは風を操る神様がモチーフになっっているんだ」

「……モチーフ？」

「作った人の願いが込めてある。そして、その願いが力になるようにできている」

「……願い？」

「そうだ。願いが大きければ大きい分だけ力は強くなる。この風神バットレプリカに込められた願いは、とつても大きな物なんだよ。それから、夏苗にはもう一つ大事な事を教えてあげよう。強い力を使う時は、必ず大切な誰かの為に使いなさい。だから、夏苗は本当に大切な物を見つけるまで、このバットを使ってはいけないよ。いいね」

「……うん」

夏苗は涙を拭いて頷いたが、この時は父親が何を言っているのかさっぱりわからなかった。目の前で起きた突然の出来事に怯えていた自分を、父親が優しく包んでくれた、温かい思い出の一つに過ぎなかった。

でも、今ならばわかる気がする。少しだけだけど、何となくだけど、あの時父親が何を伝えたかったのかを。



ハッキリとしたイメージがあるわけではない。ただ、今日の前で力の限り戦っているチームメイトの気持ちにどうにか報いたい。その一心で、夏苗は打席に立っている。このまま何もしないで終わるわけにはいかない。

風神バットの基本的な使い方はこうだ。下段に構えてテイクバツ

クをすると、バットの軌道上に真空空間ができる。この事により、ピッチャーの投球はその真空空間に吸い寄せられるのだ、また同時に打者のスイングもその真空空間に吸い寄せられて加速する。両者が引き付けあう事によってインパクトの精度があがり、お互いの加速によって打撃の威力が増すとされている。また、この打ち方をすると、打者や捕手が身体に刃物で鋭く切りつけられたような傷を負う事から、これは「かまいたち打法」と呼ばれている。

ただし、風神バットレプリカは完全な真空状態を作ることにはできず、それを維持する時間も短いためその威力はオリジナルの1割にも満たないと言われている。だがしかし、それでもトリオスター。グラヴィティーボールに対抗するには充分な力を持つアイテムであると言えよう。

ルコフスクの2球目もグラヴィティーボール5倍。少し高めの甘いコースだが球威は充分だ。夏苗は手を出さない。これで2ストライク。ルコフスクは5倍のグラヴィティーボールはすべて使い切った。

カウントノーボール2ストライクとなったが、ルコフスクは切り札を使い尽したのだろうか。いくら夏苗が打ち取り易い「安牌」とはいえ、切り札は最後まで残すのが定石だ。まして、夏苗が持つバットがレプリカとはいえ風神バットである事に気が付いていないはずがない。

黒く尾を引いたボールを5球連続で捕球して、口数の少ない波水出もまた不気味だ。

「まだ、何かあるのかしら……」

夏苗は恐る恐る、独り言のように呟いた。迂闊にしゃべれば、波水出のペースに飲み込まれかねない。

しかし、波水出は黙って一点を見つめていた。ただ、何となく視線を落として考え事をしている様にも見ええたが、ベースとマウンドの間の少し柔らかくなって色が変わっている赤土の部分を凝視している。昂ぶる気持ちを鎮めるかのように、彼はゆっくりと息を吐きながらストライクゾーンの中央線上にミットを構えた。

——グラヴィティーボール10倍が来る！

他のチームメイトよりも一瞬だけ早く、夏苗はそれに気が付く事ができた。あと一瞬でも覚悟を決める時間が遅れていたのなら、彼女は呆気にとられて次のボールを見送っていたことだろう。

ルコフスクが巨体を揺らしながら大きなモーシオンを起こすと、彼の右腕の力が掌の中に集約されていく様子を黒いオーラが具現化していく。やがて、彼の指先が黒いオーラに包まれると、赤い火花がジリジリと音を立てて彼の掌の中から溢れだす。

三塁側のベンチからは夏苗を制止するしゃがれ声と、憤りをぶつける怒号が響いたが、それらが打席やマウンドに届く事はない。

渾身の力が込められた、グラヴィティーボール10倍がルコフスクの剛腕から解き放たれた。

夏苗は下段の構えから、短く持ったバットをすくつと立てると、小さなめのテイクバックから一気にバットを振り抜く！

バットの軌道に吸い寄せられるようにボールの軌道が変化して、あとは振り抜くだけのはずだがバットが返らない。本来は141.7gの148.8gと定められているはずの小さなボールだが、巨大な鋼鉄の城壁を打ちつけたような反動に夏苗の腕は悲鳴を上げる。夏苗のささやかな握力ではバットを保持することができない。しかし、このまま手を離せばボールはバットを破壊して波水出のミットへと収まるだろう。既に覚悟を決めていた夏苗は、ここで引き下がらない。

——夏苗！ やめなさい！

突然、夏苗の耳に聞いた事のない女性の声が響いた。しかし夏苗は、それが母親の声であるとすぐに理解する事ができた。いくら、母親の助言とはいえ、ここで引き下がるわけにはいかない。

——さすが、私の娘ね。一度決めた事は曲げない、か。

「な、何なのよ、こんな時に」

初めての母との対面で話したい事、聞きたい事は山ほどあったが、

今はそれどころではない。

——こんな実験を知っているかしら？ 液体窒素に漬けて凍らせたバナナって釘が打てるくらいに硬くなるのよ。

強い衝撃を受けた時、生命の危機に瀕した時、それが引金となって新しい魔道術が錬成される事がある。夏苗の腕は既に限界を迎えていた。指が砕けて、手首や腕の関節もおかしな方向に曲がろうとしている。

——くれぐれも、身体は大事にしなさいよ。

母親の声は最後にそう言い残すと、どこかへ去っていった。

「月並みな事を……でも、ありがとう」

かなり差し込まれているものの、悪くない角度でボールを捉える事ができた。『ビキイイイン！』と鈍い音を立てて、打球は一塁後方のフェアグラウンドへと上がっていく。前進守備のライトが飛び込むが、詰まった打球は風に押し戻されて彼のグラブの手前でショートバウンドした。

一度グラブに当たった打球が、ライト後方に転々としていく。ライトの秦野はすぐに起き上がって打球を追いかけるが、ボールはかなり深いところまで転々としていく。

三塁走者のガツテムは悠々生還。続いて二塁走者の橘も本塁を踏んでフロッグスは逆転に成功した。一塁走者の井伏も三塁まで進塁、打者走者の夏苗も二塁まで到達して、なおも二死二三塁。

ヴオクスルトフットレイクスのエース、ルコフスクロシユツスキーのウイニングショットであるグラヴィティボール10倍が一夜にして二度攻略された。防御率ゼロ点台のエースは今日6失点。まさかの不調に、チーム内にも動揺が走る。

ライトからの返球を持ったまま内野まで帰って来た金が、ルコフスクにボールを手渡しする。

「大佐ア、しっかりするアル。二死だから打者集中アル」

「うぬう。あの小娘、なかなかやりおるわい。吾輩とした事が、完敗だ」

「飛んだ場所が悪かったアル。打ち取っている当たりアルヨ」

「いや、そうじゃない。あの小娘はグラヴィティボール10倍に臆することなく挑んだ。バットや腕が折れなかったのはどんなカラクリなのかはわからないが、吾輩は10倍ならば大丈夫だと多寡を括ってしまっていた。吾輩は、勝負する前から気持ちで負けていたのだよ」

「大佐が何を言っているのかわからないアルけど、まだ試合は終わっていないアル。早く気持ちを切り替えるアル」

「むむっ！ 吾輩とした事が、かたじけない」

マウンドに戻ったルコフスクは一切の動揺を見せなかった。打順は一番の矢部に戻ったが、彼をピッチャーフライに打ち取ると彼は颯爽とマウンドを後にした。

そして“切り札”があるのはフットレイクス側も同じである。

ベンチへ戻ったルコフスクは、今日誰も触れる事なかったバットに手を掛ける。島内リーグのパワーバランスを崩壊させる程の威力を持つクインテットスターレアアイテム「雷神バット」がその姿を御披露目しようとしている。

腰にまわしたバットを両肘で固定した状態で身体を左右に大きく捻りながら、ルコフスクは橘の投球練習を横目で確認する。小柄で線も細いが、無駄のない美しい投球フォームは、淀むことのない清流のように滑らかだ。

前の打席は彼女のスクリーンボールに翻弄されてしまった。視界から消えるかの如くキレの鋭いその変化がルコフスクの脳裏に焼き付いているが、それに惑わされるほどルコフスクも浅はかな打者ではない。

橘の投球練習が終わると、ルコフスクが右の打席へと歩みを進めた。ザクツザクツとスパイクが少し硬めの赤土に刺さり小気味よい音を立てる。そして、彼の右手に握られたポツキーバットを目にした夏苗に途轍もない緊張が走った。

ドキン。夏苗はその正体を知っている。だからこそ、彼女の表情は一気に凍りついた。1点のリードが、とても儚く、とても心許無いものとなる。決壊寸前の堤防を、ひとつしかかない土囊では何もできない

のと同様に、ただ濁流に飲み込まれる運命を思うと、一刻も早く、この場から逃げ出したい衝動に夏苗は駆られた。

敬遠？ 打者と勝負を避ける事は可能だ。しかし、バットは次の打者にも共有される。意味を成さない漢字二文字はすぐに却下された。
「プレー！」

無情にも、ゲームの再開が告げられた。

バッテリーのサインはなかなか決まらない。そして、一人の男が打席に立つルコフスクの違和感が付いた。それは、あまりにも僅かな違いだったが、彼を失望させるには充分な違いだった。

一塁を守るガツテムが、ある事に気が付いた。

Shocking Pink and Ash Purple

9回ウラ、先頭打者のルコフスクが打席に入り、ポツキーバットを振りかざす。初回から一貫して、彼の上半身は裸のままである。色白の肌がほんのり紅潮する程に男の熱気が溢れている肉体。体脂肪率の少ない前腕から浮かび上がる静脈はピクピクと躍動している。

そんな彼を前にして、マスクを被る17歳の夏苗は目のやり場に困惑していた。彼女の視線は、一定のリズムを刻んで揺れるバットへどうしても泳いでしまう。

「小娘よ！ この雷神バットがある限り、吾輩を打ち取ることはできぬぞ！ ガハハ！」

艶やかな光沢のある黒い塗装、妖しく浮かびあがる美しい木目。クインテットスターレアアイテムが放つ魅惑的かつ均整のとれたフォルムを忘れるはずもない。

雷神バットの能力について詳しい事は明らかになっていないが、強力な電気の力を帯びたバットを一振りした時の驚異的な飛距離は午前中の試合で実証済みだ。ルコフスクのバッティングは少々荒っぽい所があるものの、彼の打撃センスを侮ることはできない。1点のリードを守る為には慎重なリードが必要だ。

彼に対する橘みずきの持ち球はストレートと大小2種類のスクリュー。スクリューは右打者のルコフスクから逃げながら落ちる軌道で、かなり有効な決め球である。夏苗は前の打席でルコフスクを三振に取ったストライクからボールになる大きいスクリューを外角に要求した。これが打たれるのであれば、諦めるしかないだろう。

しかし、橘は首を横に振った。2つ年上の彼女は我儘で気まぐれなところがあるものの、野球に関しての知識・経験については年齢以上のものを夏苗は感じていた。橘が雷神バットの能力を侮っているとはいえないし、彼女の高いプライドが自身のウイニングショットを攻略されるのを恐れたとも思えない。

次のシグナルを夏苗が躊躇すると、橘は一旦プレートから足を離れた。

そこに一塁からガツテムがのしのと歩み寄っていく。傍目には息が合わないバッテリーを見かねて励ましている様に見えるだろう。ガツテムはミットで口を覆いながら、橘のすぐそばまで近寄って小声で彼女に尋ねた。

「本物ノ雷神バットハ ドコニアルノデスカ？」

橘ははつとした表情でガツテムを見上げた。大きく目を見開いた色白の小顔は充分に美しく、見つめられれば多くの男が戸惑う所だが、ガツテムは目もくれていない。

「今、ルコフスクが持っているじゃない」

澄み切った瞳を一切逸らすことなく、橘はガツテムに答えた。そこに、焦りや動揺の色はない。しかし、ガツテムは食い下がった。彼も取り乱すことはせず、あまり表情を変えなかった。

「私ノ目ハ ゴマカサレマセン アレハニセモノノ雷神バットデス」

「何か証拠でもあるの？」

「グリップテープデス 午前チュウノゲームデ端ノホウヲ少シハガシテイマス」

「ルコフスクが巻き直したんじゃない？」

「彼ガ 丁寧ニテープヲ巻き直スデショーカ 私ハソウハオモイマセング」

打席に立つルコフスクは、腕力に物を言わせて素振りとはばかりにバットを振り回していた。几帳面な彼の部下がグリップテープを丁寧に巻き直した可能性もあるだろうが、目の前の大男を口先だけでやり過ぎす事は難しそうだ。

ガツテムはまだ視線を逸らさなかった。彼の目は、その眼差しの奥にある覚悟が、簡単に揺らぐものではないことを物語っていた。橘は観念して素直に事情を話す事にした。

「話せば、長くなるんだけど……」

「結論ヲ サキニ言ツテクダサイ 理由カラ言ウノハ日本人ノ悪イ癖

デス」

ガツテムは大きなファーストミットを橘の顔面に向けて台詞を制した。

「雷神バットは、もうここにはないの……」

「オーケー 事情ハアトデキキマス」

そう言い残して、ガツテムはあっさりマウンドを去っていった。理由を聞かれ、責め立てられるだろうと思っていた橘は、あまりにも乾ききったガツテムの反応に戸惑った。多くを語らない彼の後ろ姿は、一切の情状を斟酌しようとしないうる冷淡な態度の裏返しにも見える。続きを話す事で、背負い込んだ重荷が少しでも軽くなるのではないかと至りかけた甘い考えが、逆に彼女の良心にチクリと刺さる。

橘は、まとわり付くネガティブな気持ちを振り払って、再びキャッチャーとのサインの交換に挑む。

——夏苗のサインは外角のストレート。

まともな勝負はしたくないのだろう。マスク越しの青ざめた夏苗の表情が気の毒だ。さて、18.44m先に座る弱気な彼女に真実を知らせる為にはどのようなすればよいだろうか。

球種はともかく、コースのサイン違いには対応できるはずだ。橘はインコースに狙いを定めてステップを踏むと、ルコフスクに対して初球を投じた。もとより、鬱々とした気持ちを晴らす為には、打者の胸元を抉るクロスファイヤー程気持ちの良いものはない。

「カキーン！」

芯を食った快音がレイクサイドスタジアムに響くも、打球は三塁側スタンドの奥深くへ消えていく。ルコフスクはインハイのストレートを見事に捉えたが、あのコースは何度打つてもファールにしかならない。

「ファールボール」

球審の茅野から新しいボールを橘は受け取ったが、夏苗の表情は冴えないままだ。ただの「いい当たり」では「偽物である」という判断は難しいだろうか。

「ガハハハハ！ さすがは雷神バット！ 手応えも格別である！」

それは気のせいだ。少なくとも、打席の男は気が付いていない。ならば好都合。敵を欺くには味方もろともだ。最終回、橘は夏苗の慎重すぎるリードを受け入れる事にした。偽物の雷神バットの力にすがろうとしている打者を打ち取ることは、橘にとって難しい事ではなかった。



「やはり、ここには雷神バットはないみたいです。しかし、彼女の言う通りならば、この情報は高くつきそうです」

ルコフスクの大ファールをバツクネット裏で見届けた保谷は、赤茶色の癖のある前髪を掻きあげながら、ゆつくりと立ち上がった。レースパンツに付いた砂埃を手で払い、眩しく光るカクテル光線に背中を向けると、出口へ続く通用口の階段を下りていく。

これから先、雷神バットを巡って必ずひと悶着あるだろう。だがしかし、今はそれどころではない。本物の雷神バットを持ったピンクⅡパンサン達はどこかへ消えてしまった。彼らはどこへ行ったのだろうか。

それを解く為の唯一の手掛かりは橘の記憶だが、彼女の記憶もいまひとつ理解に苦しい。彼女達は3人で行動を共にしていた。おそらく彼女は見張り役で、残りの二人が球場内に潜入して雷神バットを精巧な偽物とすり替えたのだろう。彼らがどの様にして、誰にも気付かれる事なくバットをすり変えたのかはわからない。そして、どういう訳か彼女は球場の外に置き去りにされてしまっていた。

橘みずきに、もう用はなくなつた。と結論付けてしまえば手っ取り早いのだが、どうもそれでは腑に落ちない。論理的に考えている時に何か引つ掛かるのは、何かを見落としていたからだ。橘の記憶の中のピンクⅡパンサンは常に紳士的に振る舞い、義理堅い性格の持ち主だった。そんな彼の性格が、こんな地の果ての球場に年頃の女の子を置き去りにするなんて、余程の事情がない限り考えにくいのだ。

「よっぽどの事情か……」

球場の出口に差し掛かり、自身のロードバイクを目にした時、保谷ははたと立ち止まる。もし、雷神バットを持った二人が、球場に接近する自分の存在に気がついていたら……どうするだろうか。

彼らは橘みずきとの合流を諦めて、逃走する事を選んだだろうか。保谷の絡まった思考がするすると解けていく。

「ガッデム！」

彼は上着のポケットからPDAを取り出すと、連絡先一覧から一人の女性の連絡先を検索にかける。この女と関わりと色々厄介だが、蛇の道は蛇。今は彼女の情報網が頼りになりそうだ。

プルルルル♪ プルルルル♪

2コールで彼女は電話に出た。ムツハーツという荒い鼻息が受話器越しに響いてガサガサというノイズが彼女の声に紛れる。

『あら？ どうしたの？ あなたから掛けてくるなんて珍しいわね♪』

「姫野か。ちょっと聞きたい事があるんだが……」

『ムツハー！ いいわ。保谷さんの頼みなら何でも聞いちゃう』

「雷神バットが盗まれたのは知ってるな」

『愚問ね。私を誰だと思ってるの？ アンダーグラウンドの勘のいい連中はみんな血眼になって捜してるわよ』

「……そうみたいだな」

『ああ、もう、すでに何か握ってる口ぶりね。尊敬しちゃう』

「ありがとな。ところで、雷神バットを今手に入れたら、お前ならどうする？」

『そうねえ。闇オークションにでも流しましょうかしら』

「闇オークション？」

『運営の目を盗んで法外な値段でレアアイテムを取引するの。そこに雷神バットが出品されるとなれば、話題性十分ね』

「その闇オークションは、どこでやってるんだ？」

『あら、保谷さんともあろう人が知らないの？』

「運営には目を付けられたくない身の上でね」

『ムツハーッ！ 私と一緒に行ってくれるなら教えてもいいわよ？』

「ん…？ ああ。誘いは有り難いんだがな。レディーを危険に巻き込むのは性に合わない」

『んもお。心にもない事を言わないで。でも、いいわ。特別に教えてあげる』

「デートはしないぞ」

『会場で偶然ばったり出会うことだってあるでしょ。実はね、明後日の水曜日にジエンドで大規模な闇オークションが予定されているの』
「確か、ジエンドと言えば南地区にある砂漠の中の観光都市だよな」

『運営の目を逃れてコソコソ悪さするには好都合ね。私も行ってみようと思うの。だって、パープル・オーの生ユニフォームが出品されるって噂なのよ。どこで待ち合わせる？ ねえ、ちよつと聞いている……!?!』

後半を聞き流しながら保谷は通話終了ボタンを押下した。

雷神バットが盗品となり、このタイミングで闇オークションが開催される。ピンクⅡパンサンがこの機を逃すはずがない。長い旅になる事を予期した保谷は、装備を整えに一度イーストタウンの自宅まで戻る事にした。



“ピピッ!”

「会話ログ 『雷神バット』 ヒットしました」

「今度は与太じゃないんだろうな。場所は？」

「長距離通話ですね。西地区姫野カレンと、東地区保谷丈……」

「聞かせろ」

アッシュパープルの長髪を気障にアレンジした男が通信士から強引にヘッドホンを奪い取った。男はまだ若い。最新鋭の通信機材（とは名ばかりの盗聴システム）で埋め尽くされたこの部屋を仕切っているのは彼のようだ。

「随分とノイズが多いな。もつとクリアにならないのか？」

「あ、それは女の鼻息です」

既に2アウト。勝利を確信した私の声は今までで一番大きかったと思う。

何の変哲のないゴロでも丁寧にバウンドを合わせて大坂さんは掴む。捕ってから送球までの素早い動作を当たり前のようになすと矢のような送球が一塁へ……

あれ……、身体が……。

だんだんと視界に赤土のグラウンドが近づいてくる。パシンというガツテムさんの頼もしい捕球音を最後に私の意識は途絶えてしまった。

M a g i c a l C r a m p

三塁側ベンチの横に立て掛けて並べられていたバットが、ドミノ倒しのように倒れていく。ベンチ隅の小さな机の上でスコアを付けていた加藤京子は、カランコロンと大きな音を連鎖させながら崩壊していくバット群に気を取られて、茅野のコールを聞きそびれてしまった。少々演出過剰だったアクションも見逃してしまった。試合に集中していたはずの加藤にとっては、それほど心を掻き乱される出来事だった。嫌な予感がした。

「ストライクじゃ。2ストライク1ボール」

戸惑っている加藤の様子を察したヤソジが呟いた。彼は何かを噛みしめるように、グラウンド上の一点を見つめて、両手でベンチ前の柵を握りしめている。その腕がかすかに震えていることに加藤は気が付いた。

何か思い詰めた表情のヤソジとは対照的に、菅野はベンチに浅く腰掛けて背もたれに体重を預けてリラククスしている。彼はぴゅーと口笛を吹いて橘の快投を賛辞する言葉を並べていた。

二人の温度差もどこか薄気味悪い。加藤は胸騒ぎを覚えた。もう一度ベンチの横で散乱しているバット群を見ると、折り重なるバット群の中でただ一本、風神バットレプリカだけが粉々に砕けて原形を留めていなかった。思い返せばグラヴィティーボール10倍を打ち返したのだ。トリオスターとはいえ木製のバットが今まで原形を留めていた方が不思議なくらいだ。しかし、その無惨な姿を目にした加藤は背筋に冷たいものが巻きつくような嫌悪感を覚えた。漠然とした恐怖が知らぬ間に接近してくる恐怖映画のような感覚。

「キーン！」

打球はショート正面へ。

勝利の喜びに、というよりは現実を引き戻された安堵感に、加藤は思わずヤソジの方を見たが、彼女は再び戦慄した。

野球観戦をした事がある人間ならばわかるだろうが、売子のお姉ちゃんの太腿に目を奪われたり、あるいは握りしめたビールを溢して

前列のオヤジの禿げ頭にぶちまけたりでもしない限り、試合に興じる人間ならば、その視線は打球の行方を追いかけているものだ。いかに捻くれた野球狂でも打球を一切見ないという事はあり得ないだろう。

ヤソジの視線が、一点を見つめたまま動いていない。

視界の左端に両手を叩きながら立ち上がる菅野を捉えている加藤は、おそろおそろ視線を右にスライドさせていく。シヨート大坂が丁寧に打球を捌いて一塁へ転送。ファーストガツテムが胸元でガツチリ掴んでスリーアウト。

そして、更に右手、キャッチャーである龍ヶ崎夏苗がうつ伏せに倒れていた。

悪い事に、彼女の身体から少しずつ色が失われていく。貧血とか、そういう現実的な色の失われ方ではない。色褪せていく写真のように、あるいは画像処理ソフトで徐々に色合いを消してモノクロ化していくような、そんな異常な光景だった。

加藤京子は本でしか見た事がなかった。しかし、それが今、目の前で起きている出来事、魔道痙攣（マジック克蘭プ）だ。許容量を超える魔力を使用し続けると、肉体と精神が限界を超えて起こるアレだ。

「血は、争えないのう……」

かすれた声だったが、しかしハッキリとヤソジは呟いた。品野ヤソジ。伝説の風神打線を率いた中心選手であり、今も語り継がれる大惨事、魔力暴走事故の数少ない経験者。ヤソジはグラウンドの一点を見つめたまま話し続けた。

「京子さん。このままではいけません。マジック克蘭プは不足した魔力を求めて周囲の魔力を食い荒らします。無理は承知でのお願いじゃ。何とかありませんか？ このままでは、夏苗は真っ白になってしまう」

「ちよつと待つてください。夏苗ちゃんは魔力を使っていたと言っても、せいぜいミラーージュゾーンくらいのもの。魔道痙攣なんて有り得ないわ」

「わしが、迂闊じゃった。今しがた、風神バットが砕けるまで失念して

おつたが……」

ヤソジは一度言葉を止めた。この間にも夏苗の色がみるみる失われていく。直射日光に晒された記念写真のように夏苗のシルエツトがぼやけていく。

外野から戻る3人は倒れた夏苗を見て慌てて戻ってくる。まだマジッククランプには気が付いていない。永瀬は膝を突いてその場にしゃがみ込んでしまった。ガツテムと橘は、あまりに凄惨な光景に状況を飲み込めず立ち尽くしている。大坂が夏苗の名前を呼びながら本塁方向へ駆け寄ろうとすると、球審の茅野が厳しい口調で制した。「近づくな！」

大坂はムツとしたが、すぐに井伏にも呼び止められた。彼もまた腕組みをしたまま仁王立ちして動かない。

「マジッククランプは最も近くにいる人間の魔力から食い荒らす。それで足りなければ、次に近くにいる人間、それでも足りなければ、その次に近くにいる人間……といった具合だ」

「だったらオレが！」

「だから待てと言っているんだ。一度マジッククランプになってしまつと、どれだけ魔力を食い尽くしても満足する事は無いんだよ」

「え……？」

「不足した魔力、つまりマイナスの魔力を補った後も魔力の吸収は続くんだ。やがて本人の許容量が満たされてゲージがMAXになる。だが、魔力の吸収が止む事はない」

「俺達は、いや、夏苗はどうなるんですか？」

「わからない。溢れる魔力を放出する為には強力な魔道術を放ち続けなければいけなくなる。あるいは……これは、言わずともわかるよな？」



一度言葉を区切ると、ヤソジはまた話し始めた。

「アイスブロックという魔道術を知っているかね？」

「最近はあまり見かけませんが、一時期流行りましたね。氷属性のキャッチャーが自分の身体を瞬時に凍結させてブロックするやつですよね」

「そうじゃ。夏苗は恐らく、無意識のうちにそれをやっていたんじゃない？」

「アイスブロックってそんなに消耗する魔道術なんですか？」

「ランナーと交錯する一瞬だけならば問題なからう。じゃが、これを1イニング継続していたとなると、どれだけの消耗か、見当がつかないの」

加藤は粉々に砕けたバットを思い出す。

「こんな危険な試合、早々に棄権するべきじゃった。いや、そもそも、夏苗に野球など……」

「それは、違います……!」

夏苗ちゃんは、あんなに楽しそうに野球をしていたのに。と、加藤は言えなかった。彼女の身体はバットと同様にボロボロのはずだ。

夏苗の魔力が暴走を始めるには、まだしばらく時間が掛かるだろう。それまでに、何かできる事があるはずだ。加藤は周囲を見回した。少しずつ頭がクリアになっていく。加藤は菅野の手を取るとグラウンドに向かって歩き始めた。

「ちよつと来て!」

「おおい、何だよ……」

「いいから早く!」

渋る菅野を急かすように加藤はベンチを出た。



車は人影のない一本道を飛ばしている。アウトインアウトで一筋のハイビームが暗闇を蛇行する。

そんな、とある車内――

「予定外の魔力を使ってしまいましたね」

「いいさ、予定通りに行かないからこそ面白い事もある」

「でも、いいんですか?」

「何がだ？」

「橘ですよ」

「……」

車内は沈黙に包まれる。シフトレバーを忙しく操作しながら軽快にハンドルを切る大みみず男には、この沈黙の意味がすぐに理解できた。橘をレイクサイドスタジアムに置き去りにした事は、後部座席に深く腰掛けている男も本意ではないと。沈黙に耐えきれなくなったドライバーは、無神経だった発言を詫びた。

「すみません」

「パンサンよ、どうして謝る？」

「いや、何となく……」

「事は計画通りに進んでいるんだ。それに、あの女の役目はもう終わっているであろう」

「はい」

「これ以上、彼女を巻き込む事はないであろう」

「しかし……」

「お前の気持ちはわからないでもない。だが、大局を見失ってはいけない」

「はい」

「野球超人伝最後の1ページの奪還。これを成し遂げない限り、俺達はこの島の呪縛から逃れることはできないんだ」

「わかってます」

「ならいいんだ。……しかし、あの男、気になるな」

「保谷掟ですか？」

「ああ、何故、あのタイミングで現れた？」

「あの試合は地元のアジア局でネット中継されていたんです。物好きな人間が観に来ても不思議ではないでしょう」

「だいたいのだが……げほっ、げほっ」

「オーさん。余計な悩み事は身体に障ります。ゆっくり休んで下さい」

「そうだな。悪いが、お言葉に甘えさせていただくとするよ」

後部座席の男、パープル・オーは暗闇を映し出している車窓に目を移した。街灯もガードレールの無い山道をレンタカーのスポーツワゴンが駆け抜ける。この峠を越えた先にカオスシティという小さな街があるようだ。今夜はそこで一夜の宿を構える事になっている。ここまでは、概ね順調。しかし、回り始めた歯車は少しずつ、確実に狂い始めていた。



「おい！ 何を始める気だ？」

茅野が三墨線を跨いだ加藤に怒鳴りつけるように訊いた。

「何って、このまま放って置くつもり？」

加藤も眉間にしわを寄せてキツと茅野を睨みつけた。

「どうするつもりだ」

「結界を張って、これ以上の魔力の暴走を止めるわ」

「そんなことが出来るのか？」

「やってみなければわからないでしょ？」

加藤は菅野を呼び寄せると、刺青が良く見えるようにアンダーシャツを脱ぐように言った。菅野は言われるがままに上半身裸になった。ルコフスクやガツテムのように分厚い鎧のような筋肉で覆われている訳ではないが、広い肩幅にバランスよく鍛えられている見事な逆三角のシルエットに流石の加藤も舌を巻いた。

「永瀬くん！ パワリンエーテルあるかしら？」

加藤は座り込んでいる永瀬に尋ねた。永瀬は首を横に振った。加藤は同じ事を一墨側ベンチにいるルコフスクに尋ねたが、彼の答えも同じだった。パワリンエーテルは島では最もポピュラーな魔力回復アイテムだ。

「もう、これだから東地区は……」

「もう、これだから東地区はいつまで経っても魔道術が進歩しないのよ」

加藤が溜息をつくのと同時に、背後からハスキーな女性の声が聞こ

えた。振り返ると、バックネット横の通用口から一人の女性が近付いてくる。高円寺奈加乃だ。一昨年、西地区の首位打者に輝き、翌年のシーズン途中に突然の引退宣言。なぜ、彼女がこんな所に居るのだろうか。良く見ると、彼女の手には栄養ドリンクのような小瓶が握られていた。

「あげる。1本しかないから大事に使ってね」

「いい………んですか？」

「いいわ。それにしても、見ない術式ね。でも、理に叶ってる。あと、ここはこうした方が良いわね」

高円寺は加藤に小瓶を渡すと、加藤が施した結界を覗きこみ少しだけ手を加えた。小瓶を受け取った加藤は礼を述べて結界を仕上げる。そして、小瓶のキャップを空けて夏苗の口元に注ぎ込んでいく。加藤が菅野の刺青の模様を確認しながら慎重に印を切っていくと、夏苗の色の後退が緩やかになり、やがて止まった。

「……こんな術式、どこで覚えたの？」

「見よう見真似よ。回復魔法でケガの治療とかは出来るけど、結界魔法なんて専門外。術式は彼の刺青を参考にさせてもらったわ。魔力の循環を抑制する効果があるみたいなの」

「それで、この術式か。……すごいわ」

「だけど、あなたのアドバイスのおかげで後半部分はだいぶ楽に展開できたわ。持続時間も延びたし」

「長くて2日って所かしらね。ところで、あなた何者なの？ パラキフロッグスのチームドクターにしては博識すぎないかしら」

「私はただの通りすがりの洋服屋よ」

「ふくん。そうなの……。まあ、いいか……」

高円寺は腰に手を当てたまま、おもむろに菅野に視線を移した。そして、両手首から肩にかけてビッシリ彫られた刺青を舐めるように見つめた。

好奇の視線を容赦なく浴びせる高円寺に不快感を覚えた菅野は、不機嫌そうに長袖のアンダーシャツをさっさと被ってしまった。

「隠す事ないじゃない」

「見せ物じゃないんだ」

「……それもそうよね」

高円寺も何となく居心地が悪くなった所に、バックネット横の通用口から顔を出した髭のおじさんが早く戻るように催促してきた。高円寺は一同にお見舞いの言葉を残してその場を後にしていった。

夏苗が一命を取り留めた事がわかると、その場に居合わせた面々の緊迫が一気に弛緩する。まだ予断を許せない状況だが、最悪の事態は免れた。大坂が歩み出て夏苗を背中に背負い、加藤を伴ってベンチに下がる。

スコアボードを振り返れば6―5。フロツグスの勝利でゲームは幕を閉じた。

そして、一塁側ベンチから一本のポツキーバットを携えてルコフスクが姿を現した。

「手放すのは惜しいが、約束は約束だ。仕方あるまい。ガハハ！」

「ミスタールコフスク 気ガツイテイナイノデスカ？」

「ムムッ！ ガツテム君、何の話だ!？」

グラウンドの真ん中でルコフスクは足を止めた。ガツテムがルコフスクに近付いてポツキーバットを受け取ると、その場で一振りして見せる。ビュオン。風を切る重低音が響いた。

「コレハ 雷神バットデハアリマセン」

「ガハハ！ 何を言っているんだいガツテム君。これは正真正銘の雷神バットだ……と、思うが……」

よくよく考えてみれば、5番ルコフスク、6番厚木、7番平塚、そのいずれにもヒット性の当たりは無かった。3人ともクインテットスターレアアイテム雷神バットを手にしていたにも関わらずだ。確かに楯のスクリューは手強かったが、クインテットスターはそんな実力差を埋めて余りあるものだと言われている。だとしたら、これは偽物なのだろうか？ そんな疑念がルコフスクの頭の中をよぎる。

ルコフスクはもう一度ガツテムからバットを受け取る。

「ビュオン！」

「おかしいな……」

「ビュオン！」

「そんな筈では……」

より強く、より鋭く、ルコフスクはバットを振り込む。しかし、何も起こらない。もし、これが本物であれば、ナイター設備に何らかの負荷が掛かって、どこかしらで異常が起こるはずだ。今思えば、試合中もそのような事は無かった。

焦るルコフスクに茅野が追い討ちをかける。

「困りますなあ、ルコフスクさん。試合前の契約は今更取り消しできませんよ。万が一不渡りなんて事にでもなったら、あなた、タダじゃ済まないんじゃないですか？」

「ぬぐう。言うではないか。だが、君の素性も調べさせてもらった。なかなか危ない橋を渡っているではないか。ここはひとつ取引しようではないか」

「聞きましょう」

「48時間でいい。吾輩に時間をくれないか。その間に雷神バットを何とかしよう」

「それで？」

「君に新しいIDを用意する。本部のデータは削除したらしいが、それだけでは何かと身動きが取りにくいだろう。そこで、東地区の一市民としての茅野啓吾を用意する。ただし、雷神バットを奪還するまでの期限付きだ」

「いいでしょう。ですが、雷神バットを取り戻せなければどうします？」

「それは、お互い困るのではないかな？ 必ず取り戻して見せる。ガツテム君、面目ないが、これで容赦してくれないか」

ルコフスクがガツテムの方に向き直り、深く頭を下げた。ガツテムは目を瞑り、少し考え事をしているようだったが、やがて目を開くとルコフスク達に告げた。

「承知シマシタ デスガ条件ガアリマス……」

第三章

C a f e G i a n t s S t a r

カオスシテイは南地区の東部にある廃墟の町である。

早朝にヴォクスルトゲートを出発して車に揺られること3時間余り、雷神バットを訪ねて西へと向かうガツテム一行は、必然この町に立ち寄る事となった。ここではMP回復薬のパワリンエーテルの調達も兼ねている。

しかし、町とは名ばかりで表通りには人影が見当たらない。はじめは暑さに負けて、町中の人間が屋内に避難しているのかとも思ったが、どうやらそうではなさそうだ。町並みを彩るはずの建物の殆どは手入れされていない様子がない。壁面は無様に崩れ落ち、割れたままの窓ガラスは放置されている。廃墟の町という触れ込みは、誇張でも何でもないようだ。

「あゝ、喉渴いたあゝ」

愚痴をこぼしているのは一番に車を降りた橘だ。オレンジ色のスニーカーが蹴る地面は凸凹に舗装がめくれ上がっていて、その窪みに彼女はうっかり足を取られてつまずいてしまう。よろめく彼女の右腕を大坂の左手が掴んだ。

「気を付けるよ」

「ごめん、ありがとう。それにしても、自販機も全部売り切れてるじゃない！ 一体どうなってるのよ、この町は？」

「廃墟の町、カオスシテイ。南地区の中央を占める大砂漠地帯の東側に位置して、気候は比較的穏やか。しかし、近年はホーム球団であるカオスシテイフェニックスの成績不振により財政がひっ迫。同時期に球団内の不祥事も明るみになって事態に追い討ちをかけた。財政難と主力選手の流出に歯止めがかからず現在は都市機能・球団活動は事実上の停止状態……だってさ」

ガイドブックを片手に大坂は読み上げた。女の子が一人で歩いては物騒だと、大坂も散策に付き添う事にした。

「北地区じゃあんなに華やかだったのに、こつちじゃ野球するのも一苦勞って感じよね。でも、この様子ならフェニックスには簡単に勝てるんじゃない？」

「だといいいけど。……っていうか、試合なんてできるの？　この町？」

路地を抜けて、大きな交差点に出た大坂は足を止めてきよろきよろとあたりを見回したが、遠くまで見渡せる大通りにも人影はない。歪に展開した近代的な雑居ビルが虚ろに並ぶだけだ。

「ねえねえ、あそこの喫茶店でちよつと休まない？」

橘が指差す先に小さな喫茶店があつた。

『Cafe Giants Star』

小さいながら品のある木製の看板が目を惹いた。テラス席に広げられたカラフルなパラソルが強い日差しを受けて、客席に濃い影を落としている。

「でも、先にパワリンエーテルを買わないと……」

「ジュースもお茶もろくに売ってないこの町のどこにパワリンエーテルがあるって言うの？　大坂さんは夏苗ちゃんの心配ばかり。私の事はどーだっていいの!？」

橘は両手を腰に当てて口を尖らせた。

「そこまで言ってないだろ」

「じゃあ決まり。行きましょ」

橘は大坂の手を取ると半ば強引に引つ張った。広い町で薬局もコンビニも見つけられず手詰まり状態だったので、大坂も少し休憩することにした。とはいえ、それは恋人との甘いひと時というよりも、お転婆でわがままな妹のご機嫌取りに近いものだったが。



黒い木製の扉を開けると、上品な鈴の音がカランカランと店内に響いた。板張りのフロアーに客席はカウンターとテーブルを合わせて15席ほどあるが、先客はいないようだ。

テラス席から自然光を取り込む店内は、明るすぎず暗すぎずのいい

具合に採光されていて、店内を彩る観葉植物の緑や調度品の赤や青がセンスよく配置されている。カウンターの奥にあるショーケースにもカラフルなドリンクやリキュール類のボトルが並んでいて小洒落た雰囲気漂っている。

エントランスに掲げているイーゼルの文言をみるに、店は営業しているようだが、店員の姿はなく、店内はしんと静まり返っている。

大坂と橘が顔を見合わせて出直そうとしたところに、先程の鈴の音よりも更に上品な女性の声が奥から聞こえてきた。

「いらっしやいませ」

2人が同時に振り返ると、美しい女性が奥から現れた。20代中頃だろうか。21歳の大坂からすると、少し年上のお姉さんといった美貌である。黒いクラシックなメイド服が良く似合っている。彼女が優しく微笑んで頭を下げると、カチューシャに付いた大きな白いフリルが揺れた。

しかし、揺れているのはフリルだけではない。メイド服を押し上げる豊かなバストが動くたびに揺れている。大坂はごくりと生唾を飲み込んだが、隣に立つ橘の肘打ちですぐに現実に引き戻される。

「アイスティーでいいわ」

橘はテラス側のテーブル席へ進むと、不機嫌そうに椅子を叩いて大坂を促した。大坂も同じものを注文して、慌てて奥のテーブルへと進む。メイド姿の店員はオーダーを恭しく復唱するとバーカウンターに入り、グラスを並べはじめた。

二人掛けの小さなテーブルに向かい合って座る。付き合いたてのカップルであれば、それだけでハッピーなシチュエーションだが、二人の関係はただの異性友達のそれに近い。先程から不機嫌そうに眉を吊り上げている橘は、口をへの字に曲げて黙ったままだ。余計な御世話だと思ったが、大坂は訊いてみる事にした。

「気にしてるの?」

「何を?」

橘は喰い気味に答えて、キツと大坂を睨みつけた。睨まれた大坂は慌てて取り繕う言葉を探したが、どの台詞も正解とは思えず「えっ、

ああ……」と訳のわからない相槌を打ってしまふ。

試合中は冷静沈着に振る舞っていた大坂が慌てふためく姿を見て、橘は気を良くしたのか猫のような大きな瞳を細めて「ふふふ」と笑い相好を崩した。

「気にしてなんかないわよ」

そうこうしているうちに、巨乳メイド店員がアイステイーを2つ携えて現れた。弾む胸元の名札には出井と書かれていた。珍しい名前だ。細いウエストをキュツと結んでいる純白のエプロンの帯が、出るところは出て、締まるところは締まる彼女のシルエツトをより一層強調している。その美貌に吸い込まれそうになる大坂だったが、いつまでも凝視しては失礼だ。橘の刺すような視線も感じる。大坂は劣情を押し殺して、視線を上に移したが、襟元から僅かにのぞく鎖骨がまた官能的だった。彼女はにっこりと微笑んで、大坂にそつとグラスを差し出した。

口を半開きにして、目を白黒させている大坂を見かねて橘はウェイトレスに尋ねた。表情は穏やかだが、声は穏やかではない。

「この町には薬局とかスーパーとかはないんですかあ？」

「昔はあったんですが、今はもうありませんね」

品のある艶っぽい声が大坂の耳元で囁く様に響いた。それと同時に、ほのかに甘い香水の香りが大坂の鼻腔を刺激する。橘は大坂に鋭い視線を送り続けていたが、彼の意識はすっかりお花畑の中だ。堪りかねた橘は大坂の足の甲をスニーカーでギュツと踏みつける。ようやく大坂は意識を取り戻し、会話に加わった。

「パワリンエーテルを探しているんです」

「パワリンエーテル？ そんなに高価な物は、ここでは手に入らないですよ」

「どういうことですか……？」

「カオスシティは南地区の東のはずれにあります。南地区と一口に言いますが、中央に大砂漠地帯がありますから、物資の流通が容易ではありません。もともと豊かではないカオスシティでは隣町のジエンド……といっても、ここから車で5時間以上かかる砂漠の中の街で

すが、ジエンドからの物資がとても貴重なんです」

ジエンドは南地区のほぼ中央に位置する南地区第二の都市である。比較的西側に人口が集中している南地区では「終わり」を意味するジエンドよりも東側は辺鄙な土地であるという隠喩でもあるそうだ。カオスシティも例に漏れずということらしい。

「ジエンドに行けば、パワリンエーテルは手に入りますか？」

「もちろん。ジエンドは広大な砂漠の中に築き上げられた大歓楽街。欲しいと望めば大概の物は手に入るわ。もっとも、これからジエンドを目指すのであれば、相応の覚悟が必要ですが」

「覚悟ですか？」

「ええ。旅に危険はつきものよ」

出井はにっこりと目を細め、テーブルに伝票を置くとカウンターの奥へと下がっていった。

「じゃあ、決まり。もう、こんな店に用はないわ。ジエンドに急ぎましょう」

橘はアイスティーを一気に飲み干すと、オレンジ色のウサギを型取ったコースターに勢いよくグラスを置いた。橘の失言に出井は眉をひそめかけたが、そこは接客業だ。客には悟られない。

大坂と橘は支払いを済ませて、店を後にした。

彼らが見えなくなるまで、メイド姿のウエイトレスは店先で見送りを続けたが、彼女の口元が妖しく微笑んでいた事に、彼らが気が付く由もない。



時を同じくして、カオスシティ内にあるジャンクショップにて——
「うっひょ〜！ 宝の山でやんす！」

店内をはしやぎ回る矢部を尻目に、菅野は店主と交渉中だ。

「こんなガラクタ欲しがる人間なんて今時いないだろ？ もっと安くしてくれよ」

「ここにはガラクタなんて一つも置いてないよ。それに、ほら、欲しが

る人間なら今、ワシの目の前にはいないか」

「くうくつ、足元見やがって」

「こつちも商売だからね。買う気がないならとつとと帰りな」

「わかった。4500ペラだ。これでどうだ？」

「だめだ。5000と言ったら5000だ」

「あくも面白いよ！ ケチな店だな！ おい、矢部！ 帰るぞ！」

「待つでやんす！ オイラこれが欲しいでやんす！」

矢部が指差すのは店の隅でほこりを被っている煤けたロボットだ。PAL1号。一昔前に流行った量産型野球ロボットである。最近では見る影もなくなつたが、だからと言って希少価値にプレミアが付く程の代物でもない。値札には特価150,000ペラと記されていた。

「そんな物を買ってどうするんだよ」

「特価商品でやんす！ お買い得でやんす！」

「これから砂漠を横断するんだ。車のメンテナンスにどれだけ金が掛かると思ってるんだ。150,000ペラあればこの砂漠を15往復してお釣りがくるの」

「今のオイラ達にはメンバーが足りないでやんす。彼は貴重な戦力でやんす」

「彼ねえ……こいつの実力を知って言ってるのか？」

「知らないでやんす。でも、オイラの見立てに間違いはないでやんす」
菅野は矢部にPAL1号という野球ロボットのあらましを簡単に説明した。人間との簡単なコミュニケーション能力を搭載した人工知能と人間と比較しても遜色のない運動能力。まさしく科学技術の結晶だったが、彼らの野球能力は子供の練習相手程度に留まった。

飛んだり滑ったりという激しい動きに精密な機械が耐えられなかったし、高速で飛んでくる小さいボールを細いバットで叩くなんて計算は彼らのメモリでは容量オーバーとなり、とても対処できるものではなかったらしい。彼らはピッチングマシン程度の働きはしたが、やがて無用の長物となつてしまった。

「逆立ちしても、こいつはポンコツなんだよ」

「そんな事ないでやんす。これと、これと、あとこれと……」

矢部は雑多に部品に並ぶ店内からベアリングやらセンサーやら基盤やらをかき集めていく。

「店長さん。これ全部でいくらでやんすか？」

「ほほう……」

店主は関心のあまり目を細めている。

「いやあ、面白い。青年、名前は？」

「矢部明雄でやんす」

「矢部君、実にすばらしい。このPALI号は君に譲ろう。お代は結構じゃ」

「やんす？」

「この組み合わせならば、ピッチャーとして使えるかもな。球速も140 km/h後半はでるかも知れない」

掌を返したように店主は喜んでいるが、この反応に菅野は納得がいかない。

「どういうことだ？ PALシリーズと言えば野球ロボットの先駆けだが、その能力はいくら改良を重ねたところで少年野球レベルがいい所だ。それが140 km/h後半だなんて、冗談だろ」

「冗談かどうかは、試してみるかい？ 矢部君、裏の工房を好きに使うといい。案内しよう」

頬肉を眼鏡に喰い込ませてドヤ顔の矢部と、すっかり意気投合している店主はいそいそと裏手にあるらしい工房へと消えていく。誰もいない店内に一人残された菅野は釈然としかなかったが、先程まで店主がいたカウンターの椅子に腰を掛けて待つ事にした。

「泥棒が来たらどうするんだよ。物騒だなあ……」

裏通りにある小さな間口は見つけるのも一苦労だった。泥棒すら入るのを躊躇う店構えを思い出した菅野は溜息をついて、店内を見回した。これで商売が成り立っているのかすらも疑わしい無秩序な品揃えを眺めながら欠伸を噛み殺す。

裏手にある工房からドリルやインパクトドライバーのモーター音、拳句の果てには溶接機材が作動する音まで聞こえてきた。一体何を

やっているのやら。

「……………!!」

菅野がまどろみかけた所に、ドカーン! という爆発音が裏手から轟き、さすがにこれには菅野も驚いて飛び上がる。そして、裏の工房を覗きこむ。

「どうした!?!」

「菅野さん! 危ないでやんす!」

勢いよく工房の扉を開けた菅野に矢部がグローブを投げ渡した。見ると、少しアーバンチックに改造されたPAL1号がギシギシと軋みを上げながら投球動作を始めた所だ。あろう事かその動作は菅野と正対している。

「マジかよ…」

菅野は慌ててグローブをはめると、喉笛目掛けて飛んでくる剛速球を寸での所でキャッチした。

※パシイイン☆

「馬鹿野郎! 危ねえだろ!」

「DJB-78を侮辱した報いでやんす」

「D、J……………!?!」

「デラックスジャイアントボラー78号でやんす!」

「何だそのクソみたいなネーミングは!?! あと、残りの77号はどこにあるんだよ!」

「また侮辱したでやんす。DJB-78行くでやんす」

「おいおいおいっ! こんな至近距離で……………!」

※パシイイン☆

「危ねえつつつてるのがわからないのか貴様は!」

「ゴシユジンサマコレイジヨウハキケンデス」

「それもそうでやんすね。この位で勘弁するでやんす。ロボに免じて許すでやんす」

「……………ロボ? 呼び方が変わってるじゃないか!」

「DJB-78は流石に長いでやんす」

「お前が先に辞めてどうするんだよ! まあいいや、嬢ちゃんのミ

ラージユゾーンと組み合わせれば使えない事もなさそうだし」

「ちつちつちつでやんす！ プログラム次第では変化球も投げられるでやんす。伸びしろ十分でやんす」

矢部は人差し指を立てて得意気だ。まあ、あれだけの球威があれば戦力として計算できる。予想外の収穫に菅野も怒りの矛を収めつつあったが、ふとある事に気が付いた。

「そうかそうか。それは凄いな。しかし矢部、何でまた左投げなんだ？」

「何か問題でやんすか？」

「俺も橘も左利き。これ以上左投手増やしてどうすんだよ！」

「……しまったでやんす!! 別にオイラが右投げだから何も考えないで向き合って作ってたら左投げになってしまったとか、そんな間拔けな理由じゃないでやんす！」

「はあっ……!?! 何やってんだてめえ! とつとつ作り直せ!!」

「無理でやんす。もうボディーを溶接してしまったから、中のパーツは交換できないでやんす！」

「……………」

菅野は額に手を当ててがつくりとうな垂れた。メカを弄る腕は確かだが、矢部とはどこか相容れないものがある。よく見れば、工具棚が大破して工房は散らかり放題だ。きつとピッチングテストか何かをしたのだろう。さっきの爆発音がそれだったに違いない。店主も半ば呆れ顔で一部始終を見ていた。大坂はよくこんな奴と長年ツルんでいたものだ。いや、大坂だからこそ彼を受け入れる事ができているのかも知れないが。

「……マスター、ちよつと相談が」

「何じゃ？」

「こいつの財布の中身全部くれてやるから、さっきの奴も頼むわ」

「良いだろう。ワシもここまで好き勝手されるとは思わなかったからな」

「…………ぐすん、でやんす」

カオスシティから西に広がる大砂漠地帯を大型トレーラーが激走していく。夏の太陽に照らされながら土煙を高く巻き上げて目的地へと進むその姿は、過酷なレースに挑むレーサーのごとく勇ましい。タフな走りを担うのはドライバーの佐賀の巧みなハンドル捌きと、メカニックの菅野の絶妙なチューニングによるものだ。

砂漠の街ジエンドを目指す一行は、目的地までまだかなりの距離を残しているものの、ここまでの旅は概ね順調にきている。

移動中の大型トレーラーの仮眠室で眠る夏苗の容態も落ち着いてきている。

前夜のフットレイクス戦から一夜明けた今でも、彼女の意識は戻っておらず、依然として魔力はマイナスの借金状態にある。しかし、隣に付き添っているチームドクターの加藤京子の診断によれば、今の彼女は外部の魔力に頼ることなく彼女自身の自然回復力によりマイナス分の魔力を埋め合わせている状態らしい。実際に、徐々にではあるが彼女は自身の色を取り戻しつつあった。この緩やかな回復速度を維持したまま魔力をプラスに戻すことができれば、ショック症状を起こさずに済むだろう。つまり、魔力暴走を回避できるということだ。本来ならば、夏苗は周囲の魔力を見境なく吸収してしまう危篤状態にある。それにもかかわらず、この安静な状態を維持できているのは加藤がとっさに錬成した結界魔術のおかげである。

ただし、今夏苗に施されている結界魔術は時間の経過とともに徐々に崩壊して力が失われているため、効果が持続するタイムリミットが存在している。残されている時間は少なく見積ると24時間程度。そして、ゆつくりとした夏苗自身の回復速度では24時間というタイムリミットはあまりにも短すぎた。これでは彼女の魔力回復に到底間に合わないのだが、この問題はそれほどの難題ではない。魔力回復アイテムのパワーリンエーテルがあれば彼女の魔力回復を助けることができるからだ。

問題は、島で比較的ポピュラーであるはずのこのアイテムがすぐに

手に入らないということだ。彼らが、この砂漠を進み南地区第二の都市「ジエンド」を目指す理由のひとつは、このパワリンエーテルを手に入れるためである。



ーガタン！

大きな音と同時にトレーラーが急停車した。小さな椅子に腰掛けていた京子は、体重を持って行かれて身体がよろめく。彼女がふと窓の外を見ると、先ほどまでの晴天が一変して視界が砂嵐で覆われていた。細かい砂塵が窓に当たり、ザーツという不快な音を立てる。

トレーラーはどうやら足止めを食っているらしいが、何が起こっているのかまでは京子のいる場所からはわからなかった。佐賀と菅野が車の外に出て何やら話している声が聞こえてくる。内容までは聞き取れないが、あまり状況は良くなさそうだ。

様子を確かめようと京子が立ち上がったところで、仮眠室に茅野が現れた。茅野は雷神バットを奪還するには行動を共にした方が良くと考えてフロッグスの一同と行動を共にしていた。

「嬢ちゃんの様子はどうか？」

「よく眠ってる。心配ないわ。それより何かあったの？」

「ああ、それなんだが、タイヤが砂にはまったらしい。今、佐賀と菅野が状況を確認してる。しばらくは、ここで足止めになりそうだな」

ルコフスクの計らいもあって、茅野は新しいIDを手に入れることができた。これによりコソコソ隠れずに身動きが取れるようになったが、一方で、運営本部にその足取りが露呈するリスクも負うこととなった。いずれ足はついてしまうだろう。ルコフスクが提示したIDの有効期限は48時間。時間制限があるのは茅野も同じだった。「ちよっと」服付き合わない？」

茅野は一刻も早くジエンドに向かいたいはずだ。不測の立ち往生に少し苛立つ茅野に京子は声をかけた。仮眠室の隣の休憩室には灰

皿がある。車内唯一の喫煙スペースだ。茅野もそれに応じると仮眠室を後にした。



「ところで、雷神バットも西に向かっていているってというのは本当なのか？」

場所を休憩室に移動して、一服燻らせたところで茅野が口を開いた。ハイライトの灰が灰皿に入る。

「正確には、みずきちやんの私服の追跡結果だけど、間違いないわ。彼女の元仲間たちが雷神バットを持つことが前提だけだね。彼らはもうジエンドに到着していて、しばらく座標が動いてないから、休憩しているのかも。或いは…」

「俺たちの追跡がばれた？」

「…ずいぶんと悲観的なよね。まあ、その可能性もゼロではないけど、唯一の手がかりなんだからもう少し期待したらどう？」

「悪い状況も考えておくべきだと思うが」

「一理あるけど、いい状況も考えて損はないと思うわ」

「どういうことだ？」

「例えば…雷神バットの取引がジエンドであるとしたら、どうかしら？」

「なんでそんな事がわかるんだ？」

「ただの噂よ…」

京子は大きく煙を吐きながら、興奮気味の茅野に背を向けた。窓の外の砂嵐はまだ収まらないらしい。京子はタバコの煙のごとく砂嵐の中に浮かび、そして消える人影を見つめながら自身の推論を続けた。

「そもそも、雷神バットなんて盗んだ犯人たちはどうするつもりなのかしら。盗品のレアアイテムを試合で使おうものなら即御用。だから、それはあり得ない。そして、ジエンドは砂漠の街。運営本部の目が届きにくいから、幾つもの闇市が立っつていうじゃない」

「おいおい。闇商の手に渡りでもしたら取り返しが付かないぞ。…だが、ジエンドは運営の目を逃れて取引するには好都合だな」

「おかげ様で、治安は悪いみたいだけどね」

「そうだな。取引の現場を押さええることができれば、むしろチャンスだ」

「違うわよ。ちよつと、窓の外、覗いてごらんなさい」

「ん……？ 何だって？」

茅野も窓の外を覗き込んだ。砂嵐の中に人影がうごめいている。少し離れた砂丘の上からこちらの様子を伺っているようだ。

「……ちよつとマズインじゃない？」

「俺が様子を見てくるよ。お嬢ちゃんを頼む」

「ええ、わかったわ」

茅野はデツキのある車両前方部へと急いだ。京子は灰皿の灰を片付けると仮眠室へと戻っていった。



「くっそお。こんなところでスタックかよ」

「ついてねえな」

先に車を降りた佐賀と菅野が前輪の前で腕組みをしている。吹き付ける砂嵐はさらに強くなるばかりだ。すぐにでも作業に取り掛かりたいところだが、2人に容赦なく砂塵がまとわり付いてそれどころではない。

「これじゃあ動かせないなあ」

「ひとまず、嵐をやり過ぎそう。ダメだこりゃ」

「おい、ちよつと待て…」

諦めて車に戻ろうとした菅野を佐賀が引き止めた。佐賀が嵐の中を指差している。菅野が振り返り目を凝らすと、砂嵐の中に人影がうごめいているのが確認できた。1人や2人ではない。10人近い大所帯がこちらの様子を伺っている。

「……ハメられたか？」

「……どうだろうか？」

「……おそらく、ハメられたな」

菅野の疑問に答えたのはトレイラーの陰から現れた茅野だった。開襟したアロハシャツが強風でなびいて、もう既に砂まみれになっている。

「この辺り一帯はヤツらの縄張りなんだ。それは君らも知っていただろう」

「ああ。だからルートも慎重に選んだつもりだ」

「それでも襲われたんだ。我々が狙われていると考えるべきだと思わないか？」

「俺たちが狙われる？ 確かに、東地区じゃやりたい放題だったけど、こうまでされる恨みを買う覚えはないぜ」

「果たして、そうかな？」

「……？」

「このところ、ジエンドに向かう商人が賊に襲われる被害が増えているらしい」

「へえ。さすが元警備部のお偉いさんだ、カオスシティでもきっちり仕事してたんですね」

「…… “元” は余計だ！ それに、盗まれた雷神バットがジエンドで裏取引されるなんて噂も流れているらしい」

「じゃあ、奴らは雷神バットを狙ってる？」

「そこまではわからない」

「…それはそうと、この状況どうやって切り抜けます？」

「それは先方の出方次第だな」

「……特に策が無いんですね？」

「そういうことになる……」

次第に砂塵が晴れて見通しが効くようになると、近くの砂丘の上から10人の人影がこちらを見下ろしていた。彼らはアラビアンナイトのような衣装を身にまとい、そのうちの1人は踊り子のような艶やかな衣装の女性だった。

一団の中から、1人の小柄な男が歩み出てきた。彼が一団のリーダーのような様子だ。

「我が名は水田ポポ。貴公らに忠告申し上げる。これより先は我々の神聖なる領域である。早々に引き返されたし」

これに応じたのは菅野だ。

「俺たちはジエンドまで急いでるんだ。それは出来ない」

「これより先は神聖なる領域。何人も通すことは許されない」

「誰も通れないだあ!? どこにそんな法律があるんだよ!」

「法律がないから忠告している。ここを通れば、必ず貴公らは厄災に見舞われるであろう。水田ポポ、嘘つかない」

「そうかよ。じゃあ、あんた達と話すことはないから強行突破だ。へっ!」

「菅野君。待ちなさい!」

指を折りポキポキと鳴らしながら歩み出た菅野を茅野が引き留めた。

「おっと! おっちゃんも加勢してくれるのかい? 1人は女みたいだが、流石にあの人数を俺と佐賀だけじゃ、ちよつと手強いと思ってたところだぜ」

「バカを言うな、街の喧嘩じゃないんだ。それに、今は奴らのテリトリーにいる事を忘れるな」

「た、確かに、少し分が悪いかもな。…で、どうするんだよ?」

「まあ、見てなさい」

茅野は不敵に笑いながら菅野の前に歩み出た。

「先程から聞いていたが、この辺りが神聖な領域というのは初耳だなあ。不当に通行を妨害しているようにしか思えない。運営本部に通報してもいいだろうか?」

「余計な真似をするな」

「ほほう。では、通してもらえるのかな?」

「どうしても通ると言うならば、神に捧げる供物を我々に納めよ」

「随分とあっさり本性を晒すじゃないか。この一帯は盗賊が出るって

評判が悪いんだ。賊に渡す供物なんて持ち合わせちやいないよ」

「貴公らの無礼に神はお怒りだ。しかるに、クインテットスターレアアイテムを置いていってもらおうか」

「通行料にしちや随分とボるじゃないか。あたかも、俺たちがクインテットスターレアアイテムを持っているかのような口ぶりだな」

「その位の価値がなければ、神の怒りは鎮めることができない。持っているのならば、早々に立ち去られよ。通報したところで、其方にも利はないことは調べがついている」

「それはそれは、随分と器量の小さい神様なことで……」

今は雷神バットを持つていない。仮に、持つていたところで簡単に渡すことはできない。精巧なレプリカならば手元にあるが、これを渡して彼らを欺くことができるだろうか。無論、一度引き返して別ルートでジエンドを目指す方法もあるが、それまで加藤京子の結界と龍ヶ崎夏苗の体力が持ち堪えられる保証はどこにもない。



「うひょーっ！ 巨乳のお姉さんがいるでやんす！」

矢部が運転する軽乗用車が先行する大型トレーラーに追いついたのはそれから少し後のことだ。同乗していた大坂、橘、井伏は3人もグロッキーで、色めき立つ矢部の相手をする気力は残っていなかった。

「オイラは悪くないでやんす。砂漠の悪路をこんなポンコツで攻めるなんて土台無茶な話でやんす」

普段感情を表に出さない井伏も、矢部のテンションにうんざりといった様子だったが、先行していたはずのトレーラーが砂漠の真ん中で立ち往生している事に気がつく、歪んでいた表情を引き締めた。

「何かトラブルみたいだな」

「オイラが様子を見てくるでやんす！」

「気をつけてな」

助手席に座る井伏は、上機嫌の矢部を見送ると、地図を畳みながら

後部座席を振り返った。井伏の状態は後部座席の2人よりもいくらかはマシらしい。大坂と橘の顔面は蒼白だった。

井伏はある事情により東地区を離れることができないヤソジに代わって、フロッグスの監督代行を任されてここまで付いてきていた。

「しばらく休憩だ。外の空気でも吸ってきたらどうだい？」

「はい、そうします……」

「すみません……」

2人は車を降りると余程気分が悪かったのか、近くの岩陰まで小走りで消えるとげーげー唸っていた。

矢部の運転は慎重に慎重を重ねた安全運転だったが、コーナリングやそれに伴う加速減速がぎこちなく、本人に悪意はないものの同乗者は不快感を覚えざるを得ない下手くそぶりだった。悪路ではあつたが、高低差のない砂漠の一本道で危険こそ感じなかったものの、口数が減り、やがて黙った後部座席を気遣って井伏は何度も運転を代わることを提案したのだが、矢部は「監督代行はゆっくり地図を見てみてくださいやんす」と頑なにハンドルを譲らなかつた。

一本道にもかかわらず、時より道を間違えそうになる矢部に神経を擦り減らされながらナビをしていた井伏も、ついに力尽きて、ぼんやりと遠くの地平線を眺め始めていた頃、先行するトレーラーに軽乗用車は追いついた。



さて、舞台はもう一度トレーラー前方へと移る。

茅野はこう提案していた。クインテットスターレアアイテムの雷神バットは確かにあるが、簡単に渡せるものではない。どうしても欲しいのであれば、野球で勝負して決着をつけるものとする。水田ポポたちが勝てば雷神バットを渡す。フロッグスが勝てば雷神バットは渡さない。結果に関係なく、ジエンドへは通してもらおうと。

「駄目だ。貴公らが敗れた場合は雷神バットを置き、早々に立ち去りなさい」

結果に関係なくここを通過する条件は、言ってみれば保険だ。仮に、偽物の雷神バットを渡したとしても、彼らが気がつく前にジエンドまでたどり着ければ目的は達成できる。この条件を飲むくらいならば、初めから素直に偽物の雷神バットを渡してしまったほうが良いのではないだろうか。茅野が逡巡すると、彼の背後で即答する人物がいた。

「イイデシヨウ ウケテタチマス！」

「おい、ガツテム、これは罠だ。いいのか？」

茅野は驚いて振り返りガツテムに尋ねた。負けた場合は、魔力暴走の深刻なリスクを負うだけでなく雷神バットの補償問題になるだろう。どちらか片方だけでも、人生を棒に振るようなものだ。

「タダシ アンパイヤーハ ミスター茅野ニヤツテモライマスガ ヨロシイデスカ」

「いいでしょう。代わりにグラウンドはこちらで手配します。ここから北西に800メートル行ったところに扇型の窪地がありますので、そこで1時間後の午後1時に試合を始めます」

「ワカリマシタ オテヤワラカニオネガイシマス」

「それから、万が一、如何わしいジャツジがあった場合には運営本部に匿名で通報させてもらいます。くれぐれも、不注意のないようお気を付けてください」

そう言い残すとアラビアンナイトの一団は砂丘の影へと去って行った。一団の姿が消えると茅野がガツテムに掴みかかる勢いで詰め寄った。

「おい！ ガツテム！ どういう積もりだ!!」

「コレデジヨウケンハ ファイフティーファイフティーデス」

「五分だあ？ そんな訳ないだろ！ 球場は向こうが用意するって言うてるんだぞ！ 砂漠のど真ん中にまともな球場がある訳がないだろ。罠が仕掛けてあるかも知れない。いや、そう考えるべきだ」

「ソннаコトハ イツテミナイトワカリマセーン ソレトモ ミスジャツジガコワイノデスカ？」

「見くびってもらっちゃ困る。ただ、あの口ぶりじゃ、賊に勝算はある

だろ」

「ワタシタチニモシヨウサンアリマス！ ミスター茅野ガアンパイ
ヤーナラバ ベースボールノルールガ崩壊スルコトハアリマセーン」
「お前、そこまで考えて俺を……？」

「ソノトリーデス」

「そうか。：ガツテム。今回のジャツジは俺が責任を持って引き受け
る。条件が五分なら、実力がある方が勝つよな」

「オフコース！」

そうと決まれば、一行は野球道具一式をトレーラーの荷台から引つ
張り出す。ちょうど良いところに後続の軽自動車が登場に追いつい
てきた。運転席から矢部が血相を変えて飛び出してきたが、ちよつと
様子がおかしい。面倒に巻き込まれる前に、菅野が一方的に話しかけ
た。

「おい、矢部よ。ちょうどいい所に来た。1時間後に北西の窪地で試
合だ。大至急井伏監督代行にオーダーを組むように伝えてきてくれ」
「ムキーツ！ オイラまだ来たばかりでやんす！ 巨乳のお姉さんとお話
しがしたいでやんす！」

「ああ、確かに艶っぽい女がいたな。あれはヤバかったな。だが、残念
だな矢部よ。彼らは一足先に移動してしまったぞ。そして喜べ、次の
対戦相手はその巨乳美女達だ」

「オツ、オイラ、すつ、すぐにオーダー組んでもらうでやんすくくつ!!」

矢部は顔を真っ赤に張らせて拳を突き上げると、猛ダツシユで軽自
動車へと引き返していった。

Major League Baseball First Part 1

カオスシティから西へ約50kmの所にある扇形の窪地は南地区の大砂漠の北東部に位置している。内外野を整地してマウンドを盛っただけのグラウンドはまさに天然の野球場といった感じだ。

フィールドは外野から本塁に向けて緩やかな下り坂になっていて、本塁後方には高く切り立つ断崖が巨大なバックネットのように聳えている。その断崖は両翼に向かって延びていき、それらの崖は外野に続くにつれて少しずつ低くなり、やがて緩やかに傾斜しているフィールドと合流している。外野の向こう側はそのまま大砂漠へと繋がっていて、フェンスや柵のようなものは設置されていないから、外野を抜けた打球はどこまで転がってもインプレーというのがグラウンドルールらしい。

そんな球場の三塁側ベンチ前ではフロッグスの円陣が生まれ、その中央で井伏監督代行がオーダーを読み上げていた。

「1番センター 矢部」

「はいでやんす！」

「2番セカンド 永瀬」

「はい」

「3番ショート 大坂」

「はい」

「4番ファースト ガツテム」

「イエス！」

「5番ライト 佐賀」

「はい」

「6番キャッチャー ……」



「……異な事を、吾輩がキャッチャーだと？」

「そうだ」

およそ1時間前。大型トレーラーの倉庫を改装して作られたトレーニングルームを井伏は訪れていた。この主はルコフスクⅡ口シュツスキーだ。幾つもの重りをつけたベンチプレスのバーベルを上下させながらルコフスクは答えた。

「うむう。しかしだな……」

「まあ、聞いてくれ。大坂君は体調がすぐれないから不慣れなポジションは避けたい」

「吾輩とて勝手知ったるポジションではないぞ」

「この試合、求めているのはキャッチャーとしての資質や経験値ではない。今の俺たちには魔導術の知識が足りないんだ。圧倒的に足りない。無いと言つてもいい。それに加えて、対戦相手であるフェニックスのデータも乏しい。今わかるのは、砂を自在に操る能力者がいるだろうということくらいだ。得体の知れない魔導術に臨機応変に対処しながらのタフなゲームになると思う。」

色々考えてみたが、君が適役だろう」

ルコフスクは頬を膨らませて大きく息を吐きながら、ベンチプレスのバーベルをゆつくりと挙げると、そつとラックに戻した。全身を覆うように流れる汗が紅潮した肌にまとわり付き、分厚い筋肉の凹凸の溝へと雫がこぼれ落ちていく。ルコフスクはむくりと起き上がるとタオルで汗をぬぐった。

「上策とは思えぬが、致し方なしといったところか」

「いや、案外向いてると思うぜ？」

「世辞はよしてくれ」

「世辞で采配をする気はないよ。負けられないのは、お互い様の筈だ」ルコフスクもこの勝負を落とすわけにはいかなかった。ガツテムがルコフスクに告げた条件こそ、雷神バットを取り戻すまでチームに同行することなのだ。つまり、ルコフスク自身が雷神バットの身代わりとして同行することとなったのだ。この試合に負ければ雷神バットが遠のくことはルコフスクも承知の上だ。

「おまけに、君がピッチャーをやると、グラヴィティボールを捕る人間がないからな」

「ガハハ！ それもそうだな。あいわかった、引き受けよう」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
「……6番キャッチャー ルコフスク」
「うむ」

東地区リーグの最終戦で最終回だけだったがマスクをかぶった大坂か、あるいは井伏監督代行自らマスクをかぶると予想していた一同はにわかに驚きざわついたが、井伏は構わずにオーダー発表を続けた。

「7番レフト 菅野」

「お、おう…」

「8番サード 俺、9番ピッチャー ロボ」

「ハイ…」

「以上だ。夏苗ちゃんを救うためにも、雷神バットを取り戻すためにもこの試合は負けられない。絶対に勝つぞ!!」

『オー!!』



試合前のノックで、両チームの選手がグラウンドの感触を確かめ終わると、すぐに試合が始まった。フェニックスサインがグラウンドに散っていく。先攻はフロッグス。先頭打者の矢部が右の打席に入り構えた。

「プレイボール！」

主審茅野の宣言によって運命の一戦がスタートした。フロッグス選手一同が声援を送る中で、打席の矢部はどうも試合に集中できていないようだ。チラチラと一塁ベンチの方を伺っている。

「集中しろよオ！ って、聞いてんのかっ!!」

三塁コーチ菅野の怒号も耳に届いている気配がない。たまらず菅

野はベンチを振り向き、大坂に話しかけた。

「おい、あいつ大丈夫なのか？」

「多分、ダメですね」

「ずいぶん素っ気ないな。お前の相棒じゃねえのかよ!？」

「付き合いが長いから、わかることもあるんです」

「そうか。大坂もお手上げじゃ、仕方ない。ピッチャーさんよお!

デッドボールでも当ててうちの切り込みメガネの目を覚ましてやっ
てくんねえか!？」

「ちよつ、それは言い過ぎ……」

「構いやしねえさ。あいつは口ボに俺目掛けて全力投球させやがった
んだからな。危ないったらねえや」

「そりゃ酷い……」

フェニックスの先発は水田ポポ。先刻挨拶のあったリーダー格の
男だ。身長は165cm程度の小柄ながらも筋骨逞しく、右足を高々と
突き上げる大きなフォームから唸りを上げる左腕は、かつての大投
手星飛雄馬を彷彿とさせる。もつとも、星は自身の開発した大リーグ
ボールと呼ばれる新変化球によって肉体を蝕まれ、わずか数年で選手
生命を絶たれてしまったため、彼の名を知る者は今ではほとんどいな
い。だがしかし、彼とそのライバル達が築いた数々の名勝負を知れ
ば、きっと誰もが胸を熱くたぎらせることであろう。

スピードガンがないため正確な球速はわからないが、水田の直球も
150km/h近くは出ているだろう。投球練習ではバシンツとい
う強烈な捕球音が球場を囲む断崖にこだましていた。

その水田の初球はインコース高めにすっぽ抜ける。矢部の頭上を
めがけて水田の豪速球が襲いかかるが、一塁側ベンチに気を取られて
集中力が散漫している矢部の反応は少し遅れた。ほとんど垂直に立
てられたバットにボールが当たり、力のない打球がピッチャー正面に
転がる。

「おいおい、嘘だろ……」

驚き呆れる菅野を尻目に水田は打球を処理すると、あつという間に
1アウトとなった。

矢部はしよんぼりとした様子でベンチに戻ってくる。

「面目ないでやんす。オイラ何もできなかつたでやんす」

「女なんぞに気を取られてるからだ」

「うるさいでやんす！ 今時、硬派な不良なんて流行らないでやんす！」

「軟派なオタクもどうかと思うがな！」

「まあまあ、二人とも……」

間に入った大坂だけが事の重大さに気がついていて。矢部は反応が遅れたとはいえ、寸前でバットを傾けてボールを避けようとしていた。それにもかかわらず、ボールはバットを追いかけるようにシュート変化して矢部のバットに命中していたのだ。ただの偶然なのだろうか、それとも、水田が狙ってやっていたとしたら……？

いやいや、そんな曲芸のようなピッチングができるはずもない。にわかによぎった疑念を払うべく、大坂はネクストバッターズサークルで水田の投球のタイミングを伺い、素振りを始めた。

2番永瀬もハーフスピードの臭い球をカットし損ねて内野ゴロに倒れた。ナチュラルに沈んだからツーシームかも知れないとは永瀬談である。いつもは粘り強い永瀬の打撃が淡白に終わったことも、大坂にはどうも引つ掛かる。水田はただの速球派投手ではないのではないかと。

自らの打順となったが、打席に向かう大坂の体調は優れなかった。矢部の運転による車酔いを引きずっているものだと初めのうちは考えていたのだが、時間を追うごとに体が重くなってきているし吐き気も酷い。これは、ただの車酔いではなさそうだ。そんなことを考えていると、一塁ベンチに見覚えのある顔があった。

……どうして、今まで気がつかなかつたのだろうか？

フェニックスのスコアラーはあの巨乳メイド店員だったのだ。彼女はにっこりと妖しく微笑んで、大坂に視線を送った。

まさかと思ひ、一塁コーチを見ると橘の顔色も良くないことがわかった。周囲にはまだ悟られていないようだが、眉間にしわを寄せて額に脂汗を浮かべている。大坂は橘にアイコンタクトをしてフェ

ニックスベンチを見るように促した。一塁ベンチにチラリと視線を送った橘もハツとした様子で気が付いたようだ。この試合は始めから彼女たちによって仕組まれていたのだろうか。だとすれば、今後の展開は推して知るべしだ。

こうなると、味方であろう茅野が主審を務めていることが、大きな救いだった。きっと魔導術による度を越えた攻撃の抑止力になっていくに違いない。俺たちはここに誘い込まれたのだろう。そして、その状況を一瞬で察知し条件を限りなくイーブンに引き戻したガッツムの機転には感謝するばかりである。

……イーブン？ 果たしてそうだろうか？

打席に立つ大坂に、容赦なく真夏の太陽が照りつける。十分に熱せられた地面からの熱気すらも息苦しく感じる。ただでさえ消耗している体力が余計に削られて、意識が飛んでしまいそうだ。高校時代も本調子でないままに試合に挑んだことはあったが、試合が始まれば体内を巡るアドレナリンによって具合の悪さは何処へやら消え去っていたものだ。しかし、今回はそうもいかないらしい。アイスティーに混入した毒薬が大坂の体力と集中力を奪う。

「ズバンッ！」

「ストライク！」

実際に打席に立つと、さらに速く感じられた。いわゆる手元で伸びるタイプの直球が、外角低めのいいコースに決まった。制球力にも自信があるのだろう。捕手のミットがぶれることなく乾いた捕球音を響かせた。

捕手の御殿場が山なりのボールを水田に返す。御殿場は彫りの深いアラブ系の顔立ちで、濃い眉毛と蓄えた口ひげがチャームポイントだ。遠目に見るとコミカルで穏やかそうな印象だが、近くで観ると深慮遠謀そうな強力な力を放つ眼差しが周囲に警戒を払っている。190cm近い長身に手足も長くフィジカルも強そうだ。

ボールを受け取った水田は腰を深く折り曲げてサインを覗き込む。サインを送る御殿場とその様子を伺う大坂との視線が交錯すると、御殿場は優しく微笑んだ。試合前の殺伐とした緊張感が緩むと同時に、

わずかだが勝負への闘争心が削がれる。これが計算ずくであれば、捕手の御殿場もなかなか曲者だ。

水田の第2球は初球よりも外よりアウトローだが、ぼつちりストライク。大坂はまだ手を出さない。ここまでの投球が狙つての投球であれば、水田の制球力はかなりのレベルである。加えて150km/hに及ぶであろう球速だ。コーナーを広く使われれば攻略は容易ではないだろう。カウントはノーボール2ストライク。追い込まれた大坂はストライクゾーンを広くして待たなければならない。

そんな大坂の心理を見透かしたように、水田の第3球はさらに外角の臭いコース。これだけの制度で投球をコントロールされてはぐうの音も出ない。大坂も無理に引つ張らず三遊間を意識してバットを投げ出すが、寸前でわずかにボールが沈んだ。永瀬の言っていたツーシームだろう。

「カンッ！」

ショート左に打球が転がるが遊撃手ギャネンドラの守備範囲内だ。砂地の上とは思えない軽い身のこなしでギャネンドラが打球を処理して3アウト。

初回、フロッグスの攻撃は三者凡退に終わった。



「バシッ！」

「むむう。シュート回転しているなあ」

「おい矢部、どうなってるんだ!？」

ロボの投球を受けたルコフスクは渋い表情だ。すぐ隣で腕組みをして立ち会う菅野も怪訝な表情である。矢部はマウンド上のロボの背後で自身のPDFアプリを用いて最終調整を行っていた。

「おかしいでやんす。マウンドの高さ、傾斜、土の弾力、それ以外にも気温や湿度に気圧、あらゆるデータに問題はないでやんす。何か他に不確定な要素が介在していて、ロボは本来のパフォーマンスを発揮できていないでやんす」

「そうだな。貴様の想定が甘いから優秀なCPUも宝の持ち腐れってわけだ」

「ムツキー！ だったら菅野さんが投げるでやんす！」

「俺はいつでも準備OKだよ。貴様がどうしてもって言うから譲ったまでだ」

「さ、3連投の菅野さんよりは役に立つはずでやんす…」

「テメエ、昨日俺が投げてなかったら今頃どうなってたかわかって言ってるのか…!?!」

「いつまでじゃれてる気だ。次で最後だぞ」

「へーい」「はいでやんす」

ヒートアップする2人を茅野が諫める。矢部と菅野はバツが悪そうに外野の定位置へと走っていく。

「ボールバックウ!!」

ルコフスクの声を合図にロボは最後の投球モーションを起こす。ぎこちないが、それでも人間の動きに限りなく近いモーションが自律型の制御装置で体现される。ヒュオーンヒュオーンという静かなモーター音とともに、ロボの左腕から最後の投球練習が放たれた。

「パシンン!!」

しかし、投球はストライクゾーンから大きく外れてクソボール。ルコフスクは立ち上がって腕を伸ばして捕球するとそのままノーステップでセカンドへ送球した。

「あつ、すまん！」

送球は三塁方向に少し逸れる。ベースカバーに入った大坂が左手を目一杯伸ばして掴もうとするが、ボールはグローブの土手を掠めてセンター方向へと転々した。

「悪い悪い、大坂くん。握りが甘かった」

「いいえ、俺も、あのくらい取らないと」

大坂はそこに立っているのがやつとといった感じだ。まだ初回だというのに汗の量がひどい。

「大丈夫でやんすか？」

外野フィールドは内野よりも深い砂に覆われていて、グラウンダーは

すぐに失速してしまう。セカンドベース後方で動きを止めたボールを矢部が掴んで返球する。

「これは外野も難しいでやんす。間を抜かれたらホームランでやんすけど、あまり深く守っていると、シングルでも次の塁に行かれてしまうでやんす。おまけにこの砂、足にまとわりついて重いでやんす。合宿の砂浜ダツシユを思い出すでやんす」

「ああ、そうだね……」

いつもなら「でも、矢部君がセンターなら安心だ」などと愛想よく調子を合わせる大坂が、うつろな表情で虚空の彼方を見つめていた。大坂の異変に、まず矢部が気がついた。

「大坂君……?」

Major League Ball First Part 2

大坂はもともと球種やコースの得手不得手によるムラが少ない選手だった。同様に、調子の好不調による波も少ない安定感のある選手でもあった。そんな大坂だったが、高校時代にただ1試合だけ調子を大きく崩した試合があった。

3年生の夏の埼玉県大会予選の2回戦。対戦相手は地域最凶のヤンキー高校として名を轟かせていた極亜久商業高校。この時、応援団に紛れ込んだ極亜久商業の工作員が部員の弁当に毒を盛る事件（と言っても選手数名が食中毒を引き起こし体調不良を訴えるにとどまり、確かな証拠もなかったので表沙汰にはならなかった）があった。球八高校ナインも例に漏れず甲子園出場を目標に掲げていたものの、強豪校ひしめく激選区埼玉を勝ち抜き、その頂点に立つことなどまだまだ射程圏外の頃の話である。

この試合、大坂は3番サードでの出場。慣れ親しんだショートポジションを一年生に譲り、引退した元キャプテンの定位置へコンバートしての公式戦2戦目だった。ちなみに初戦は超格下のバス停前高校に5回コールド勝ちをしていた。

極亜久商業も格下だったが、荒井三兄弟をはじめとする機動力と亀田・水原などの中軸打線には定評があり、気を抜ける相手ではなかった。

この日は曇天の空に程よく風もあり、7月の埼玉県にしては比較的過ごしやすい天候だったと記憶している。とはいえ、埼玉は一部の地域を除くと海からも山からも離れた立地にあるため、夏場は関東圏でも屈指の猛暑地となる。試合が始まればその熱気は容赦なく高校球児たちに襲いかかっていたことであろう。

序盤は両先発投手の好投により膠着状態で展開していた。両チームともチャンスメイクに事欠かなかったが、両投手ともにピンチをよく凌いだ。そして、その均衡は5回表、極亜久商業の攻撃時に破られ

ることとなった。この試合、初めてのエラーが球八高校に記録されたところからゲームが動き出した。一死一三塁で、4番亀田の打球はホットコーナー三塁を強襲した。



「バシン！」

「ボールフォア！ テイクワンベース」

初回、先頭の富士川はストレートの四球で出塁した。

「……………」ルコフスクはミットに収まったボールを見つめて黙っていた。

調整が甘かったのだろう。ロボは本来のパフォーマンスを發揮できていないようだ。しかし、最終調整を行った矢部を責めることも出来ない。それだけ、マウンドの状態は投手のピッチングを繊細に左右するものなのだ。もちろん、ピッチングの良し悪しをマウンドの所為にする投手は三流だが、その僅かな違いを、短い投球練習の時間に修正する事は人間だってなかなか上手くいくものではない。無理矢理に修正を試みてフォームを崩してしまうことさえある。

さて、この状況に及んでロボのスペックは如何なものか。ロボはマウンドの状況に合わせて自分の投球を修正していくのだろうか。それだけの繊細なパフォーマンスが彼に可能なのだろうか。手探りのまま、ルコフスクのリードが続く。

2番の磐田が打席に入った。彼はセオリー通りバントの構えだ。ここは素直に送らせて、アウトを一つもらおうとしよう。ここまでの4球の間にルコフスクはロボが持つ致命傷と言わなければならない。しかし、その癖さえわかればそれを逆手にとってリードすればいい。彼のピッチングは右打者から見てボール1〜数個分内角に制球される。ならば、欲しいコースよりも、少し外側に構えればいいだけ。ルコフスクはインコース、やや甘いゾーンにミットを構えた。

球場の静寂にロボのボーターが駆動する音が響いて、オーソドックスなオーバーハンドから初球が投げられた。しかし、ロボの初球は激

甘のインコース。ボールがシュート回転しながら、ど真ん中へと流れていくコースだ。要求通りだったが、思惑の外れたルコフスクは小さな声で悪態をついた。

「ガツデムー！」

そして、これを見逃すほど磐田も甘くはなかった。磐田はスツとバットを引くと上から叩きつけた。バスターエンドランの形になる。

「カーン！」

高いバウンドがショート正面へ飛んでいく。一塁ランナーはスタートを切っているが、エンドランにしてはスタートが悪い。併殺が狙えると大坂は判断した。ショートバウンドにはグラブは届かないが、次のバウンドを待っているのはセカンドフォースアウトは無理だ。大坂は前に出てハーフバウンドのタイミングで捕球した。ハーフバウンドは最も捕球が難しいタイミングだ。打球は、サード方向に大きくイレギュラーしていたが、それも想定内の範囲内と言わんばかりに大坂は華麗にグラブを捻ると、ダンサーのように身を翻して二塁へ転送した……。



3年前の極亜久商業戦。試合は5回表に動き出す。一死二三塁、打席には4番の亀田。内野は併殺を意識した中間守備。

「カキーン！」

そして、痛烈なゴロが定位置よりも前進しているサード正面を強襲した。地を這うような打球は直前でポンと跳ね上がり、大坂はグラブでつかみ損ねてしまったが、打球は胸元でしっかりと受け止めていた。

「2つ！ 間に合う！」

高校生とは思えない気迫の声でキャッチャーの指示がかかり、セカンドがベースカバーに入る。大坂も決して焦ったわけではなかった。落ちていてボールを拾い上げる。念のため握り直しても、タイミングはまだ余裕がある。しかし、不意に訪れた刺すような胃の痛みに大坂

は耐えられなかった。

「……！」

ボールは二塁手のはるか頭上を飛び越えて外野グラウンドを転々としていく。その間に走者2人が生還して球八高校は2点を失った。



……難しいバウンドに華麗に合わせた直後、刺すような胃の痛みが大坂に襲いかかった。全身の血の気が引いて、指先に力が入らない。守備位置こそ違えど、あの時をなぞるような暴投に永瀬のジャンプも及ばない。ボールはセカンド後方の砂地に埋まって動きを止めた。

一塁走者の富士川は逸れる送球を見て迷わず三塁を狙ったが、砂地に埋まったボールをすぐに拾う右手があつた。

「甘いでやんすー！」

走り込んだ矢部は勢いをそのままにステップを踏むと、三塁目掛けて矢のような送球を放つ。滑り込むランナーのすぐ隣をすり抜けたボールが井伏のグラブに収まる。そのグラブに滑り込んできたランナーの右足が触れて、井伏は左手のグラブを高く上に掲げた。

「アウトオー！」

「ナイスセンター！」井伏は矢部の素早いバックアップを称賛すると、ショート定位置付近で膝に手を当てて俯向く大坂に近寄って声をかけた。「どうした？ 顔色悪いぞ？」

「まだ、気分が優れないみたいで……」

「そうか。辛いだろが、今は弱みを見せない方がいい。後で永瀬に診てもらえ」

「はい、そうですね……」

そうは言っても大エラーの直後である。フェニックスの中軸はショート大坂を狙って強烈なゴロを立て続けにお見舞いした。ろくに整備されていない土と砂のグラウンドはボールを不規則に弾ませて、どれも不自然な軌道を描いていたが大坂はそれでも喰らい付いた。

一死一罌から3番浜松ショートゴロ、4番清水ショートゴロ。

早くも砂まみれのユニフォームを払いながら大坂はベンチへ戻ると、フェニックスベンチから死角になる岩陰に永瀬に連れられて消えていった。

「凄いなあ、よくあんな無茶苦茶な打球に反応できるね」永瀬はただただ純粹に大坂の好守に驚嘆していた。同じ内野手だからこそわかる。球際の粘り強いグラブ捌きや絶妙なジャンプのタイミング感に改めて大坂の野球センスを感じていた。「……っつか、相当具合悪そうだね」

「永瀬さん。最初はただの車酔いだと思ってたんです……」

「僕もそう思ってたよ。何か心当たりでもあるのかい？」

「ええ、実は……」

大坂はカオスシティのカフェ『Giants Star』での出来事を話した。

「そうだな。確かに、みずきちちゃんも具合が悪そうだ」

「もしかして、気付いてたんですか？」

「僕を誰だと思っているんだい？ こう見えてもフロッグスの元チームドクターだよ。だけど、その話が本当ならば、大坂くんとみずきちちゃんは出井というスコアラーに毒を盛られたということになるな」
「何とか、なりませんか？」

「解毒剤があれば、すぐに楽になると思うけど」

「じゃあ、すぐにそれを……」

「あいにくだけど、調剤道具一式はトレーラーに置きっぱなしなんだ」
「なら、加藤先生に持ってきてもらいましょう」

「いいのかい？ それだと夏苗ちゃんを一人にしてしまうよ」

「……！」

「それに、こっちも控えはみずきちちゃんだけだ。具合の悪い彼女を炎天下の中お遣いに出すのも考えものだ。まずは監督代行に訊いてみよう。話はそれからだ」

大坂と永瀬がベンチに戻ると、ガツテムがカラカラとバットを引きずりながら打席から戻ってくるころだった。大坂は無理な笑みを

浮かべてガツテムに尋ねた。

「あれ？ ガツテムさんもう終わりですか？」

「私デモ 打チソソンジルコトアリマス」

二人は苦笑して顔を見合わせると、井伏監督代行の姿を探した。彼はベンチの端でルコフスクと真剣な表情で何やら話をしている。周囲には聞こえないように声を潜めている様子で、少し近寄りづらかったが、会話の内容は聞き取ることができた。

「……吾輩のグラヴィティゾーンを力任せに押しつけてまで砂を操っている。きつと腕の立つ術者がいるに違いない」

「徹底したゴロ打ちと不規則なバウンド。狙いは恐らく我々の失策だろうな……確かに、フェニックスの対戦相手は極端にエラーが多い」

井伏は自身のPDFを指先で撫でながら南地区の公式戦の記録を検索している。

「これ以上吾輩の重力を大きくすると、砂が重くなって選手の足腰に負担が掛かってしまう。かと言って力を緩めればフェニックスのやりたい放題だろう。如何致す？」

「うくん。あんな出鱈目なバウンドをまともに処理できるのは大坂君くらいなものだが、これ以上砂を重くすれば、身動きが取れなくなってしまうだろう。今は下手に動かない方がいいかも知れないな。まずは、術者がわかればいいんだが……」

「ムムウ。それは、吾輩も思念していたところである」

「あのう……」そこに大坂と永瀬が現れた。

ガツテムがセカンドゴロに倒れると、一死走者なしで佐賀の打席となった。相手投手の水田ポポは左の速球派で、大きなくくりでは菅野と似たようなタイプだ。しかし、長身の菅野のような上から角度をつけて投げ降ろすタイプではなく、球速でもやや劣るため、水田の方がくみしやすいと予想していたのだが、その予想はすぐに誤りだったと思いい知らされる。

水田の武器は150km/hを数える球速などではない。異常なほどに精密なコントロールだ。アウトロー、そしてインハイ、教科書

通りの揺さぶりが効果的に展開して、佐賀もあつという間に追い込まれた。ここまで、矢部を除いて全員が2ストライクから臭いコースのボール球を打たされている。つまり、次は厳しいコース。

一般に追い込んだピッチャーはストライクは要らないが、追い込まれた打者はボール球が来るなどと決めつける事はできない。あつという間に投手有利のカウントが出来上がった。

水田が右足を高く上げると、スパイクの刃先からサラサラとマウンドの土がこぼれ落ちて、風になびいて消えていく。胸元に構えたグラブをゆつくりと身体に押し付けながらの第3球を投じられた。

そして、水田の第3球はボールは佐賀の打ち気をあざ笑うかのような……チェンジアップ！

もちろん、膝元のギリギリのストライクだ。

タイミングを外された佐賀は当てるので精一杯だ。

「ゴットン！」

三塁線をボテボテのゴロが転がる。佐賀はがつくりと肩を落とし一塁へと走り出したが、サード浜松の守備範囲内だ。浜松が難なく打球を処理して2アウト。

「ガハハハ！ ついに吾輩の出番である」

両手で持ったバットを高々と掲げながら、上半身裸の男が右打席に入った。そのままバットを振り回すように僧帽筋や広背筋をストレッチするとぐりんぐりんとおよそ野球に必要なとは思えない筋肉群が躍動して、彼は満足気にバットを立てて構えた。

ルコフスクはフットレイクスのエースピッチャーではあつたが打撃にも定評がある。打率こそ3割に及ばないが、調子が良ければレイクサイドスタジアムの上段まで打球を飛ばすほどの実力者だ。

水田の初球はアウトコースのフォークボール。きっちりストライクからボールになるように制球されていた。打ち気満々のルコフスクは、これを強振して空振り。ノーボール1ストライク。

「ムムウ……なかなかやるではないか」

水田の第2球は高めの釣り球。さすがにルコフスクもこれは見定めて1ボール1ストライク。

この時、ルコフスクには予感めいたものがあつた。1番矢部から5番佐賀まで、形はどうあれ全て内野ゴロに打ち取られている。佐賀を打ち取ったチェンジアップや、さっきのフォークボールといい内野ゴロを打たせるにはとても有効な球種である。つまり、バッテリーが意図して内野ゴロを打たせているのではないかという予感だ。

データのない一巡目とはいえ、ガツテムや佐賀といった実力のある打者が打ち取られている。ここは無理に抗うのではなく、敵の戦術に身を委ねてみようではないか。

水田の第3球はコーナーを丁寧につくアウトローの直球。素晴らしいコースだ。手を出しても凡打になるのがオチだろう。1ボール2ストライク。追い込まれてルコフスクは次の投球に狙いを絞る。水田の第4球はインコース。ストライクともボールともつかない臭いコースだったが、ルコフスクのスウィングに迷いはなかった。腕を畳んでの軽打だったが、それでも鋭い打球がショートの方左方に転がっていく。

普通のショートであれば守備範囲内だ。しかし、ルコフスクはショート方向に左手をかざすと遊撃手ギヤネンドラの足元にグラヴィティゾーンを展開する。彼の足元の砂が枷のようにスパイクにまとわり付いて彼の身動きを封じると、砂に足を取られたギヤネンドラはよろめいて動きを封じられた。その間も打球は地面を弾み転がっていく。

足を取られたギヤネンドラが打球に追いつけないと誰もが思ったその時、打球が突然イレギュラーバウンドしてギヤネンドラの正面へと舞い戻ってきた。

『……い』

フロッグスナインの誰もが目を疑った。いや、偶然の仕業か。ショート定位位置付近は大坂が再三にわたりイレギュラーバウンドに苦しめられたばかりだ。

まさかのラッキーバウンドにギヤネンドラも重い足元に耐えて身を振ると、よろめきながらも何とか一塁へと送球した。投球後、彼は膝に手をつけて呼吸を整えた。頭にきつく巻かれたターバンが揺れ

ている。

「パァンツ！」

「アウト！」

ルコフスクの必死の走塁も及ばず、送球は一塁手清水のミットに収まった。3アウトチェンジ。2回表、フロツグスは三者凡退に終わり無得点。0対0。試合はまだ序盤であるが、お互いの強かな鏖迫り合いはもう既に始まっている。

Advantage and Disadvantage

一塁側ベンチの日陰に腰掛けた出井は、悔しそうにグラウンド上の一点から視線をスコアブックに移してショートゴロを記録した。シャープペンを握る白く細い指先に真紅のマニキュアが妖艶に光って、かすかに震えている。思い通りにいかない試合展開への苛立ちもあつたが、それよりも、思いがけない好敵手の出現によって闘争心が掻き立てられているのだ。

「あの裸の6番、ルコフスクと言ったわね。まさかとは思ったけど、あの術は間違いない。でも、フットレイクスのエースピッチャーがどうしてこんな所にいるの？ しかも、キャッチャーで出場だなんて……」

視線の先にはプロテクターもなしにロボの投球練習を受けるルコフスクの姿がある。強いフィジカルに強い肩、キャッチャーとしての資質は十分に備えていると言っていていいだろう。正捕手不在のフロツクスには悪くない補強だ。しかし、フットレイクスにも正捕手はいたはずだ。なぜ、彼ではなくルコフスクを選んだのか。ひとつの答えは、すでに出ていた。

「道理で、私の術が効かないわけね……」

出井はベンチの奥で人知れず納得して頷いた。シャープペンを小さいテーブルの上にそつと置いて腕を組むと、彼女の豊満なバストがユニフォームの中で大きくたわみ胸元のボタンをキツく締め上げた。続けざまに、彼女が両腕を高く上げて伸び上がると、ベルトで締められた細いウエストとの対比がより一層彼女の悩ましい曲線美を強調した。ベンチの注目は既に彼女に集まっていたが、彼女はパンパンとふたつ手拍子を打った。そして、艶やかに伸びた黒髪をゆつくりと掻き上げるとチームメイトに告げた。

「この試合、あまり派手に砂を動かせないわ。何せ、主審は運営本部の茅野だからね。予想通りチェックが厳しい。加えてキャッチャーの

ルコフスクがグラヴィティゾーンで砂を重くしているから、私の魔導術もかなりの制約を受けているの。今日はあまりみんなのバツテイニングを援護できないけど、必ず突破口はあるはず。何としても先制点、お願いね」

「姉さん。言われなくても、そのつもりですよ」打席には、5番の掛川が向かう。「まあ、見ていてください……」

掛川は、よく日に焼けた肌に短い白髪頭の似合う退役軍人のような風格のある男だ。チーム最年長だが、長打力でも若い選手にも負けないう実力を彼は備えている。彼は厳つい顔を綻ばせると、白い歯を見せて笑ってみせた。



その頃、マウンドでは菅野と矢部が投球練習の合間でロボの調整を行っていた。

「パシン！」

「おい、矢部よ。このままだと、こいつがフェニックス打線に捕まるのも時間の問題だぞ」

「わかってるでやんす！」

「コントロールはイマイチ、球速もそこそこ、変化球は初期設定のレベル1フォークだけだ。こんなのが実戦で通用するとはとても思えない」

「だから、今ダウンロードしているでやんす」

「ダウンロード？」

「OSを書き換えているでやんす」

「おいおい、何の話だ？」

「オイラ色々調べたでやんす。このロボが作られたのは10年以上も前でやんす。このロボは10年以上も前のソフトウェアで動いていたでやんす。だけど、オイラが組み込んだ部品には最近のものもあるでやんす。古いOSでは、新しい部品の性能に対応できていないでやんす。つまり、ロボはまだ真の実力を発揮できていないでやんす」

「そうか。で、そのオーエスの書き換えとやらが終われば、球速は上がるのか？ 何か変化球でも覚えるのか？」

「今ダウンロードしているのは無料の体験版ソフトでやんすから、球速はそのままだし、変化球も覚えなくてやんす。強いて言えば、ちよつとコントロールが良くなる程度でやんす」

「ハア!? 大して変わらないじゃないか!!」

「ぼ、暴力は反対でやんす!」

菅野は一度振り上げた腕を矢部の頭上で一旦停止させた。

「……いや、待てよ。無料体験版って事は有料の製品版もあるんだよな」

「もちろんでやんす。最新ソフトには期間限定でレベル6高速スライダーのパッチも付いてお買得でやんす。更にメーカーの無料メンテナンス保証が1000イニングも付帯しているのでやんす」

「だったら、早速そいつを落とそうぜ」

「それはできないでやんす」

「何で？」

「先立つものがないでやんす」

「……………あつ」

菅野はカオスシティのジャンク屋で矢部が一文無しになっていたことを思い出した。

「菅野さんが立て替えてくれるなら話は別でやんす」

「ほほう。いくらなんだ？」

「10万ペラでやんす!」

「そんなにするのかよつ!? 俺だって、持ち合わせねーよ!」

「高性能の最新機種は1億ペラ以上で取引されているでやんす。野球ロボットなんて、所詮は金持ちの道楽でやんす。オイラ達貧乏人に手が出せる物ではないみたいでやんす」

「マジか……」

「でも、がっかりするのはまだ早いでやんす。OSさえ書き換えてしまえば、比較的安価な海賊版アップデートである程度はスペックの向上が見込めるでやんす。ふっふっふ、でやんす」

「お前、そんな情報いつの間に……」

「おいらの情報収集能力を侮ってもらっては困るでやんす」

「ボールバック！」

「まあ、今更うだうだ言っても仕方ないか。矢部、いくぞ」

「言われなくても行くでやんす！」

ロボの最終投球は今度はワンバウンドとなつてルコフスクは捕り損ねてしまう。足元に落ちた砂まみれのボールを太もものユニフォームでぬぐうと、ルコフスクは矢のような送球をセカンドへ丁寧に送球した。わずかにホップするボールを大坂が中腰で受けると、ベースタッチしてそのままサードの井伏へ。ボールは井伏から再び大坂へ戻り、今度はセカンド永瀬へ。かなり一塁寄りで捕球した永瀬がファーストのガツテムヘトスを上げると、ガツテムはそれを素手で掴んで山なりのボールをマウンド上のロボに返した。

その頃には、矢部と菅野も定位置までたどり着いていた。

「……ところで、アップデートはいつ終わるんだ？」

「うくん。実は試合開始からやってるでやんすけど、この辺りは電波状況があまり良くないみたいでやんす。メーカー推奨の通信環境には程遠いでやんす」

「……後どのくらいかかるんだ？」

「実は、まだ半分も終わってないでやんす」

矢部はPDAの液晶を菅野の方に向けた。

「ハア？ このゲージちつとも進まねえじゃねえか！」

「オイラに当たらないで欲しいでやんす！ オイラもいい加減イライラしてきたでやんす！ ムキー！」



2回ウラ、フェニックスの打線は5番掛川から。ロボの制球はぐらぐらで、ストライクとボールのハッキリとした投球になったものの、制球に苦しむロボに対して打者の対応は慎重なものとなった。これはダウンロードの完了を待つバッテリーとしては好都合だ。投球と

投球の間合いを充分に取って、なるべく多くの時間を稼ぐ。

しかし、フォアボールを出すわけにいかないから、最後は結局甘い球にならざるを得ない。

「カキン！」

思い切りよく引つ張った打球がサードを強襲する。ライン際、抜けたら長打コース。井伏が横っ飛びで打球を抑えると、すぐに起き上がって一塁への送球。やや短い送球が本塁側に逸れたが、ガッツテムがこれをショートバウンドで難なくすくい上げる。1アウト。

打席には6番ギヤネンドラが入った。

ギヤネンドラは初回の大坂の守備を見ていた。迷いのない一歩目を踏み出す野生動物のような鋭い打球判断、積み重ねた努力の跡がうかがえる確かな捕球技術、送球のエラーこそあったが同じ遊撃手だからこそわかる彼の総合的な守備能力の高さ。これだけの選手が今まで頭角を顕せていなかったのが不思議なくらいだ。守備はある日突然能力が開花することはまずない。彼が今日までに積み重ねてきた努力が、中途半端な代物でないことはギヤネンドラにはすぐに理解できた。

三塁手井伏はどうか。彼はここ十数年来のフロッグスの中心選手だ。成績不振の東地区の田舎球団とはいえ、魔導術がないからこそ求められる純粋な野球人としてのスキル。そのスキルが偽りではないことは、先ほどの三塁線の打球反応を見れば明らかだ。

そして、一塁手ガッツテムもなかなかの手練れだ。いつイレギュラーが起こるかもわからないこのグラウンドコンディションの中で、ベースから大きく離れたショートバウンドを長い手足を伸ばして軽々とすくい上げた。内野手として、これほど投げやすい一塁手はいないだろう。

消去法だが、内野に穴があるとすれば二塁手の永瀬だけだ。彼は怪我で長期間戦列を離れていた選手だ。メンバーが足りないにも関わらず欠場を続けていた彼のことだ、何も問題を抱えていないはずはないだろう。突破口が存在するとすれば自ずと見えて来るものだ。

ロボの制球が不安定な今のうちに、……叩く！

3ボール1ストライクからの4球目。ギヤネンドラの打球は一二塁間への痛烈なゴロ。当たりこそ鋭かったが打球の勢いは砂に吸収されて永瀬が深い位置で回りこむ。臍の下で丁寧な打球を掴むと軽快にステップを踏んで、永瀬が一塁へと送球の構えをした。

ビリッ！

何かが破断したような緊張感がフロッグス内野陣に共鳴した。発信源はセカンド永瀬だ。これまで、全く予期していなかったわけではない。永瀬が肘を痛めて戦列を離れていた事は知っていたし、加藤の治療があつたとはいえ、再三のボール回しを何となくファーストガツテムに近い位置でやり続けていたのも事実だ。ちよつと長い距離の送球でも、彼は頑なにサイド気味のスナップスローで対処していた。ただ、そういうプレイスタイルの選手もいる。重く受け止めることはない。知らず知らずのうちに、誰もがそうやって意識の隅へと受け入れがたい事実を遠ざけていた。そんな積み重なった小さな、取るに足らないような予兆の数々がフラッシュバックして、それらの記憶のつながりがビリッビリッと音を立てて破断した。

「……」

永瀬の肘は完治していなかったのだ。ボールは永瀬と一塁の間あたりでポフツと埋まり、砂の中に消えた。

送球に自信がなければ、ワンバウンドでも確実に送球することは選択肢としては是だ。しかし、今は違う。ここはフェニックスが用意した名もなき扇型の窪地なのだ。今までも不可解なイレギュラーバウンドが野手たちを苦しめてきたのだ。なるべくであれば、接地しない送球が望ましい場面……！！

ギヤネンドラは一塁ベースを勢い良く蹴り上げ二塁を目指す。俊足だ！

「止まれ！ ギヤネンドラ！」

一塁を大きく回ったところで、ギヤネンドラは背後の一塁ベンチから身を乗り出す水田に呼び止められた。ギヤネンドラもハツとした表情で、慌てて一塁に帰塁する。

「忘れたのか！ ルコフスクのグラヴィティゾーンを!!」



この球場の魔力の循環は特殊な構造故に、広範囲に及ぶようになっている。一般に魔導術は特殊な呪具や術式がない限りは術者に近ければ近いほど強力になり、一方で遠く離れると魔力が弱まり、その効果も薄れるというのが理屈である。つまり、離れたところで大きな力を発揮させるには熟練と、それに相応しい強い魔力が必要となる。

しかし、この扇型の窪地では状況が異なる。どういうわけか、砂上に引かれた一塁線や三塁線のラインが魔力の伝導性に優れており、それに挟まれたフェアグラウンドでは実際よりも容易に能力の解放ができるのだ。また、ファースト、セカンド、サード、ホームの各ベースも簡易な魔力誘引スポットとなっていて熟練の術者であればこれらを中継スポットとしてより遠方での魔導術の展開も可能になるという魔導力学的には比較的高度な構造になっているのだ。

特に、フロックスの守備の間はホームベース、一塁線、三塁線の三ヶ所がルコフスクの直接の支配下に置かれるために、フェアグラウンド内はルコフスクのグラヴィティゾーンが主導権を握っていた。

水田がギャネンドラの進塁を止めたのはその為だ。

ルコフスクは初回の守備からこの球場の魔力循環の構造に気がついていて、この構造こそがベンチの奥からでも出井の魔導術が効き及ぶ要因でもあったのだ。出井の魔導術は一塁ベースを起点として展開していたが、ルコフスクがホームベースで「壁」となり魔力の伝導を押さえつけているため、出井の魔導術が球場全体を支配することはなかった。

出井の魔導術が偶然で説明のつくイレギュラー程度に収まっているのはその為だ。9回まで、出井がこのまま手を拱いているとも思えないが、今の所は力は拮抗していると言っただけだろう。だからこそ、試合そのものの主導権をみすみす与えるわけにはいかない。

打席には7番の服部が登場した。

ロボはクイックモーションなんて気の利いた事は出来ないが、一二塁間に強力なグラヴィティゾーンを展開して盗塁を封じている。しかし、一度打球が飛べば永瀬の守備があるから、このグラヴィティゾーンは直前に解除しなければならぬ。ギャネンドラの走塁は、通常と変わらないものとなる。状況判断が難しいところだ。

一死一塁から、服部の打球は一二塁間への痛烈なグラランダー。カウント2ボール1ストライクから甘く入った4球目だった。ロボには打者と駆け引きするコントロールも、打者を確実に仕留めるウイニングショットも存在しないから、内野守備の弱点を狙う打撃を容易に許してしまう。

しかし、フロツグスの内野陣も二度同じ手を食わない。ファーストのガツテムが大きな体を横に投げ出すと、長いファーストミットの先端で打球を叩き落とした。地面に転がる打球を、その体格に似つかわしくない俊敏な動作で拾い上げて二塁ベースカバーの大坂に転送、大坂から一塁ベースカバーのロボにボールが渡って3―6―1のダブルプレーが完成した。

2回ウラを終えて0―0。ロボのピッチングと永瀬の守備に不安があるものの、ルコフスクが球場の特性を逆手にとってフロツグス有利に見える展開。しかし、フロツグスサインは水田の卓越した投球術にまだ気がついていない。

3回表の攻撃は7番菅野から始まる。

Major League Ball First
Part 3

「ズバンツ！」

「ストライーク！」

カオスシティの西方にある扇形の窪地での試合は3回表、フロッグスの攻撃が始まる。この回先頭の菅野が左のバッターボックスに立つ。初球はアウトローのコーナーいっぱいには直球が決まりストライク。

「ズバンツ！」

「ストライーク！ ツー！」

2球目も膝元いっぱいストライク。ボール半個の誤差もない精密なコントロールに、たちまち菅野も追い込まれた。ノーボール2ストライク。

ここまでを狙って配球しているのだろうか。だとすれば、およそ人間業ではない。打者心理として、早いカウントでは厳しいコースのボールに手は出したくないものだ。無理に手を出して、それを凡打するくらいならば、いずれ来るであろう好球に狙いを定めているものだ。打撃が得意でない選手ならば四球だって狙うだろう。菅野もそんな一人だ。

そんな打者心理の隙をつく水田のピッチングは、ひとつの完成形といえる。しかし、それを実現できるのはほんの一握りの投手だけだ。理由は簡単である。なぜなら、投手のコントロールは100%カンペキではないからだ。日常生活で狙ったゴミ箱に紙くずが入らないように、常に狙ったコースに狙い通り投げることは容易ではない。それを一試合中一球狂わずやってのける為には、持って生まれた素質だとか、それを磨き上げる努力だけで説明できるものではないだろう。100球以上それを持続させる集中力とスタミナも必要である。

打者との駆け引きに負けない精神力、天候や体調などの運、他にもいろんなものが混ざって合わさって、その日のコンディションは形作

られる。どんなにコントロールの優れたピッチャーでも人間である以上、どこかに失投は付きまとうものだ。それは打席に立つ菅野が一番よくわかっていた。

「バシンツッ！」

「ボール！」

3球目は目線の高さに見せ球を織り混ぜる周到さだ。これをやられると、打者はどうしてもボールとの距離感がリセットされて、次の投球への対応が弱くなってしまう。

次の投球はどこだつて構わない。つまり、何が来ても嫌だ。水田の第4球が、嫉妬する程のコントロールが菅野の膝元まで伸びてくる。インローの角一点を目掛けて、ブレることなく伸びてくる。

「キイインツッ！」

菅野は当てるのが精一杯だった。真上に詰まった打球が上がる。キャッチャーとファーストがファールグラウンドへ駆け出した。太陽光線がほとんど真上から差し込んできているが、さすがホームグラウンド。その対応は慣れたものだ。器用にミットで庇を作り、ファーストの清水がキャッチャーの御殿場を右手で制した。1アウト。

「いいようにやられたな」
ネクストサークルから出てきた井伏も苦笑いで水田の投球を称賛した。

「あんなん人間業じゃねえよ！ あの球速であのコントロールなんて不公平だろ」

「妬んでも始まらないさ。制球がいいなら、それを逆手に取ればいいだけだ」

「……!?!」

「相手の配球を逆手に取るんだよ」

「カキーン！」

不敵な笑みを浮かべて井伏が打席に入ると、間もなく快音が響いたが、彼はサードへのハーフライナーに倒れた。菅野はすかさず喰つてかかった。

「おっさん！ さっきの自信は何だったんだよ！」

「当たりは良かっただろ？」

「ヨレヨレのハーフライナーじゃねえか！」

続いて打席にはロボが入る。菅野がネクストサークルへ向かう矢部を引き止めた。

「おい。あいつのバッティングってどうなんだ？」

「初期設定のままやんす。多分、というか絶対に150 km/hの球速には反応できないでやんす」

「そんなくらい先にやっつけや！」

菅野が矢部をどつく間にロボはピッチャーゴロに倒れた。3アウトチェンジ。



「友沢くん、その情報は確かなのかね？」

役員室の中央に立つ男は友沢と呼ばれた。友沢が頷くと、短く刈り整えられた金髪が揺れて、額に乗せたサングラスが蛍光灯を反射して虹色に光った。一流ホストクラブの人気ホストか、あるいは人気ヴィジュアルバンドのフロントマンのような美形で細身のブラックスーツがよく似合っている。一見すると軽薄そうな印象を受けるルックスだが、一度でも彼に接したことのある人間ならば彼の性格がそうではないことを知るはずだ。

「はい。間違いありません。南地区第二の都市、砂漠の街ジエンドの高級ホテルで現地の有力者が主催するパーティーが執り行われます」

友沢の対面にある革張りの役員席に深く腰を下ろしているのは神高龍だ。彼は若くして運営本部の幹部に上り詰めたエリートだが、彼の手腕に疑問を持つ人間も組織の中には少なくない。親の七光りやつかむ声がその大半を占めるが、彼の功績のほとんどが右腕である友沢によるものと考える者も多いようだ。しかし、当の神高はそのような評判など意に介していないらしい。常に結果を求められる組織の中で、優秀な部下を従えて扱いこなすことも才覚の一つであろう。

アッシュスーパープルの長髪をかき上げると、彼は節張った長い指を組んで頬杖をついた。

「なるほどね。パーティーは表向きのカモフラージュ、その内実は闇オークションというわけか」

「如何でしょう？　神高さんもパーティーに参加されては？」

「汚れた不正行為に手を貸すのは気が引けるが、敵の事情も知っておくのも悪くないかも知れない。……友沢くんは、どう考える」

「私も同意見です。百聞は一見にしかず。直接現地に赴き情報を収集することが、雷神バット奪還への最善策かと」

「わかった。いいだろう。早速、チケットを手配しておいてくれないか？」

「そう仰ると思いました。既に手配済みです。北地区のベンチャー投資ファンドの社長とその付き人という事にしてあります」

「なんで、身分を偽る必要がある？　運営本部の神高が行くと言えばそれで良いのではないか？」

「そんな事をすれば、警戒されてオークションが中止になってしまいます。オークションが中止になれば、せっかく掴んだ雷神バットの情報も無駄になってしまいます」

「そうか。なるほどな。……やはり、友沢くんは頼りになる」

「……それから、お伝えしておきたい情報がもう一つあります」

「何だ？」

「オークション出品者リストの中にピンクⅡパンサンという名前がありました」

「ピンクⅡパンサン!?　三才山隊長が言っていたアレか……」

「はい。雷神バット強奪の実行犯と思われれます」

「ならば彼の身柄も取り押さえねばなるまい。良くやってくれた、友沢くん。この仕事が成功した時の報酬は存分に弾ませてもらうよ」

「ありがとうございます」

「ところで友沢くん。例の件については、考えてくれたかね？」

例の件、その言葉を耳にして友沢の愛想の良い表情がにわか曇った。神高はそれに気がつかなかったようだが、友沢は曖昧な返事をし

て答えを先延ばしにした。友沢は深々と頭をさげるとセントラルタワー役員室を後にした。



3回裏、フェニックスの攻撃は8番の御殿場から始まる。ベース近くにスクウェアスタンスを取り、188センチの長身をベースに覆いかぶせるように構える独特の構えだ。長いリーチを考えればアウトコースには投げにくい。まずはインコースで様子を見よう。と思わせるために、わざとインコースに隙を作る構えで誘っている場合があるから、初球はボール球でいい。ルコフスクは御殿場の膝下にミットを構えた。

「バシンツッ！」

「ボール！」

ロボの初球は膝下に外れてボール。狙い通りのコースだが打者の御殿場に反応はない。インコースは眼中に無いのか、はたまたポーカーフェイスの食わせ者か、初球は捨てるか決めている変わり者か。もう一球、様子を見たいが、あまりカウントを無駄にもできない。今度はインコース低めいっぱいミットを構える。

「パシンツッ！」

「ボール！」

コースは申し分なかったが、ボール1個分低い。ルコフスクは御殿場の様子をよく観察していたが、彼はロボの140km/h台中盤の球速にタイミングこそ合わせていたが、打気は見せなかった。ルコフスクの視線を感じた御殿場が口を開いた。

「自分が投げないと、随分と慎重になるんだな」

「吾輩が投げれば、一捻りなんだがな。ガハハ」

「噂通りの自信家だなあ」

「ウチの4番以外にマトモに打たれた記憶がないものでね」

「オタクの4番もウチのエースには敵わないみたいだが？」

「侮らない方がいい。彼だけじゃないさ、このチームは強い。強いだ

けじゃない。いいチームだよ。吾輩も強いチームはたくさん見てきたが、いいチームにはなかなか無いものさ」

「何を言っているのかわからないが、とにかく、お手並み拝見させてもらいますよ」

“カキーン!!”

ロボの3球目は外角低めへのフォーク。空振りを誘うほどの大きな変化ではなかったが、御殿場は巧みに打ち返した。ピッチャーの右横を打球がすり抜ける。センターへ抜けそうな痛烈な打球だったが永瀬が回りこむ。ルコフスクのサインを見ていたとはいえ、データのない打者に対してなかなか大胆なポジショニングだ。そのまま大坂へグラブトス。セカンドベース手前で大坂は受け取ると、丁寧にボールを握り直して一塁へ転送した。1アウト。

一塁側ベンチ前で打席に向かう水田を出井が呼び止めた。

「……ショート寄りの打球は大坂くんに預けるか。内野に穴は無さそうね。さすがに、モンキース、フットレイクスを破っているだけの實力はあるわ。ライトの佐賀、レフトの菅野は強肩だし、センターの矢部は砂のフィールドに足を取られることもなく守備範囲も広い。崩すなら、やはり即席のバッテリーからになるわね。ちよつと早いけど、水田さん。いいわね」

「ああ。構わないさ。この試合に勝って俺たちは街を取り戻すんだからな」

「そうよ。運営南支部から遠征公式戦の認可が下りたわ。この試合に勝てば、私たちは勝率でジエンドキャツスルズに並ぶことができるわ。そうすれば、プレーオフよ」

「でも、今は目の前の勝負に集中だ」

「わかってるわよ」

出井が頷くと、水田はゆっくりと打席へ歩みを進めた。

水田が打席に立つ頃には、どこからか吹き付ける砂漠の風が赤茶けた砂塵をグラウンドに連れてきていた。選手たちの視界が徐々に砂嵐で奪われていく。砂嵐はどんどん濃くなりルコフスクの位置からは外野の3人が見えなくなり、さらに4人の内野手も影でしか追うことができない。ピッチャーのロボは何か目視できるが、目をまともに開けていては砂が目に入ってしまう。

ルコフスクがタイムを取ろうと茅野を振り返ると、背後から水田ポポの声が聞こえた。

「この辺りでは、たまにあるんだよ。余所から来た人はみんな驚くけど、風向き次第ではもつと酷くなるよ。タイムを取っても構わないけど、試合を遅延させるつもりなら抗議させてもらうからね」

「うぬう。……言うではないか。だが、ここはタイムだ。茅野さん。いいよな?」

「ああ。問題ないだろう。……タイム!!」

茅野が大きなジェスチャーでタイムを告げると、内野陣がマウンドに集まった。

「これじゃあキャッチボールも危ういですね。試合は中断できないんですか?」集まる内野陣の顔を見比べながら大坂が口を開いた。ルコフスクが打席の方に視線を送りながら、それに答える。

「そのようだ。このタイムすら遅延行為と言わんばかりだったからな。監督代行。どうしますか?」

「どうするも、こうするも、やるしかないだろう。ピッチングに影響はないのか?」

「ロボハセキガイセンセンサーモトウサイシテイマスノデエイキョウハアリマセン」

「砂が目に入って、吾輩のサインやミットが見えないということはないよ。ならば良からう。吾輩が全て受け止めてみせよう」

ルコフスクがドンと胸板を叩いてそれに応じた。半ば呆れ顔で井伏はルコフスクの身を案じたが、ルコフスクは「吾輩が鍛えているのは今日この日のためである。ガハハ」と笑って見せた。それならばと、内野陣も彼の心意気を買ってそれぞれのポジションへと戻って

いった。

3回ウラ、一死走者なしからゲームは再開される。

「プレイー！」

茅野がゲーム再開を告げると、ロボがゆつくりとワインドアップモーションを起こした。彼のモーター駆動音は砂嵐にかき消されて聞こえない。マウンドが少し遠くに感じられた。ルコフスクが感じた小さな不安をよそに、機械とは思えない滑らかなフォームから初球が放たれる。

……甘い！

外角の直球。やはりシュート回転しながらベルトの高さに外から真ん中に入ってくる。水田もこれを見送るほど甘くない。

「チイーン！」

「…げふっ!!」

「ファールボール！」

ファールチップがルコフスクの腹筋を直撃した。

「…大丈夫か？」

「な、何の、これしき……」

ルコフスクは上半身裸である。膝について俯くルコフスクを茅野が案じたが、ルコフスクはすぐに足元のボールを拾い上げた。水田も気の毒そうな表情だ。

「プロテクターくらい付けたらどうなんだ？ 危ないぞ」

「生憎、吾輩のサイズに合うものが無くてね……」

ルコフスクは水田の同情など気にも留めなかったが、彼の様子から察するに、どうやら先のファールチップは狙った訳ではなさそうだ。あのコースを打ち損じるとなれば、水田の打撃も底が知れる。ルコフスクは強靱な腹筋の上で赤く腫れる痣を摩りながら、次の投球のシグナルを送った。まだ、ストレートにタイミングは合っていないはず。

真ん中低めのストレートでカウントを稼ぐ……！！

「キイーン！」

ボールが見えないのは打つ側も同じはずだ。しかし、視界が悪い中で試合の中断を善しとしかかったのは何かしらの勝算があったからに違いない。水田のコンパクトでシャープなスイングがロボの146km/hを捉えた。

「ショートツー！」

不規則に弾む速いグラウンダーがショート左へと転がるも幸い大坂の守備範囲内だ。深く腰を落として柔軟に膝をクツションさせてバウンドの変化に対応する。遊撃手の華麗なグラブさばきには敵軍ベンチからも賞賛の声があがった。体調不良をおしてなお、砂嵐による視界の悪さを差し引いてなお、この男に捕れないイレギュラーはないのではないか。そう思わせるほどに彼の守備は研ぎ澄まされていた。

しかし、足元の打球を掬い上げた大坂には一塁手ガツテムの姿が砂塵に霞んでしまい、陽炎のようなシルエットでしか確認できない。フェニックスの狙いはこれだ。このまま大坂が矢のような送球を放てば、ガツテムがそれを捕球できるという保証はどこにもない。後逸すれば、次の塁を許すことにもなり得る。ただの内野ゴロが労せず二塁打へ変わるのだ。

「ボールヒットツ 投ゲテイイヨ!!」

ガツテムの位置からも、大坂の姿がはっきりと見えるわけではない。一塁側に陣取るフェニックス軍には彼の言葉はただの虚勢にか聞こえなかった。これに釣られて大坂が投げようものなら、この試合は優位に展開できる。そんな思いがベンチを支配した。

そして、大坂の軸足付近の砂面が出井の魔導術の干渉を受けて流砂のごとく沈み始める。すでに送球体勢に入っていた大坂は足を取られてバランスを失った。

「短い!! ぐめんなさいー！」

その言葉を受けてガツテムは目一杯に足を広げて大股を開き、ミツ

トを地面すれすれで構えて目線をギリギリまで地面に近づけた。砂塵の奥からボールが黒い影となって現れる。幸いコースは逸れていないが、確かにガッツテムのミットまでは届きそうもない。…が、ボールに勢いも衰えそうにない。

ガッツテムは冷静にこれまでの大坂の送球の感触を思い返して、黒い影の軌道を分析した……。

砂塵の中、それは一度ガッツテムのミットの中に収まったかのように見えたが、ボールはミットからこぼれてしまう。彼はショートバウンドの変化を嫌ってか上からミットを被せる形での捕球を試みた。本来であれば、地面からミットを立てて捕るのがセオリーだがグラウンドコンディションが信用できない中での苦肉の策だ。ボールは後ろに逸れることはなかったが、ミットのポケットにもやはり入らない。一度こぼれた球をそのままミットで掴み上げる頃、全力疾走の水田が一塁ベースを駆け抜けた。

一塁コーチが派手に両手を横に広げて、水田の好走塁を引き立たせるセーフのジェスチャー。

しかし、10 m先のファールグラウンドでヘルメットを右手で押さえながら振り向いた水田の耳には、37 m先で、おそらく右手で握りこぶしを掲げているであろう男の声が聞こえた。2アウト。

二死者なしからフェニックスの打順は先頭に返り、1番富士川の打席。富士川も視界の悪さを利用した内野ゴロ作戦を試みたのだが、ルコフスクもまた視界の悪さを逆手にとったリードで翻弄。結果はファースト正面へのゴロ。ガッツテムが自分でベースに入り3アウトチェンジとなった。

Major League Ball First
Part 4

4回表、この回先頭の1番打者、矢部が2度目の打席に入る。煉瓦色の打席を両足のスパイクで丁寧にかき混ぜて打席を慣らし、踏み固める。ここまでフロッグスはノーヒットだ。スコアはもちろん0-0。

水田の投球練習の間、矢部と話し込んでいた大坂がベンチに帰ってきた。

「円陣を抜け出して、何を企んでるんだ……？」

ベンチに帰ってきた大坂を、監督代行の井伏が呼び止めた。

「ちよつと、確かめたいコトがありました……」

「確かめたい事……？」

「…はい。水田の抜群のコントロールを踏まえての想像なんです。が、もしかすると、彼はバットを狙って投げているんじゃないかなと思ひまして……」

「初回の矢部君のPゴロの話か。有り得なくはないが、何度も通用する手じゃないだろう」

「オレも最初はそう思ったんです。ですが、その後のスコアも見てください」

「どれどれっ……ええと、永瀬がセカンドゴロ、大坂君がショートゴロ。2回はガツテム君がセカンドゴロ、佐賀君がサードゴロ、ルコフスク君がショートゴロ。3回は菅野君がファーストフライ、俺がサードライナー、ロボ君がPゴロか。なるほどな。確かに、全員のバットに当てているとも言えなくないな。だが、そんなに珍しいスコアでもあるまい。ましてや、まだ一巡目……」

「打たせて取る。理想のピッチングスタイルです。水田のようにコントロールに自信のあるピッチャーならば尚更でしょう」

「……何が言いたい？」

「打たせて取るピッチングの更にも上の投球術。そうですね『当て

て取る』ピッチングとでも名付けましょうか」

「当てて取るう……!? 馬鹿言っちゃいけない。もし、仮にそうだとしたら、打者のスウィングの軌道やタイミングまで測って投げてることになるぞ……」

「……不可能でしょうか？」

「……………」

ここは南地区だ。砂塵を操る魔導術に気を取られていたが、術者が一人とは限らない。原理はわからないが大坂が描いたある意味当然の結論に井伏は言葉を失った。もしこの推論が当たっているのであれば、早々に手を打たなければならぬだろう。

「それで、彼には何て言ったんだ？」

『空振り』三振か、四球を選べと言っております。矢部君の実力と性格を考えると四球を選びたいでしょう。ですが、水田の制球力ではその望みは限りなくゼロです。おまけに、矢部君は追い込まれた状況で四隅に投げ分けられた150km/hを確実にカットし続けるほど器用な打者ではありません。だから空振り三振という逃げ道を用意しました」

「なるほどな。大坂君の仮説が正しいのなら、矢部君は空振り三振できないというわけだ」

「はい……ですが、この検証は水田がこちらの意図に気が付かない事が前提です。バットに当てるピッチングなんかよりバットに当たらないピッチングの方がはるかに簡単なはずですし、理にかなっていませんからね」

「ん？ ちょっと待ってくれ、だったら初めからそうすればいいだろう」

「そうなんです。だから、矢部くんを試してもらうんです。もし、水田が狙って投げているのであれば、その意図がどこにあるにせよ、この1打席を犠牲にしても確認しておくべきだと思います」

「わかった。彼の武運を祈るとしようか」

キーンッ！

「ファールボール！」

三振を恐れない思い切りの良いスウィングが炸裂して、打球が三塁ベンチ後方の崖で勢い良く弾んだ。気がつけばカウントは1ボール2ストライク。矢部は追い込まれている。

「ミスターヤベ！ ヒロクヒロク！」

ガツテムの声援に頷いて、矢部は外角低めいっぱいのコナーにポイントを合わせ、バットの軌道を確認するようにゆっくりとバットを振った。そしてそのままバットを真っ直ぐに立てると、分厚いメガネの奥の視線を再びマウンド上の水田に集中させた。

水田が足を高く上げて5球目のモーションに入る。奇しくも、その軌道は先ほどポイントを確認したバットの軌道上だ。タイミングはもう既に掴んでいる。さつきは少し早かった。だから、今度はコンマ数秒だけ溜める時間を長くする。そうすれば、バットは間違いなくボールを捉えることができる。力まないで、振り抜けばセンターの前に落ちる。そんなイメージで、矢部は左足を地面に踏み込んだ。



「三振か四球でやんすか!? オイラにはそんな事できないでやんす! オイラはいつだって本気でやんす! 手心を加えるなんて相手に対して失礼でやんす!」

「まあまあ、聞いてよ。矢部くん……」

4回表の開始前、大坂は円陣を抜け出して打席に向かう矢部を呼び止めていた。

「聞かないでやんす! 夏苗ちゃんの命が懸かってる大事な試合でオイラに三振しろだなんて正気じゃないでやんす!」

「矢部くん、声が大きいよ。それに、三振とは言っていない。フォアボールでもいいんだ。あと、正確には空振り三振だ。見送り三振じゃ意味がないんだ」

「ん……? どういうことでやんすか?」

「ちよつと確かめたいコトがあるんだ……」

「オイラと大坂くんの仲でやんす。隠し事は無しでやんす」

「わかった。じゃあ、説明するよ……」



キーンッ！

打球はキャッチャー後方へのファール。捉え損ねた矢部は少し悔しそうな表情を浮かべながら、バッティンググローブをバンドをゆつくりと締め直した。ちらりと大坂とアイコンタクトを交わす。作戦は続行だ。

「ナイカットオ〜！ 顔に似合わず器用な真似するじゃねーか！」

「顔は関係ないでやんす！」

三塁コーチの菅野が皮肉交じりのエールを送った。傍目には外角の厳しいコースの球を上手くカットしたように見えたことだろう。しかし、矢部がそんなに器用な打者ではないことは、高校三年間を共にしてきた大坂にはよくわかっていた。矢部は「空振りできなかった」のだ。

矢部は本来のタイミングに加えて、さらに半テンポタイミングを遅らせていたが甘かった。水田の投じたチェンジアップにまずまずのタイミングで合ってしまったのだ。こうなった以上、矢部にはどうする事もできなかつた。フォームが崩れていた分、打球が前に飛ばなかつた。それだけの事だつた。

「監督代行。今のカット、どう思いますか？」

「どうって言われてもなあ……」

「矢部くんは高校時代、割と早打ちで有名だつたんです。1番打者にもかかわらず、若いカウントから積極的に手を出すんです。これでは1番打者としての役目を果たしているとは言い難い。先頭打者は、なるべく相手投手の球筋やコンディションを見極めて欲しいから、臭い球をカットして球数を稼ぐような立ち回りをするのがセオリーです。でも、彼はそうしなかつたんです」

「変なところで頑固だもんな、あいつは」

「初めはオレたちもそう思っていました。矢部くんをトップで起用せ

ざるをえないチーム事情もありましたし、彼自身の結果も出ていた
たので、監督も含めてそれが彼のプレイスタイルだと割り切っていた
のですが……」

コロコロコロコロ……

力のないゴロが三塁ベンチに転がってきた。矢部はまたもファール
で粘る。大坂は思惑通りの結果に困惑しながらボールをワンバウ
ンドで茅野に返した。ボールは綺麗に弾んで茅野の手のひらに収ま
る。

「……ひよんなことから、矢部さんの弱点が晒されてしまったんで
す」

「弱点……?」

「矢部くんは、追い込まれるとからつきし打てないんです。ある日
の練習試合で、相手の投手がスタミナに難のある選手だったんで、監
督指示で待球作戦をとっていたんです。ですが、その試合で矢部くん
は全打席三振を記録してしまいました。おまけに、この後の数試合、
矢部くんが調子を崩してしまって、勘を取り戻すのに苦労したんで
す」

「ならば、ここまでのカットは彼の本意ではないと?」

「カットが苦手な矢部くんがバットに当てさせられているんです」

「だとすれば、水田っていうピッチャーの底が知れないな。だがし
かし、そんな事をして何の意味があるんだ? 自分の球数を増やすだ
けだ」

「多分ですけど、それは矢部くんが空振りしようとしているからだ
と思います。打席でそんなことを考えるバッターはいませんから。
本当であれば凡打を打たせて、球数あるいは試合時間を節約したいは
ずです」

矢部の打席、最後はヤケクソになった矢部がピッチャーのモーショ
ンと同時にバットをフルスイングして空振り三振。……と思いきや、
振り抜いた背中越しのバットの先に見事ボールがヒットして、鈍い金
属音と共に真上に打球が上がった。

パシッ!

「アウト！」

キャッチャーの御殿場がこれを落ち着いて捌いて1アウトとなった。任を果たせなかった矢部は肩を落としてベンチに戻ってきた。

「気持ち悪いでやんす……」

「まあまあ、そんなに落ち込まなくても……」

「落ち込んではいないでやんす。あ、でも空振り三振出来なかったことは謝るでやんす。けどやっぱ気持ち悪いでやんす。軌道をズラしても、タイミングを外してもバットに当たったでやんす。まるでボールが意志を持ってバットに当たりに来てるみたいでやんす。こんな事なら始めっから長打狙いで強振していれば良かったでやんす」

それが出来ればとつくに1巡目にそうなってるよ。と大坂は敢えて言わなかった。矢部もそんな事は百も承知のはずだ。とにかく、この厄介な投球術の正体を見破らなければならない。

打席には2番打者の永瀬が入った。

矢部の打席での試行錯誤はネクストバッタースークルで待機する永瀬にも伝わっていた。散々粘った後での自暴自棄とも言える強振、からの曲芸のような打法(?)は彼の本意ではなかったに違いない。振り抜いた後、三振したにもかかわらず彼の表情は一瞬だが安堵の色を浮かべていた。彼の表情が歪んだのは、空振りしたはずのバットの先端にボールが当たった後だ。逃げ切ったはずの追っ手から不意に背後から刺されたような、恐怖とも絶望ともいえる苦渋の表情で、彼は打席に立ち尽くしていた。やがて、上空に漂う白球がミットに収まり主審がアウトを宣告すると、打席から逃げるようにベンチへと帰っていった。永瀬は矢部に声をかけるタイミングを失っていた。バッテリーの術中にハマる前に、こちらからも揺さぶりをかける。永瀬も第2打席は思うところがあった。初球はバットを横に寝かせて一塁へ走るそぶりを見せる。

「ストライク！」

そう、初球はセーフティバントのそぶりだけ。やらないと分かかっていても、守る方は少なからず嫌なものだ。一番反応が悪かったのは

三塁手だ。彼は守備が苦手というよりも……

永瀬はちらりと自軍のベンチで上半身を露出している男に視線を送ると、彼もまた黙って頷いた。元より打てる見込みがないのなら、躊躇うことはない。

水田の第2球。永瀬は再びセーフティバントを敢行した。狙うは三塁線、ピッチャーではなくサードの守備範囲に転がすこと。

コツンツッ!

テンテン……………

まずまずのコースだ。三塁手の動きを封じている以上、まずまずのコースでいい。しかし、打球の勢いが強すぎる! これではルコフスクがグラヴィティゾーンで足止めをしても意味がない!

大柄な三塁手の浜松が深く腰を折ると、差し出したグローブに打球がちょうど収まる。浜松はノーステップで一塁に転送して2アウトとなった。

「すまない。折角いい作戦を思いついたのにファイにしてみました。同じ手は2度は通用しないだろうな」

「いえ、今のはいい前フリになりましたよ」

永瀬とのすれ違いざまに言葉を交わして、大坂は打席に入る。初めからバントの構えだ。

いつもより少し大きいアクションでルコフスクに目配せをする。大げさになり過ぎないように自然に振る舞う。御殿場ほど観察眼のある捕手ならば、このくらいで十分だ。そして、このグラウンドで一番洞察力に優れているのは背後の彼ではなく、正対している水田だ。三塁手を前進させて取らせるエリアに狙いを定めて腰元にバットを構える。

水田の初球モーションと同時に膝と腰を深く折り曲げて、三塁線のみならずのコースに狙いを定める。まずまずのコースでいい。

そして、永瀬はバントが苦手な打者ではないはずだ。セーフティとはいえ、力加減を大きく誤ることはないだろう。そうになると、導き出される結論は水田の球質が極端に軽く、ボールがよく反発したということだ。ならば、慎重に力加減を見極めて転がさねばならないだろう

う。

あるいは・・・

水田の指先をボールが離れると同時に、大坂は素早くバットを立てに戻した。できるだけ小さいテイクバックで態勢を整えると、さつきまでバットを寝かせていたポイントを目掛けてバットを一気に振り下ろす！

手で若干ホップするように伸びた投球を慎重に転がそうとしていたら、ピッチャーへの小フライになっただろうか。永瀬に同じく、イージーなサードゴロになっていただろうか。

しかし、感覚的には完全に振り遅れている。水田の投球は今日最速の153km/hを記録していた。それでも何とか喰らい付く。矢部が粘り、永瀬が揺さぶり流れが変わりつつあるのだ。ここで必要なのは揺るがない結果である。

キイイーン!!

快音が扇形の窪地でこだまする！

痛烈なライナーが左翼線に襲いかかる！

トンッ！

「フェアー！」

低い弾道が功を奏したか、球質の軽さが災いしたか、打球は切れることなくレフト線いっぱいに落ちた。

「四つ（ホームまで）行けるよ！」

一塁コーチの橘が叫ぶ。

そう。この球場にはフェンスがなく、どこまで転がってもインプレーだ！

大坂はスパイクに絡みつく砂の重さも忘れて一塁を蹴った。フ
ログス初めてのヒットは、長打コースになりそうである。

Major League Baseball Season
d Part 1

「2分ほど時間を遡る。」

サードゴロに倒れた永瀬がベンチに帰ってきた。ヘルメットを脱いで、白銀の長髪にまとわりつく汗を丁寧に拭う。そろそろ切ったほうがいいかな？ 永瀬はそんな事を考えながら、ベンチの最前列に陣取った。打席に立つ大坂は「いい前フリになった」と言っていたが、その真意まではわからなかった。

「……あいつ、何を考えてるんだ？」

考えていた事が口に出ていたようだ。しかし、同じ事を考えている人間がベンチにもう一人いた。監督代行の井伏だ。

「気になるか？」

「井伏さん、何か知ってるんですか？」

「いや、何にも。……でも、あいつは野球をよく知ってるし、魔導術への理解も悪くない」

「そうですね。本当に驚かされます。ここまでの守備といい、どうして解散寸前のフロッグスに入ったのか……」

「全くだ。おかげで、この歳になってまで他所の地区の試合に駆り出されてしまったがね」

井伏は自嘲気味にははっと笑った。永瀬も同意した。

「それにしても、大坂君の体調は随分快復してきたじゃないか」

「実は、毒の種類が特定できなかったんで、症状を和らげる回復魔術を試してみたんです。京子さんの見よう見真似ですけど大坂君には効果テキメンだったみたいですね。みずきちちゃんには気休め程度にか効いていませんけどね」

「……何っ！ 魔導術だと!？」

「井伏さん、そんなに驚かないでくださいよ。僕だって休んでる間チームの力になれるように勉強してたんですよ?」

「すまない。しかし、魔導術は……」

「井伏さんまで、ヤソジさんみたいな事言わないでくださいよ。ここは東地区じゃないんです。実際に今だつてルコフスクさんの魔導術が無ければ勝負になつてないはずですよ」

「それはわかっている。違うんだよ。永瀬君にはまだ言つてなかつたな……」

「……？」

「大坂君はねえ、一回目の魔導術が人よりも過剰に反応してしまう能力があるみたいなんだ。そして、二回目以降は同じ魔導術が無効になるらしい。まだ十分検証したわけじゃないから、永瀬君には伝えていなかったんだ……」

快音とともに、意表を突いた大坂のバスター打法が奏功した。ライナー性の打球が左翼ライン際に落ちる。「回れ！回れ！」とチームメイトの声が二人の会話の間を弾幕のように過ぎていく。

「……こんな事になるなら、先に言つておくべきだったな。大坂君には、君の回復魔術がもう効かない可能性がある」

「……それは、ちよつとマズイですね。僕の魔力では効果は1時間くらいが限界です。魔法が切れたら改めて上からかけ直せばいいかなと思つていましたが、それが出来ないとなると……」

「まずいな。控えはみずきちゃんしかいない」

「……んっ!! ちよつと待つてください！一回目は過剰に反応してしまつて言いましたか!?!」

「そうだが……」

永瀬は立ち上がり、ベンチを見回してルコフスクを探す。ユニフォームを着ていない彼の姿はすぐに確認できた。彼は、グラウンドに手をかざして何か集中しているようだが、叫ばずにはいられなかつた。

「ルコフスクさん！早く、グラヴィティゾーンを解除してくださいー！」

「ヌググッ！それは今やってる！だが、三塁線の魔力伝導率があるまりにも高すぎる。うまく制御できんだ！」

「そんなっ!! 菅野さん！ベースオンで止めてください！」

「バカ言うな永瀬！ ボールはあんなに遠くだ。例えばグラヴィティゾーンがあるのが余裕で還れるだろ！」

「違うんです！ 何でもいいからお願ひします!!」

「何だよ、急に……」

大坂は既に勢いよく三塁を回るべく、大きく膨らんでいた。ベースまであと数歩のところ、菅野のジエスチャーが突然変わる。すでに打球が視界の外にある大坂にはボールの正確な位置までわからない。レフトかなり深いところまで転がったはずだが、とにかく本塁は無理な状況に変わったのだ。しかし、ベースオンだつて？ 今更スライディングしてもベースに激突して怪我するだけである。無茶だ！

軽くオーバーランしてすぐに帰塁する方が安全とスピードに乗った大坂は判断したが、結果としてそれは甘かった。そうは言っても急いで減速しようと三塁ベースの内角を右足が踏んだその時である。スパイクの先が吸盤のごとくベースに吸い付くのと同時に、全体重：いや、それ以上の負荷が右足一本に集中する。その正体がグラヴィティゾーンだとすぐにわかった。骨が軋んで、割れそうな痛みが膝を圧迫する。咄嗟に着いた左足も地面に張り付いて思うように動かせない。二本の足では数倍にまで膨れ上がった体重とベースランニングの慣性力を支えるには足りなかった。勢い余った大坂はそのままベース前方に吹っ飛び、うつ伏せに倒れこむ形となった。

ダメだ！ 身動きが取れない！

立ち上がるだけ。それだけの動作なのに重すぎる体に対して意志は届かない。大坂はレンガ色の砂を握りしめて俯いたまま礫のように動くことができない。堪らず菅野が声を張り上げた。

「ルコフスクのおっさん、ふざけてる場合じゃねえぞ！」

「ヌグウ……！」

「何を格好付けてるんだよ！ そんなもん、止めちまえばいいだろ!!」
目の前で倒れている大坂は地面の上で必死で悶えている。総合格闘技で、格上選手の寝技から何とか抜け出そうともがく挑戦者のようだ。そして、到底及びそうにない。制御できない魔導術は止めてしまえばいい。菅野の指摘はもつともだ。それでも、ルコフスクにはグラ

ヴィテイゾーンを完全に止めることができない理由があった。

どこまでも転がっていきそうだった打球は、砂に勢いを殺されて失速。左翼手が打球に追いついて内野への返球が始まった。相手捕手の指示はバックホーム。しかし大坂は三塁ベースのやや前方に伏せたままで動けない。とても本塁は無理だろうが、何とか三塁まで戻ってくれば、二死三塁で打順をガツテムに回すことができる。

やがて、ボールはかなり深いところまで中継に走った遊撃手のギヤネンドラを伝って、三塁手の浜松まで中継して戻って来る。いつの間にか捕手の御殿場の指示がバックサードに変わる。

「井伏さん……」

「やむをえないだろう」

ルコフスクの本心は決まっていたが、念のため監督代行である井伏に確認する。グラヴィティゾーンのフィールド魔術を完全に解除するということは、今後の試合展開を左右する重大な決断だったからだ。一塁側から徐々にグラヴィティゾーンが解除されていく。ゾーンが解除された地面からは順に砂煙が立ち昇り、グラウンドの右側面からゆつくりと腰ほどの高さまで砂塵が浮かび上がっていく。

三塁手浜松の送球とクロスするように砂埃が左側面へと徐々に展開して、高度を落としながらボールがその中に消えていく。その軌道の先には三塁カバーに入った水田のグラブがあるはずだ。

……パシン！

硬球が革製のグラブに収まると、大坂が伸ばした腕にポフツとタツチが入る。しかし、その様子は両サイドのベンチからは目視できない。

「セーフ！」

『……………!?!』

目視できないのは判定を下す茅野も同じはずだ。大坂は視界から消えるまで三塁後方のファールグラウンドで突っ伏していたのだ。帰塁が間に合うはずがない。ベンチから出井がすかさず抗議に出てきた。

「何だ、俺の判定が不服か……？」

「エコヒイキがあれば本部に通達すると言ったはずです」

「依怙贖罪なものか。三墨走者の方が先にベースに触れていた。それだけだ」

「……………」

「納得がいかないようだな。しかし、考えてみたまえ。これだけ魔導術が氾濫してる島で審判を歴任してS級ライセンスを獲得してるんだ。視界が奪われたくらいで判定がブレてるようじゃやってられないよ」

「そ、それもそうね……」

「俺は逃亡中の身だが審判員としての矜持と責任がある。例え雷神バットを奪還できたとしても、道中でいい加減な判定をしたとあっちゃ、先がないんだよ」

出井は黙ってベンチに去った。予想以上に相手は手強いらしい。



「例のものはまだ届かないのか？」

「もう、間もなくとの報告を受けておりますが……」

「別に急かしているわけではない。くれぐれも慎重に頼むぞ」

「心得ております、支配人」

舞台は変わって砂漠の街ジエンド。ジエンドの最高級ホテル・ウィローは市街地の中心で抜群のアクセスを誇り、煌びやかな外装は都市の景観を損なうことなく、むしろ都市を彩るシンボルとして華やかにそびえ建っている。そんなホテル・ウィローには島内の数々のVIPが連日訪れ賑わっていた。まさに、南地区の富の象徴とも言うべきホテルである。

そんな由緒ある超高級ホテルの支配人は、ある物の到着を心待ちにしているようだ。

地上階はお客様のためという理由で、支配人執務室は地下に設けられていた。執務室にある応接用のソファアーに支配人は腰掛けると、

淹れたばかりのコーヒーの香りを堪能した。彼はその香りに満足したらしく、傍に立つ世話人らしい老婆に微笑みかけた。やがて、コンコンコンと静かなノックが執務室に響いた。

「例のものをお持ちしました」

「入りなさい」

静かにドアノブが開くと、細長い木箱を携えたとろんとした目つきの若い女がコツコツとヒールの音を響かせながら現れた。女は黙ったまま二人と視線を合わせることもなく執務室の中央まで進むと、応接用のテーブルの上にその木箱をそつと置いた。

「ほほう……」

支配人の口から感嘆の声が漏れた。傍に立つ老婆がそつと木箱のフタを開けると、白木の上半分を黒塗りにした一本のバットが入っていた。

「そうか。これが噂の……実に、美しい」

「これを競売にかけてしまうとは、いささか勿体ないですねえ」

「馬鹿を言うな。こんな物を手元に置いては、いずれ足が付いてしまうぞ」

「それもそうですな、ほほほっ」

支配人と老婆はお互いの顔を見合わせ、お互いの悪徳な笑顔に気が付くとすぐにその表情を引き締めた。

「では、予定通りに明晩18時から競売会を執り行う。運営本部への根回しは私が直接出向くとしよう。何せ億単位の金が一夜にして動くからね。奴らも黙ってないだろうさ」

「そうですね。では、運営本部がらみで1つお耳に入れておきたい事が……」

「…何だね？」

「実は、運営本部の要人が南地区へ身分を偽って潜入しているという……これは、あくまでも噂なのですが、火の無い所に煙は立たぬと言います。くれぐれもご用心ください」

「心配には及ぶまい。我々はあくまでも合法的に事を進めているんだ。法に触れていない以上は、運営本部も手出しはできないよ。しか

し、油断は禁物だな。忠告に感謝するよ」

支配人は手を挙げて老婆に礼を述べると、執務室を後にした。パタ
ンと扉が閉まると、目つきのとろんとした女はフウ〜と大きく息を
吐いて、ボフィンと音を立ててソファアーに寝転んだ。

「いけませんよ、お嬢様。そんなだらしのない格好をしては、いつま
で経つてもお嫁にいきませんぞ」

「いいのよ。どうせ私はパパの跡目と政略結婚なんだからっ」

「それはそうかも知れませんが、西園寺家の娘としてその名に恥じぬ
よう……」

「わかってるわよ。だけど、お仕事の話をしてる時のパパってなんだ
か好きになれないのよね」

「それは婆も同感にございます」

「特に、今回は嫌な予感がするの。何とか明日の競売会を中止にでき
ないかしら」

「お嬢様、滅多なことを言うんじゃないよ」

「ふふふつ。冗談よ」

「万が一にもお父上のお耳に入ってはと思うと婆は寿命が縮まる思い
です」

「ヨネはいつまでも長生きするんだから、寿命なんて気にしないで
いのよ」

「まあ、お嬢様ったら……」

「ところで、このバットはどこに仕舞えばいいのかしら」

「それはお嬢様にも秘密でございます」

「ケチ〜 ぶ〜ぶ〜っ！」

「かわいい子ぶつても婆には通用しませんぞ」

「うぐう……」



舞台は扇形の窪地へと戻る。

二死ながら走者大坂を三塁に置いて右打席にはフロツグスの4番

ガツテムが入る。先ほどから立ち籠めている腰ほどまでの高さの砂塵が晴れる気配はない。しかし成程、しゃがんでいる捕手の首から上は砂塵から飛び出して捕球に支障はなさそうだ。

三塁塁上で果敢に投手を挑発する大坂の様子からすると先程のグラヴィティゾーンの影響は無さそうだ。そして、水田の牽制球を捌く浜松の動きも軽快だ。ルコフスクの魔導術はもう頼りにならないと考えた方が良さだろうか。

そうなれば、必要なのは小細工なしのヒットだ。第一打席では手元で僅かに変化したムービングファストボールを打ち損じてセカンドゴロだった。水田の投球は手元でホップしたりフックしたりするから見かけ以上に打ちづらい。カウントを整えるためにチェンジアツプで揺さぶりもかけてくるから厄介だ。一巡を終えてそんな印象だったが、大坂が第二打席にライト線への三塁打で突破口を開いた。いや、ルコフスクのグラヴィティゾーンがなければ本塁まで到達できたであろうが、済んでしまった事を悔いても仕方がない。

また、ギリギリの局面で泣く泣くルコフスクがグラヴィティゾーンを解除したのはガツテムの打席への期待があつたからに他ならない。

意表を突いた大坂のバスターが長打となったが水田は落ち着いていた。幾多のピンチを凌いできたエースとしての自信と自負が、彼に動揺という隙を与えなかった。小柄な体軀をバネのように躍動させながら高々と足を上げると、それを一気に振り下ろしながら鞭のように左腕をしならせて第一球を投じた。外角低m……………

……………

……………

……………

…パシンツ！

本塁に到達する前にボールは砂塵に飲まれ、消えた!!

「ストライクッ！」

それは消えた訳ではないようだ。見失っただけ？

茅野はストライクとコールし、御殿場もしっかりと捕球している。形あるボールが消えることは物理的に有りえない。ガッツテムはもう一度打席で自分の集中力を高める。しかし、第2球も……

………

………

………

…パシンツ！

確かに、消えた!!

そして、判定はまたもストライク。

さらに、忘れてはいけない。先制の走者が三塁にいる事を、ここは簡単に終わってはいけない打席だ。

水田の左腕から第3球が放たれる。しかし、無情にもその投球は本塁との中間地点を過ぎるとまたしても姿を消した。

「……!!」

こうなればバットを振るしかない。振らなければ絶対に当たることはないのだから。そんな気休めの理屈で打てるほど水田の150キロは甘くない。

ガッツテムのバットは砂塵を切って、豪速球は御殿場のミットにズバんと収まりその姿を晒す。

「ストライクッ！ バッターアウト！」

為す術もなく三球三振に倒れたガツテムは食いしばった白い歯を
むき出しにしてマウンドを去る水田を睨みつけた。しかし、水田はそ
んなガツテムと視線を交える事なく飄々とベンチへと戻った。

4回表、フロッグスに両軍通じて初の安打が出るも無得点。水田の
怪投に首を傾げながらガツテムは4回裏の守備へと向かう。

4回表、フロックス3番打者の大坂の第2打席に大リーグボール1号を攻略された事にフェニックスベンチは驚かされていた。「絶対にバットに当たる」変化球である大リーグボール1号はフェニックスのエース水田がかつての師匠から伝授された魔球である。しかし、その性質ゆえにそれ自体が変化球であると相手に気づかれる事は滅多にない。事前に情報もなく初めて顔を合わせるチームならば尚更である。打者は皆、打ち損じたと思い込み、まさかそれが意図的に行なわれているとは露ほども思わないだろう。普通、変化球はバットとボールを遠ざげるために投げられるものなのだから。

どのタイミングで大坂がそれ気がついたのかはわからないが、大リーグボール1号攻略の最適解であるバスター打法に大坂は早くも辿り着いていた。三本間のグラヴィティゾーンで三塁手の足が止められていたため、セーフティバントにバッテリーの意識が行き過ぎたのも敗因の一つだろう。大リーグボールシリーズそのものは、その特異性故に誤解されがちであるが、魔導術に依存しない変化球である。絶対にバットに当たる大リーグボール1号は打者の心理や癖などを読み取る洞察力と卓越した制球力によつて実現された魔球なのだ。

とはいえ、水田の直球は150km/hを超えている。そのカラクリに気がついた所で、おいそれ簡単に破られるような代物ではない。バッテリーに悟られる事なく、一度構えたバントの姿勢を解いて、逆らわずに逆方向へバスターを成功させた大坂の打撃センスは賞賛に値するだろう。繰り返しになるが、それとわかっていても簡単に攻略できないのが大リーグボールなのだ。もともと、その貴重な好機は仲間内での魔導術の「コントロールミス」によつてあつけなく潰されてしまったのだが。

フェニックスのベンチからはルコフスクがグラヴィティゾーンの制御を誤り、拳句グラウンドの魔導制圧権を手放すというお粗末な対応に映っていた。その事が結果として大リーグボール2号を容易に

発動させる切っ掛けにもなっていたのもまた皮肉である。「消える魔球」としてその名を知られる大リーグボール2号は二死三塁で4番打者を迎えたピンチをあつきりと切り抜けた。

「グラヴィティゾーンは手強かったが、ルコフスクはどうも扱いに慣れていないらしい」

4回裏の攻撃は打順よく2番の磐田から始まる。円陣の中央で出井は口角を緩めた。

「あの男、少し魔力を抑えればあの背番号1だってホームに還るくらいはできただろうに、事もあろうかグラランドへの魔力放出を完全に止めたぞ。これで、当分は私たちのペースだ。今のうちに流れを作るよ！」

「オーツツ!!」



背後で威勢の良い「オーツツ!」という掛け声を聞きながらルコフスクは嫌な汗をその逆三角に力強く隆起した上半身から噴き出していた。寒冷な祖国から流れ着いた当初は、この島の常夏の気候に辟易していたものだが、今となつてはとつくに身体は順応している。汗をかくこと自体は嫌いではない。そもそもルコフスクは汗を流すことが好きで、さらに言えばその肉体にかかる負荷に喜びをも覚える人間なのだ。しかし、今日の汗は砂漠の灼熱波に晒されてヌメヌメと皮膚にまとわりついて不快だ。ユニフォームの袖があれば、今すぐにでも拭きたい。

ルコフスクは投球練習の前に右手をベース上にあてがう。これは初回、2回、3回と全てのインニングでやってきたことだ。自身の魔力を流し込んで、敵軍の魔導術をけん制し相手の自由にやらせない。魔導術に長じた選手が複数いればそれは誰かしらが交代で、あるいはその中の適性のある者がいればその者がその役割を担うのが常套だが、あいにくフロッグスで魔導術に精通しているのはルコフスクだけだった。砂を自在に操る出井に対しては相性もそれほど悪くなかつ

たため、ルコフスク自身も適役と疑っていなかった。

この日も、ルコフスクはホームベースに手を当てるが、ホームベースは今までと変わらないホームベースのままだった。それは目の前の地面に埋め込まれた白い見慣れた形状の五角形。いつもならば、指先の先端にある細胞が対象物に共鳴して魔力が注ぎ込まれる。そんなイメージだが、ベースの表面に術式を打ち消すトラップが仕掛けられていて上手く魔力を送ることができない。剣と魔法の空想世界に逃避する中学2年生が現実世界で声高に、しかしどこか虚しく、呪文を念じるもどかしさにも今のルコフスクは容易に共感できるのだろう。

このグラウンドではホームを含めて4つのベースは魔力を注ぎ込むための起点となっている。ここから一塁線（ライト線）、三塁線（レフト線）へと展開させてグラウンド全体を制御すると実に効率良く魔導術を展開する事ができるのだ。もちろん、これらを経由せずとも魔導術の発現は可能だが術者には相応の負荷が掛かることになる。逆に言えば、多少複雑な術式もこれらの特性を熟知していれば比較的容易に展開が可能というわけである。フェニックスの術者はルコフスクが魔導術を完全に停止させた一瞬の隙を突いて重力魔法を打ち消す術式をこのグラウンドに組み込んだのだに違いない。したたかであり確実な対応が効果的に機能していた。

そして、それは対魔導術的に丸腰の状態でフェニックス打線と対峙する事を意味する。打順は2番からだ。この機会にフェニックス打線は何か仕掛けてくると考えるべきだろう。悪い事に、ロボの球威が初回、2回に比べて少しずつ落ちてきているような気がする。それもそうだ。こんな砂埃の中で精密機械を使い続けて何の悪影響も無いはずがない。

ロボの最後の投球練習で、回転の甘いストレートが打ちごろの高さに入ってくる。頼むから、実戦で投げてくれるなよ。そんなことを考えながらルコフスクは二塁ベースめがけて矢のような送球を送る。軸足の地面が少し柔らかく沈み込んだのは気の所為であることを願う。送球は右寄りに逸れるも大坂がくるつと体を捻ってエア走者に

タッチ。先ほどの「転倒」の影響はなさそうだ。そのまま、永瀬にトス、永瀬は井伏にスロー、井伏がガツテムにスロー、最後にガツテムから山なりの送球でロボにボールが渡った。プレイボール。



5つ星レアアイテム雷神バットが地下オークションに出品されるという噂は、その真偽は置いておくとしてあつという間にアンダーグラウンドの事情通には拡散された。実際に偽物をつかまされて私財を逸した愚かな実業家がもう既にいるとかいないとか、まあ、そんな与太話は置いておいてもその信憑性は調べれば調べるほどに増していった。

調べるにつれて聞き覚えのない名前が捜査線上に現れてくる。彼の名はピンクⅡパンサン。本名かどうかはわからないが、彼はそう呼ばれていた。初めは半信半疑だったが、東地区と南地区の境界にあるレイクサイドスタジアムで出会った少女が語ったその男が全ての鍵を握っているようだ。2メートルを超える長身にスキンヘッドという非常に目立つはずの男だが、彼の目撃情報は皆無だった。事情通の間ではピンクⅡパンサンが人物なのかどうかすら懐疑的な見解もあるほどだ。しかし、彼は実在したのだ。そして、どういうわけか橘みずきという少女と共に海を渡り、この島へとやって来たのだ。

さらに、驚くべきことに彼らは伝説の反逆者パープルⅡオーと接触していたのである。

パープルⅡオーといえば島内のリーグ戦において一時代を築いた名選手の一人であるが、同時に島内では知らぬ者はいない大罪人としても知られている。近年では後者のイメージの方が強いだろうか。かつて、島内の野球技術向上のために歴代の名選手や研究者らが編纂した野球超人伝という書物の誤った解釈を島内に広めたことが発端となり、彼は失脚し島の外へ名実ともに追いやられてしまったのだ。ちなみに、野球超人伝は禁書として運営本部の地下倉庫に保管されているらしい。何しろ、この野球超人伝こそ7つある5つ星レアアイテ

ムのひとつに指定されているからだ。

しかし、パープルオーが疎まれる理由はそれだけではなかった。彼の魔導術は時間を意のままに止めることができたのだ。この事實は、当時の運営本部にとって脅威であったに違いない。卓越した彼の能力を恐れた運営本部の策略によって彼の失脚が意図的に行われたのではないか？ そんな陰謀説など誰も口にしないが、誰もが行き着く憶測は今もおタブーとして事情通であればあるほどに関わらない方が賢明とその箱には蓋がされていた。

そして、生きていれば80歳を過ぎているであろう彼が、往年の姿のままに橘の前に姿を現していた。これが何を意味しているのか。彼が自身に対して時間を止める魔導術を施したという仮説が浮上する。だが、ここで気になるのは50年以上の年月にわたって時を止め続けるにはどれ程の魔力が必要とされるのかという事だ。例えば、フログスの捕手である龍ヶ崎夏苗が十数分自身の体の一部を氷漬けにしていただけである有り様だ。彼女とパープルオーの熟練度の差はもちろん無視できないが、膨大な魔力を消費したであろう事實は想像に難くない。

少々話が逸れたが、往年の名選手であり大罪人のパープルオーと5つ星レアアイテム雷神バットが接触しているとすれば、話題性としては強力な材料だ。情報屋にとって情報は商品だ。新聞社やテレビ・ラジオ局などの表舞台から、ここでは語れないような裏組織まで、信用に値する情報は高値で取引される。とはいえ、自分の証言だけでは情報の価値など二束三文だ。動かぬ証拠とはならなくても、多少胡散臭くてもいいからそれらしい根拠が欲しいものである。

申し遅れました。私、保谷掟と申します。元イーストタウンタワーズの外野手、現在は引退してしまえない情報屋として日々の暮らしを繋ぎとめる者です。まあ、言ってしまうえば定職につかずフラフラしている噂好きのダメな大人ではありますが、どうも好奇心をくすぐる情報が近頃増えてきている次第であります。

今回は久々に長旅の予感です。東地区イーストタウンの自宅で装備を整えて意気揚々ロードバイに跨がって南地区はカオスシティを

通り過ぎて更に西方、ジエンドを目指す次第でございます。

カオスシティから西へ向かう道中は治安があまりよろしくない。そんな情報は情報屋である保谷でなくとも地元の間人であればよく知ることだ。それもそうだろう。島内のお宝が一挙に集う闇オークションが明日に控えているのだ。街の周囲で商人や運び屋を襲えば一攫千金、そんな安易な発想ではあるが高価な積み荷に遭遇する可能性が高ければ、盗賊たちも色めき立つのは必至だ。高設定のスロット台があればギャンブラーはみんな競って座るのだ。

その中でも安全そうなルートを保谷は選ぶ。少し遠回りでも、路面状況に難はあるがそれを嫌うのは運び屋も盗賊も一緒だろう。そして、その読みは間違っていないかったが、先を急いでいた保谷は自らが背負ったリスクへの意識が少し疎かになっていた。

突然、北西の方角、目視で1キロくらいの距離で砂柱が空高くに立ち上った。やがてその砂塵は風に乗ってこちらまでやってくる。ここで視界を奪われては道を見失いかねない、保谷は砂嵐を振る切るべくロードバイクのギアを加速させた。

それは小さな段差だった。視界を奪われつつあった保谷は気がつくのが一瞬遅れた。それだけだった。自転車は小さく地面を跳ねた後で後輪がスリップ。詰め込みすぎた荷物も仇となり、バランスを失って横転。地面が硬いアスファルトではなかった事に保谷は0コマ数秒だけ安堵したが、高速度域で地面に激突して痛くないわけがない。右肩、右腕を強く打撲して慣性力のまま前方に吹き飛ばされる。咄嗟に身体を丸めて頭を守ったが今度は背中から地面に叩きつけられた。脳内がフラッシュしてお星様が見えた☆

★ ★ ★ ☆ ☆

4回裏、先頭打者の2番磐田に対してロボは痛恨のフォアボール。確実に制球が乱れていた。

これまでとは違いルコフスクが構えたところにボールが来ない。やはり、機械仕掛けの投手には限界があるのだろうか。加えて砂嵐に

視界を奪われて、目を開け続けるのも困難なほどだ。赤外線センサーも搭載しているロボにはこの視界不良の影響はほとんど無いらしいが、ルコフスクの位置からはようやくロボが目視できる程度にまで視界が遮られてしまっている。セカンドベースは砂に隠れてしまっても何処にあるのかすらわからない。

見えない以上、心配なのは盗塁だ。ショート大坂、セカンド永瀬の位置はシルエット程度に判別はできるから一か八か投げてみてもいいが。彼らにルコフスクが放るボールをすぐには目視できないであろう。ボール回しの時に僅かに地面が沈んで重心がふらついたことを思い出すと、暴投が絶対に無いとは言い切れない。ここは一球牽制球を挟んでみよう。

ヒュッ!

……パシン!

「セーフ!」

意外と(?)牽制球がサマになっている。クイックや牽制球の苦手なルコフスクには少し遅れを取っている自身の技術を省みるほどだ。しかし、ファーストのガツテムはこちらを向いてヒラヒラとそのミットを振るそぶりをしてアピールしてくる。見づらいからあまり投げてくるなど。

しかし、ガツテムは試合巧者であることをルコフスクはわかっていた。一塁ベンチ、ましてや一塁ランナーから見えるようにワザとそんな事をする真意は明らかだ。ルコフスクは再び牽制球のサインを出す。

ロボがセットポジションに入る寸前に先ほどよりも速い牽制球を一塁に投げた。ガツテムは少し驚いた様子だった。それだけ一塁ベース上にいた2人は牽制球を意識していなかったのだ。ガツテムは本当に牽制球を拒否していたのだが、その空気感に走者磐田の心理

は裏を完全にかかれてしまう。見えづらいとはいえ絶妙な角度とコースでできた牽制球を捕り、そのままタッチするだけのガツテムと、逆を突かれてしまった磐田との勝敗は明確だった。

「アウト！」

ルコフスクの位置からはガツテムの表情は見えない。ルコフスクは満足げにロボに正対して座ると次の打者浜松を迎え入れた。

試合は4回裏、0―0のままフェニックスの攻撃中、一死走者なし。